現代日本語の動態研究

Aizawa Masao
相澤正夫
▼
編

おうふう

現代日本語の動態研究

Aizawa Masao
相澤正夫
▼
編

おうふう

まえがき

本書は、書名が端的に示すとおり、「現代日本語」の「動態」に関わる多彩な「研究」の成果を、12編の論文としてまとめた論文集である。編集の基盤となったのは、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」（基幹型、リーダー：相澤正夫）であり、その最初の成果物として刊行するものである。“現代日本語の動態”と略称するこのプロジェクトは、4年前の2009年秋に、次のような構想を掲げて新規に発足し、その後、メンバーと対象領域を拡充しながら現在も継続している。

・戦後60年余（20世紀後半から21世紀初頭）の現代日本語、特に音声・語彙・文法・文字・表記などの言語形式に注目して、そこに見られる変異の実態、変化の方向性を、従来とは違った多角的なアプローチによって解明する。
・変異から変化への動態を的確にとらえるため、各種コーパス等の新規データを最大限に活用するとともに、対象に適合した新たな調査・分析手法の開発をはかる。併せて、現代日本語の的確な動態把握に基づき、言語問題の解決に資する応用研究分野の開拓を目指す。
・この共同研究により、例えば、語彙論的研究（体系・構造研究）と社会言語学的研究（運用・変異研究）の融合が促進され、変化して止まない現代日本語の姿を多角的・総合的にとらえるための研究基盤が確立される。

プロジェクトでは、現代日本語の動態を的確に捉えるための試みであれば、どんなアプローチをとってもよい、むしろ、従来とは違った多角的なアプローチを積極的に試してみよう、そういった姿勢をメンバー間で共有しながら調査研究を進めてきた。したがって、試行的、探索的な性格を色濃くもったプロジェクトと言うことができる。

取り上げる対象は、現代日本語の時間的変異（変化）、空間的変異、社会的変異のいずれに関係する事象であってもよい。音声・語彙・文法・文字・表記

などの言語形式に注目し、そこに見られる変異の実態、変化の方向性を明らかにすることを主要なテーマとするが、そのような変異・変化の背後にある日本語の使い手の様々な言語意識、言語使用意識を探りだすことも、重要なテーマとして含めることにする。

プロジェクトのメンバーは、以上のような研究姿勢を念頭におきつつ、各自のテーマ設定に沿って調査研究を進め、年4回開催の公開研究発表会の場で順番に成果を発表し、たっぷりとコメントを受けた。本書に収めた12編の論文のほとんどは、そのような過程を経て最終的に産出されたものである。

論文集に編むにあたっては、大きく二つの観点から、全体の構成と論文の配置を行うこととした。一つ目の観点は、分析の「対象」と「手法」のどちらに論文の焦点が当てられているか。これにより、12編の論文を「第1部 動態研究の実際―分析対象の側面から―」の6編と、「第2部 動態研究の基盤―データと分析手法の側面から―」の6編とに分けた。「第1部」の6編は、さらに分析対象の違いにより、「語・慣用句」3編と「文法・表現」3編とに二分した。二つ目の観点は、論文で扱うデータが「コーパス調査」と「対人調査」のどちらによるものであるか。「第2部」の6編は、この区分をそのまま当てはめて、それぞれ3編ずつに二分した。これでひとまず見通しのよい構成が得られたが、このような区分・配置はあくまでも一つの便宜であって、個々の論文をその枠組みに固定しようと意図するものではない。

プロジェクトが最終的に目指すところは、変化して止まない現代日本語の研究に、従来の枠組みを超えた融合的な新領域を開拓することである。そのためには、近接した領域で類似の言語現象を研究していながら、一堂に会して議論をする機会の少なかった様々な背景をもつ研究者に、情報交換や相互啓発の「場」を提供することが不可欠である。本書は、そのような「場」から生まれた第一段階の成果と位置づけられるものであり、「現代語動態研究」の「構築」を進めていくための「足場」として、広く活用されることを願うものである。

編　者

『現代日本語の動態研究』　目次

まえがき ……1

第１部　動態研究の実際　―分析対象の側面から―

―――――――――――――〈語・慣用句〉―――――――――――――

動詞ヒモトクにおける伝統用法と新用法の共存（相澤正夫）……9

1．はじめに
2．ヒモトクの新用法とその普及
3．大規模コーパスに見る伝統用法と新用法の使用実態
4．全国規模の意識調査に見る話者の使用意識の実態
5．おわりに

外来語動名詞「チェック」の基本語化
―通時的新聞コーパス調査と意識調査の結果から―（金愛蘭）……29

1．外来語の基本語化
2．本稿の目的
3．大規模な「通時的新聞コーパス」の作成
4．使用量の増加
5．用法の拡大
6．意味の拡大
7．意識調査との比較
8．まとめと今後の課題

慣用句“気がおけない”の「誤用」について（新野直哉）……46

1．はじめに
2．先行研究
3．世論調査の結果
4．今日の実例調査の結果

5．「誤用」例の意味
6．「誤用」の発生理由
7．世論調査と実例調査の結果のずれ
8．「誤用」の初例
9．おわりに

〈文法・表現〉

サ変動詞の五段活用化・上一段活用化の現状（松田謙次郎）……69
1．はじめに
2．研究史とその批判的検討
3．調査概要
4．結果と分析
5．おわりに

新聞データ（朝日『聞蔵』）に見る「なく中止形」の動向（金澤裕之）……90
1．はじめに
2．「なく中止形」について
3．アンケートによる確認
4．今回の調査について
5．おわりに

“道理に合わない”授受表現の使用と動態
―愛知県岡崎市での経年調査および最近の全国調査から―（尾崎喜光）…104
1．“道理に合わない”授受表現
2．授恵場面（情報提供場面）における従属節内での「～ていただく」等の使用
3．授恵場面（援助申し出場面）における主節での「～なさい」「～てください」「～てあげる」等の使用
4．まとめ

第２部　動態研究の基盤　―データと分析手法の側面から―

〈コーパス調査〉

探索的データ解析による言語変化研究
―蛇行箱型図によるＳ字カーブの発見―（石井正彦）……129
1．はじめに
2．探索的データ解析
3．安本（1963）の概要と問題点
4．金水（2004）の概要と問題点
5．蛇行箱型図
6．安本データの蛇行箱型図
7．金水データの蛇行箱型図
8．おわりに

現代日本語における外来語表記のゆれ（小椋秀樹）……151
1．はじめに
2．先行研究
3．調査資料
4．外来語表記のゆれの認定
5．調査結果
6．考察
7．おわりに

分かりにくい医療用語の類型と語の性質（田中牧郎）……172
1．はじめに
2．分かりにくい医療用語の分類
3．一般媒体での使用実態の調査
4．一般に知られていない語（ａ類）の特徴
5．言葉は知られているが意味が正しく理解されていない語（ｂ類）の特徴
6．言葉は知られており、意味も正しく理解されている語（ｃ類）の特徴
7．おわりに

〈対人調査〉

方言と共通語に対する意識からみた話者の類型
　—地域の分類と年代による違い—（田中ゆかり・前田忠彦）……194
1．はじめに
2．全国方言意識調査の概要
3．方法
4．五つの潜在クラスと生育地群別帰属確率
5．年齢による潜在クラスへの帰属確率の違い
6．主要生育地群ごとの年齢による潜在クラスへの帰属確率の違い
7．潜在クラスへの帰属確率と年齢との関係から分かること
8．おわりに

「とびはね音調」はどのように受けとめられているか
　—2012年全国聞き取りアンケート調査から—（田中ゆかり）……211
1．はじめに
2．「とびはね音調」とは？
3．2012年全国聞き取りアンケート調査
4．報告
5．まとめと今後の課題

NHKアナウンサーのアクセントの現在 —複合動詞を中心に—（塩田雄大）…236
1．はじめに
2．今回のアクセント調査
3．複合動詞のアクセントをめぐる先行研究
4．前回のアクセント調査（1996、1997年）での複合動詞の傾向
5．今回のアクセント調査（2009年・音声聴取式）での複合動詞の傾向
6．考察

あとがき……259

編者・執筆者紹介……261

第１部　動態研究の実際
―分析対象の側面から―

動詞ヒモトクにおける伝統用法と新用法の共存

相澤　正夫

キーワード：意味　比喩　表記　コーパス　意識調査

1．はじめに

「ヒモトク」という動詞には、〈書物を読む〉という意味の伝統用法に加えて、〈分析・解明する〉という意味の新用法が近年になって急速に広まり、二つの用法が共存状態にあるようである。（本稿では、動詞そのものに言及するときは「ヒモトク」のように片仮名で表記する。また、動詞の意味に言及するときは〈書物を読む〉のように山括弧に入れて示す。）

新用法を誤用とする批判的な立場もあるが[注1]、本稿では、新用法の成立が伝統用法とどのような関係にあるのか、主として『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から抽出した用例の分析に基づき、全国規模で実施した話者の使用意識調査の結果も援用しながら、両用法が共存するに至った過程と今後の変化の方向について多角的に動態の解明を試みる。

あわせて、「歴史をヒモトク」に見られる伝統用法と新用法の二面性、ヒモトクの多様な表記と用法との関係、ヒモトクの出現文脈と用法との間に見られる顕著な傾向など、意味・用法の識別に有効な観点を具体的に指摘する。

2．ヒモトクの新用法とその普及

まず、新用法の典型的な用例を次に示す。2008年に地方自治体の広報用ポスター（ちらし）と思われる文書に現れたものである[注2]。（以下、用例中の動詞ヒモトクを囲み線で、その動作の目的語に相当する部分を下線で示す。）

(1)「宇宙の歴史をひもとく気球実験」（改行）137億年前に私たちの宇宙が始まってから現在までの宇宙の歴史を解き明かそうと、今年から大樹町

で気球実験が始まります。（改行）多くの宇宙の謎に挑戦する気球実験チームの夢を紹介し、宇宙についての皆さんの疑問にもお答えします。

(2) …この協定締結を記念して、JAXAからお二人の講師をお招きし、講演会を開催します。（改行）宇宙の歴史、それを解明する大気球実験及びこれまで大樹町で行われた航空機や飛行船実験のお話をしていただきます。…

(1) の講演タイトル中のヒモトクが新用法であることは、直後の本文に「宇宙の歴史を解き明かそう」とあることから明らかである。また、同じ文書の別の箇所には、(2) のように「宇宙の歴史、それを解明する大気球実験」とも書かれており、新用法であることを裏付けている。

講演タイトルという人の目を引く部分でヒモトクを用いながら、本文では「解き明かす」「解明する」という普通の動詞で言い換えをしている。この点に、自治体（あるいは講師）の宣伝効果を期待する表現上の工夫と同時に、公共機関としての住民に対する配慮を感じ取ることができる。しかし、ヒモトクの新用法が公共性の高い自治体の広報媒体に登場していることは注目に値する。新用法が社会一般に相当広く普及していることを想像させるからである。

公共性の高い媒体と言えば、新聞にも新用法はすでに登場しているようである。国広（2010）は、その「ひもとく―誤用か新用法か」の冒頭で、「〈書物を読む〉という意味の少し古風な言葉」という伝統的な理解では意味の通じない最近のヒモトクの用例をいくつか示しながら、同様の用例が新聞の社説にも見られたという次の (3) のような記述について、要約しながら紹介している[注3]。

(3) …朝日新聞の社説に「テロに屈してはならぬというのは当たり前のことだ。だが、世界を見渡すと、それですべてがひもとけるわけではない」とあったので、「どう解してよいか迷った」…　（傍点は原文。）

(3) のヒモトクには、国広も指摘するとおり〈解決する〉に近い意味が感じられるが、新用法の一変種であることには違いなく、少なくともこの社説の筆者は社会一般に向けて使用しても問題ないと考えていたものと思われる。ヒ

モトクの出現箇所を見ると、先の（1）が講演のタイトルであったのに対して、(3) は社説の本文の文章であることから、新用法が相当な水準まで普及していることを窺わせる[注4]。

このように、自治体の広報や新聞の社説のような公共性の高い媒体に現れているかどうかは、ヒモトクの新用法の普及度を推定する際の一つの指標として有効である。また、本や雑誌記事、あるいは講演などのタイトル部分に現れるだけなのか、それともさらに本文の文章中にも現れるのかに注目することも有効な観点と言えるだろう。いずれにせよ、今がヒモトクの新用法の発生・普及の動態を観察する好機であることは間違いない。

3．大規模コーパスに見る伝統用法と新用法の使用実態

3.1.『現代日本語書き言葉均衡コーパス』からの用例採集

まず、国立国語研究所がウェブ上で公開している『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）[注5] を調査対象として、ヒモトクの用例をもれなく採集することにした。BCCWJ は、その名のとおり、「現代日本語」の「書き言葉」を対象とする、様々な媒体間の「均衡」を図った、約 1 億語を収載する大規模コーパスである。BCCWJ が収載する媒体の種類は、次に示す 11 種である。（括弧内は、順に、発行年、サンプル数、推定語数である。）

① 書籍（1971 ～ 2005 年、22,058 件、約 6,270 万語）
② 雑誌（2001 ～ 2005 年、1,996 件、約 440 万語）
③ 新聞（2001 ～ 2005 年、1,473 件、約 140 万語）
④ 白書（1976 ～ 2005 年、1,500 件、約 490 万語）
⑤ 教科書（2005 ～ 2007 年、412 件、約 90 万語）
⑥ 広報紙（2008 年、354 件、約 380 万語）
⑦ Yahoo! 知恵袋（2005 年、91,445 件、約 1,030 万語）
⑧ Yahoo! ブログ（2008 年、52,680 件、約 1,020 万語）
⑨ 韻文（1980 ～ 2005 年、252 件、約 20 万語）
⑩ 法律（1976 ～ 2005 年、346 件、約 110 万語）
⑪ 国会会議録（1976 ～ 2005 年、159 件、約 510 万語）

発行年の情報から分かるように、媒体によって「現代日本語」の「現代」の範囲が大きく異なることには注意が必要である。例えば、主要媒体の「書籍」は1971年から2005年の35年間という時間幅があるのに対して、「Yahoo! ブログ」のような新媒体はごく最近の2008年のみが対象期間となっている。

11種全ての媒体を対象にヒモトクの用例採集を行った結果、「書籍」136例、「雑誌」13例、「新聞」4例、「広報紙」9例、「Yahoo! 知恵袋」3例、「Yahoo! ブログ」16例、「国会会議録」3例のように、7種の媒体から今回の分析に有効と思われる総計184の用例が採集された(注6)。

3.2. 表記と媒体から見たヒモトクの出現状況

実際に184例の用例を確認していくと、ヒモトクの表記には、「ひもとく」97例、「ひも解く」10例、「紐とく」2例、「紐解く」42例、「繙く」33例のように多様性が認められる。「表記」の多様性と「媒体」の違いに注目して、ヒモトクの出現状況を概観したのが、表1である。(「Yahoo! 知恵袋」と「Yahoo! ブログ」は「Web」として一括した。)

表1　ヒモトクの出現状況（表記別・媒体別）

	書籍	雑誌	新聞	広報紙	Web	国会	計
ひもとく	73	6	4	6	5	3	97
ひも解く	5	2	0	2	1	0	10
紐とく	1	0	0	0	1	0	2
紐解く	27	2	0	1	12	0	42
繙く	30	3	0	0	0	0	33
計	136	13	4	9	19	3	184

表1から、媒体によってヒモトクの出現度数には違いがあるものの、表記に多様性の見られる媒体（書籍、雑誌、広報紙、Web）と、一定した表記「ひもとく」のみが現れる媒体（新聞、国会）との大きく二つがあることが分かる。この違いは、その媒体にあらかじめ決められた表記規則があり、それに従っているかどうかによるものと考えられる。

公共性の高い媒体である新聞と国会会議録では、表外漢字である「紐、繙」

が使用されず、また交ぜ書きも回避されて、「ひもとく」に一本化されている。一方、文字・表記の制約がゆるく、書き手の自由裁量の度合いが高い書籍、雑誌、Web、広報紙では、表外漢字、交ぜ書きを含めた多様な表記が行われているのであろう。

ここでは、「繙く」の使用が、表記の自由度が高い書籍、雑誌に偏っている点に注目したい。「繙」という表外漢字は、「紐解く」「紐とく」「ひも解く」とは違って、ヒモトクの伝統用法（＝書物を読む）を知っている人でなければ使えないはずである。したがって、同じヒモトクであっても表記が「繙く」の場合は、それを手がかりにして、その用法を伝統用法と特定できる可能性がきわめて高い。一方、「紐解く」「紐とく」「ひも解く」などは、表記の面からも二つの形態素に分解して捉えられやすく、「もつれた紐を解く」といった新用法のイメージとの親和性が高くなると推測される。

3.3. 伝統用法と新用法を区別する原理

次のステップは、BCCWJ から採集された 184 の用例のそれぞれについて、二つの用法のどちらであるかの判別を行うことである。その前に、両用法の区別を的確に行うための前提として、２点について確認をしておく。

第１点は、ヒモトクの二つの用法の意味論的な成立原理に関することである。国広（2010）には、一般向けの平易な記述のなかに、両用法の本質を突く観察が示されている。これを、谷口（2003）が提示する認知意味論の主要概念であるメタファーとメトニミーの区別を参考にして整理すれば、次のようになる。

伝統用法：ひもを解いたあとの「読む」という動作を間接的に表現するもの。間接的であるがゆえに上品な感じを伴う[注7]。
⇒ メトニミー（metonymy：喚喩）

新用法　：固く縛ってある「ひもをゆるめて解く」という具体的動作に基づき、比喩的に抽象的な働き・精神的作用を表現するもの。
⇒ メタファー（metaphor：隠喩）

メトニミーは、「近接性に基づく比喩」であり、「あるものによって、それと

近い関係にある別のものを指し示す」ものである。ヒモトクの伝統用法〈書物を読む〉は、先行する「書物のひもを解く」という動作によって、直後に続く「その書物を読む」という動作を表現していることから、「先後関係」すなわち「時間的な近接性」に基づくメトニミーの一種と言うことができる。類例としては、「ミシンをふむ（＝ミシンで縫い物をする）」「ハンドルをにぎる（＝車を運転する）」「筆をとる（＝手紙や原稿を書く）」などが挙げられる。

一方、メタファーは、「類似性に基づく比喩」であり、「あるものによって、それと形態や性質の類似した別のものを指し示す」ものである。ヒモトクの新用法〈分析・解明する〉は、上述のとおり、「ひもをゆるめて解く」という具体的動作によって、「分析・解明する」という抽象度の高い精神的作用を表現していることから、メタファーの一種と言うことができる。目に見えない精神的作用のプロセスを具体的動作に見立てることによって、ありありとした表現が与えられている。「事件のもつれた糸をほどく（＝解明する）、「解決の糸口（＝きっかけ）」など、同様の「見立て」による表現が即座に想起され、新用法を容易に産み出す素地ができ上がっていることを窺わせる。

第２点目は、「～をヒモトク」と「～のひもをトク」における形式と意味の対応関係に関することである。現代語で、動詞ヒモトクは〈ひもを解く〉という具体的動作を表わすことがない。「ひもをトク」あるいは「ひもをホドク」というのが普通である。一方、例えば「書物のひもをトク」は、ヒモトクの伝統用法であるメトニミー的な意味を表わすことがない。「歴史書のひもをとけば、○○が分かる」のような言いかたはしない。また、メタファーによる新用法でも「謎をヒモトク」のように言うだけで、「謎のひもをトク」とは言わない。以上の関係を整理すれば、表２のようになる。

表２　「～をヒモトク」と「～のひもをトク」の用法分担

	具体的動作	メトニミー	メタファー
～をヒモトク	×	伝統用法	新用法
～のひもをトク	○	×	×

現代語のヒモトクには、具体的動作を表わす用法がなく、比喩を基盤とする二つの用法が現時点で共存している。メトニミーに基づく伝統用法は、古風な

文章語あるいは教養語として存続してきたが、分かりやすい日常語ではないために長期的には「衰退」傾向にあったと思われる。しかし、その一方で、「ヒモトク」という語形自体には強いイメージ喚起力があり、そのことがメタファーに基づく新用法の発生・普及を促し、この語を「再生」させたのではないか。

新用法の周辺には「トキアカス（解き明かす）」「トキホグス（解きほぐす）」などが類義語として存在し、また、「謎（疑問、問題）をトク（解く）」のようなありふれた言い方も存在する。「トク（解く）」を機縁として、ヒモトクがこれらの複合動詞と連想・類義の関係に入り、徐々に安定した地位を築きつつあるというのは、十分に想定できる普及のプロセスであろう。

3.4. 伝統用法と新用法の出現状況

3.3. の確認事項を踏まえ、BCCWJ から採集された 184 の用例について、二つの用法のどちらであるかの判定を行った。基本的に「ヒモトクの前後の文脈を参照して、伝統用法と新用法とで無理なく意味の通る方を用法として採用する」という方法によった。判定の結果は、次の表３に示すとおりである。（項目ごとに、「伝統用法 / 新用法」のような形式で用例出現数を示した。）

表３　ヒモトクの伝統用法と新用法の出現状況（表記別・媒体別）

	書籍	雑誌	新聞	広報紙	Web	国会	計
ひもとく	64/9	3/3	3/1	3/3	2/3	3/0	78/19
ひも解く	4/1	1/1	0/0	2/0	1/0	0/0	8/2
紐とく	1/0	0/0	0/0	0/0	1/0	0/0	2/0
紐解く	19/8	1/1	0/0	1/0	7/5	0/0	28/14
繙く	29/1	3/0	0/0	0/0	0/0	0/0	32/1
計	117/19	8/5	3/1	6/3	11/8	3/0	148/36

（注）「伝統用法 / 新用法」のように出現度数を表示。

まず、全体の出現状況を百分率に直して見ると、伝統用法 80.4%、新用法 19.6%となり、ほぼ４対１の出現率となっている。この数値が BCCWJ における両用法の出現状況の平均像と言うことができる。

表記の観点から見ると、平仮名表記の「ひもとく」は、伝統用法 80.4%、新用法 19.6%となり、全体と全く同じ出現状況となっている。交ぜ書きの「ひ

も解く」と「紐とく」は用例数が少ないので措くとして、注目したいのは漢字表記の「紐解く」と「繙く」である。

3.2. において、表記が「繙く」の場合は、それを手がかりにして伝統用法であると予測できることを述べたが、33 例中の 32 例がそのとおりの結果となった。新用法と判定した 1 例は次の（4）であり、〈書物を読む〉あるいはそれに準ずる解釈では意味が通じないが、〈分析・解明する〉あるいは〈解説する〉ととれば解釈が可能である。

(4) …「台湾人による台湾人のための台湾史」と銘打たれた、この新しい解釈の歴史教科書は台湾の視点で歴史を繙き、オランダ、スペイン時代から鄭成功の奪回、清朝の統治は「清領時代」という区分になり、日本時代についても功罪平等、きわめて客観的記述が目立つ。…（宮崎正弘『迷走中国の天国と地獄』2003 年）

一方の「紐解く」については、伝統用法 66.7%、新用法 33.3%と、ほぼ 2 対 1 の出現率となり、全体の平均よりも新用法の比率がかなり高くなっている。こちらも 3.2. における予想のとおり、「紐」「解く」の二つの漢字による表記が、新用法の意味解釈と親和的であることを示唆する結果となっている。

媒体の観点から見ると、圧倒的多数の用例が採集された書籍では、伝統用法 86.0%、新用法 14.0%と、新用法の比率がやや低めである。一方、Web、雑誌、広報紙においては、新用法の比率がきわめて高くなっている、これは媒体そのものの性格の違いもさることながら、BCCWJ に収載されたデータの対象時期の違いが影響していると見るべきだろう。3.1. の媒体一覧のとおり、書籍は 1971 年から 2005 年の 35 年間、それ以外の 3 者は 2000 年代のデータである。

3.5. 用例に見る伝統用法の特徴

実際に採集された多数の用例を精査すると、「ヒモトクの伝統用法は条件節の中で使われやすい」といった顕著な傾向が観察される。すなわち、「～をヒモトクと、～」「～をヒモトケば、～」「～をヒモトイてみると、～」のような順接条件の用例が頻出するとともに、「～をヒモトイても、～」「～をヒモトイ

てみても、～」のような逆接条件の用例もそれに準じて現れる。そして、この傾向は新用法との意味の識別に重要な手かがりを与えていることが分かる。具体的な用例を次の（5）（6）に示す。（以下、傍点は筆者。）

（5）…いったいこの男はどこで何をしていたのだろう。そこで『日本書紀』を ひもとく と、奇妙な重なりをもった人物が存在していたことに気づかされる。…（関裕二『古代史の秘密を握る人たち』2001 年）

（6）…そこで『大辞林』というやつを開くと、やはり「日本風の食事。日本料理」となっている。さらばと『日本語大辞典』を 繙いて も同じ説明であり、さっぱり輪郭がつかめない。…（村松友視『食べる屁理屈』1998 年）

このように、伝統用法の〈書物を読む〉は、ある何かの目的のために〈書物を参照する〉といった「参照モード」で使われていることがきわめて多い。言い換えれば、読むことそれ自体よりも〈読んで調べる〉に近い意味で使われている。同様の参照モードの意味は、次の（7）（8）のように、連用形、あるいは連用形＋テ形で接続する場合にも、読み取ることができる。

（7）…同時に、医師や教授の指導と助言を仰ぎつつ、和漢方の原典を 繙き、完成度の高い治療薬の調合を目指した。…（山崎光夫『日本の名薬』2004 年）

（8）…私は最近、錬金術の実験を始めた。久しく手を着けずにいたピエェルの書を 紐解いて、詳細に閲し、その手順を追って日毎作業を繰返している。…（平野啓一郎『日蝕』1998 年）

このように、〈読んで調べる〉という参照モードの意味が読み取れるかどうかは、一方では伝統用法と認定するための手がかりとして重要であるが、それと同時に〈調べる〉という新用法につながる意味が読み取れる点にも注意をしておきたい。次の（9）（10）は、いずれも「歴史をヒモトク」のように動詞

ヒモトクの対象物が「書物」として明示されていないが、参照モードを形成する文脈の特徴をもつことから、実質的に「歴史について書かれたもの（＝歴史書、記録文書）」を対象物とすることが明らかに読み取れる例である。

(9) …上位入賞者たちのしのぎを削る演奏が目白押しだ。過去の歴史を紐解けば、必ずしも優勝者が大成するとは限らない。…（岩城京子・前島秀国『Weekly ぴあ』2003年）

(10) …私の結論を述べると、残念ながらオバマ大統領による「雇用創出のための経済施策」は全て失敗すると見ています。というのは、資本主義経済の百年の歴史を紐解いてみても、「雇用創出」それ自体を目的として上手く機能した経済施策というものはないからです。…（『Yahoo! ブログ』2008年）

一方、3.4. に示した（4）の「歴史をヒモトク」の用例は、表記こそ伝統用法と整合的な「繙く」であるものの、意味的には伝統用法と認定できなかった稀少例である。（4）に対するこの判定には、上述のような参照モードを形成する文脈の特徴が欠けていることも、要因として関わっていると思われる。

なお、次の（11）のように〈読んで調べる〉といった参照モードの意味が希薄で、単に〈書物を読む〉、つまり〈読書〉という意味で使われている用例も、もちろん採集されている。

(11) …スクリャービンはショーペンハウエルからニーチェ、はてはマルクスまでをもひもとく読書家で、多くのアフォリズムを書き残し、「音楽は思想によって生きる」と言うほどに思想を欲する人間だった。…（岡田敦子『永遠は瞬間のなかに』1994年）

3.6. 用例に見る新用法の特徴

新用法には、3.5. で見たような伝統用法としての解釈を許さない新奇な用法という側面もあるが、一方では、〈分析・解明する〉など新たな意味の特定に

つながる特徴も観察される。例えば、次の（12）（13）は、いずれも翻訳文であり自然さにはやや欠けるが、ヒモトクが「受け身形」で現れている。意味は〈解き明かされる〉がいちばん近いであろう。

（12）…写本によれば、私たちは、自分自身の進化の喜びによって満足します。つまり、霊感を受け取り、そのあと自分の運命がひもとかれてゆくのを、じっと見守る喜びによって、充たされるのです。…（ジェームズ・レッドフィールド / 山川亜希子・山川紘矢訳『聖なる予言』1995 年）

（13）…これはマルコムのシンボリックなパワーが白いアメリカの集合心理の中でいかに大きかったかを如実に物語っている。カシアス・クレイにとっては、このときこそ真実が紐解かれていくのを経験した最初のモメントだった―この後同じようなモメントに彼は何度も遭遇することになる。…（マイク・マークシー / 藤永康政訳『モハメド・アリとその時代』2001 年）

また、次の（14）は、ヒモトクが「可能形」で現れているが、これは事物の由来・来歴が〈解明できる〉という意味であろう。

（14）…ヨーロッパやインド、中国などを旅して、モダニズムだけでは物足りないと思うようになってきた。実際に海外でオリジナルの建築に触れ、過剰装飾を構成する部品のルーツが紐解けるようにもなっていた。ゴテゴテの折衷建築はわけのわからない恐いものから、複雑でおもしろいものになってきた。…（小野一郎『日本怪奇幻想紀行』2001 年）

新用法には、次の（15）（16）のように、「もつれた紐を丁寧にほどいていく」といった具体的イメージを喚起する用法も多い。普通に「疑問（謎）を解く」と言う場合に比べて、〈解きほぐす〉という意味合いを強く感じさせる用法のように思われる。

(15) …何故に歴史ある巴里の街が灰燼に帰したのだろうか？　ISDFはどうして抑止力としての役割を全うできなかったのだろうか？こうした疑問を一つ一つ紐解いていけば、数冊分の書籍が必要となろうし、それを詳説できるだけの力量があるかどうかは、筆者にも疑わしい。…（吉田親司『帝国の聖戦』2（勃興編）2002年）

(16) …女と男は、どこがどう違うのか。なぜそんな違いができたのか。その謎を紐解いていくと、数百万年におよぶ弱肉強食の世界での熾烈な生存競争が浮かび上がってくる。…（Yahoo! ブログ／エンターテインメント／テレビ 2008年）

さらに、新用法には、単に〈解きほぐす〉だけでなく、その内容を人に伝えることまで含み込んだ（17）のような用例もある。「分かりやすく」とあるとおり、意味は〈解説する〉がいちばん近いであろう。

(17) …私のような粗末な者なのに、お寺のご住職様や坊守様、布教師の先生方、在家の方でありながらも仏法に詳しい方々から、仏様の教えを分かりやすく、ひもといて戴きました。心から、厚くお礼申し上げます。…（浅川昌子『金色の喜び』2005年）

この〈解説する〉という意味で広まりつつある新用法の変種を観察すると、次の（18）のように、「～から」が共起する用例のあることに気付く。解説する際に取り上げる「観点」を、「～からヒモトク」という形式で提示しているものと思われる。メタファーに即して言えば、「紐解く」という行為の「糸口」を、「～から」で表示していると見ることもできる[注8]。

(18) …この本では家族政策から紐解いて、最も身近な家族政策である保育・育児の領域に限定してみました。家庭と母性の歴史、人口政策という国の制度政策と保育の関係、世界の保育の状況、日本の保育制度などごく大ざっぱですが概観して、家庭と育児と社会の関係を考え直す新たな視

点を提供してみたいと思います。… （鈴木真理子『保育革命』1997年）

3.7. 伝統用法と新用法を媒介する「歴史をヒモトク」

ここまでの議論で、「歴史をヒモトク」が伝統用法と新用法の両方にまたがる興味深い事例である点に触れてきた。用例で言えば、(9)（10）を伝統用法、(1)（4）を新用法として分類している。このような「歴史をヒモトク」の二面性については、事実の指摘はあるものの(注9)、詳細な考察は行われていないようである。

3.5. で見たように、「歴史をヒモトク」に〈読んで調べる〉という意味が読み取れる（9）（10）のような用例の存在が、ここでは重要な位置を占めると思われる。単に〈読む〉だけでなく〈調べる〉という意味を含意することが、新用法へと展開していく契機になったと推測されるからである(注10)。

本稿では、「歴史をヒモトク」を媒介項として、ヒモトクの伝統用法と新用法の連続的な側面を捉えることを試みる。ちなみに、BCCWJからは「～の歴史をヒモトク」が33例、「～史をヒモトク」が14例、合わせて47例が採集されており、全184例の25.5%を占めている。ヒモトクの用例の四分の一は「歴史をヒモトク」ということであり、出現頻度の点でも無視できない存在と言うことができる。

ところで、本稿の分析に深く関連することとして、歴史学で区別される「歴史」という言葉の二重性に言及しておく必要がある。端的に言えば、過去に起こった事柄である「出来事としての歴史（＝ゲシヒテ）」と、それを調べて書き上げた「書かれたものとしての歴史（＝ヒストリイ）」の区別である（堀米1964:26-38）。この歴史の二重性は、「歴史をヒモトク」という表現の解釈に、そのまま当てはめることができそうである。

ヒモトクの典型的な伝統用法から、「歴史をヒモトク」の複数の用法を経て、典型的な新用法に至る過程を順序立てて示せば、次の①～⑤のようになる。全体として見れば、②の「読書モード」と④の「探究モード」との間に意味・用法の飛躍・断絶があるが、その間に③の「参照モード」を介在させることによって、両者の連続的な性格を捉えることができる。

①【伝統用法】書物を読む。
② 歴史をヒモトク＝歴史書を読む。（歴史＝書かれたもの）
③ 歴史をヒモトク＝歴史書（記録・文書）を参照して調べる。（同上）
④ 歴史をヒモトク＝多様な手段で歴史を解明する。（歴史＝過去の出来事）
⑤【新用法】事物がどうなっているかを分析・解明する。

なお、実際の用例は、次に示す（19）（20）のように、③の「参照モード」に属するものが圧倒的に多い（30例）。また、（21）は、④の「探究モード」と思われる数少ない用例（5例）の一つである。

（19）…歴史研究を志す者であるからこそ、現代の社会問題や時事問題に敏感でなければならないといえるでしょう。史学史をひもとけば、時代時代・地域地域で必要な歴史が研究され、叙述されてきたことがわかります。…　（早瀬晋三『歴史研究と地域研究のはざまで』2004年）

（20）…何ごとも研究してみてこそ、明らかになる。古来つねに人は人を食ってきたことは、わたしも憶えているが、あまりはっきりしない。わたしは歴史をひもといて調べてみたが、その歴史には年代がなく、どのページにも「仁義道徳」という字がくねくねと書いてあった。…　（高橋和巳 / 魯迅『世界の文学セレクション36』中央公論社 1995年）

（21）…木彫仏はおいそれと樹種を調べるわけにはいかないが、小原氏がおこなった膨大な調査の結果は木の文化史をひもとく上に、十分すぎるほどであると思ってきた。…　（鈴木三男『日本人と木の文化』2002年）

4．全国規模の意識調査に見る話者の使用意識の実態

前節のBCCWJを活用した用例調査によって、ヒモトクの伝統用法と新用法の共存関係の詳細が明らかになった。本節では、日本語話者のヒモトクに対する使用意識の側面から、さらに両用法の共存関係の実態を探っていく。

2012年に実施した全国規模の意識調査[注11]では、大きく次の3項目につい

て、全国満16歳以上の男女1,263名（男性560名、女性703名）から調査データを得た。（調査対象者を「⇒○○」のように示す。）

【1】ヒモトクという言葉の使用度、理解度、認知度。⇒全員
【2】伝統用法と新用法についての使用意識。⇒【1】で「使用、理解」の者
【3】伝統用法と新用法のどちらを先に習得したか。⇒【1】で「使用」の者

まず、【1】では、対象者全員（1,263名）に対して、ヒモトクという言葉を「自分でも使う＝使用」「自分では使わないが意味は分かる＝理解」「意味は分からないが見聞きする＝認知」に区分して、該当するものを尋ねた。結果は、「使用」13.9%、「理解」57.6%、「認知」17.8%となった。これを年齢層別に示したのが図1である。

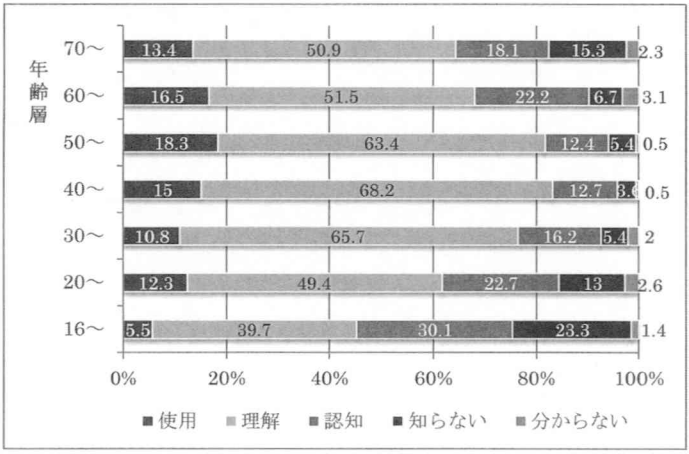

図1　ヒモトクの使用率・理解率・認知率（年齢層別）

図1を見ると、どの年齢層でも「理解」と「認知」を足した割合がきわめて高く、「使用」の割合はかなり低いことが分かる。50代を中心に社会的活躍層で「使用」の割合が高くなるが、それでもかなり低い水準に止まる。ヒモトクが「見たり聞いたりするし、意味は分かるのだが、日常的に使うような言葉ではない」ことを示唆する結果となっている。

次に、【2】では、【1】で「使用」「理解」と回答した人（903 名）に対して、次に示すようなヒモトクの４つの用法を示して、それぞれについて「使う」「知っているが使わない」「知らない」のどれに該当するかを尋ねた。

① 書物をひもとく（「書物を開いて読む」という意味で）
② 歴史をひもとく（「歴史について書かれた書物を読む」という意味で）
③ 歴史をひもとく（「歴史がどうなっているかを解き明かす」という意味で）
④ 宇宙のなぞをひもとく（「宇宙のなぞを解き明かす」という意味で）

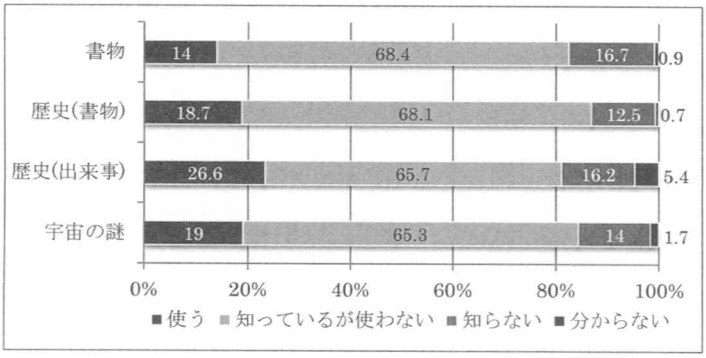

図２　ヒモトクの４つの用法の使用率・理解率

結果は、図２のとおりである（ここでの全体は 903 名）。「知っているが使わない＝理解」については、４つの用法とも 60％台後半と大差はないが、「使う」については、①②の伝統用法と③④の新用法との間に差が認められる。特に、③の新用法の「歴史をひもとく」の使用率が 26.6％と高いことが目を引く。一方、①の伝統用法の「書物をひもとく」の使用率は、その半分強の 14％とかなり低くなっている。

さらに、４つの用法の使用率の動向を探るために、「使う」と回答した人だけを取り上げ、年齢層別に割合を示したのが、図３である[注12]。概観して、60 ～ 70 代の高年層では４つの用法の使用率に大差はないが、50 代以下では年齢層が低くなるにつれて、ほぼ高い水準で推移する新用法と、大きく低下を見せる伝統用法とに二分されていく様子が見て取れる。20 ～ 40 代では、新用法が伝統用法を上回っており、両用法の使用率は逆転している。

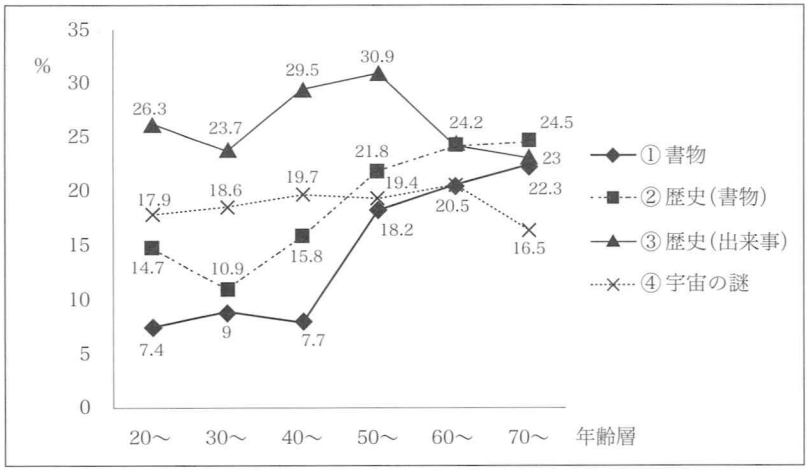

図3　ヒモトクの4つの用法の使用率（年齢層別）

さらに、【3】では、【1】でヒモトクを「自分でも使う＝使用」と回答した人（176名）に対して、4つの用法の中で「初めて覚えて使ったときの使い方に近いもの」を1つだけ尋ねた。結果を年齢層別に示したのが、図4である。現在ヒモトクを自分でも使う人から、かつて最初に身に付けて使ったときの用法を、当人の記憶をたよりに聞き出したものであるが、概観して分かるように、結果ははっきりとした傾向を示している。

60代以上では①②の伝統用法が③④の新用法を上回っているが、50代で③の「歴史をひもとく」の新用法が激増して4つの用法の第1位となり、以下の年代では圧倒的に強い勢力となっている。同じ新用法でも④の「宇宙の謎をひもとく」は、70代のゼロから若年層に向けて微増傾向を示している。一方、伝統用法は、①②とも徐々に、しかし確実に減少していることが分かる。

「先入主となる」と言うとおり、若年層にとってヒモトクの意味は、第一に〈分析・解明する〉であり、〈書物を読む〉はその背後に退いている。3.3. で見たように、メタファーに基づく新用法が安定した地位を築いているのに対して、メトニミーに基づく伝統用法は、意識的な学習によってのみ維持される「教養語」の地位にあることを裏付ける結果と言えるだろう。

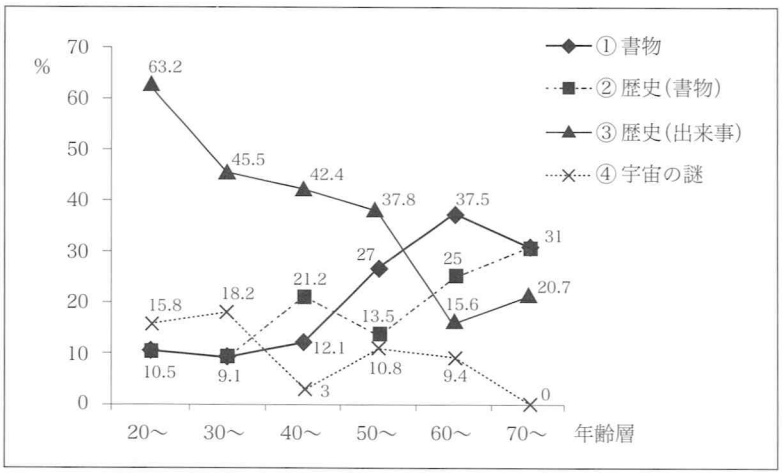

図４　ヒモトクを使う人の初めての使い方（年齢層別）

５．おわりに

本稿では、動詞ヒモトクの新用法が伝統用法とどのような関係にあるのかを解明するために、大きく２種類のデータを活用した。１つは、BCCWJ から抽出された大量の用例データであり、もう１つは、全国規模の意識調査から得られた話者の使用意識データである。

大量の用例データは、日本語そのものの実際使用の微細な側面を明らかにする上できわめて有用である。本稿における分析でも、ヒモトクの多様な表記と用法との関係、ヒモトクの出現文脈と用法との関係、「歴史をヒモトク」に見られる伝統用法と新用法の二面性など、意味・用法の細部に踏み込んだ議論を展開する上で不可欠の存在であった。

一方、全国規模の使用意識データは、用例に基づく意味の分析結果の妥当性を検証する上できわめて有用である。本稿における分析でも、ポイントとなる４つの用法に対する話者の使用意識を年齢層別に捉えることで、伝統用法と新用法とが共存するに至ったプロセスを跡付けることができた。

本稿は、大規模データに基づくコーパス言語学的研究、全国規模の意識調査に基づく社会言語学的研究、メタファーとメトニミーに基づく認知意味論的研究のそれぞれの持ち味を生かす「いいとこ取り」をすることによって、動詞ヒ

モトクの意味・用法の動態（＝揺れ動く実態）を多角的に捉えようとする試みである。互いに異なるアプローチを結合して全体像に迫るための第一歩を踏み出すことはできたが、細部にわたる検証の余地はまだまだ残されている。今後の課題としたい。

注

1）呉智英（文芸評論家）は、「知識人がおかしな言葉を平気で使うことを批判してきた」と断ったうえで、「歴史をひもとく」の一部は「歴史を記した本」とも解釈できるので許容範囲であるが、それ以外の新用法は「拡大解釈を超えた誤用」であるときびしく批判している（「言葉の煎じ薬 第28回 そんなものに紐が付いているか」『小説推理』(2008.1)）。

2）北海道大樹町が主催した「大樹町 / 宇宙航空研究開発機構 連携協力協定締結記念講演会」（平成20年5月25日）の開催案内ポスター（ちらし）の文面による。ウェブ上でグーグル検索により採集した。

3）大久保房男『日本語への文士の心構え―すぐれた文章を書くために』（アートデイズ、2006年）の記述による（国広 2010：113）。

4）国広（2010）が新用法として示す用例6件は、いずれも学者や研究者などの文章、本や雑誌記事のタイトルからの引用である。同書が引く伝統用法の用例5件も同様である。なお、国広（2010）は、旧版の 国広（1991）と同（1995）を「合わせて一本とし、その粋を抜いてさらに新しい項目を加えたもの」であるが、ヒモトクは『新編』で新たに取り上げられた項目である。

5）BCCWJは、Balanced Corpus of Contemporary Written Japaneseの略称である。このコーパスの設計等については、山崎（2007）、前川（2008）を参照。

6）「韻文」からも2例採集されたが、現代の日常的な言語使用とは異なるため、集計からは除外した。

7）国広（2010）では、「お手洗い」に見られるように、大小便を出すことをその直後の「手を洗う」という動作によって間接的に指すのと同じと解説されている。

8）2013年現在、Web上で検索すると、「データからひもとく2015年までのIT市場」「社会のしくみをお金から紐解く」のようなタイトル記事が採集される。さらに、「法律でひもとく介護事故」「力学でひもとく格闘技」のように「～で」と共起する用例や、「マンガがひもとく未来と環境」「写真が紐解く幕末・明治」のように「～が」と共起する用例も採集される。いずれも〈解説する〉ための〈手段〉の意味を表示しており、新用法の変種と見ることができる。

9）例えば、神永曉（辞書編集者）の「『ひもとく』の新しい意味？」（『日本語、どうでしょう？』第7回（2010.5.17）、知識検索サイト「ジャパンナレッジ」のブログ）を参照。

10）関根健一（新聞校閲者）の「ひもとく―読書を始めるにはまず…」（読売新聞『日本語日めくり』（2010.3.17））に、『三省堂国語辞典 第六版』（2008.1）が用例に「歴史をひもとく〔＝調べる〕」を掲載するとの指摘がある。

11）社団法人中央調査社に委託の上、同社が提供するオムニバス調査の一環として実施した。調査設計は、①地域：全国、②調査対象：満16歳以上の男女、③標本数：4,188、④抽出方法：層化副次（三段）無作為抽出法、⑤調査方法：調査員による個別面接聴取法、⑥実施期間：2012年2月2日～2月12日。回収数は1,263、回収率30.2%であった。

12）10代は該当する人数が極端に少ないため、グラフの表示から除外した。

【参考文献】

国広哲弥（1991）『日本語誤用・慣用小辞典』（講談社現代新書1042）

―――（1995）『日本語誤用・慣用小辞典＜続＞』（講談社現代新書1250）

―――（2010）『新編 日本語誤用・慣用小辞典』（講談社現代新書2033）

谷口一美（2003）『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』（英語学モノグラフシリーズ20）研究社

堀米庸三（1964）『歴史をみる眼』（NHKブックス15）日本放送出版協会

前川喜久雄（2008）「KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の開発」『日本語の研究』4-1

山崎誠（2007）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の基本設計について」『特定領域「日本語コーパス」平成18年度公開ワークショップ（研究成果報告会）予稿集』

〔付記〕

本稿で取り上げた全国調査は、国立国語研究所基幹型共同研究「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明（プロジェクトリーダー：相澤正夫）」の一環として実施したものである。また、ヒモトクの関連文献について、新野直哉氏からご教示をいただいた。記して感謝の意を表する。

外来語動名詞「チェック」の基本語化
―通時的新聞コーパス調査と意識調査の結果から―

金　愛蘭

キーワード：外来語　動名詞　基本語化　新聞コーパス　使用意識

1．外来語の基本語化

これまでの外来語（洋語）に対する見方は、日本語語彙の周辺部において揺れ動く存在というものであった。このような見方は、もちろん、現実の語彙の実態に裏付けられたものである。今から半世紀前（1956年）に行われた国立国語研究所の「雑誌九十種の語彙調査」では、外来語の使用率は、異なり語数では10％ほどを占めるものの、延べ語数では3％弱にすぎない（国立国語研究所1964）。

しかし、この調査から半世紀以上を経て、日本語語彙における外来語の位置は、徐々にではあるが、確実に変わってきた。そのことは、まず、外来語の量的な増加として現れている。1906～76年の雑誌『中央公論』を10年おきに調べた国語研究所の語彙調査は、20世紀の後半における外来語の確実な増加を報告している（国立国語研究所1987）。また、『現代用語の基礎知識』の見出し語を1960年版と80年版とで比較した野村雅昭（1984）の調査、戦後の朝日・読売両新聞の社説を対象とした橋本和佳（2010）の経年調査なども、外来語のとくに20世紀の後半における確実な増加を明らかにしている。

このような外来語の量的な増加は、さらに、一部の外来語が（一定の言語使用領域において広範囲・高頻度に用いられるという意味での）「基本語彙」の中にも進出するという結果をもたらしている。実際、1994年の「月刊雑誌70誌の語彙調査」でも、広範囲・高頻度に使用される「基本語」群の中に数多くの外来語を見出すことができる（国立国語研究所2005）。同じ資料の上位1,000語を、「雑誌九十種」の上位1,000語と比較した宮島達夫（2008）は、外来語の比率が1.8%から7.1%に「激増している」こと、すなわち、この40

年ほどの間に、雑誌の基本語彙に外来語が進出していることを報告している。また、20世紀後半の「毎日新聞」を10年間隔で調査した金愛蘭（2011）も、各年の上位2,000語における外来語の比率が延べ語数・異なり語数とも3倍弱増加していると報告している。

こうした外来語の基本語彙への進出（＝基本語化）は、かつては想定されていなかった事態である（森岡健二1977、樺島忠夫1981、石綿敏雄1988）。1970年代から80年代当時は、外来語が増えるとしても、それは、社会的な情勢の影響を受けて基本語彙の外側で起こるものであり、外来語が基本語彙の中に進入してくることはないと考えられていた。しかし、2000年代に入って、樺島（2004）は、日本語の基本的な語の用法が外来語に「侵されている」事実を指摘している。樺島は、それを使わなくてもこれまでにある日本語で表せる外来語や、日本語の基本語彙に属する語で表現できる外来語は、使用しないことが望ましいと結論づけている。

しかし、外来語の基本語化は、樺島が指摘する「日常の会話」にとどまらず、新聞記事などの書きことばにも浸透している可能性がある。最近の語彙調査では、高頻度・広範囲に使用される語群（基本語彙）の中に数多くの外来語を見出すことができる（金2011）。そこには、生活の近代化という言語外的な要因によってその使用が増え、基本語化したと考えられる「エンジン」「スキー」「ホテル」「テレビ」「ビル」などの具体名詞のほかに、「タイプ」「システム」「バランス」「ケース」「トラブル」のような抽象的な意味を表す名詞が少なからず認められる。

生活の近代化という言語外的な要因によって説明できる具体名詞の場合と違って、ある程度抽象的な意味を表す外来語の基本語化には、異なる接近法をとる必要がある。つまり、抽象的な意味を表す外来語は、既存の和語や漢語の類義語があるにもかかわらず用いられるものが多く、その意味・用法とその発展過程とを、関連する（和語や漢語の）類義語との関係や、用いられる文章・談話の特徴なども視野に入れながら、言語内的に明らかにしなければならない。従来の外来語研究では、主に具体名詞としての外来語の、その借用段階の様相に記述の重点が置かれたが、今後の、とくに現代語の外来語研究においては、「抽象的な意味を表す外来語の基本語化」の記述と理論化が重要な研究課題に

なるものと考えられる。

2．本稿の目的

筆者は、上記のような抽象的な外来語の基本語化研究の一環として、これまでに、そうした基本語化が20世紀後半の新聞においてどのように生じたのかを、「トラブル」「ケース」などを対象に調査してきた（金愛蘭2006a、2006b）。しかし、基本語化現象を見せている抽象的な外来語には、純粋の名詞だけでなく、「チェック（する）」「カット（する）[注1]」「スタート（する）」といった動名詞[注2]も多い。いま、『CD-毎日新聞2000データ集』(大阪版含む)に用いられている外来語動名詞を、出現頻度順に上位30語まで取り出し[注3]、その紙面（記事種別）ごとの使用頻度をあわせて示すと、表1のようになる。

表1 『毎日新聞』(2000年）における高頻度の外来語動名詞

順	語		紙面
1	スタート	1288	ス208、総170、経141、特140、社113、説100、二73、一70、国60、芸59、三51、家50、読23、文19、科11
2	アピール	890	ス126、二122、国115、社107、経80、特76、総65、三63、一52、説45、家14、芸9、文7、読6、科3
3	リード	689	ス265、国74、経49、特47、社47、一36、二30、総27、説27、芸26、三26、家10、科10、読9、文6
4	マーク	658	ス531、特30、社23、総21、国19、一18、二5、説5、三5、芸1
5	チェック	579	社142、総84、家57、説54、経43、ス41、三32、特30、一29、国27、二13、芸12、科9、文4、読2
6	オープン	507	社109、経88、総80、三55、特48、一23、芸23、家19、国17、二12、文10、ス10、説6、科4、読3
7	プレゼント	292	三97、総28、社28、特27、ス27、家23、説14、芸11、経10、二8、国6、読5、一4、文2、科2
8	コメント	290	社123、ス26、国25、総24、一23、二16、経16、三14、説11、特4、芸3、家2、文1、読1、科1
9	クリア	269	ス70、社37、経34、総30、特29、説16、三14、家11、二10、一6、文5、芸4、国3
10	ヒット	239	芸66、総39、経36、社21、特15、国13、一12、説11、読7、三6、二5、家4、文2、ス2
11	サポート	220	ス38、特35、社35、総20、経19、家18、三12、説11、二8、文7、国5、芸4、一4、科3、読1

12	イメージ	213	総30、家29、特27、社21、ス19、二12、芸12、経11、三11、読9、説9、一8、文7、国6、科2
13	アドバイス	196	家53、社36、総31、三13、ス10、二9、経9、特8、説8、一7、国4、芸3、文2、科2、読1
14	ストップ	177	社47、ス43、総18、一17、国16、三11、経9、特6、二3、説3、家2、科1、芸1
15	アップ	167	ス34、社23、経21、特18、総18、一13、家12、三10、説7、芸4、二3、科2、文1、国1
16	アクセス	160	社47、特26、総25、経22、一8、説8、家6、読3、三3、ス3、芸3、二2、科2、国2
17	ゴール	157	ス107、総15、社14、特9、芸3、一3、説3、二1、家1、三1
18	リラックス	136	ス49、社21、総14、家12、芸11、二7、特6、国4、三3、一3、説3、科2、経1
19	デザイン	126	社27、総18、家18、特16、経11、一8、ス6、読4、芸4、文3、説3、国3、科3、三2
20	カット	124	経35、ス14、社12、総11、家11、特9、説7、三7、国5、芸5、一4、二3、文1
21	コントロール	120	総27、ス13、特12、家12、説12、社10、二8、三7、国6、芸4、経3、一3、科3
22	チャレンジ	109	総17、ス15、特14、家11、社10、経8、芸8、説7、一5、読4、三4、二3、文2、国1
23	キープ	100	ス67、総12、特4、経4、二3、芸3、国2、家2、三1、一1、説1
24	ダウン	99	社17、経16、ス12、総10、家9、一7、三7、説7、特5、二4、国4、読1
25	エスカレート	95	社27、二11、国11、説10、特9、三7、一6、総5、芸3、文2、読2、経1、ス1
25	サイン	95	ス44、社18、国10、説6、総4、一3、三3、二2、特2、家1、芸1、経1
25	シフト	95	経41、二9、総8、一6、社6、文4、特4、国4、三3、説3、ス2、家2、芸1、読1、科1
28	バックアップ	92	説15、社15、特13、経12、一9、ス5、国5、二4、三4、家3、芸3、総3、科1
29	ボイコット	81	国37、二11、一6、ス6、総6、社6、説6、特2、三1
30	アレンジ	74	総22、家12、特7、社7、芸7、三4、経3、文2、国2、説2、二2、一2、ス1、読1

紙面略号：第一面、第二面、第三面、社説、国際、経済、特集、総合、家庭、文化、読書、科学、芸能、スポーツ、社会

ここには、「リード」「マーク」といったスポーツ面に特徴的な語もあるが、「スタート」「チェック」「イメージ」など全紙面にわたって幅広く使われる語も確認できる。

本稿では、この全紙面にわたって幅広く使われる動名詞のうち、「チェック」について行った調査について報告する。具体的には、自ら作成した大規模な「通時的新聞コーパス」を用いて、「チェック」の意味・用法の変化を明らかにするとともに、別に行った全国規模の意識調査（後述）の結果も検討して、「チェック」の基本語化の過程を記述する。

3．大規模な「通時的新聞コーパス」の作成

1950年から2000年までほぼ10年おきの『毎日新聞』を資料に、毎月3日分（5日・15日・25日）、各年36日分（全体では216日分）の朝刊全紙面の記事を、1950年・60年・70年・80年は『縮刷版』からテキスト入力し、1991年と2000年については『CD-毎日新聞データ集』を利用して該当する部分を抽出し、プレーンコーパスを作成した。

表2　各年の文字数

年	文字数
50	793,692
60	2,208,396
70	3,183,297
80	3,218,737
91	3,265,786
00	3,994,933
計	16,664,841

基本的には、広告を除く記事を対象とするが、ラテ欄、都内版、地方版をはじめ、俳句・川柳、証券・株、人事、決算、訃告、競馬などは除外した。抽出比率は、約10分の1である。作成されたコーパスの規模は、表2の通り。

データの規模は、全体で1,600万字を超え（空白は除く）、ページ数の極端に少なかった1950年（原則として一日2ページ、休日・祝日のみ4ページ）、やや少なかった1960年を除けば、各年ほぼ300万字程度となり、20世紀後半の通時的な新聞コーパスとしては、他に例を見ない大規模なコーパスとなっている。詳しくは、金（2009、2011）を参照されたい。

4．使用量の増加

上記の「通時的新聞コーパス」を用いて、「チェック」の用例数の推移を調べた（表3）。各年の言語量が異なるため、生の出現度数をそのまま比べるこ

とはできないから、100万字当たりの換算値を算出した。なお、言うまでもないが、ここでは、「模様」「符号」「貨幣・切符・証券」といった動名詞ではない単純な名詞での使用はカウントしていない。

表3　「チェック」の使用量の変化

	50年	60年	70年	80年	91年	00年
チェック(する)	0(0)	3(1.4)	44(13.8)	80(24.9)	71(21.8)	83(20.8)

(カッコ内は100万字あたりの換算値)

表3をみると、50・60年の使用は少ないが、70年から80年にかけて大きく増加し、以後、横ばいの傾向をみせている。「チェック」は、80年ごろまでには基本語化した可能性がある[注4]。

また、参考までに、『朝日新聞』14年分（1985～1998年）の単語・文字の出現頻度を調査した『NTTデータベースシリーズ』(天野成昭・近藤公久2000）における「チェック」の出現度数も記す（表4)。ここでも、1985～88年には(百万字あたり)23～25語だが、以後は20語前後で横ばいに推移し、通時的新聞コーパスと同様の傾向を示している。

表4　『NTTデータベースシリーズ』

85年	86年	87年	88年	89年	90年	91年
580(23.2)	640(25.5)	681(25.2)	776(23.4)	695(19.7)	663(19.0)	685(22.2)
92年	93年	94年	95年	96年	97年	98年
602(19.4)	702(20.5)	684(19.6)	727(20.1)	851(22.8)	901(24.7)	762(20.5)

(カッコ内は100万字あたりの換算値[注5])

5．用法の拡大

動名詞「チェック」が、(1)のように名詞として使われるか、(2)(3)のように動詞として使われるかをみた。動詞には、(4)(5)のようないわゆる語幹止めも含めた。表5からわかるように、動詞用法の方が早く現れ、一貫して名詞用法よりも多いことがわかる。

表5　名詞か（サ変）動詞か

	50年	60年	70年	80年	91年	00年
名詞	0(0)	0(0)	8(2.5)	22(6.8)	10(3.1)	17(4.3)
動詞	0(0)	2(0.9)	23(7.2)	35(10.9)	39(11.9)	44(11.0)

(1) 電気製品の安全性などを規定した電気用品取締法の対象が二年前、大幅に広げられ、それまで同法の適用外だったテレビ、ステレオなどもきびしいチェックをうけることになったが、この暫定期間が、…［1970年10月15日第一面］

(2) 結局こんどの公定歩合引上げは国内的には投機を抑制してインフレ傾向をチェックし、対外的にはスターリングの信用を高めて、英国経済を健全な状態に保とうと…［1960年1月25日外電］

(3) 係官はこれらのなかから不穏分子をチェックするが相手が“大物”だったりして大目玉をくう場合もあるという。［1960年7月15日社会］

(4) このためJSALは、販売開始後、20歳前後のシャドーバイヤー（覆面購入者）に販売店を巡回させ、ルールが守られているかどうかをチェック。［2000年10月25日スポーツ］

(5) 冷凍魚、肉は1グラム当たり雑菌五百万個以下とし、冷凍魚については腸炎ビブリオ、冷凍肉についてはサルモネラ菌の有無をきびしくチェック、またナマの魚は腐敗度のバロメーターとなる揮発性塩基窒素の量が百グラムについて…［1970年1月15日社会］

次に、「チェック」の対象の形式が、(6)(7)のようにヲ格の名詞ないし名詞句か、(8)のように「～か（どうか）」などの（疑問表現の）補足節（益岡・田窪1989）かをみた（表6）。名詞（句）の方が早く現れ、その後に補足節の用法が生じたことがわかる。

表6　対象が名詞（句）か補足節か

	50年	60年	70年	80年	91年	00年
名詞(句)	0(0)	2(0.9)	21(6.6)	28(8.7)	31(9.5)	36(9.0)
補足節	0(0)	0(0)	1(0.3)	5(1.6)	9(2.8)	7(1.8)

(6) 政界関係者の出入りは複雑で、院外団、元党員、右翼関係者の出入りがたえない。係官はこれらのなかから不穏分子をチェックするが相手が“大物”だったりして大目玉をくう場合もあるという。[1960年07月15日社会]

(7) …IAEAの査察目的が、原子力の軍事転用をチェックすることにあるとすれば、今回のやり方は、確かにきびしすぎるだろう。[1970年11月5日社説]

(8) 学生の特別実習でやってもらうのだが、学生は毎年、顔ぶれが変わるし、そのたびに測定技術を一から教え、正しいデータが出ているかどうか、チェックしなければならない。当然、余分な負担がかかる。[1970年10月25日解説]

なお、「チェック」が単語として使われるか、(9)～(11)のように合成語中の造語成分として使われるかもみたが（表7)、ともに60年から使われていて、差がない。

表7　単語か造語成分か

	50年	60年	70年	80年	91年	00年
単語	0(0)	2(0.9)	31(9.7)	57(17.7)	49(15.0)	61(15.3)
造語成分	0(0)	1(0.5)	13(4.1)	23(7.1)	21(6.4)	22(5.5)

(9) 小柄ながらスピードのあるスケーティングと十分なスティック・ワークをみせたが、ボディチェックをほとんどしないのがカナダ側の注意をひいた。[1960年1月5日スポーツ]

(10) 一般的には、地図と磁石を使い、主催者が示した方法で、指示されたチェック・ポイントを発見、通過し、できるだけ短い時間でゴールするスポーツといえます。[1970年12月25日意見]

(11) 竹村元支店長は事件の共謀者ではないが、当然やるべき支店のチェック体制に重大な手ぬかりがあったとして、免職一歩手前の諭旨解職処分にしたが、…[1970年11月5日第一面]

6．意味の拡大

国語辞書の意味記述を参考に(注6)、「通時的新聞コーパス」に現れた用例を検討すると、動名詞「チェック」の意味は、以下の四つに分類することができる。

＜意味Ⅰ＞主として組織やその成員が、ヒト（の出入り）やモノ・トコロを、そこに悪いこと（不正や問題）がないかどうか、調べたり監視したりして、取り締まること。

(12) リュブリャナ市街は、依然主要交差点がダンプカーなどで封鎖され、武装した大勢の共和国軍兵士が通過車両のトランクを開けてチェックしている。[1991年07月05日国際]

(13) 十九億円不正融資事件の内部処分を発表した佐々木富士銀行副頭取はこう結んだ。菅沼の不正をチェックできなかった“職務上”の責任をとって担当重役は辞職、当時の雷門支店長は“クビ”。[1970年11月5日社会]

＜意味Ⅱ＞主として組織やその成員が、機械類や身体、文書などを、そこに異常や問題がないか、点検・測定・検査・照合などすること。異常事態を未然に防ぐために行なう場合が多い。

(14) 美浜2号機で問題になった蒸気発生器細管の損傷をチェックするほか、振動による細管の摩耗を抑えるため、振れ止め金具を新型に取り換える。[1991年2月25日第三面]

(15) ある雑誌に掲載されていた企業広告「突然、心臓病に見舞われたりすることのないよう心臓、体力、健康度を測定、チェックし、個人に合った運動プログラム立案を助ける“心臓病・健康測定センター”」に目がとまった。[1980年8月25日家庭]

(16) 内申書が正しく書かれているかどうかチェックして間違いを訂正してもらう権利もあるはず。[1991年4月5日社会]

＜意味Ⅲ＞主として個人が、情報や事柄やモノの内容・中身を、確認するこ

と。不正や異常などの発見のためとは言えないものである。

(17) こんどはゲームが見やすいかどうか、競技場へのアクセスがどうかなどのチェックだよね。日本も競技場ができているけど、アクセスが悪かったり、まったくくだらないスタジアムもある。[2000年7月5日特集]

(18) 前売りはほぼ毎回四週間前に始まるので、日程を早めにチェック。プレイガイド、チケットぴあ、チケットセゾン、日本旅行… [1991年8月25日経済]

(19) 実際、東北地建の98、99年度の対象事業は計112件にも及んだ。再評価では地元の意向もチェックされる。「用地補償や物価上昇など（事業費増の）内容を見ればやむを得ない」（寺田典城知事）… [2000年6月5日総合]

(20) きれいに盛りつけられた料理を崩してまで、下に敷かれたソースをちびりちびりとチェックしたり、テーブルにノートを出してメモしたりする人がいたのです。[2000年11月5日社説]

＜意味Ⅳ＞スポーツで、相手の攻撃などを牽制したり食いとめたりすること。

(21) 優勝をかけた第二試合の西武・王子戦は、十三日国土に敗れて優勝を決めそこなった王子が西武の速いチェックに押された。[1980年12月15日スポーツ]

(22) 中盤もボランチの鬼木を中心に鹿島FW、平瀬と鈴木のコンビを素早くチェックし、スペースを与えなかった。[2000年11月5日スポーツ]

通時的新聞コーパスで、これら四つの意味が、その用例数においてどのような推移を示しているか調べた（表8）。スポーツに限られる意味Ⅳを除けば、意味Ⅰ・意味Ⅱから意味Ⅲへと、その使用が拡大する傾向が見てとれる（意味Ⅰと意味Ⅱとの間には明確な差を見出すことはできない）。つまり、(ⅰ)「チェック」を行なう主体が＜組織やその成員＞から＜個人＞へ、(ⅱ)「チェック」の対象となるものが＜人の出入り＞や＜機械類や身体の異常＞から＜情報類＞

へ、(iii) 行為としては<取り締まり>や<点検>といったややマイナスの評価を伴ったものから情報などの内容・中身の<確認>といったニュートラルなものへ、その意味が広がってきている。

表8 「チェック (する)」の意味とその用例数

意味		50年	60年	70年	80年	91年	00年
I	主に組織やその成員が、ヒト・モノなどを、悪いことがないか調べ、取り締まること	0 (0)	1 (0.5)	18 (5.7)	24 (7.5)	17 (5.2)	17 (4.3)
II	主に組織やその成員が、機械類や身体、文書などを、異常や問題がないか、点検すること	0 (0)	1 (0.5)	11 (3.5)	27 (8.4)	21 (6.4)	28 (7.0)
III	主に個人が、情報などの内容・中身などを確認すること	0 (0)	0 (0)	2 (0.6)	3 (0.9)	11 (3.4)	14 (3.5)
IV	(スポーツで) 相手の攻撃などを牽制したり食いとめたりすること	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (0.9)	0 (0)	2 (0.5)

さらに、最近は「あのお店は、雑誌でお勧めのお店として紹介されたりして、要チェックだ」といったプラスの評価を伴った行為にまでその意味用法を広げてきているようである。今回の通時的新聞コーパスにはこうした使用例は見られなかったが、BCCWJ (注7) には119例が確認できた。下表の数値は「要チェック」のPMW (100万語当たりの頻度) であるが、雑誌に多い表現と言えよう。

表9 BCCWJにおける「要チェック」のPMW

雑誌：11.24	ブログ：1.58	広報：1.22
知恵袋：0.88	出・書籍：0.78	図・書籍：0.37

本来「チェックが必要だ」の形で使うものを、「要チェックだ」という表現にしているのだが、これは「要注意だ」などの語構造からの類推であろう。ただ興味深いのは、「チェックが必要だ」という時は、用例 (23) (24) のように上記の意味IまたはIIで使われているが、「要チェック」は用例 (25) のようなプラス評価の意味合いのものがほとんどである(用例末尾の情報は、[出典、出版年、カテゴリまたはページ数])。

(23) ハワイへ行くのに荷物チェックが必要なようですが、スプレー缶や刃物がダメなの調べてわかったのですが、お水とかペットボトルもダメと聞きました。[Yahoo! 知恵袋、2005年、海外]

(24) 外科的切除後も長期にわたる再発の有無のチェックが必要である。[瀧川雅浩・白濱茂穂編『皮膚科エキスパートナーシング』、2002年、492頁]

(25) 1／24からは「大決算」セールを開催予定なので、こちらも要チェック！[with、2001年、一般]

また、「要チェック」は、119例のうち、113例が述語としての用法で、連体名詞の用法（26）は2例、形容動詞の連体形（27）は1例、合成語の構成要素としての用法（28）も2例にとどまっている。今は、述語用法にほぼ限られていると言える。

(26)「見た目」はどんな場合においても、要チェックの大切なポイントである。[舛添要一著『学び心』、2000年、159頁]

(27) オートエクゼお得意の剛性パーツだが、RX-8は観音開きドアの大きな開口部で剛性不足を指摘する人もいるので要チェックなパーツだ。[CAR BOY、2003年、機械]

(28) また、ファーやベルベット素材が斬新なモノグラムバッグは、行列必至の要チェックアイテム。[GINZA、2004年、家庭／生活]

こうした「要チェック」の意味・用法は、おそらく意味Ⅲからの派生と考えられる。通時的新聞コーパスには見られなかったが、BCCWJには、次のような意味Ⅲの例が少なからず認められる。これらの「チェック」は、推奨・勧誘といった機能を持つ文の中で、行為者の利益につながる「確認」行為を表しており、「要チェック」にきわめて近い。意味Ⅲの中でも、こうしたプラス評価の使用例が増え、そのことが「要チェック」といった表現につながっている可能性がある。

(29) 店内は明るくて気持ちがいい。珍しい種類もあるので、切り花のコー

ナーもチェックしよう。［ヨーロッパ花の旅、2004年、分類なし］

(30) この春に登場したばかりの、新作のパフェやディッシュデザートも、ぜひチェックしてみて！［Hanako WEST、2001年、総合／一般］

7．意識調査との比較

以上、新聞における外来語動名詞「チェック」の基本語化の様相を記述したが、これとは別に、2012年2月に「現代日本語の動態」プロジェクトで行ったオムニバス調査(注8)で、「チェック」についての使用意識も尋ねているので、その結果を報告する。具体的には、表10に示す八つの例文を示し、「チェック」をその意味で「使う」かどうか尋ねたものである。

表10　意識調査の結果（N=1263人、%）

	意味	文	%
使う	（名詞）	①あてはまる欄に、チェックを書き入れる	56.2
	Ⅰ	②会計課は、不正をチェックしなければならない	49.4
	Ⅱ	③機械の異常をチェックする	60.8
	Ⅱ	④水道のメーターをチェックする	51.5
	Ⅱ	⑤毎日欠かさず血圧をチェックする	44.4
	Ⅲ	⑥ゴミ処理場の建設について、地元の意向をチェックする	11.2
	Ⅲ	⑦会場までの行きかたをチェックする	39.5
	Ⅲ'	⑧あの店は、雑誌などにも載って、要チェックだ	37.5
どれも使わない			10.8
わからない			1.0

表10からわかるように、「使う」と回答した人の割合は、意味によって異なる。前述の意味Ⅰ・意味Ⅱに対応する例文②～⑤については、半数程度ないしそれ以上の人が「使う」と答えているが、それに比べて、意味Ⅲに対応する⑥(注9)⑦を「使う」と答えた人は少ない。この結果は、前述の、意味Ⅰ・Ⅱから意味Ⅲへと使用が拡大したとするコーパス調査の結果と一致する。また、新しい意味と考えられる⑧（仮に「意味Ⅲ'」とする）については、⑦と同程度の4割弱の人が「使う」と答えており、すでにある程度浸透していることがわかる。

図1は、各意味と年齢をクロス集計したものであるが、意味の新旧（表8）と年齢とに相関関係があることが確認できる。意味Ⅱの③は、どの年齢におい

てもよく使われているが、興味深いのは、意味Ⅰの②は、「使う」と答えた人の割合が40代で最も大きくなっているのに、新しい意味と考えられる⑧は、若い世代ほど「使う」と答えた人の割合が大きくなり、逆転している。60歳以上の人は、どの意味においても全体の中で一番割合が低く、新しい意味の意味Ⅲ’は10%程度にとどまっていることがわかる。

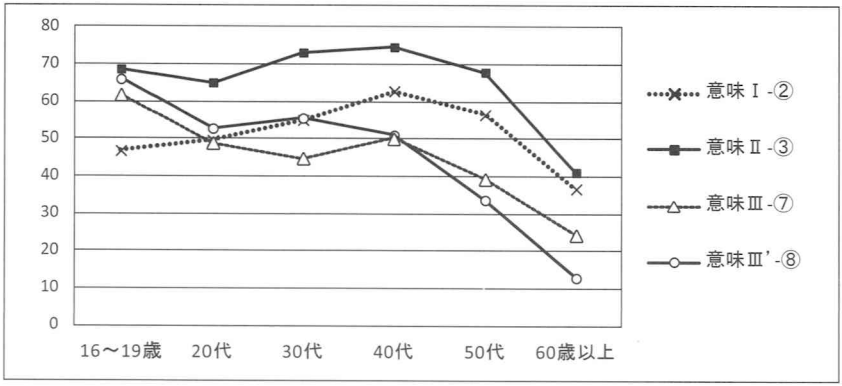

図１　各用法の年齢別使用意識（%）

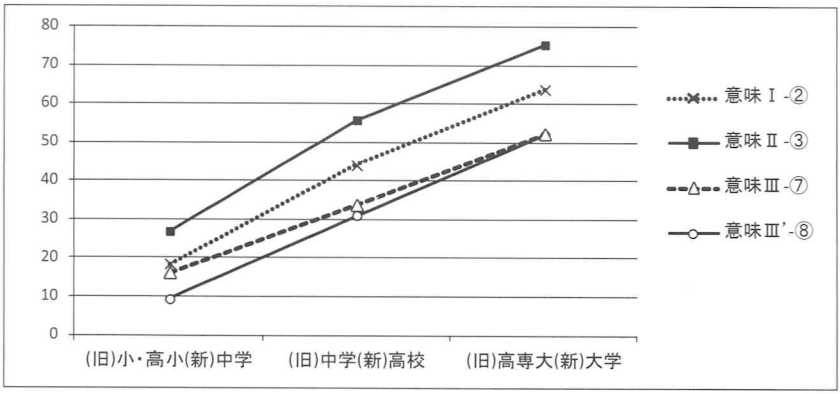

図２　各用法の学歴別使用意識（%）

図２は各意味の学歴別使用意識を示したものである。どの意味でも学歴が高くなるほど「使う」と答えた人の割合が大きくなるが、やはり、意味Ⅲや新しい意味Ⅲ’に対応する⑦⑧はどの学歴でも、他の意味に比べて、その割合が

小さい。この結果も、コーパス調査の結果と矛盾しない。一般的に学歴が高い人ほど、外国語・外来語に対する抵抗が少なくなると言われているが、図2のカーブが高いところで緩ければ緩いほど本当の意味での「基本語」と考えていいだろう。

8．まとめと今後の課題

以上、20世紀後半の新聞における、外来語動名詞「チェック」の基本語化について、自作の通時的新聞コーパスを用いて、①使用量の増加、②用法の拡大、③意味の拡大の三つの観点から報告した。

「チェック」は、20世紀後半を通して、使用量を増加させるだけでなく、意味と用法の両面において拡大し、基本語化してきたことがわかった。とくに、意味の拡大については、「チェック」の意識調査の結果とも符合することが確認された。

ただし、「チェック」の基本語化の全容を把握するためには、和語・漢語の類義語群との関係を、それらの使用の変化から明らかにする必要がある。今後の課題としたい。

注

1）茂木俊伸（2011）は、BCCWJ(Balanced Corpus of Comtemporary Written Japanese、現代日本語書き言葉均衡コーパス）データを使って外来語「カットする」の分析を行なっている。茂木は、文法的視点を取り入れた外来語研究の必要性について述べたうえで、BCCWJにおける「カットする」の語義、さらに構文的特徴との対応について明らかにしている。

2）ここでは、「する」を伴ってサ変動詞となり得る名詞を「動名詞」（影山1993）と呼び、名詞と動詞の両方の性質を持つものとする。

3）検索には、国立国語研究所の全文検索システム「ひまわり」を使って、『CD-毎日新聞2000データ集』の中から、正規表現を用いてサ変動詞を抽出した。

4）国立国語研究所が中心となり開発された「中納言（長単位）」を使ったBCCWJの検索結果でも、「チェック（する）」は基本語であることが確認できる。

5）換算には、「形態素解析成功文データセット」の延べ文字数を用いた。

6）『日本国語大辞典』（第二版、小学館、用例略）　①小切手。②（―する）完全であ

るかどうかを一つ一つ調べること。（イ）書類などを照合すること。引き合わせること。また、それが済んだことを示すしるし。「✓」印など。（ロ）悪い点がないかどうか、ひとりひとりについて、また、一つ一つのものについて確かめること。阻止すること。くいとめること。③直角に交差する何本もの線によって作られた、たくさんの長方形や正方形で構成される模様。チェッカー。④チェスで、王手をかけること。また、その時の宣言。⑤⇒チッキ。『基本外来語辞典』（東京堂出版）　①小切手。◆イギリス英語で cheque。②荷札。チッキ。③照合のしるし。④【服飾】格子じま。⑤検査。⑥チェスの王手。『日本語新辞典』（小学館）　①小切手。②格子縞。また、碁盤縞　③―スル　異常がないか検査、確認すること。また、その証明書をチェックする／戸締りのチェックをする。④―スル　球技などで、攻撃を阻止すること。『新明解国語辞典』（七版、三省堂）　一　㊀小切手。「――ライター4」　㊁チェッカー㊂。「はでな――の背広」　二　――する（他サ）［阻止・抑制の意］　㊀照合の印として✓などを付けること。［引合せ検査の意にも用いられる］。㊁［相手の攻撃などを］牽制（ケンセイ）したり食いとめたりすること。

7）検索には、NINJAL-LWP for BCCWJ（NLB）を使った。NLB は、国立国語研究所が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Balanced Corpus of Comtemporary Written Japanese: BCCWJ）を検索するために、国語研と Lago 言語研究所が共同開発したオンライン検索システムである。

8）社団法人中央調査社に委託の上、同社が提供するオムニバス調査の一環として実施した。調査設計は、①地域：全国、②調査対象：満 16 歳以上の男女、③標本数：4,188、④抽出方法：層化副次（三段）無作為抽出法、⑤調査方法：調査員による個別面接聴取法、⑥実施期間：2012 年 2 月 2 日～2 月 12 日。回収数は 1,263、回収率 30.2％であった。

9）アンケートでは「使うかどうか」という聞き方をしているので、質問文を他と同じように、「夏休みの主催について仲間の意向をチェックする」などのように「主体」を組織ではなく「私（たち）」に設定すべきであったと反省している。

【参考文献】

天野成昭・近藤公久編著（2000）『ＮＴＴデータベースシリーズ　日本語の語彙特性　第７巻　頻度①（付録 CD-ROM）』三省堂

石綿敏雄（1985）『日本語の中の外国語』岩波書店

―――（1988）「外来語のゆくえ」『言語生活』436

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房

樺島忠夫（1981）『日本語はどう変わるか ―語彙と文字―』岩波書店

―――（2004）『日本語探検　過去から未来へ』角川書店

金愛蘭（2006a）「外来語『トラブル』の基本語化 —20 世紀後半の新聞記事における—」『日本語の研究』2-2、日本語学会
———（2006b）「新聞の基本外来語『ケース』の意味・用法 —類義語『事例』『例』『場合』との比較—」『計量国語学』25-5、計量国語学会
———（2009）「外来語の基本語化の研究 —20 世紀後半の新聞コーパスをもとに—」『第 3 回博報「ことばと教育」研究助成研究成果論文集』財団法人博報児童教育振興会
———（2011）『20 世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化』阪大日本語研究別冊 3、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
国立国語研究所（1964）『現代雑誌九十種の用語用字（3）分析』秀英出版
———（1987）『雑誌用語の変遷』秀英出版
———（2005）『現代雑誌の語彙調査 —1994 年発行 70 誌—』国立国語研究所
野村雅昭（1984）「語種と造語力」『日本語学』3-9、明治書院
橋本和佳（2010）『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ書房
益岡隆志・田窪行則（1989）『基礎日本語文法』くろしお出版
宮島達夫（2008）「語彙史の比較（1）—日本語（雑誌 90 種と 70 誌）」『京都橘大学研究紀要』35
茂木俊伸（2011）「コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析—『カットする』を例として—」『第 2 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』
森岡健二（1977）「命名論」『岩波講座日本語 2　言語生活』岩波書店

〔付記〕
本稿で取り上げた全国調査は、国立国語研究所基幹型共同研究「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明（プロジェクトリーダー：相澤正夫）」の一環として実施したものである。また、『CD- 毎日新聞データ集』は、毎日新聞社と交わした利用許諾契約・覚書に基づき使用した。「通時的新聞コーパス」の作成にあたっては、（財）博報児童教育振興会「第 3 回ことばと教育研究助成」（平成 21 年度）と、文部科学省科学研究費補助金「20 世紀後半の新聞における外来語の基本語化に関する調査研究」（平成 22 ～ 23 年度、若手研究 B）の交付を受けた。

慣用句“気がおけない”の「誤用」について

新野　直哉

キーワード：“気がおけない”　慣用句　誤用　意味変化　類推

1．はじめに

“気が（の）おけない”という慣用句[注1]は今日以下のように使われている（以下、引用中の下線、｛　｝内は筆者による。傍点、太字は原文のママ）。

(1) そのくらい偉ぶるところがない気がおけない人物だという。（朝日 2002.10.9 付朝刊）

(2) 家族と食べる気のおけない食事の時間が、わたしはいちばんくつろげて、いちばん好きです。（日野原重明『十歳のきみへ　九十五歳のわたしから』pp.125-126。冨山房インターナショナル、2006）

(3) スコアなんかどうでもいい。気の置けないメンバーと楽しくできればそれで十分（「ゴルフが好き！」『週刊現代』2010.5.1、p.147）

『大辞林』第3版（2006）では、「気が置けない」について以下のようにある。

(4) 気遣いする必要がない。遠慮がない。「 ―・ない仲間どうし」〔「気が許せない、油断できない」の意で用いるのは誤り〕

ここで指摘されているようなこの句の「誤用」は、「間違い言葉」「おかしな日本語」を集めた図書や記事には必ずと言っていいほど登場する。しかし、日本語研究者による、実例の調査・分析を踏まえた本格的な研究の成果は、いまだ公にされていない。

筆者は、これまでこのような「誤用」と呼ばれる事例のうちいくつかについ

て研究してきた（新野 2011 など）。今回はこの慣用句を取り上げる。多くの図書や雑誌・新聞記事で取り上げられ、一般国民にも広く知られている「誤用」の事例に、専門家の立場からの調査・分析・考察の結果を提示することは、日本語研究者のできる社会貢献の一つである、と考えるからである。

なお、本稿では以下のようにカッコを使い分ける。今回問題とする慣用句の総称は“気がおけない”、助詞の別を問題にするが動詞部分の表記は問題にしない場合は［気がおけない］［気のおけない］、動詞部分の表記をも問題にする場合は「気がおけない」「気が置けない」「気のおけない」「気の置けない」のように表す。

2．先行研究

2.1．見坊豪紀によるもの

この句の「誤用」を初めて指摘した文献は、管見の限り、見坊豪紀による 1969（昭和 44）年 1 月の（5）である。

（5）喜んではいけません

「おじさまは**気のおけない人**ね」とカワイコちゃんから言われたら、私は喜ぶ。ところがどっこい、これは「気が許せない」と言っているのだ。彼女たちは本気でそう信じている。十一月下旬「週刊読売」の佐野寧氏から教えられて大ショック……。（「ことばのくずかご」『言語生活』208、p.73、見坊（1979）に再録）

『ことばに関する新聞記事見出しデータベース』（国立国語研究所）で検索しても、同じ 1969 年の 7 月 16 日付読売朝刊の見坊執筆[注2]の記事「言葉は美しい 「気のおけない人」」がもっとも早い。その後見坊（1976：18-33）は、1968 年 11 月に「誤用」の情報を知ってから 6 年以上かかって、気象庁観測部地震課（当時）を紹介する雑誌記事の中の

（6）地震国ニッポンだけに、<u>気のおけない</u>毎日だという（『週刊読売』1975.9.6 号、p.13）

という「誤用」例に出会うまでのいきさつと、第6節でふれるような意味変化についての考察を述べている。

さらに見坊（1987:194）では、[気のおけない] について「全33例。うち正用10例」と、「誤用」例の方を多く採集していることは示すものの、見坊（1976）同様（6）以外の「誤用」例は挙げていない。

2.2. 見坊以外の研究者によるもの

この句を題名に冠した論文は、『日本語研究・日本語教育文献データベース』（国立国語研究所）で検索すると、30年以上前の鈴木（1970）、増井（1977）、高木（1980）の3件のみである[注3]。『国文学論文目録データベース』（国文学研究資料館）、CiNii（国立情報学研究所）でもこれ以外の文献はヒットしない。この時期の文献としては他に、見坊（1987）が引いていることで飯豊（1975）を知ることができる。

鈴木（1970）は短期大学国文科1年生71名分、高木（1980）は京都府立高校1年生の「父兄」（10代、20代の回答者もいるが）65名分、飯豊（1975）は神奈川の女子大国文科2年生91名分のアンケート調査の結果（いずれも「誤用」が多数派）を紹介しており、前二者はさらに「誤用」の発生・拡大の理由について考察する。また増井（1977）は「気のおける」と肯定形で取り上げ、その成立について考えたうえで「歴史も浅く、誤用から生じた素性のよくない語」「自然淘汰させても惜しくないことば」「大衆の言語感覚に信頼をおいて、廃語にすべき」（p.22）と判断している。いずれも、実例の分析は全く行っていない。

その後、国広（1991）では、

（7）{「ら抜き言葉」とは違い}「気が置けない」の場合は、正用法と誤用で意味が真反対になり、この意味の取り違えが元で人間関係にひびがはいる恐れが多分にあるから、ことは重大である。（p.58）

としたうえで[注4]、

(8) できることなら、この誤った解釈はこの世から消えて行ってほしいものである。(p.60)

と同書には珍しく強い調子で「誤用」への反感を示す。しかし、約20年後の改訂版にあたる国広（2010）では、(7) はそのまま残っているものの (8) の一文は削られている。そしていずれの版においても、ほかの多くの項目とは異なり、この句については正誤ともに実例はまったく出ていない。

丸田・福田（1993：40-41）では、次節で紹介する「1993年調査」の結果について世代別・性別のデータを示し、「誤用」の回答率が「若い年代で極めて高くなっている」とする。

そして同年、筆者は新野（1993）で“役不足”の「誤用」について論じる中でこの句の「誤用」にも言及した。この拙稿については後に再度取り上げるが、とにかく「言及した」程度で、深くは考察しておらず、その後もこの句に関してそれ以上研究は進めなかった。

ほかに、単なる「誤用」の存在の指摘だけでなく、その発生理由や過程等について短くではあるが言及している論文として、石野（1981、1991）、坂梨（1995）が筆者の目に留まった。これらについては第6節で取り上げる。

新しいところでは、新沼（2010）が管見に入った。ここでは、「国語に関する世論調査」の平成7～19年度の「言葉の意味」「慣用句の認識と使用」の調査項目について、検索エンジンGoogleで調査を行って両者の結果を比較しており、その調査項目の中に「気が置けない」もあるが、本文中で特に取り上げて論じてはいない。

また文化庁文化部国語課（2011）では、次節で紹介する「2007年調査」の結果を示し、「この言葉を本来とは反対の意味に理解している人が多いことが分かりました」とする。やはり「誤用」の実例は挙げていない。

以上見てきたように、この句に関しては多くの実例の調査・分析に基く研究成果はいまだ論文・書籍の形では示されていない。それどころか、この句に絞って本格的に考察した文献すらきわめて乏しく、しかもここ30年はほとんど見当たらないという状況なのである。

本稿ではまずこの句の意味についての世論調査の結果を示し、次に今日の各

資料から実例を採集して、この句の現状をまず明らかにする。そして「誤用」の発生理由や時期についても見ていく。

3．世論調査の結果

「国語に関する世論調査」(全国16歳以上の男女3000人を対象に実施)では、平成14年度（2002年11～12月実施。以下「2002年調査」とする）と18年度（2007年2～3月実施。以下「2007年調査」とする）の2回「気が置けない」の意味が調査項目になっている。いずれも、「その人は気が置けない人ですね」という例文を挙げ、所与の選択肢から一つを選ぶ方式で行われており、文化庁文化部国語課編（2007：92）では、この2回の調査結果が比較されている。それをまとめると表1のとおりである。

そして、それからさらに遡る調査結果もある。「NHK第7回言語環境調査(2)ことわざ・成句の形と意味のゆれ」(1993年1～2月に東京100キロ圏内の16歳以上の男女1800人を対象に個人面接法で実施。以下「1993年調査」とする）がそれで、『放送研究と調査』43-7（1993.7）p.79によれば、表2のような結果である。この調査はまず「「気のおけない人」ということばをご存じですか」と質問し、「はい」と答えた被調査者（全体の91.8%）に、さらに「では、そのことばの意味はどれだと思いますか」と尋ねて選択肢から選ばせる、という方法をとっている。

表1　2002年・2007年調査の結果

選　択　肢	2002年(%)	2007年(%)
(ア) 相手に対して気配りや遠慮をしなくてよいこと	44.6	42.4
(イ) 相手に対して気配りや遠慮をしなくてはならないこと	40.1	48.2
(ア)と(イ)の両方	2.2	1.4
(ア)、(イ)とは全く別の意味	6.3	1.4
分からない	6.9	6.7
計	100.0	100.0

表2　1993年調査の結果

選　択　肢	比率(%)
1. 油断できない人	51.0
2. 気楽につきあえる人	46.1
3. つきあうと不愉快になる人	1.4
4. わからない・無回答	1.4
計	100.0

さらに、丸田・福田（1993：40）では、「気のおけない人」について、1983年の「全国の広報担当の公務員」が対象の調査（以下「1983年調査」とする。石野（1991：6）によると、この年の秋に福岡市で開催の「第20回全国広報広聴研究大会」の参加者が対象で、回答者は1923～1959年生まれの490人である）では、「気の許せる人」と「気の許せない人」（選択肢2つ）がともに49%であった」とする。

調査対象や質問の方法、選択肢の表現が異なるため、単純な比較はできないものの、4回の調査結果に表れた正誤の勢力を順に見ていくと、1983年調査で互角であった後、優勢なのが「誤用」（「1.」）→「正用」（（ア））→「誤用」（（イ））と交替してはいるが、どの調査でも両者の勢力は拮抗している。

4．今日の実例調査の結果

次に、今日の実例を、ウェブ記事、新聞記事、雑誌記事の3種の資料において調査した。表中の☆はこの句そのものを慣用句あるいは「間違い言葉」の例などとして取り上げているケースである。（　）内の数字は文語体の「～ず」の数（内数）である。

4.1．ウェブ記事

ウェブ記事における用例の検索を、筑波大学・国立国語研究所・Lago言語研究所『NINJAL-LWP for TWC』(http://corpus.tsukuba.ac.jp) ver.1.10 (2013年4月15日公開）を利用して行った[注5]。結果は表3のとおりである。同じ記事の中に同一の形が何度か現れていたり、複数の形の例が併存していたりするケースもある。用例数を見ると、否定形の例が肯定形の例の8倍近くである。

また前者では「誤用」例はわずか3例なのに対し、後者では「誤用」例が「正用」例の3倍近くに達している。

なお新沼（2010：28）の示す「ウェブ検索の結果」でも、「気が置けない」の検索結果の「最初の100件」は「正」83件、「誤」2件、「他」15件と同様の傾向になっている。

表3　ウェブ記事の調査結果（数字は用例数）

	「～ない」				「～る」				不明
	正用	誤用	☆	計	正用	誤用	☆	計	
気が置ける	13	3	38	54	1	2	12	15	1
気がおける	4	0	1	5	1	0	0	1	0
気の置ける	166(3)	0	6	172(3)	3	6	0	9	0
気のおける	88(1)	0	4	92(1)	3	15	0	18	0
計	271(4)	3	49	323(4)	8	23	12	43	1

4.2. 新聞記事

朝日新聞、毎日新聞、読売新聞3紙の記事データベース（順に『聞蔵IIビジュアル』、『毎索』、『ヨミダス歴史館』）を利用した。対象は2001年1月から2012年12月までの東京本社版の記事で、地方版・地域面の記事、著作権上の理由で本文が表示されない記事は対象から除いた。各活用形の例がヒットするよう、「気が置け」「気がおけ」「気の置け」「気のおけ」というキーで検索した。一つの記事に同じ形の用例が複数ある場合もあるが、複数の形が併存するケースはない。結果は表4のとおりである。

表4　新聞記事の調査結果（数字は例のある記事数）

	「～ない」			計	「～る」
	正用	誤用	☆		
気が置け	28(2)	0	13(1)	41(3)	1
気がおけ	3	0	2	5	0
気の置け	106(2)	0	1	107(2)	0
気のおけ	51(3)	0	2	53(3)	0
計	188(7)	0	18(1)	206(8)	1

「～ない」は☆の例（「気が置けない」が多いのは、2002年・2007年調査での調査項目がこの形であり、それに関する記事にこの形で表れていることの影響である）以外は（1）のような「正用」例ばかりである[注6]。「～る」の1例は、次のような☆に分類される川柳での例である。

(9)「気が置ける」悪い意味には思えない（川崎 さくら）（「仲畑流・万能川柳」毎日 2011.1.18 付朝刊）

4.3. 雑誌記事

雑誌記事における用例の検索を、以下のデータベースを利用して行った。キーは新聞記事の場合と同じで、期間は2012年12月発行分までである。

まず、「大宅壮一文庫」所蔵の雑誌記事の検索を、Web OYA-bunko（http://www.oya-bunko.or.jp）を利用して行った。「ご利用案内」には、1988年以降の雑誌記事約350万件のタイトルを全文検索できる、とあるが、2013年4月にそれ以前のデータ100万件も追加公開され、同年4月29日に検索の結果、1985年の「気のおけない」の「正用」1例もヒットした。

次に、週刊誌『AERA』『週刊朝日』の記事本文を4.2.で用いた『聞蔵IIビジュアル』で、経済誌『週刊エコノミスト』の記事本文を同じく『毎索』で検索した。それぞれの検索対象期間の始まりは、『AERA』は1988年5月（創刊）、『週刊朝日』は2000年4月、『週刊エコノミスト』は1989年10月（31日号）である。著作権等の関係ですべての記事が検索対象ではない。

調査の結果、肯定の「～る」の例は全く得られなかったので、表5のようにまとめてみた。Web OYA-bunkoの場合、特集名に“気がおけない”が使われていてその中に5件の記事があるような場合は、各記事のタイトルには使われていなくてもヒット件数は「5件」と表示されるが、本稿ではそのような場合は1件として計算した。また週刊3誌の場合はすべて「正用」例であり、雑誌ごとの違いは見られないので、合計の数字を示してある。結局、表5でわかるように「誤用」例は全く見られない。

表5　雑誌記事の調査結果（数字は用例数）

	Web OYA-bunko				週刊3誌			
	正用	誤用	☆	計	正用	誤用	☆	計
気が置けない	0	0	0	0	6	0	0	6
気がおけない	3	0	1	4	1	0	0	1
気の置けない	17	0	0	17	18	0	0	18
気のおけない	29(1)	0	1	30(1)	15	0	0	15
計	49(1)	0	2	51(1)	40	0	0	40

5.「誤用」例の意味

過去の世論調査では、1993年調査で<油断できない>、2002年・2007年調査で<相手に対して気配りや遠慮をしなくてはならない>が「誤用」の意味とされている。「油断できない人」と「気配りや遠慮をしなくてはならない人」では、かなり意味が違う（1983年調査の「気の許せない」はどちらの意味でも使われる）。本節では「誤用」例を分析し、どのような意味で使われているのかを明らかにする。

とはいうものの、前節に挙げた調査の結果得られた「誤用」例はウェブ記事の以下の3例のみである。

(10) 2桁のワーカーが羽化するまで、気が置けないのが一時寄生種です。じっくりと気長に待たなければならないのです。(『アント☆だいありぃありんこ飼育講座』)

(11)「白熊」は、今ではコンビニでアイスになってたりしますが、この「むじゃき」とゆー店が、カキ氷に練乳をかけたのが始まり。
鹿児島では、カキ氷の事を「白熊」と言ったりするから気が置けません。(『*YMGH* 第三ゆふ号弐号車』)

(12) さくさくと朝食を取り、チェックアウト。早めにいって様子を見るが、なかなか素早い。これなら大丈夫そう。大丈夫そうと思っていたら、MiniBarの計算が間違っていたり（高津君）、間違っていなかったり（永田さん）、やっぱりぎりぎりまで気が置けない。(『Kei Koba's Weblog: TITECH days』)

(10) はアリの飼育方法に関する記事の中の例で、「一時寄生種」とは＜ほかの女王の巣に寄生して自分の子を育てる種類の女王アリ＞の、「ワーカー」とは＜働きアリ＞のことである。(11) は九州各地の名物料理・食品を紹介する記事の一節である。(12) はモンゴルでの調査を終えた研究者一行が、帰国のためホテルをチェックアウトする場面である。

これだけでは分析の対象としては少なすぎるので、筆者が以前に採集していた図書・雑誌の「誤用」例を加える。(13)・(14) はノンフィクション、(15)〜(18) は小説の例である。(14) は、プロレスラー大仁田厚が、会場の観客に「幼稚な言葉の羅列」で挨拶をした場面である。

(13) 安全保障の問題で、突っこんだ討議を避ける吉田 {茂} は、ダレス {米国務長官} の質問に曖昧模糊とした言い廻しや一般論で応え、日本の基地提供について言質をあたえなかった。{中略} 吉田にとって、初対面のダレスは、まだ気がおけない人物であった。(細谷千博『サンフランシスコ講和への道』p.165、中央公論社、1984)

(14) どこか気のおけない子供のように、頼りなげな大仁田のたたずまいは、それだけで充分に「恍惚と不安」を伝えてはいたが、(高山文彦「オリンポスの方舟」『宝島』1993.9.24 号、p.83)

(15)「とにかく、気の置けない連中である。俺がよほどしっかりしていないと奴等に呑まれて、顎で使われるようになる。そんなことされてたまるか。俺は現役の最古参兵だ！」(川村勉『鉄道兵物語—実話小説』p.235、文芸社、2002)

(16) 私は外の様子を見てみた。なんだか連中に見張られているような気がしたから。だけど予想は外れて、トイレの外には誰もいない。それでもやっぱりまだ気が置けなくて、外に出て階段の壁伝いまで行って見ることにした。(趙香貴『愛は今も　前篇』p.50、新風舎、2005)

(17) さっきまで、私、凄い体験をしたのよ！　とにかく凄く恐かったの！　やっと逃げ出して来られたの！ {中略} 家にたどり着くまでは、まだまだ気が置けない。みんなに会うまでは。(同 p.447)

(18)「いいかい、おれはこのゴルフ場を取り仕切っている『芝刈りの政五郎』

っていうもんだ。あっちこっち、おしっこで臭いをつけてあるから、その中には絶対入っちゃならねえんだよ。いま見回りの最中だが、おめえみたいにおれの縄張りを荒らすやつがいるんで、気が置けねえんだよ」（おかべりょう『とらの助の猫に小判』pp.27-28、文芸社、2007）

また、4.2. で用いた新聞記事データベースの検索対象期間（新聞により異なる）全体を検索してみると、短歌の中の次の1例が見つかった。

(19) ガン治癒から十余年いまなお痛みに脅かされる気のおけぬ日常（「うたごよみ」朝日 1989.8.18 付夕刊）

さらに、もっとも有名なこの句の「誤用」例といえる、1984年のヒット曲『ふたりの愛ランド』（作詞：CHAGE・松井五郎、作曲：CHAGE、歌：石川優子とチャゲ、発売元：ラジオシティ）の歌い出し部分の詞も挙げておくべきであろう。

(20) 夏が噂してるわ あなたのことを ピンボールみたいで 気がおけないの
小麦色に灼けてる おまえのせいさ 風のない都会を 忘れてみないか

この「気がおけない」は、＜（球の転がり方がなかなか予測・コントロールできないピンボールのように、その行動が自由気ままで予測できないので）注意が必要である。目が離せない。ハラハラさせる＞という意味であろう。

結局、ここに挙げた計11例や見坊の挙げる（6）は、いずれも＜油断できない。注意・警戒の必要がある＞という意味で使われている。したがって、「誤用」の意味の選択肢としては、2002年・2007年調査より1993年調査の方がより実態に近かったということになる。

6.「誤用」の発生理由

第2節に挙げた先行文献では、「誤用」の発生理由をどう考えているか。

鈴木（1970）では、次のように述べる。

(21) 単に形式的な類似によって「信用がおけない」や「気を許せない」いった表現が同一視されたり影響を与えたりしたのではなく、「ない」という否定辞のもつ心情的用法が強い紐帯となって働いているのではなかろうか。「ない」が否定的心情とかかわり合っているために、「気のおけない人」は、価値的に良くないことの表現と受け取られ、同様に価値的にマイナスの内容をもつ「信用がおけない」や「気を許せない」が、形式的に似ていることもあって引きつけられ、誤解を生んだものと思われる。{中略} この「気のおけない人」という表現が、前述のような他の表現形式の影響を受けやすいのは、表現形式の類似ということ以外に、「気」という語の意味内容の稀薄さにもよるものと思われる。(p.100)

見坊（1976）は、語源が忘れられたためとする。

(22) 現在の若い人は「気のおけない」の“ない”の部分を取り去った“気のおけ”から、“気をおく”というもとの形を考えることができなくなったため、“ない”の打ち消し形を悪い意味の表現と受け取っているのです。(p.23)

増井（1977）もやはり類推であるとする。

(23) 想像だが、彼等 {=「よく類推能力を指導された生徒」} は、「気のおける人」ということばを、受け入れると、「信用が置ける人」と同じ型だと、認識する。そうして、「心が置ける人」だと類推する。心が置ける人なら、「心が許せる人」にも近い意味であろう。よい意味に使っているのだろうと類推を進める。それなら、「気のおける人」は、「親しめる人」だ、「気やすくつきあえる人」だと、判断して解釈する。(pp.20-21)

高木（1980）は、「おける」についての二重の解釈の変化を指摘する。

(24) 助動詞「る」「れる」は受身、可能、自発、尊敬の四つの意味をもち、

「気のおか＋れ」は自発の意味をあらわしているが、短縮され「気のおける」という形になって口語下一段活用の「行ける」などと同じ可能を示すものと理解され、その一方で「おく」の意味も、「何かを間に隔てた状態にする」の意味でなく、「物をある場所にすえる」意味にとられて、「気（持）を安心して固定できる」と自己流に解釈される余地が生じてしまった。(p.11)

［気のおけない］を含むいくつかの成句が「最近の若い人たち」に誤解されている背後にある、「彼らなりの論理ないし文法意識」を探ろうとした石野（1981）は、見坊（1976）の（22）を引いたうえで、語源は「現在の若者」でも比較的容易にたどれるとし、誤解の生じた理由は他に二つあるとする。

(25) 一つは、見坊氏の指摘に関連するが、似た意味への類推ということである。{中略}{「気の許せない」「信頼できない」などの} 同じような文脈で同じ否定形で使われることばはどれも意味的に共通している。つまり、“悪い”意味を持つ。「気のおけない」の解釈がそれにならっても不思議はない。

もう一つは、今の若者にとっては、「気をおく」という句――それ自体はすでに死語であるが――の持つイメージは、「信頼を置く」「気を許す」のイメージに近いものである、ということである。決して辞書にあるような「相手の気持ちを気づかう、遠慮する」という古語のイメージではない。(p.7)

ここでは、鈴木の挙げる類推と、高木の挙げる「気をおく」の解釈の変化を挙げている。石野は後の石野（1991）では、

(26) 何よりも「気のおける」という成句が今やほとんど死語になったことの影響が大きい。「気のおけない＝気をおくことができない」の意味は、もとの「気のおける」という成句を知らなければ、＜気をおく＝安心する＞と受け取るのが今はむしろ自然であろう。(p.7)

と、「気をおく」の解釈の変化の方のみを挙げている。

坂梨（1995：5）では、文政5（1822）年の

(27) わたしのやうなものを。ひいきにしておくれるは。おうれしいがいつそ気がをけます旦おれらは気はをけぬが（大極堂有長『河東方言箱まくら』上、『洒落本大成』27。p.120）

という例を挙げ、「「気がおける」の「おける」も自発と解すべきである」「「置く」から派生した下一（二）段動詞と考える方が無理がない」としたうえで、

(28) 今日、「気の（おけない）人」の解釈をめぐって時折り話題になることがある。たしかに「おける」という可能動詞の形は一般には可能の意味であることが多い。そのために「(気の）おけない（人)」についても、「(気の）置くことができない（人)」「(気の）許せない（人)」という反対の意に解釈されることになるのだろう。

と、高木と同じく「おける」の自発から可能へという解釈の変化を挙げる。

文化庁文化部国語課（2011）は、先行研究をまとめたような内容である。

(29)「気が許せない」という意味で使われていた「気が置ける」という言葉が、現在では余り使われなくなっていることが挙げられるでしょう。{中略}「気が置けない」は、好ましくない状態である「気が置ける」を打ち消して、好ましい状態を示している言葉です。しかし、「気が置ける」の意味が理解されなくなっているため、「気が置けない」の「……ない」という言い方に伴う否定のニュアンスに影響され、本来とは反対の意味に感じる人が多くなっているのかもしれません。また、「信用が置けない」「信頼が置けない」などの使い方からの類推が影響しているとも考えられます。

筆者は、鈴木や石野の挙げる「類推」が大きな要因と考える。ただし、「～ない」がすべて鈴木や石野の言うように「否定的心情とかかわり合っている」「“悪い”

意味を持つ」わけではない。この句の「正しい意味」とされる「遠慮のいらない」「気兼ねのいらない」に加え、「裏表のない」「屈託のない」のような好ましい人の性格を表す「～ない」もある。あくまで「気の許せない」や「信頼のおけない」といった形の近い表現に限定して影響を考えるべきであろう。これらの影響による、「置く」の意味の解釈や、「る」の自発から可能へという解釈の変化によって、4.2. に引いた (9) のような意識が生まれてきたのではないか。

ここで想起されるのは、やはり本来の意味とは「真反対」にも感じられるような新たな意味が生じた“役不足”である。筆者は、以前新野（1993）で、この語の「誤用」には①ある役目を果たすには力量が不足している、②ある目的を達成するためには役目の重さが不足している、という二つのタイプの存在が先行文献で指摘されていることを述べた。そして、②は＜役が適正な水準に対し不足している＞と解釈できる点では「正用」と同じであり、「その役の人の能力から考えて」ではなく、「ある場面で求められる『役』（役職、肩書）から考えて」不足しているという点が異なる、そう考えればこのタイプの「誤用」は「正用」からの派生という形で発生したと判断できる、とした。これは、［気がおける］についての「おく」の解釈の変化と通じるところがある。また①については形のよく似た「役者（が）不足」に牽引されたことが一因ではないかとした。この点も、“気がおけない”が「気の許せない」や「信頼のおけない」といった形の近い表現に影響されたのと似ている。

しかし、この句の意味変化のより詳細な解明には、江戸期にまで遡る必要があるように思う。見坊 (1976) は「誤用」の発生過程について『日本国語大辞典』（初版）の用例を挙げながら論じているが、その中に次のような一節がある。

(30) なお『日本国語大辞典』には、{「気を置く」の} 二番目の意味として「気を休める。ほっとする。」とあって、江戸時代の用例が出ていますが、ここでは関係ありません。(p.24)

ここにある「江戸時代の用例」とは、安永7（1779）年の朱楽菅江作の洒落本『雑文穿袋（ざつもんせんてい）』の例である。「似山（にたやま）先生」が長々と漢語の講釈をし、奴の「此蔵（このぞう）」がそれをひたすら書きとめる、という場面である。

(31) 此蔵気を置く間なく段〳〵と書つけながら御庭をあるきますハ犬でハござりませぬかぶたて(ママ)御ざりますかととふ(大阪大学文学部蔵本三十丁表、『洒落本大成』8、p.191)

この例を「関係ありません」と見坊が簡単に切り捨てたのは適切であったか。江戸期にこのような[気を置く]の例があったとすれば、その自発表現である[気が置ける]は<気が休まる。ほっとした気分になる>、さらにその否定形の[気が置けない(ず)]は<気が休まらない。ほっとした気分にならない>という、今日「誤用」とされるような意味になることになる。その一方で、坂梨(1995)の挙げるように文政期にはすでに[気がおける]の「正用」例が現れている。そして[気のおけぬ]の「正用」例は、明治10(1877)年の福沢諭吉『学問のすすめ』十七編に次のように現れている。さらに用例を探せば、江戸期のものが見つかる可能性も否定できない。

(32) 今日俗間ノ言ニ人ヲ評シテ、アノ人ハ気軽ナ人ト云ヒ、気ノヲケヌ人ト云ヒ、遠慮ナキ人ト云ヒ、サツパリシタ人ト云ヒ(慶応義塾福沢研究センター蔵本八丁裏。進藤咲子編『笠間索引叢刊104 學問ノスヽメ―本文と索引』p.107、笠間書院、1992)

この「誤用」の発生時期・過程という問題については、稿を改めて考えたい。

7. 世論調査と実例調査の結果のずれ

第4節の調査結果から、今日の“気がおけない”の使用実態については、いずれの資料においても次の2点が言えることがわかった。

① [気がおけない]よりも[気のおけない]の形で使われることの方が圧倒的に多い。

②世論調査の結果では正誤の勢力が拮抗した状況が続いているが、実例調査の結果では「正用」が圧倒的に優勢で、「誤用」例はほとんど現れない。

②により、

(33) 本来は、緊張する必要のない打ち解けた人という意味であるが、「置けない」という否定の表現から「気の許せない」などと同じ意味に誤解されたのか、反対に緊張して注意しなければならない相手という意味に用いられることが多くなっている。(辞典編集部編 (2003)『朝日現代用語　知恵蔵 2003』別冊付録『ことばの知恵袋―とっさの日本語便利帳』p.54、朝日新聞社)

(34) まったく逆の意味に使われている言葉の代表が、この「気が置けない」という言い回し。多くの人がこの言葉を正反対の意味に使っている。(知的生産研究会 (2007)『言ってはいけない日本語―「あとで後悔しない」ための言葉の常識』p.65、PHP 研究所)

のような「反対の意味で使われることが多い」という記述は、実態を正確に反映していないということになる。

新沼 (2010：31) では、世論調査とウェブ検索の結果のずれについて次のように述べる。

(35) この理由として訊き方と対象の違いが考えられる。質問法は、そのときの回答者の意識が回答に直接表れるが、ウェブ検索では実際にその言い方で使っている例を見ていくため、意識ではなく実際の使用状況が表れる。言い換えると、質問紙調査は普段そんな言葉を使わない人にも「どちらを使いますか？」という使用意識を聞いているのに対して、ウェブ検索はその言い方を知っている人が実際に自然に使っている例を集めているということである。

世論調査で、ある語句の意味をきかれ、本当はその語句を知らないものの、見栄やサービス精神から、「分からない」と回答せず、勘で回答する。そういうケースがあるのは筆者が以前行った“ていたらく”に関するアンケートの結果からも裏付けられる (新野 2007：11)。そういう場合には、前節で見たような類推を働かせ、多くの回答者は「誤用」の選択肢を選んだ。しかしそういう層はこの句を実際には使用しないので、「誤用」例の出現には貢献しない。

結果として、実例は「正用」が圧倒的優勢になる。もちろん<油断できない。注意を払う必要がある>の意の“気がおけない”を実際に使う人も第5節で見たように存在するが、それは世論調査の結果が示すほど大きい勢力ではない。まとめると、世論調査の「正用」回答者はこの句が使用語彙である層のうちの圧倒的多数派プラスそうでない（理解語彙にとどまるか、知らない）層のうちの少数派なのに対し、「誤用」回答者はその逆で、使用語彙である層のうちのごくごく一部プラスそうでない層のうちの大多数であり、それが世論調査と実例調査の結果のずれを生んでいる、ということである。

8．「誤用」の初例

見坊は（5）で「誤用」を初めて知ったのは1968（昭和43）年11月としているが、すでにその10年以上前の昭和30年ごろには「誤用」がある程度の勢力を持っており、それに気づいていた人もいたという報告がある。

（36）筆者が東京都立高校の先生より、「最近の高校生の中には、キノオケル人という言い方を、“自分の気持をさらけ出しても大丈夫な安心できる人”の意に用いている者がある」ことを報告されたのは、昭和30年ごろのことである。（飯豊1975：16）

（37）筆者がまだ高校教師をしていた昭和三〇年ごろの話である。ある日の職員室で、「あの人は気の置けない人だ」と言うとき、「気楽に付き合える人」なのか、「油断のならない人」なのか、どっちなのかという議論が持ちあがった。{中略}筆者が和英辞典の用例に基づいて「気楽に付き合える」の方が正しいと言っても、なかなか信じてもらえなかった。（国広1991：57）

『日本国語大辞典』は第二版・精選版ともに「誤用」の存在は示していない。『太陽コーパス』（国立国語研究所）では「気の置けない」2例、「気の置かれぬ」「気の置ける」各1例が得られるがいずれも「正用」である。また神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ『新聞記事文庫』（2012.7.2検索）では「気の置けない」2例、「気が置ける」「気の置けぬ」「気のおけぬ」各1例が得られるが、

やはりいずれも「正用」である。一方『青空文庫』(2012.6.13 検索) では「気が置けない」15 例、「気がおけない」15 例（うち「～ず」2 例)、「気の置けない」44 例（うち「～ず」2 例)、「気のおけない」26 例（うち「～ず」2 例)、「気が置ける」6 例、「気がおける」1 例、「気のおける」3 例が得られ、その中に次の例が見られる。

(38)「それにあの人こわいのよ。もと外務畑の人ださうだけれど、今は院外団か何かでせうか、乾児(こぶん)も多勢あるらしいの。別に悪い人でも乱暴な男でもなさゝうだけれど、ちよつと気のおけないところがあるのよ。男前も立派だし、年も若いい(ママ)わ。奥さんもインテレ(ママ)で好い人なんだけれど、何うもあの人、私に対する態度が変なのよ」(徳田秋声『仮装人物』十九、『日本評論』12-7（1937.7）p.563、初出)

この例はすでに土屋（2002：59-60）で報告されているが、明らかに＜油断できない。注意・警戒の必要がある＞の意で、管見の限り、最も古い「誤用」例である。この句の「誤用」は戦前、昭和 12 年までは遡れることになる。

『仮装人物』は、作者秋声自身と彼の弟子兼恋人であった作家山田順子をモデルとした、大物作家稲村庸三と 20 代後半の女性梢葉子との関係を中心に書かれた「私小説」で、(38) は葉子のセリフである。この作品には、[気のおけない] はほかに

(39) 庸三はこの頃仲間の人達で、こゝを気のおけない遊び場所にしてゐる人も相当多いことを考へてゐるので、隣りの客が若しかすると其の組ではないかと思つたが、(十一、『日本評論』11-9（1936.9）p.394)

(40) 葉子の家がそれらの青年達に取つて、気のおけない怡しいサルンとなるのも考へられないことではなかつた。(十五、同 12-3（1937.3）p.500)

(41) 大衆作家の同志が広間に陣取つてゐて、一晩中陽気に騒いでゐることもあつて、さう云ふ時には葉子も庸三もいくらか警戒するのだつたが、不断は気のおけない場所であつた。(二十七、同 13-8（1938.7）p.570)

の3例、「気が置ける」「気のおける」が1例ずつあり、さらに、『青空文庫』所収のほかの秋声作品には［気のおけない］6例と［気がおけない］2例があるが、すべて地の文で「正用」例である。

地の文はすべて「正用」例で、葉子のセリフである（38）のみに「誤用」例が現れているわけである。これを、当時の若い女性の現実の話し言葉に「誤用」が現れることを認識していた作者が、20代の「奔放なくせに打算的で、みえっ張りなくせに無恥で、自己の才能と容姿を過信し、自己陶酔的に男を渡り歩いては破滅をくり返す、自制心のない衝動的浮気女」（福田・佐々木 1995：179）として描かれる葉子にふさわしい言葉遣いとして意図的に使った、と見ることもできる。この作品は昭和13年に単行本化（中央公論社刊）され、そこでは（38）の「ママ」を付した個所はそれぞれ「若いわ」「インテリ」と改められているが、「気のおけない」はそのままである。

9．おわりに

新野（1993：37）では、新野が1993年までの約2年間に新聞や雑誌から採集した10例ほどはすべて「正用」例であることを指摘した（第5節に挙げた（14）は1993年の例であるが、後に採集したものである）。世論調査結果と実例分布とのズレは、すでに1993年調査の時点で存在していた公算が大きい。またそこでは、見坊（1987:194）での「全33例。うち正用10例」という数字を示したうえで、「一時は「誤用」に押されていた「正用」が復活してきたように思われるのである」と述べたが、果たして見坊の示したこの数字が「正用」が「誤用」に押されていたことの根拠となるのか、実例がどの時期、どの資料にどのように現れているか示されていない以上、判断は保留すべきであったと現在は考えている。

いずれにせよ、この慣用句の「誤用」は、実際にこの句を使うようなある程度以上言葉の知識のある層にはほとんど浸透しなかった。ところが、「真反対」のように感じられる意味になるという点が印象強く、わずかな例であっても目立つため、多くの図書や記事で「間違い言葉」「おかしな日本語」の好例として取り上げられ、その結果「実例においても勢力の強い「誤用」である」という、実態とは合わない認識が広がっていったのではないか。またその背景には、

世論調査の結果によりかかり、使用実態の検証を十分に（あるいは、まったく）行わず、先行文献の記述を安易に踏襲するような図書・記事の横行も指摘できよう。

これまで「誤用」の実例を挙げた文献がほとんどなかったのは、結局、「さんざん「こんな間違った使い方をしている」と言われていながら、いざその実例を探してみるとなかなか見つからなかったから」なのであろう。ウェブ上のコーパスやデータベースのない時代は特にそうであったはずである。

とにかく、実例においてこの語の「誤用」が今後急激に勢力を伸ばすとは考えにくい。今後も「正用」例が圧倒的優勢を保っていくであろう。ただしその使用層はある程度日本語に関心の高い（「間違い言葉」「おかしな日本語」に関する知識がある）層に限定され、そうでない（使用語彙でない）層の多くは、いざ尋ねられれば前掲のような理由で「誤用」の意味を選ぶ一方、(1) ～ (3) のような「正用」例に接した場合は、前後の文脈から＜気遣いする必要がない＞という意味なのはわかるので、特に意識せずにそのまま読み進めてしまう。そのような状況がしばらくは続くと思われる。

本稿では、これまで明らかになっていなかった、この慣用句の今日の使用実態の記述が中心であった。「誤用」の発生理由・経緯についてはさらなる考察が必要である。第6節で“役不足”の意味変化との共通点についてふれたが、意味が「真反対」と思われるような方向へ変化しているとされる語句はほかにもあり、それらに共通して適用できるような理論を導き出すことができれば、学界への大きな貢献ができよう。ほかにも、ウェブ記事で「～ない」は「正用」例が圧倒的なのに対し「～る」は大部分の例が「誤用」例であった理由など残った問題はあるが、それらについても、今後の課題としたい。

注

1）大谷（1996：61-62）では、「「気」を用いた慣用句」のうち、「ガ／ヲ動詞慣用句」の一として「気が置ける」を挙げる。このグループは「連体修飾機能を持つのがふつうで、その際、「が」は「の」に置き換わることが多い」「一般に否定形を作ることは可能」とする。

2）初出時は無記名であるが、見坊（1983）に「一九六四年から八三年までに書き、また話したもの」（「あとがき」）のひとつとして収録されている。

3）ほかに芦沢（1978）がヒットするが、これは週刊誌連載のコラムで、飯豊（1975）の調査結果を引くにとどまり、それ以上の分析はない。

4）見坊（1976：25）には、次のような事例が紹介されている。

(42) ことし（昭和51年）の六月のある集まりで、私は次のような経験談を聞きました。ある人が若い女性に向かって「私があなたにこんなことをお願いするのは、あなたが気のおけない人だということを知っているからですよ」といったとたんに、その女性ははっきり顔色を変えた、というのです。

5）記事1件1件の掲載日は示されていないが、「使用データ」のページには「2012年1月初旬から下旬にかけて計500万URLを収集しました」とある。「置ける」を例にすると、これをキーとして検索して表示されたウインドウ画面の「文法パターン」のパネルの中に「名詞＋助詞」というグループがあり、その中の「…が置ける」というパターンをクリックし、そこで表示される「気が置ける」というコロケーションをクリックすることで、「気が置ける」「気が置けない」両方の形の用例が得られる。

6）朝日・読売の「用語用字マニュアル」では、この句の「誤用」はそれぞれ「誤りやすい慣用句・表現・表記」、「誤りやすい慣用語句、表現」の中の一項目となっている。毎日新聞社編刊（2007）『毎日新聞用語集　改訂新版』の「誤りやすい慣用語句」にはこの句は出ていない。

(43)「気のおけない人」は「遠慮、気兼ねの要らない人」の意で、「気の許せない、油断のできない人」という意味ではない。（朝日新聞社用語幹事編（2007）『朝日新聞の用語の手引　改訂新版』p.555、朝日新聞社）

(44) 気が置けない　「遠慮がいらない」の意。「気が置けない友と酒を楽しむ」などと用いる。「油断できない」「気詰まりな」の意味に使うのは誤り。（読売新聞社編（2008）『読売新聞用字用語の手引　改訂新版』p.380、中央公論新社）

【参考文献】

芦沢節（1978）「日本語攷⑦　「気のおける友人」とは」『朝日ジャーナル』20-3

飯豊毅一（1975）「動く日本語」『日本語教育』28

石野博史（1981）「若者たちの文法―成句の誤解をめぐって」『月刊言語』10-2

―――（1991）「ことばの世代差はなぜ生じるか」『月刊日本語』4-6

大谷晋也（1996）「「気」の慣用句の結合度」『日本語学』15-7

国広哲弥（1991）「「気が置けない」と「気が置ける」」『講談社現代新書1042　日本語誤用・慣用小辞典』講談社

―――（2010）「「気が置けない」と「気が置ける」」『講談社現代新書2033　新編日本語誤用・慣用小辞典』講談社

見坊豪紀（1976）『朝日選書74　ことばの海をゆく』朝日新聞社
———（1979）『ちくまぶっくす15　ことばのくずかご』筑摩書房
———（1983）『ことばさまざまな出会い』三省堂
———（1987）『現代日本語用例全集1　ア～キ』筑摩書房
坂梨隆三（1995）「江戸後期の可能動詞」『国語と国文学』72-1（坂梨隆三（2006）『近世語法研究』武蔵野書院に再録）
鈴木英夫（1970）「「気のおけない人」の誤用について」『文法』2-8
高木滋生（1980）「「気のおけない」考」『国語通信』224
土屋道雄（2002）『例解おかしな日本語正しい日本語』柏書房
新沼めぐみ（2010）「質問紙調査とウェブ検索の違いについて―「言葉の意味」と「慣用句の認識と使用」を中心に」『日本大学大学院国文学専攻論集』7
新野直哉（1993）「“役不足”の「誤用」について―対義的方向への意味変化の一例として」『国語学』175（新野直哉（2011）に再録）
———（2007）「“ていたらく”の《気づかない変化》について―「ていたらくな自分」とは？」『国語学研究』46（新野直哉（2011）に再録）
———（2011）『現代日本語における進行中の変化の研究―「誤用」「気づかない変化」を中心に』ひつじ書房
福田清人・佐々木冬流（1995）『Centurybooks　徳田秋声』清水書院
文化庁文化部国語課編（2007）『世論調査報告書　国語に関する世論調査 平成18年度』文化庁文化部国語課
文化庁文化部国語課（2011）「連載「言葉のQ&A」「気が置けない人」は、油断ならない人？」『文化庁月報』519（文化庁HP）
増井金典（1977）「「気のおける人」について」『滋賀県高校国語教育研究会会誌』昭和51年度（増井金典（1987）『日本語を見直す』私家版に再録）
丸田実・福田滋美（1993）「ことわざ・成句の形と意味のゆれ―第7回言語環境調査から（2）」『放送研究と調査』43-7

サ変動詞の五段活用化・上一段活用化の現状

松田謙次郎

キーワード：サ変動詞　動詞活用　性差　年齢差　実時間調査

1．はじめに

「Xする」「Xずる」と書き表せるサ変動詞のうち、「X」の部分が漢字一文字であるものの中には、(1) (2) のようにサ行変格活用ではなく五段活用や上一段活用を示すものがある。

(1) サ変～五段活用：愛する～愛す、属する～属す、達する～達す、害する～害す

(2) サ変～上一段活用：察する～察しる、信ずる～信じる、乗ずる～乗じる、案ずる～案じる[注1)]

この現象については、小泉（1944）、湯沢（1944）以来の文法的研究、国語研（1955）以後のアンケート形式による社会言語学的調査、さらに田野村（2001、2009）によるコーパス言語学的研究、の3種の研究蓄積がある。

社会言語学的調査については、大規模調査は国語研（1981）以来途絶えているが、田野村（2001、2009）によれば、少なくとも書き言葉や国会会議録、インターネット上では、(1) (2) にあるような変異・変化は依然として活発なものと判断される。また、国語研（1981）の調査は東京・大阪2地点での調査であり、管見によればこの変異を全国規模で捉えたアンケート形式の調査はまだないようである。さらに、社会言語学的調査では文法的研究や田野村の一連の研究で明らかになった、変異を司る内的要因を導入した研究に乏しいという欠点がある。こうした反省に立ち、ここでは2011年に実施したサ変動詞の

全国調査のデータ分析とその解釈を提示し、この変異・変化の現状を報告する。

2．研究史とその批判的検討

一般に言語変異・変化の要因には、文法・音韻といった狭義の言語学的な条件付けによるもの（内的要因）と、位相差、スタイル差、使用者の属性差といった外的要因の2つが存在する（Labov 1994）。サ変動詞変異に関する過去の研究蓄積を振り返るにあたり、まずは内的要因の研究史から検討してみよう。

サ変動詞にこのような変異が存在することをまとめた形で示したのは、小泉（1944）と湯沢（1944）が嚆矢と思われるが、このうち湯沢（1944）はサ変を（A）サ変に活用させるもの、（B）サ変にもサ行四段にも活用させるもの（愛する～愛す）、（C）サ変にもザ行上一段にも活用させるもの（感ずる～感じる）、（D）サ変にもサ行上一段にも活用させるもの（察する～察しる）、の4つに分類し、（B）～（D）が一字漢語を動詞にする場合に起きることを指摘している。さらに、それぞれの形式が談話・記述のいずれで用いられるかという位相差、さらに活用形による差異にも細かく言及している。

田野村（2001）は、現代語サ変動詞をゆれの観点から分類した場合のグループ分けとして、（A）サ変としてのみ活用するもの（する、実行する）、（B）サ変とサ行五段とのあいだでゆれているもの（愛する、属する）、（C）サ変とサ行上一段のあいだでゆれているもの（論ずる、応ずる）、（D）サ変とサ行下一段のあいだでゆれているもの（進ずる、魅する）と、ほぼ上記湯沢（1944）を踏襲した4分類を提案している。その上で、『朝日新聞』6年分の電子テキストを分析した結果に基づき、「Xする」の一字漢語X部分について、（3）のような一般化を導出することに成功している（田野村 2001:15）。

（3）田野村（2001）によるサ行五段化に関わる一般化
　　（i）「X」が促音・撥音・長音を含む場合はサ変のままであり
　　（ii）それ以外の場合はサ行五段活用に変化している

田野村（2009）はこの一般化をさらに精緻化した。国会会議録および自ら作成したWebコーパスを駆使することで、田野村（2009）は（3）（i）（ii）に

ある促音・撥音・長音の階層関係と「それ以外の場合」の拍数による階層関係を発見した。Web コーパスにおいて「X しない」と「X さない」の用例数が 30 例以上の 69 の一字漢語について、五段化率と音韻的種類の組み合わせで整理すると、(4) の音韻的階層関係が浮かび上がって来たのである（田野村 (2009:99) の図 3 より松田が作成)。

(4) 田野村（2009）によるサ行五段化に関わる音韻的一般化

(i) 特殊拍を含む語の五段化率：長母音を含む 2 拍語 > 促音・撥音を含む 2 拍語

(ii) 特殊拍を含まない語の五段化率：1 拍語 > 特殊拍を含まない 2 拍語

興味深いことに、このようなきれいな一般化が通用するのはあくまで B 類のみであり、C 類に関しては同様な一般化は未だ見出されていない。つまり、C 類では個々の単語ごとに上一段化への傾斜が見られるというわけである。

もっとも、B 類においても単語それぞれによる五段化への傾斜が存在するのであり、結局この変異・変化現象では個々の単語による差が確固とした要因として存在することになる（松井 1987)。

田野村（2001、2009）はコーパス言語学的アプローチであったが、これ以降に同様に電子データを使用した研究として、松田（2011、2012、2013）がある。いずれも法令をデータとして分析したものであるが、松田（2013）では上述の田野村の音韻的一般化が当てはまることが確認されている。

外的要因に目を向けよう。実態調査でもっとも古いものは国語研による「語形確定のための基礎調査」(国語研 1955、1956）である。当時ゆれていると考えられていたアクセント、音声、語法について標準形確定の一資料とすべく行われたこの調査では、サ変動詞から「察する～察しる」、「感ずる～感じる」、「訳す～訳する」の 3 項目が取り上げられた。それぞれ「察する」、「感じる」(第 1 回調査では「感ずる」)、「訳す」が多数という結果であるが、回答者の選択理由に「口語的」「文語的」といったスタイル上の差が上げられている点と、「訳す～訳する」については西日本にサ変形が多いという観察は注目に値しよう。

これ以降のサ変動詞関連の調査には、2つの大規模調査と2つの小規模調査がある。大規模調査の最初は土屋（1971）である。これは都内小中校生1,593名を対象にして行われた語法調査の一部として実施されたもので、この中で「命じる」「感じる」をそれぞれ文に埋め込む形で提示して「命じる～命ずる」「感じる～感ずる」を選択させている。前者では上一段化があまり進行していなかったものの、後者では「感じる」が圧倒的に優勢という結果であった。

2つめの大規模調査は国語研（1981）の「大都市の言語生活」調査[注2]である。東京で639人、大阪で359人を対象に行われたこの調査データを使い、「愛スル～愛ス」「愛シナイ～愛サナイ」を比較し、東日本の方が西日本よりも五段化率が高いと結論づけた。この分析をさらに深化させた真田（1986）では性差・学歴差・職業差にも言及し、性差では女性の方が五段活用の形を使用する度合いが高い旨を述べている。さらに、国語研（1981）で触れた東西差が、言語地理学的調査の結果とも合致するものであることが示されている。[注3]

規模は小さいが、飯豊（1964）と宮本（1978）も重要なデータを提供している。まず飯豊（1964）は、相模女子大の学生189名を対象にして、「愛する」の4つの活用形（未然形、連体形、仮定形、命令形）、「訳する」の仮定形、「祝す」の3つの活用形（未然形、連体形、仮定形）を調査した結果の報告である。「愛する」について言えば、未然形では五段形が圧倒的に支持されるものの、連体形、仮定形ではサ変・五段でゆれが見られた。また、活用形による分布を検討すると、「愛する」の未然形・命令形では五段が優勢で連体形・仮定形ではサ変が優勢なのだが、「訳する」では仮定形では五段が優勢、さらに「祝する」では未然形・連体形・仮定形ともに五段が優勢である。つまり、五段化に関する活用形の効果が語により違うことがわかる。出身別の分析では五段形の支持者が四国・九州出身者に比べて東北・関東・中部出身者に多かった。

飯豊（1964）の再調査が宮本（1978）である。相模女子大国文科学生2年生の112名（出身は北海道から沖縄まで全国にわたる）を対象とし、「愛する」未然形・終止形・連体形・仮定形について調査[注4]を行った。飯豊の調査と比較した上で、宮本（1978）は未然形で五段形がほぼ定着したのに対して、連体形・仮定形では依然としてサ変が優勢であること、そして回答者の出身別の分析では、地域的なばらつきはあるが、地域差が薄れつつあることを指摘した。

以上、内的・外的要因について簡単に過去の研究史を振り返ってきた。ここからはいくつかの反省点が浮かび上がる。その一つは社会言語学的調査と内的要因の探究は、必ずしもうまく絡み合っていたわけではない点である。社会言語学的調査では多くの調査において調査語はせいぜい２～３語だったのであり、語による差が繰り返し認められてきている以上、これでは不十分なことは明らかであり、多数の語について複数の活用形で調査する必要がある。田野村（2001、2009）以降社会言語学的調査はまだなされていないが、当然今後の調査は田野村の音韻的一般化を前提としたものである必要がある。2つめに、地域差を説得的に示すためにも調査は全国規模である必要があることが挙げられる。これら2点を満足させるような総合的調査が実施されなければならない。こうした反省に立ち、以下に述べるような今回の全国調査を企画した。

３．調査概要

今回の全国調査は以下の要領で行った。先行調査との関連を考慮して、田野村（2001）のＢ類から「愛する」「属する」「察する」「適する」「害する」「熱する」「面する」「有する」「要する」の９語を、Ｃ類から「命ずる」「感ずる」「通ずる」の３語を調査語彙として採用し、これらを文に埋め込んだ形で被調査者に提示して、使用語形を選ばせる方式を採った。選択肢には、「両方使う」、「わからない」を含めている。

活用形式は未然形を主とするが、「愛する」、「属する」、「察する」の３語については未然形以外も調査に含め、活用形による差を確認できるように配慮した。また「害する」「感ずる」の２語については、探索的に目的語名詞の違いによる差を確認するために、異なる目的語を持つ２文を用意した。これは過去の調査ではまったく顧みられていない要因であるが、動詞活用の変異であれば、その直前に来る目的語名詞の性質が関与していても不思議ではない。このような観点から今回の調査で要因として採用した。被調査者は全国満16歳以上の男女1,285名（男性593人、女性692人）であり、調査は調査票を用いた面接調査の形式で、調査会社（社団法人中央調査社）に委託の上、2011年12月に実施した。

４．結果と分析

４.１．内的条件の検証 (注5)

内的条件の検証で焦点となるのは、特殊拍効果、単語差、活用形差、目的語の違いによる差の４点である。今回の調査結果は、活用形差と特殊拍効果が存在することを示している（図１、図２）。図１ではＢ類動詞である「愛する」「属する」「察する」の３語について活用形による五段化率を示した。グラフの形を比較すると、「愛する」と「属する」が互いに非常に似通い未然形での五段化率が80%にも達しているのに対して、「察する」では全体的に五段化率が20%未満と低く、グラフの形も前者２つとは大きく異なることがわかる。その前者２つにしても未然形と連体形では60ポイント前後の差があり、活用形による差が大きい。「愛する」「属する」と「察する」を分けるのは特殊拍の有無であるから、促音という特殊拍を含む「察する」の五段化率が著しく低いことは、田野村（2001、2009）の主張する特殊拍効果が健在ということを示すものである。「察する」は現段階では変化の初期段階にあるが、今後変化の進行に伴い、「愛する」や「属する」と同じように活用形差による分布を示すことが予想される。

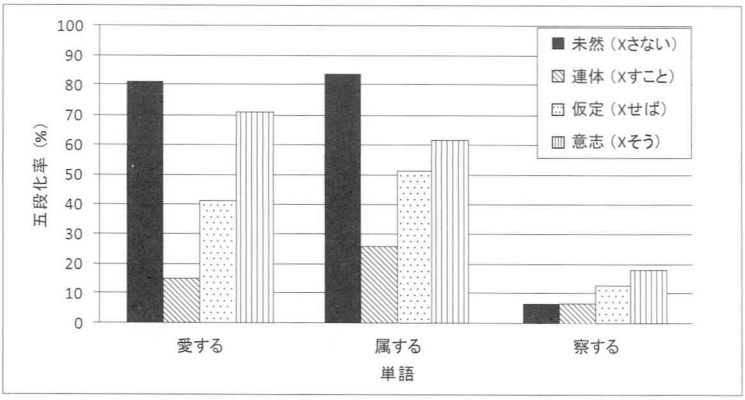

図１　「愛する」「属する」「察する」の活用形差

特殊拍効果の存在は、９語の未然形五段化率を比較した図２からも明白である。グラフの左半分には「属する」「愛する」「適する」「害する（気分・健康）」と特殊拍を含まない単語が並び、いずれも五段化率は高い。対して右半分には

「要する」「面する」「有する」「熱する」「察する」といった特殊拍を持つ単語が並ぶが、すべて左半分の単語群よりも段違いに低い五段化率である。特殊拍の存在がサ変動詞の五段化に大きく関わっている証拠である。(注6)

図２はまた、動詞「害する」は「気分」と「健康」という異なる目的語を従えた場合も五段化率はあまり変わらないことも示す。ではもう一つ、目的語を２種類用意した「感ずる」では結果はどうであろうか。この結果を示すのが図３である。このグラフは「命ずる」「感ずる」「通ずる」の３つのＣ類動詞の上一段化率を活用形差で比較したものであり、連体形と仮定形の差はわずかであるが、単語によって上一段化率に大きな差を見せている。これは図２で見た五段化率の単語差にも共通することで、先行研究の言う通り、サ変動詞の変異が動詞の個別的特徴にも影響されているわけである。

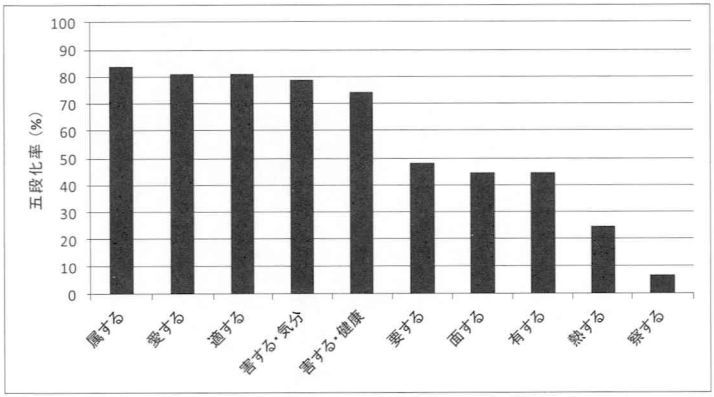

図２　Ｂ類動詞９種未然形の五段化率（「Ｘさない」の割合）

図３は、動詞「感ずる」が「責任」「寒さ」と異なる目的語を従えた場合でも上一段化率に差がないことも示す。先の「害する」の結果も併せると、目的語の違いはサ変動詞の変異には関わらないと結論づけられよう。

図１と図３を比較してみよう。活用形差を図１のＢ類動詞では４種類（未然形、連体形、仮定形、意志形）の活用形で比較したのに対して、図３では連体形と仮定形の２つで比較しているが、それでもこれら２類間の違いは明瞭である。Ｃ類の連体形・仮定形間の差はいずれも 10 ポイント以下であるのに対して、Ｂ類動詞群では変化が初期段階の「察する」こそ差が 6.4 ポイント

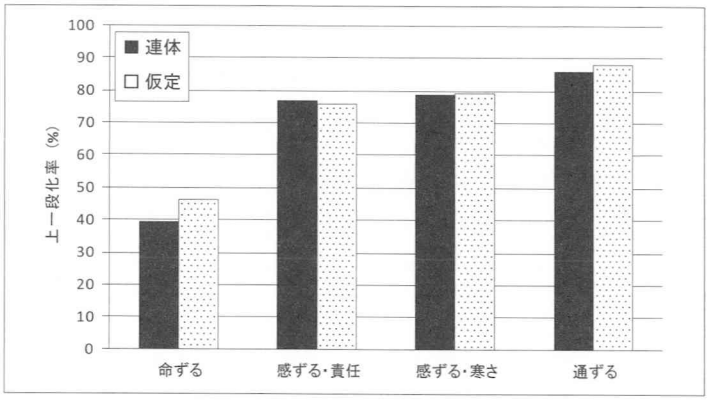

図3　「命ずる」「感ずる」「通ずる」の活用形差

と小さいが、変化の最盛期にあると思われる「愛する」と「属する」では25ポイント超の違いがある。変化の最盛期にあるC類動詞「感ずる」「通ずる」と比較すればその差は歴然である。同じサ変動詞の変化といえどもB類・C類の変化では活用形差の関わりがまったく異なるという事実は重要であろう。

4.2. 地域差の検証

先行研究（国語研1956、飯豊1964、国語研1981）は西日本より東日本の方で五段化が進行しているという地域差を指摘してきた。宮本（1978）ではこの差が縮小しつつあることも指摘されている。調査以来30年以上を経た今日、このサ変動詞変異をめぐる東西対立はどうなったのか。また東西と大まかにまとめられていたが、もっと細かな地域差はどうなっているのか。今回調査は、これらの疑問に答えるデータを提供してくれる。

B類動詞「愛する」未然形五段化率を全国12地域ごとに示したのが図4である[注7]。五段化率が最大の甲信越（90.5%）と最小の四国（66.7%）では23.8ポイントの差があるが、変化自体は全国で進行中と見える。関東・京浜と近畿・阪神を比較すると、前者の方がわずかに数値が高い。地域を東日本（北海道、東北、関東、京浜、甲信越、東海）と西日本（北陸、近畿、阪神、中国、四国、九州）に分割して平均値を取ると81.8%と77.3%と、かろうじて東日本の方が高い。東西差はわずかに残るが、引き続き薄まりつつあると捉えるべ

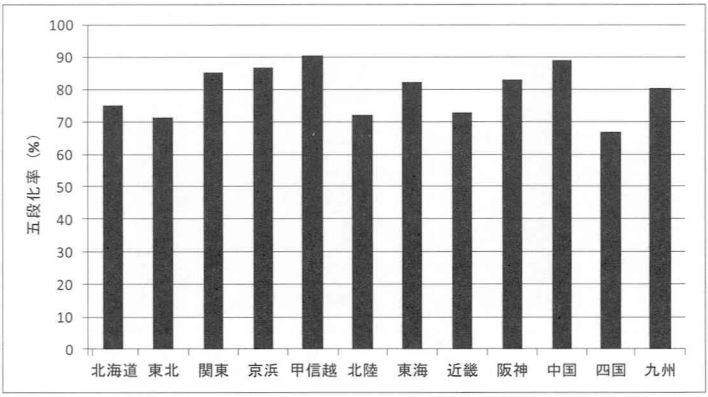

図４「愛する」未然形五段化率の地域別分布

きである。

4.3. 性差・年齢差の検証

性差・年齢差の関わりについては、国語研（1981）が「愛さない」の使用頻度が東京・大阪において年齢が下がるに従って頻用率が増加することを、また真田（1986）が男性と比較して女性が五段系を多く使用することを指摘している。ここでは全国調査の全問について男女差と年齢差を検討した。年齢は29歳以下、30～59歳、60歳以上の３分割にしてある。

全問29問のうち「愛すること～愛すこと」「察しない～察さない」「察すること～察すこと」「「察しれば」を言うか」の４問を除き、すべての回答に何らかの年齢差が見られ、年齢の低下に伴い革新形を使用する傾向が見られた。ここでは「愛する」（図５）・「属する」（図６）の未然形五段化率、「通ずる」連体形（図７）・「感ずる（責任）」連体形上一段率（図８）のグラフを掲げる。

性差はあるとしても非常にわずかである。同一年齢層で10ポイント以上の性差が見られたのは「察する」の未然形と「属する」・「命ずる」の仮定形の３つのみである。（図９、図10、図11）。たとえ性差が見られたとしても、必ずしも女性の革新的形式使用率が高いというわけでもない。性差には明確な差異はないとするべきであろう。

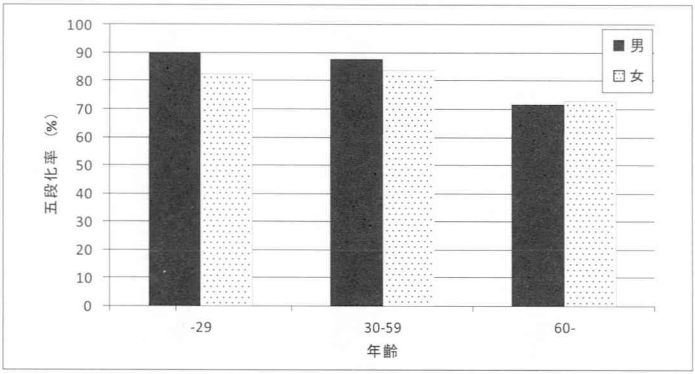

図５　「愛する」未然形五段化率（「愛さない」の割合）の性・年齢差

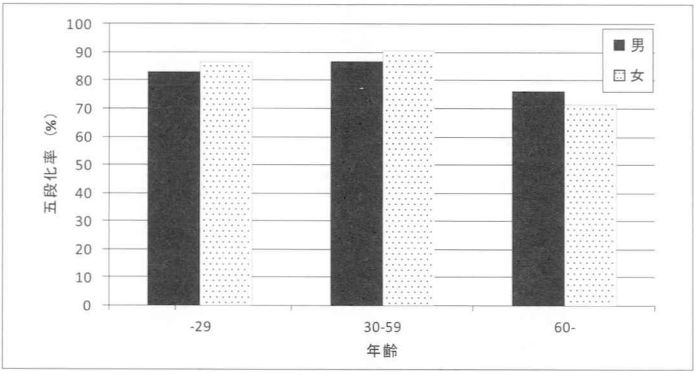

図６　「属する」未然形五段化率（「属さない」の割合）の性・年齢差

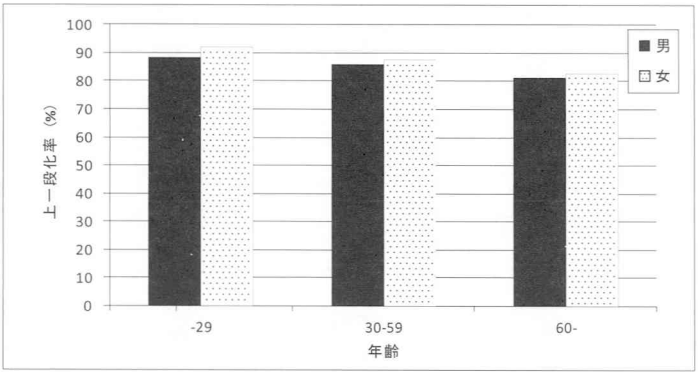

図７　「通ずる」連体形上一段化率（「通じること」の割合）の性・年齢差

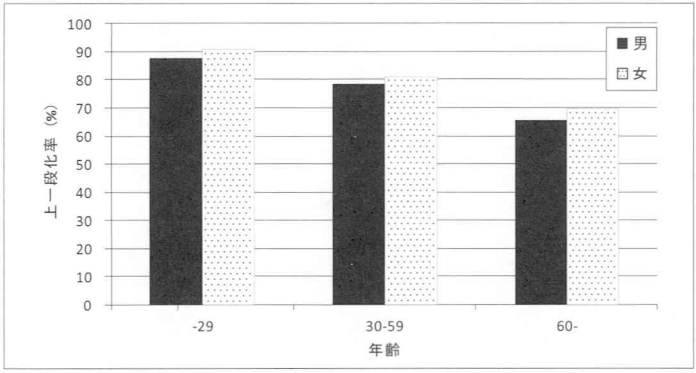

図８ 「感ずる（責任）」連体形上一段化率（「感じること」の割合）の性・年齢差

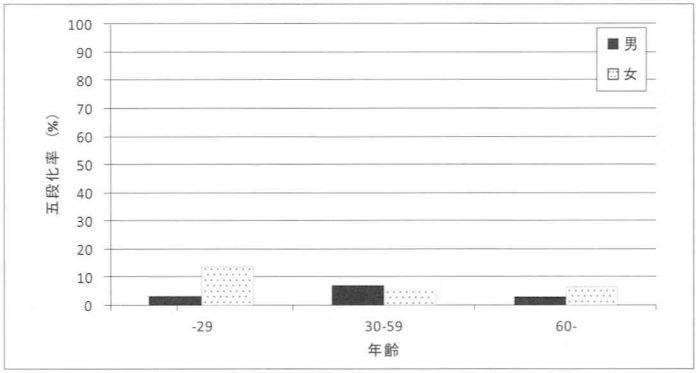

図９ 「察する」未然形五段化率（「察さない」の割合）の性・年齢差

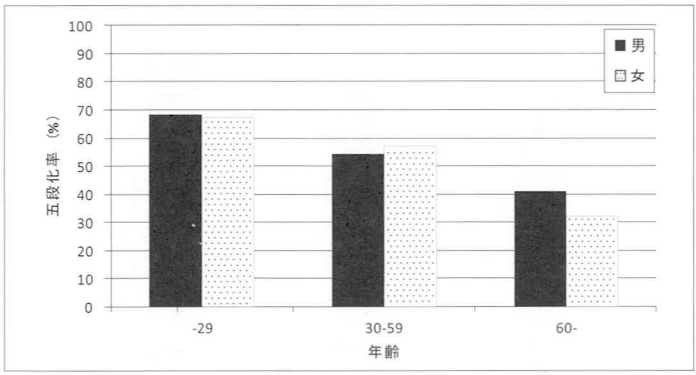

図10 「属する」仮定形五段化率（「属せば」の割合）の性・年齢差

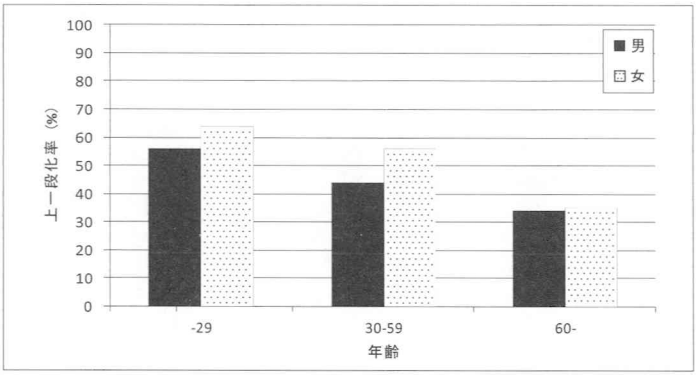

図11　「命ずる」仮定形上一段化率（「命じれば」の割合）の性・年齢差

4.4. 先行調査との比較

今回の調査結果を過去の社会言語学的調査と比較すれば、実時間で変化の進行を観察することが可能になる。ここでは、飯豊（1964）とは47年後の、宮本（1978）とは33年後の、そして国語研（1981）とは30年後の比較を行う。

飯豊（1964）は「愛する」の4活用形（未然形、連体形、仮定形、命令形）についてのアンケート調査であった。今回の全国調査では未然形、連体形、仮定形を調査しているので、これらについての比較が可能である。同様に宮本（1978）ともこれら3形を取り上げて比較する。

全国調査データから相模女子大にもっとも近い京浜地区の29歳以下の回答者29名を抽出し、飯豊（1964）および宮本（1978）と並べてみた（図12、13、14）。「愛する」未然形は五段形「愛さない」が徐々に減少しており、「両方」が増加している（図12）。サ変形「愛しない」の増加は見られないが、「愛さない」の減少と「両方」の増加は、サ変に向かっての逆行的変化の始まりを示すものであろう。「愛する」未然形は、飯豊が調査を行った1964年段階で五段化が一旦終局に至った後、再びサ変に向かって逆行しようとしているわけである。

連体形に目を転じると、五段形の減少とサ変形の増加は、飯豊（1964）以来ここ47年間の一貫した動きとなっている（図13）。今後は両形併用の割合が減少しつつサ変形が増加する傾向を見せてくるはずだが、その動きはこれまで以上に緩慢になるであろう。

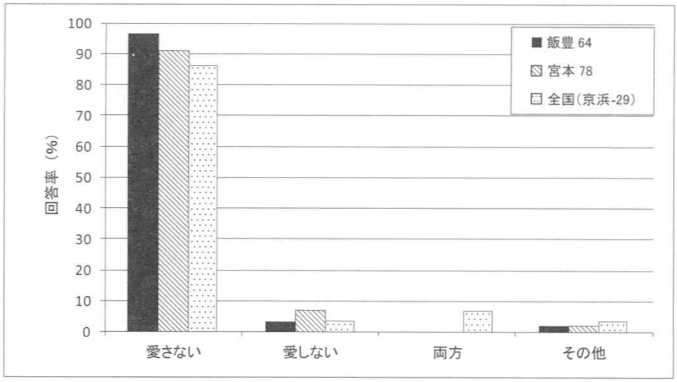

図12 「愛する」未然形・3調査の比較

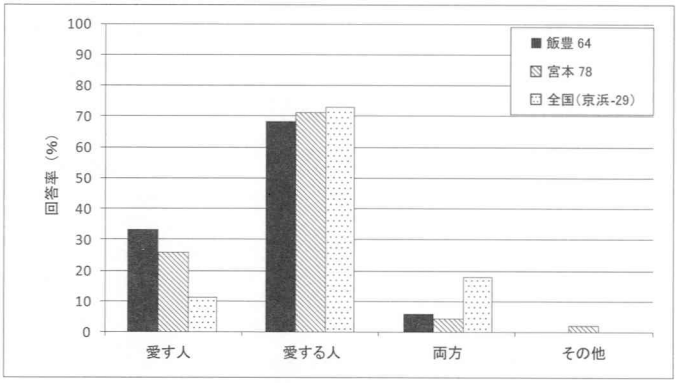

図13 「愛する」連体形・3調査の比較

仮定形は五段形と両形併用が順調に伸張すると同時に、サ変形が減少している（図14）。つまるところ、飯豊（1964）、宮本（1978）、そして全国調査の結果からは、3つの活用形はそれぞれ、未然：五段⇒サ変、連体：五段⇒サ変、仮定：サ変⇒五段という流れの中にあるわけである。少なくとも「サ変動詞の五段化」は、動詞の屈折パラダイムが全体的に五段形で平準化されるのではなく、活用形によって五段化され、また五段から再びサ変に逆行するといった、非統一的な動きであることは注意しておく必要がある。

国語研（1981）との比較に移る。国語研（1981）はB類動詞「愛する」の

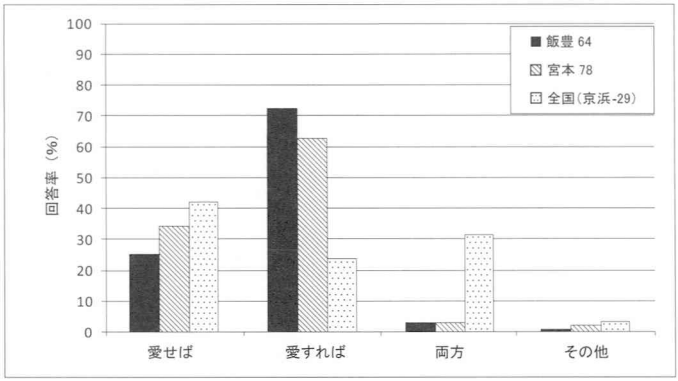

図14　「愛する」仮定形・3調査の比較

未然形と連体形(「愛す人」という形で質問)、およびC類動詞の「察する」と「感ずる」(いずれも終止形) を尋ねた。「1. その語形だけ 2. その語形を使うことが多い 3. その語形も使う 4. その語形を使うことが少ない 5. 使わぬ 6. N.A.」の選択肢のうち、1と2を「頻用」としてまとめた国語研 (1981) にならい2回答をまとめ、年齢も各年齢層で十分なサンプルが集められるよう整理して集計した。このまとめた年齢を生年に変換し、2調査の結果から生年によって過去37年間の変化が実時間で捉えられるようにした。なお、国語研調査では東京と大阪の被調査者を対象としているが、全国調査のデータではこれにもっとも近い京浜と阪神ブロックからデータを抽出している。

B類動詞「愛する」未然形・連体形から検討する。図15の「愛する」未然形の分布を示すグラフでは、国語研調査では順調に100%を目指していた線が下降を始めており、全国調査の最若年層では90%を切る。これは飯豊 (1964) と宮本 (1978) との比較により導かれた逆行的変化という結論を裏付ける。グラフをそのまま解釈すれば、逆行は1960年頃の生まれの話者を境に起きたと推測できる。五段化がほぼ完成した時点で逆行が始まったわけである。一方、大阪・阪神ではまだ五段化自体が終局に向かって進行中であり、逆行は明らかではない (図16)。ここにも東日本における変化の進行の早さが表れている。

「愛する」連体形のグラフ (図17、図18) では、国語研調査と全国調査のグラフはほぼ重なる。過去36年間にこの形式では大きな変化はなかったわけで

ある。五段形の退潮が終局に近づき、S字曲線の端末部でカーブが緩慢になったことによるものである。「愛す」の消滅には長い時間を要することであろう。

「察する」終止形として上一段形「察しる」を選択した者の割合を示すのが図19（東京・京浜）、図20（大阪・阪神）である。「察しる」の割合は国語研調査段階よりもさらに低下し、東京・京浜ではほぼ消滅しつつあるが、東西差を反映して大阪・阪神はこれにやや遅れている。いずれのグラフでも、データが重なる時点で2つの調査は高い一致度を示していることに注目されたい。(注8)

C類動詞に目を転じる。「感ずる」連体形のグラフは、目的語の「責任・寒さ」、また東京・大阪の地域を問わず、最若年層で100%に達するほぼ右肩上がりの増加となっている（図21、図22、図23、図24）。これはまさに変化が終結する一歩手前の段階と言える。

以上の国語研（1981）との比較からは、変化がそれぞれ以前予想された方向に進行していることが確認できる。なかでも東京・京浜の「愛する」未然形における逆行現象は、飯豊（1964）、宮本（1978）との比較でも観察された現象であり、国語研（1981）との比較でも裏付けられたことは意義深い。この他にも「愛す」「察しる」の退潮、「感じる」の伸張についても、東京・京浜、大阪・阪神を通じて国語研調査にそのまま接続する動きが捉えられている。

またほとんどのグラフについて、生年が重なり合う部分では2つの調査できわめて近い値が出た。これはそれぞれの調査の高い信頼性を示すとともに、ここでの比較法にも大きな誤りがなかったことを示唆するものである。先行調査データを活用して実時間レベルで言語変化を観察・分析することは、ここ10年ばかりの欧米社会言語学でも非常に盛んに行われている手法であるが、多方面にわたり調査蓄積の多い日本の社会言語学ではこれはとりわけ有効な手法であり、言語変化研究に貢献できる機会も多いはずである。

5．おわりに

以上、サ変動詞の五段化・上一段化をめぐる全国調査の結果を簡単に紹介してきた。その結果、とりわけ五段化に関しては田野村（2001、2009）の音韻的一般化、先行調査が発見した単語や活用形による差が依然として健在であること、東西差が引き続き縮小しつつあることが確認できた。飯豊（1964）、宮

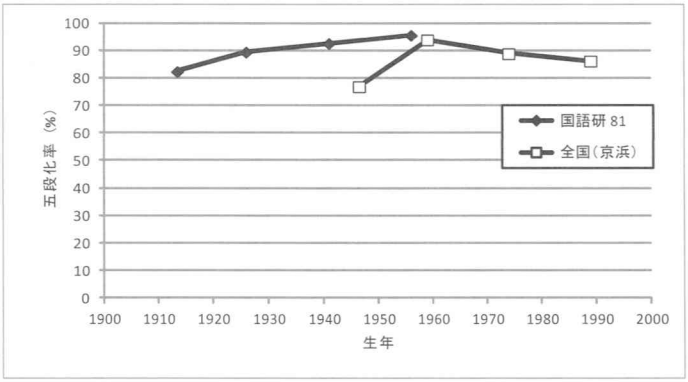

図15　「愛する」未然形・国語研（1981）の東京データとの比較

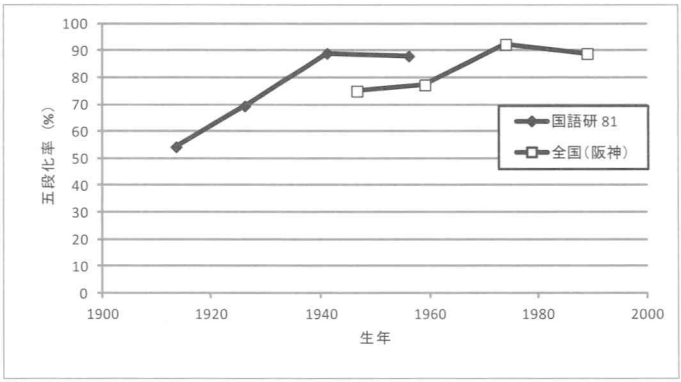

図16　「愛する」未然形・国語研（1981）の大阪データとの比較

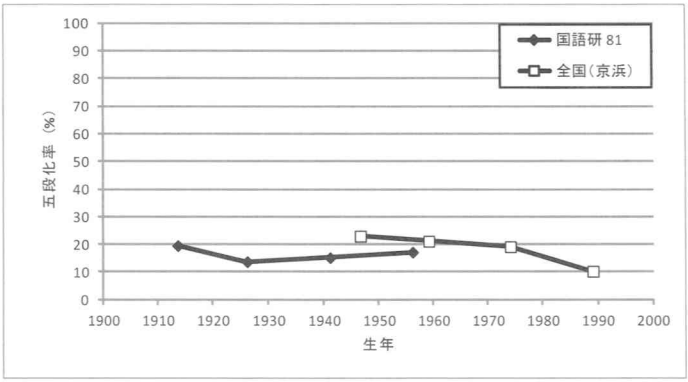

図17「愛する」連体形・国語研（1981）の東京データとの比較

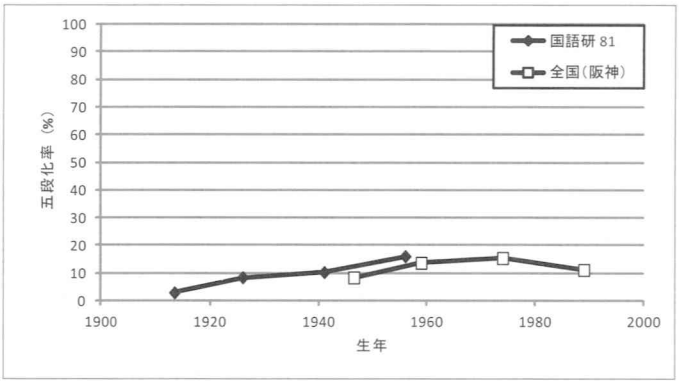

図18 「愛する」連体形・国語研（1981）の大阪データとの比較

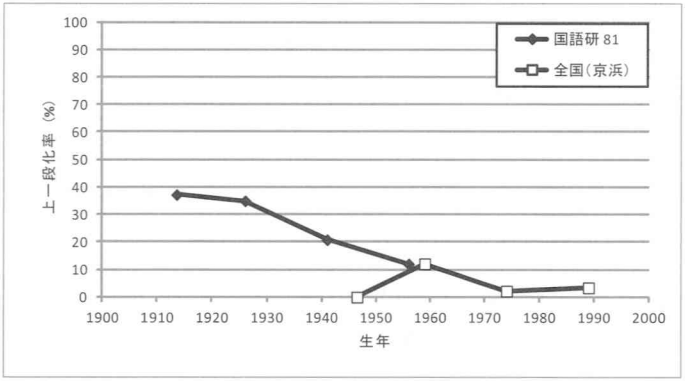

図19 「察する」終止形・国語研（1981）の東京データとの比較

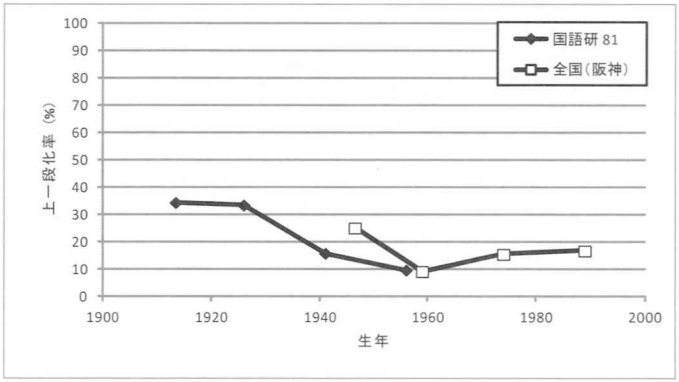

図20 「察する」終止形・国語研（1981）の大阪データとの比較

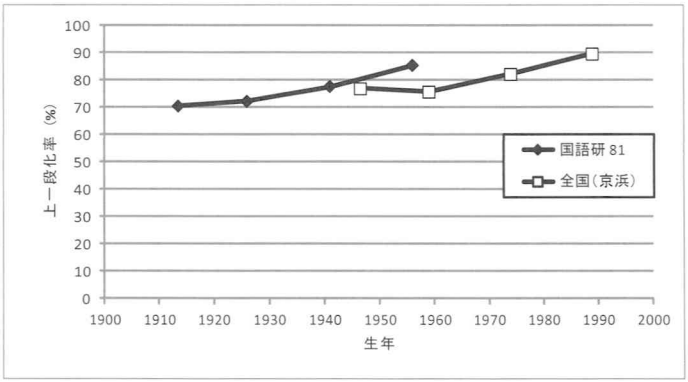

図21　「感ずる（責任）」連体形・国語研（1981）の東京データとの比較

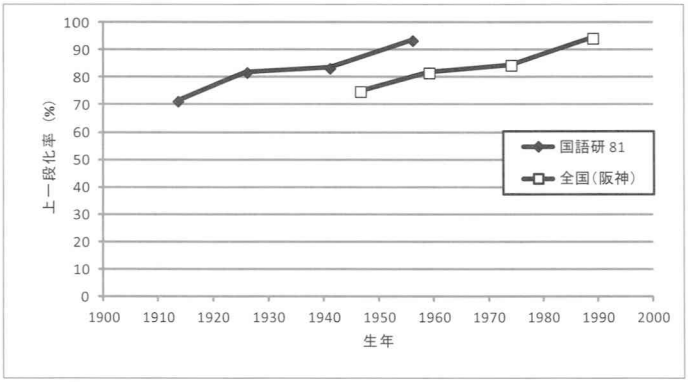

図22　「感ずる（責任）」連体形・国語研（1981）の大阪データとの比較

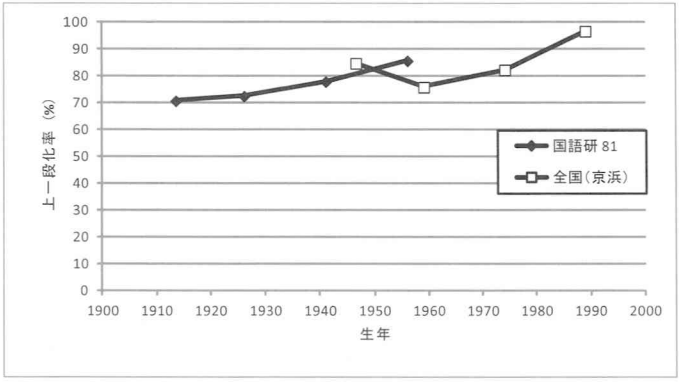

図23　「感ずる（寒さ）」連体形・国語研（1981）の東京データとの比較

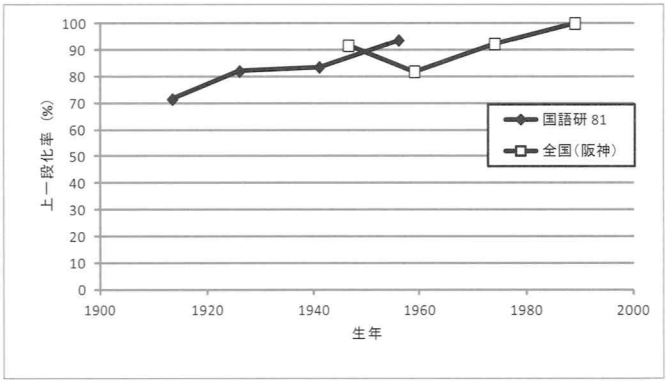

図24 「感ずる（寒さ）」連体形・国語研（1981）の大阪データとの比較

本（1978）、国語研（1981）との実時間的比較では長期スパンで変化の趨勢を探ることができ、「愛する」未然形における、変化の逆行現象も発見することができた。調査結果からの知見は今回の報告にとどまるものではない。ただし、先行調査との比較だけを取ってみても、今回は土屋（1971）に触れることができず、またC類動詞の変動の分析は不十分であったと言わざるを得ない。それでも、内的要因と外的要因の両方を取り入れ、全国規模で実施した統合的調査のもたらす知見の一端やその意義は十分に示せたのではないだろうか。

最後に簡潔に今後の課題を挙げる。一つは地域差分析である。東西差が消えつつあるとしたら、図4の散らばりはどのように説明できるのであろうか。データを調査地点の都市規模で整理するときれいな相関が浮かび上がるが、都市規模は平均年齢とも絡む。この点についての慎重な解析を行う必要がある。

属性分析も本稿の分析は不十分である。とりわけ職業差については何も触れることはできなかった。変化の社会的側面を捉えるためには、これらの属性分析を本格化させねばならない。

そして何にも増して必要なのは統計的検定である。今回の分析ではまったく統計的有意性は問題にしていない。地域差分析、属性分析を進める際には、内的要因とこうした外的要因の両者を考慮したロジスティック回帰分析を施し、差の有意性検定を行いたいと考えている。

注

1）小泉（1944）では「～ずる」「～じる」の形式をそれぞれ「ザ行変格」「ザ行上一段」と呼んでいるが、ここでは湯沢（1944）にならい「サ行」で統一する。

2）この中でサ変動詞を扱った§5.4「サ変動詞をめぐって」の著者は真田信治氏である。以後国語研（1981）と表記する。

3）なお、国語研の『大都市の言語生活』は出版年こそ1981年であるが、実際の調査は1974年から75年にかけて行われている。よって年代順であれば本来以下に述べる宮本（1978）の直前と位置づけられるべきである。

4）ただし飯豊（1964）の正確な調査内容・形式は詳らかにされていない。宮本（1978）は質問文に埋め込んで選択させる形式を採った。

5）以後特に断らない限り、「五段化率」および「上一段化率」とは「五段活用形式のみを選択した割合」「上一段活用形式のみを選択した割合」を指す。調査では「どちらも使う」という選択肢も与えてあるが、これは計算に含めていない。

6）ちなみに田野村（2009:99）では、音韻的種類と五段化率の組み合わせで一字漢語の分布を整理した表（表2）を掲げている。この中で9字が今回の全国調査でも使われている。そこでそれぞれの未然形五段化率全国平均によってこれら9字を並べ、これを田野村の表2と比較すると、非常に高い一致を示す。田野村の表では愛＞適＞属＞害＞熱＞有・面＞要＞察の順となっているが、全国調査では属＞愛＞適＞害＞要＞面＞有＞熱＞察の順であり、「熱」がやや大きく外れた以外はほぼ田野村の順序に沿っている。田野村（2009）の一般化が妥当なものであることを補強するデータと言えるであろう。

7）地域名で「京浜」とは東京都区部、横浜市、川崎市を指し、「関東」は茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、京浜ブロック以外の東京都・神奈川県を含む。同様に「阪神」は大阪市、堺市、豊中市、池田市、吹田市、守口市、八尾市、寝屋川市、東大阪市、神戸市、尼崎市、明石市、西宮市、芦屋市、伊丹市、宝塚市、川西市を含み、「近畿」は滋賀県、京都府、阪神ブロック以外の大阪府・兵庫県、奈良県、和歌山県を指す。

8）ただし今回の全国調査では「察しること」のように連体形で質問している点に注意する必要がある。

【参考文献】

飯豊毅一（1964）「サ変・カ変の問題」、時枝誠記・遠藤嘉基（監修）森岡健二・永野賢・宮地裕・市川孝編『口語法文法講座3 ゆれている文法』明治書院

———（1966）「「愛する」か「愛す」か―サ変動詞のゆれについて―」『日本語』6-7

小泉苳三（1944）『日本語文の性格』立命館出版部

国立国語研究所（1955）「語形確定のための基礎調査」『国立国語研究所年報』6
———（1956）「語形確定のための基礎調査」『国立国語研究所年報』7
———（1981）『大都市の言語生活 ―分析編』（国立国語研究所報告 70-1）三省堂
———（1981）『大都市の言語生活 ―資料編』（国立国語研究所報告 70-2）三省堂
真田信治（1986）「『愛さない』と『愛しない』の揺れ」『日本語日本文學』12（台湾・輔仁大學外語學院日本語文學系）
田野村忠温（2001）「サ変動詞の活用のゆれについて―電子資料に基づく分析―」『日本語科学』9
———（2009）「サ変動詞の活用のゆれについて・続―大規模な電子資料の利用による分析の精密化―」『日本語科学』25
土屋信一（1971）「東京語の語法のゆれ 児童生徒言語調査結果報告（2）」『NHK 文研月報』21-9
松井利彦（1987）「漢語サ変動詞の表現」、山口明穂編『国文法講座 6 時代と文法―現代語』明治書院
松田謙次郎（2011）「法令の言語変異を探る」*Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* 14
———（2012）「法令に見られるサ変動詞の五段化・上一段化について：2001 年から 2011 年のデータ分析」*Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* 15
———（2013）「現行法令におけるサ変動詞五段化・上一段化現象の言語内的要因」*Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* 16
宮本和美（1978）「“ゆれ”ている国語表現の一考察―実態調査に基づく―サ変動詞の動向―」『相模国文』5
湯沢幸吉郎（1944、1980）『現代語法の諸問題』（復刻版 著作集 3）勉誠社
Labov, W.（1994）*Principles of Linguistic Change*, Volume I: *Internal Factors*, Blackwell.

〔付記〕
本研究の全国調査は、国立国語研究所基幹型共同研究「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明（プロジェクトリーダー：相澤正夫）」の一環として実施したものである。相澤正夫氏からは調査票作成に関して多大な協力を頂いた。また、本研究の一部は、平成 25 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）（課題番号 25284082）「変異理論の新展開と日本語変異データの多角的分析」（研究代表者：松田謙次郎）を受けてなされている。

新聞データ（朝日『聞蔵（きくぞう）』）に見る「なく中止形」の動向

金澤　裕之

キーワード：新聞データ　「聞蔵（きくぞう）」「なく中止形」　動向

1．はじめに

次節でその内容を詳しく述べる「なく中止形」について、筆者はこれまで、そうした事実の発見（金澤 1997）、歴史的な現象への類推（同 1999）、言語習得の分野への応用（同 2000）、その後の動向の確認（同 2008）、などといったさまざまな面からの考察を進めて来たが、今回はこの言語現象の動態を、一つの固定したメディアである一般新聞の記事データを対象として調べることにより、これまでの研究の確認並びに見直しを進めてみることにしたい。

2．「なく中止形」について

2.1．「なく中止形」とは

前節でも挙げた「なく中止形」というのは金澤（1997 他）による造語で、端的にその内容を記せば、《動詞の否定の連用中止法において、（助動詞「ず」ではなく、）助動詞「ない」を使った「～（し）なく、…」の形》ということになる。この形式については、古く此島（1973）の中で、具体的な例を挙げつつ分かりやすく説明されている部分があるので、先にそれを引用してみる。

> 連用形「なく」の中止法は、形容詞にはあるが、助動詞にはない――「勉強する気がなく、遊んでばかりいる」とは言えるが、「勉強をしなく、遊んでばかりいる」とは言えない。中止法には「勉強をせず、遊んでばかりいる」と「ず」を用いるのである（ときに「なく」の中止法を文章に見るが、ぎごちない）。　〔第三章第二節「ない」の項、167 頁〕

この此島氏の指摘にもある通り、動詞の否定の連用中止法は、一般には「～（せ）ず、…」の形が正しいとされ、助動詞「ない」を使った「～（し）なく、

…」の形は規範的ではないと考えられてきた。しかし筆者の調査によれば、特に1990年代以降、あちらこちらのふとした場面で少しずつ目にするようになってきた。因みに、現在とは異なり、未だキーワードによる検索がほとんど浸透していなかった1990年代中頃に、筆者が（知人による協力も受けて）目視によって集め得た用例数は、大学生のレポートの中に含まれていたような例も含め、17例であった（金澤1997を参照）。

2.2. 用例のパターンと特色

そこで上記の17の用例を詳しく検討してみたところ、そこには比較的明らかな傾向が窺われ、前接する動詞（句）の特徴から、次に示すような6種類の場合に分けることが出来た。

A．動詞「(～) する」――2例
「味もしなく」、「存在しなく」

B．動詞「いる」――3例
「捕手はいなく」、「ローマを愛する者はいなく」、
「“新住民”がほとんどいなく」

C．動詞「(～) できる」――3例
「生かすことができなく」、「パスできなく」、
「理解できなく」

D．補助動詞「いる」(「～ている」) ――3例
「安定していなく」、「なされていなく」、
「知られていなく」

E．動詞＋助動詞「られる」――1例
「認められなく」

Z．A～E以外の動詞（句）――5例
「落ちつかなく」、「一面にすぎなく」、「足りなく」、
「(～ても) 構わなく」、「予想もつかなく」

そして、ここに挙げた動詞（句）については、次の二点がその特色として考えられた。

(1) 先行する動詞（句）が状態的な意味を表わす場合が多い。

(2) 対応する肯定形式を、普通には持たない場合。(定型的な性格を持つ表現)

2.3. 体系の中での位置付け

此島氏による上記引用部分にも一部窺えるが、活用語の連用中止法のうち、意味的に否定を表わす場合を全般的に考えてみると、その体系は現在のところ、次のように図示することが出来る。

形容詞「ない」	補助形容詞「ない」	動詞／補助動詞＋助動詞「ず」
雲がなく、…	*赤くなく、…* *賛成で（は）なく、…*	*雨が降らず、…* *開いておらず、…*

そして、こうした状況から考えると、「動詞／補助動詞＋助動詞「ず」」の部分に入る表現のうち、動詞や動詞句全体が、状態性が強いという、謂わば形容詞・補助形容詞に近い性格を持ったもの、つまり、図で言えば「左側」に位置するものから、(「ず」に替わって)「ない」が許容される形として侵入し始めていることになり、今後そうした方向の更なる進展も予想可能なこととなりつつある。

3. アンケートによる確認

前節では、先行する動詞（句)、あるいは「動詞＋ない」全体が状態的な意味を表わす場合に「なく中止形」が現れやすいのではないかと、出現した用例から推測を行ったが、そうした推測の妥当性を検証するため、1996年と2005年の二回、ほぼ10年の間を隔ててアンケートによる調査を行った。アンケートの対象としては、大量調査のしやすさ、及びこの種の用法が生まれている可能性として、若い世代の方が高いと考えられることを考慮して、大学生を選んだ。また実施の方法としては、まずはこうした用法が彼らに実際に使用されつつあるのかどうかということを調べるのが第一と考え、既にある用例を利用した文脈を設定した上で、問題の部分をブランクとし、そこに彼らにとって自然な表現形式を記入してもらうという、空欄補充の形式をとった。

アンケートの1回目は、1996年11月、岡山市内の三つの大学で実施し、

対象となった学生は全体で634名（女子：428、男子：206）であった。一方2回目は、2005年10～11月、前回とほとんど同じ内容のものを横浜及び東京の三つの大学で実施し、対象となった学生は全体で580名（女子：316、男子：264）であった。実施の方法としては、調査の意図に気付かれないように、質問項目にはダミーの問題を混ぜた上で、記入の仕方についてこちらからは特に細かい注意は与えず、文脈から判断してブランクを埋めてもらうという方法を採った。そのため、回答の中には原因・理由の表現にしたものや意味の通らないもの、更には方言形での回答などがある程度の数（全体の約7.5%）見られたが、それらについては考察の対象から外して集計した[注1]。

そこで設問として提示した具体例は、次の通りである。〔順不同〕

(a) 最初は何の味も（　　）、少し不安になったが、次第に本来の味が出てきた。

(b) この地区には新しい住民はほとんど（　　）、人々はみな家族同様の付き合いをしている。

(c) その言語は、構造を簡単に理解することができ（　　）、習得も難しい。

(d) 当時は運動の実態もあまり知られて（　　）、協力する人は少なかった。

(e) 懸命に頑張ったが、我々の抗議は認められ（　　）、得点も入らなかった。

(f) 新しい政府の方針は予想もつか（　　）、不安な気持に陥ることも多い。

(g) コンニャクは包丁で切ら（　　）、手でちぎった方が、味がよくしみる。

なお、(a)～(f) は、前節でA～E及びZの六種類に分けた例の中から一つずつを選び、それを部分的にアレンジしたものであり、(g) はそれらと性格的に異なると考えられる例を、寺村（1991）の中の例文（同書218頁の例(102)）を参考にして一つ加えたものである。

今回は、具体的な調査結果の詳細は省略するが（金澤2008を参照）、調査の中で、それぞれの場合における「なく中止形」の記入（使用）状況を回答人

数と総数への割合（%）で示したのが、次の表１・表２である。また、この２回の調査結果の推移をグラフの形で示すと、後の図１のようになる。

表１　1996 年の結果――大学生 634 名における「なく中止形」

	住民はいー	知られていー	予想もつかー	～ができー	何の味もしー	認められー	包丁で切らー
	（b）	＞（d）	＞（f）	＞（c）	＞（a）	＞（e）	＞（g）
割合(%)	6.5	5.8	5.1	2.9	2.6	1.4	0.0
人数(人)	39	30	31	15	15	9	0

表２　約 10 年後（2005 年）の結果――大学生 580 名における「なく中止形」

	住民はいー	知られていー	何の味もしー	～ができー	予想もつかー	認められー	包丁で切らー
	（b）	＞（d）	＞（a）	＞（c）	＞（f）	＞（e）	＞（g）
割合(%)	20.4	12.3	5.8	4.5	4.3	2.3	0.0
人数(人)	103	63	30	23	22	13	0

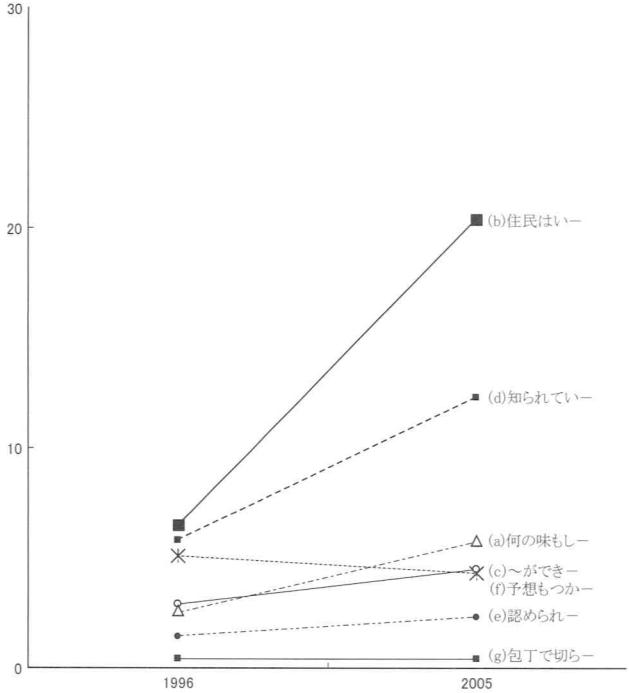

図１　２回の調査結果（1996・2005）の推移

推移の状況が分かりやすい図１を参照すると、特に興味深いと思われるのは、次の二点である。

（ｉ）２回目で割合が少し減少した（ｆ）の場合を除き、１回目から２回目の変化には、数値の高いものほどより変化（増加）の度合が大きい、という傾向が見られること。

（ii）（ｇ）の「包丁で切らー」の場合は、依然として、600 名近い回答者の中に一人も「なく中止形」を記入する者がいないこと。

言語変化のあり方として考えると、先行するもの（例えば（ｂ））は、より変化の進む方向に動いてゆくのに対し、後方に位置するもの（例えば（ｇ））はなかなか変化を受け容れない、というパターンであるように思われる。

４．今回の調査について

4.1．調査方法とその結果

前節までの経過を承けて、今回は、『朝日新聞』の記事データベースである『聞蔵（きくぞう）Ⅱビジュアル』を利用して、そこでの検索可能な 1984 ～ 2009 の 26 年間における「なく中止形」の出現状況を調べてみた。この調査にあたって採用した具体的な方法の手順は、次の通りである[注2]。

① 単純に「なく、」で検索をかける⇒ 476,781

②「はなく、」「でなく、」を初めとする、「なく中止形」を含まないと考えられる《Ｘなく、》の形を取る 16 種類を、検索対象より除く⇒ 9,339

③ 9,339 例を全て確認して、「なく中止形」かどうかを判断する（「なく」⇔「ず」）

④ 可能な限り“見落とし”を少なくするため、用例が出現した形式については、その形（例えば、「あか抜けなく、」）で、もう一度用例を検索して確認する

まず①については、言うまでもなく、単純に「なく」のままで検索にかけると、それに該当する全ての場合を拾ってしまって対象数が膨大になるため、中止形の場合の特徴の一つである読点を検索語に加えて「なく、」とした。そのため、実際の本文において読点を伴わない形で「なく中止形」となっている例については今回の検索で拾えないことになるが、この点については検索という作業を

行う以上は致し方ないことと考えて、この方法を採用した。

次の②については、「なく、」の形で検索されたものの中には、(助動詞の連用形としての「〈〜〉なく」ではなく、) いわゆる形容詞や補助形容詞などとしての「〈〜〉なく」の場合が多く含まれていることを考慮し、①での検索結果を観察・検討した上で、用例数が多く (100例以上)、且つ、検索結果一覧の前からと後からの各50例の全てが「なく中止形」ではなかった場合、という二つの条件を課して、それに相当した次の16の語が(上記②の説明の中の)「X」に当たる場合を、対象から除いた。

「は」「で」「が」「も」「に」「と」「く」「しか」「じゃ」「ど」
「少」「関係」「仕方」「別」「切」「訳」

③については、その内容自体については特に問題はないと思われるが、実際の作業においてはそれぞれの状況に応じて便宜的なルールを設けているので、その点について説明を加えておく。この場合の基本的なルールとしては、(③の末尾にも示した通り、) 用例中の「なく」の部分を「ず」に置き換えることが (とりあえず) 可能かどうかということを判断基準とした——表現上の、ある程度の不自然さは無視することとして。例えば、「帰ってなく、…」というような場合の、〈〜ていなく〉の縮約形としての〈〜てなく〉については、それを通常「＊帰ってず、…」とは置き換えられないことから、対象からは除き、他方、「帰っていなく、…」のような場合は「帰っていず、…」と一応は置き換え得ることから、対象に含めた。また、語形の成立してくる経緯とも関わって、例えば「つまらない」などのように、《動詞＋助動詞「ない」》と考えるか、全体で《一語の形容詞》と考えるかの判断が分かれるような場合については、実際の用例において、「つまらず」と「つまらなく」のどちらの検索例が多いかを判断基準として、例えばこの場合はほぼ「1：5」の割合で後者の方が多かったため、一応《一語の形容詞》と認定して、対象からは除いた。〔むろん、検索の用例数の割合が逆の場合は、それを対象に含めた。〕

最後の④については、確認のための作業なので、特に問題はないと思われる。

こうして、上記①〜④の手順で用例の絞り込みを行った結果、最終的に472の例を、26年間における「なく中止形」の用例として認定した。

4.2. 分析Ⅰ――形式面での分類

前節での調査の結果として認定できた「なく中止形」の472例について、ここでは形式面での分析をしてみたい。そこでまずは、2.2節で挙げた分類に倣い、A～Eの場合について数えてみた。なお、用例数の後の括弧内の数字は、謂わば「「なく中止」度」とも呼ぶべきもので、それぞれの動詞などの場合について、《「なく」の数÷「なく」と「ず」の合計数×100》という計算式で、「なく中止形」の割合を％で出したものである。

A．動詞「(～) する」　4（0.01％）
B．動詞「いる」　85（1.12％）
C．動詞「(～) できる」　25（0.07％）
D．補助動詞「いる」(「～ている」)　60（0.12％）
E．動詞＋助動詞「れる・られる」　38（0.06％）

また、(2.2節でのZの場合も含めて、) その他の用例をまとめて分類してみると、次のような結果となった。

F．可能動詞（下一段型）39（0.23％）――25種
G．対応する肯定表現が一般的ではないもの
　G-1　連語的な形式　73（3.70％）⇒「思いがけない」「物足りない」他
　G-2　慣用句的な形式　29（0.19％）⇒「～にすぎない」「～ざるを得ない」他
H．動詞＋補助動詞　16（0.12％）⇒「～きれない」「～かねない」他
I．その他の動詞　103（0.19％）――38種

なお、ここから分かるように、2.2節でZ項目に含まれる例は、今回のG項目にほぼ対応することになる。

以前の目視による捜索では発見できなかったF項目の可能動詞（下一段型）については、全体で39という比較的多くの例が見られ、また、その内容もあまり偏りが見られずに、異なりの語数で言えば25語を数えることが出来た。参考までに、用例数の多い順に、以下に列挙しておこう。

4例のもの：「言えなく」(1語)
3例のもの：「取れなく」「見えなく」(2語)

2例のもの：「歩けなく」「行けなく」「思えなく」「欠かせなく」「使えなく」「眠れなく」「許せなく」(7語)

1例のもの：「逢えなく」「動かせなく」「動けなく」「描けなく」「勝てなく」「切り離せなく」「頼めなく」「作れなく」「就けなく」「釣れなく」「憎めなく」「望めなく」「乗れなく」「入れなく」「読めなく」(15語)

また、I項目に分類したその他の動詞群についても、38種という多くの例が見られたので、用例数の多い順に、全て列挙してみよう。〔括弧内の数字は用例数〕

「たまらなく(注3)」(20)、「足りなく」(15)、

「分からなく」(11)、「目立たなく」(5)、

「変わらなく」「来なく」「通じなく」「届かなく」(3、以上4語)

「開(あ)かなく」「合わなく」「落ちつかなく」「済まなく」「付かなく」「出なく」「止まらなく」「治らなく」「入らなく」「満たなく」(2、以上10語)

「あか抜けなく」「集まらなく」「思いつかなく」「感じなく」「利(き)かなく」「聞こえなく」「気に入らなく」「冴えなく」「喋らなく」「透けなく」「揃わなく」「絶えなく」「務まらなく」「つながらなく」「伴わなく」「伸びなく」「間に合わなく」「結びつかなく」「保(も)たなく」「宿らなく」(1、以上20語)

4.3. その特色

前節の形式面での分析をまとめてみると、次のようなことが言えると思われる。

i）動詞／補助動詞「いる」の場合が先行している。

ii）可能表現に関わる形式（動詞「できる」、助動詞「れる・られる」、可能動詞、可能の補助動詞、可能のニュアンスを含む一般動詞(注4)）の場合に広く分布している。

iii）圧倒的に「自動詞」の場合が多い。

i）に関しては、「「なく中止」度」の数字の高さ(注5)から見て、明らかなことと思われる。この点に関しては、「～ず」の形式をとる場合に一般的である補助動詞「おる」との関わりが考えられ、動詞としてはもちろん、補助動詞においても「おる」は現在一般的にはほとんど使用されなくなりつつあり(注6)、

それに代わる形式として「いる」が使用されているところから、落ち着きの悪い「いず」の形より、新しい形式である「いなく」の方が少しずつ選択されつつあると言えるのではないだろうか。

ii）の点も、かなり顕著な特色であると言える。今回の新聞の用例での調査により、F項目の「可能動詞」やH項目の「可能の補助動詞」などの場合にも広く浸透していることが分かってきた。

iii）については、従来の分析に加えて、今回一見多様な用例（語例）が見られるIの項目が注目される。前節の最後にI項目に含まれる全ての動詞の例を挙げたが、それらの場合について確認してみると[注7]、全38語のうちの33語（約87%）はほぼ間違いなく自動詞と認定できそうである。また、それ以外の5語（「喋る」「通じる」「思いつく」「感じる」「伴う」）については、辞書によって判定が別れたり、「自他（＝両方）」とされたりしていて、（自動詞か他動詞の）どちらかに決定することは難しい例であるが、その中の前二者（「喋る」「通じる」）については、他の辞書など[注8]でもほとんどが自動詞としており、全体を通して眺めると、圧倒的に自動詞的な要素の強い動詞の場合に出現していることが分かる。

以上、i）～iii）のような面での特色から考えると、もちろん新聞（全国紙）というメディアの性格上、新しい用法については一般的に保守的な傾向のあることは否めないが、その数や割合はまだまだ少ないとしても、「状態的な意味を表わす表現」の場合に「なく中止形」の先端部分が一部侵入しつつあるという状況については、ほぼ間違いないことであるように思われる。

4.4. 分析II――経年的な変化

次に、今回の調査結果について、経年的な面から確認してみることにしよう。図2は、今回の資料に出現した472例の「なく中止形」を、出現年別に分類してグラフにしたものである。この資料では、1984年からの3年間は1例ずつであるが、80年代の後半からは徐々に増加の傾向を示し、近年はほぼ毎年20例を超える出現が見られる。

また、そうした出現例について凡そ5年ごとにまとめ、4.2節の形式面での分類を活用し、A～Iまでのそれぞれの形式の場合の、割合の推移をまとめた

のが図３である。一部の時期に、Ａなどの項目の出現例がない場合もあるが、ほぼ全期を通してさまざまな形式の出現が見られている。なおそれぞれの時期における出現の総数は、次の通りである。

1980 年代後半―― 32
1990 年代前半―― 56　　1990 年代後半――130
2000 年代前半――139　　2000 年代後半――115

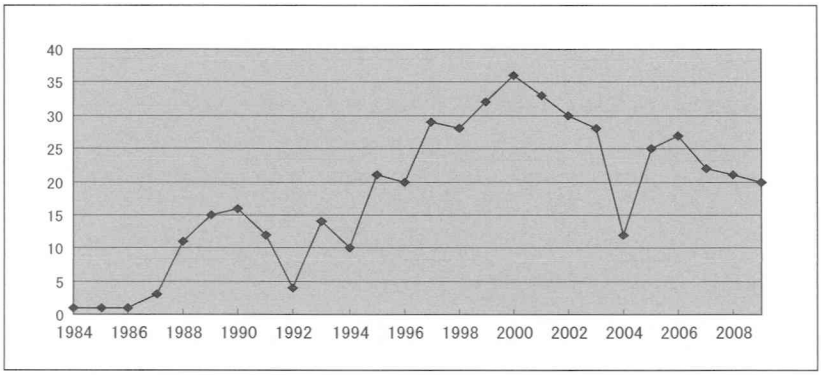

図２　年次ごとの「なく中止形」出現数

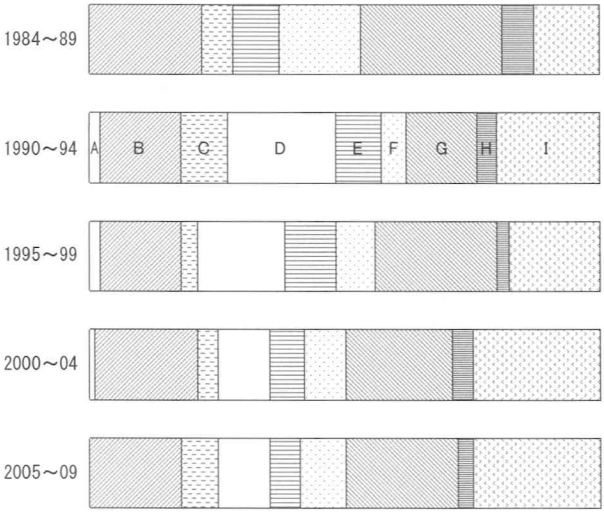

図３　形式別の割合（５年ごと）

4.5. その特色

前節での、経年的な面からの変化や動態を見てくると、その特色としては次のようなものが挙げられるように思われる。

① 1980年代後半から徐々に増加し、90年代後半以降はほぼ安定的に出現している。

② 2000年前後に、特に用例数が際立つが、その点についての理由は不明である。

③ 比較的満遍なく種々の形式の出現が見られるが、2000年以降は、特にB（動詞「いる」）・G（対応する肯定表現が一般的ではない）・I（その他の動詞）の用例が多い。

5. おわりに

今回は4節を中心として、一般の新聞（全国紙）における「なく中止形」の出現状況の動向を、コーパス検索の方法によって調べてきた。その結果として、形式的な面では、基本的には従来の調査結果を補強するような形となったが、一部には可能動詞の場合における進展の状況といった点で、やや新しい展開を加えることが出来た。また経年的な変化については、これも一応の流れや傾向をつかむことは出来たが、今後の展開に関しては未知数の部分も残されたと言える。

今後は、3節で行なったようなアンケート調査を、今後も継続的に（例えば、10年ごとに）行なってゆくのと並行して、同じ新聞データによる継続的な調査も続けて、複数の資料における結果を総合するような形で、「なく中止形」の今後の展開を詳細かつ多面的に追い続けてゆきたい。なお、そこで最大の関心事となるのは、いわゆる「変化のS字カーブ」における臨界点を示すことになるとも考えられる、一般的な動的動詞（例えば、アンケート調査における（g）の質問項目にある「（包丁で）切る」）の場合の動向で、もしもこうした場合においても「なく中止形」が許容されるような事態が起こるとすれば、それが長い目で見た将来の展望を映し出す鏡となることは間違いないように思われる。

注

1）こうした処理の結果として、設問ごとに、回答数の合計（＝計算時の分母）の数は異なっている。

2）なお、この調査を実施したのが2010年７月であるため、データベースそのものの一部変更などにより、現在では検索による数値が多少異なる結果となる。

3）「たまらない」の場合は、多様な意味・用法があるため、個々の用例の意味や文脈を確認した上で、今回の対象とする例としない例とに分けた。参考のために、それぞれの例を１つずつ挙げる。

対象とした例：愛情を注いだ分、別れがたまらなく、もうペットは飼わないという声も目立ちました。〔2008.11.8〕

対象としない例:それ以上に、児童の喜ぶ声と顔がたまらなく、うれしい。〔1998.2.4〕

4）Ｉ項目に含まれる「届く」「入(はい)る」など。中畠（2000）によると、これらの動詞については、かなりの程度日本語を習得した学習者の場合にも、一般には可能動詞にしない動詞を可能動詞の形（「＊（天井に）届ける」「＊（足が）入れる」「＊（想像が）つける」）で使う事例が頻繁に見受けられるという点で、共通の性格が見られるという。中畠はこれらの動詞に共通する性格について、「いずれもある結果に「なる」ことを表し、それが結果として既に可能の意味を帯びており、改めて可能動詞の形にはしない。」と説明している。

5）4.2節におけるＡ～Ｅの場合の数値の比較から。――動詞「いる」の1.12％・補助動詞「いる」の0.12％は、他の三者より際立って高い。

6）ただし、「～（て）おります」の形は、例外的に、頻繁に使用される。

7）まずは、次の３種類の辞書で、自動詞／他動詞の確認を行った。

・『広辞苑〈第四版〉』（岩波書店、1991）

・『新明解国語辞典〈第四版〉』（三省堂、1989）

・『明鏡国語辞典』（大修館書店、2003）

8）例えば、国立国語研究所（1971）他を参照。

【参考文献】

金澤裕之（1997）「助動詞「ない」の連用中止法について」『日本語科学』創刊号

―――（1999）「「なかった」新考」『国語学』第196集

―――（2000）「超上級学習者の隠れた文法判断能力」『日本語教育』104号

―――（2008）『留学生の日本語は、未来の日本語―日本語の変化のダイナミズム―』ひつじ書房

国立国語研究所（1971）「Ⅲ　自動詞か他動詞か決めにくい語の用例」『動詞・形容詞問

題語用例集』秀英出版
此島正年（1973）「第三章 第二節「ない」」『国語助動詞の研究』桜楓社
寺村秀夫（1991）「第８章 構文要素の結合と拡大　2.2.1 連用形による結合」『日本語のシンタクスと意味　第Ⅲ巻』くろしお出版
中畠孝幸（2000）「文法研究と日本語教育－動詞の意志性を中心に－」『表現研究』第72号

“道理に合わない”授受表現の使用と動態
―愛知県岡崎市での経年調査および最近の全国調査から―

尾崎　喜光

キーワード：授受表現　従属節内の受恵表現　授恵表現の回避　岡崎調査

１．“道理に合わない”授受表現

日本語の授受表現、中でも話し手が恩恵を受けようとする場面で使われる「～ていただく」「～てもらう」のような話し手を主体とする受恵表現や「～てくださる」「～てくれる」のような相手を主体とする授恵表現は、相手は恩恵の与え手であり自分はその受け手だということを言語的に明示する点で、相手への配慮を示す敬語に準ずる機能を持って使われていると言える。たとえば、「教えていただきたいのですが」とか「教えてもらいたいのですが」、あるいは「教えてくださいますか」とか「教えてくれませんか」という表現は、尊敬語「なさる」を含む「教えなさい」と比べるとはるかに相手を立てているように感じられる。

しかし最近では、話し手が相手から恩恵を受けようとする場面だけでなく、恩恵の関係が全く伴わない場面でもこうした表現が使われるようになってきている。たとえば、道を聞かれて教えるときの「郵便局なら、そこを右に曲がってください」という表現である。相手が右に曲がることが話し手の利益につながるような状況であれば自然な表現と言えようが、話し手の利益に関係なく単に道を教える状況でも使われている。これに代わる「そこを右に曲がりなさい」はむしろ限定された関係でしか使えないことを考えると、こうした拡大用法は今ではかなり一般化していると言える。

このような現象は、文の主節だけでなく、複文の従属節内にも現在浸透しつつある。たとえば「郵便局なら、そこを右に曲がっていただいたら、すぐ近くにあります」のような表現は最近よく聞く。特に恩恵を受けようとしているわけではないのに、従属節内で受恵表現を使っているのである。「曲がったら」

で十分なのになぜ「曲がっていただいたら」と言うのかと、理屈っぽい人は思うだろう。

さらに、話し手はむしろ恩恵の与え手であるような状況でさえも、受恵表現を使って表現することが一般化しつつあるようだ。たとえば「この傘、持って行ってください」のような表現である。状況だけから考えると「持って行きなさい」が適切だと考えられるが、現実には非常に使いにくい。その一方で、話し手を主体にした「この傘、貸してあげます」は、事実関係だけから考えると何の問題もない表現であるにもかかわらず、恩着せがましいニュアンスが生じることから、現在では授恵表現を回避した「この傘、貸します」や「この傘、どうぞ」のような表現が好まれる傾向にある。

このように、従属節内において受恵表現「～ていただく」等が特に必要でない状況や、事実関係から考えると主節での授恵表現「～てください」等はむしろ不合理な状況であっても、現実には使われることが少なくない。その一方で、事実関係から考えると、話し手を主体とした授恵表現「～てあげる」等を使うのが合理的な状況であっても、それを使わずに回避することも少なくない。

本稿では、こうしたいわば“道理に合わない”授受表現の使用（および不使用）について、国立国語研究所が愛知県岡崎市で継続的に実施した多人数調査から、そして一部については最近実施した全国多人数調査から現状と動態を見てゆき、拡大しつつある背景を探る。なお、本稿では調査結果の分析に紙幅を割くため、先行研究への言及は最小限にとどめることとする。

2．授恵場面（情報提供場面）における従属節内での「～ていただく」等の使用

相手から情報提供を求められそれに応じて教えるという授恵場面において、従属節内に相手がすべき動作を表わす動詞を含んでいる場合、話し手が恩恵を受けるわけではないにもかかわらず、その動詞に受恵表現「～ていただく」等を付けて表現することがある。たとえば、道を聞かれて教える場面での「そこを右に曲がっていただいたら、すぐですよ。」のような表現である。このような受恵表現について、現在の使用状況と過去からの変化（動態）を２つの調査から見てみよう。

2.1. 国立国語研究所の「岡崎調査」から

(1) 全体的傾向

国立国語研究所では、国民の敬語使用と敬語意識についての現状と変化を把握することを目的に、サンプルとして選んだ愛知県岡崎市において、無作為に選ばれた15～79歳の市民数百人を対象に3回の継続調査を行っている。(注1)

さまざまな質問項目がある中で最初の12問は、ある会話場面を回答者に想定させ、そこで回答者がふだんどのように言いそうかを、想定相手に対する発話形式により回答を求めている。12場面の相手にかける負担度の違いと発話の丁寧さの違いを見ることが本来の主要な調査目的であるが、設問ごとに別の観点から分析することも可能である。そこで本稿では、「道教え」場面（知らない人から道を聞かれて教える場面）と呼ばれる設問への回答を分析することにより、受恵表現の使用状況を見ることにする。(注2)

調査時期と回答者数は次のとおりである。

・第1次調査：1953年（昭和28年）……回答者429人
・第2次調査：1972年（昭和47年）……回答者400人
・第3次調査：2008年（平成20年）……回答者306人

「道教え」場面の質問文は次のとおりである。

わたし（＝調査員）のような旅行で来たものが、東岡崎駅の北口で、明代橋（みょうだいばし）はどちらかということをあなたにたずねました。何と言って教えますか。

明代橋は東岡崎駅（名鉄名古屋本線）北口のすぐ近くにあり、特に第1次調査の時点ではほとんどの市民が知っていたと思われるポピュラーな橋である。

この設問の回答を分析するにあたり、次の回答は分析対象から除外した。

①NR（無回答）
②「明代橋を知らない」旨の発話回答（調査員ではなく想定相手に対する回答）
　「チョットワカラナインデスケドモ」
　「申シ訳ナイデスケド、最寄ノ交番デオ聞キクダサイ」など

③不適切な発話回答

「ココ マッスグオ行キンナルト橋ガアルデ、ソレガ殿橋デス」

「アソコニ城ガ建ッテルデショー。アソコガ岡崎公園デス」など

④相手の動作動詞を含む従属節のない発話回答

「スグソコデス」

「百メートル先ニ橋ガアリマスカラ、ソコオ曲ガッテクダサイ」など

上記に該当する回答数、それらを差し引いた分析対象とする有効回答数、従属節内での授受表現の数とその内訳を調査ごとに示すと表1のとおりである。

表1　岡崎調査「道教え」場面の分析対象データの処理と分析

	第1次(1953年) 429人	第2次(1972年) 400人	第3次(2008年) 306人
NR（無回答）	8	8	42
「明代橋を知らない」旨の発話回答	3	6	46
不適切な発話回答	25	14	5
相手の動作動詞を含む従属節のない発話回答	99	89	46
分析対象とする有効データ(上記以外)	294（68.5%）	283（70.8%）	167（54.6%）
従属節に授受表現のある回答	6（2.0%）	31（11.0%）	56（33.5%）※
内訳 もらう	1	10	21
内訳 いただく	5	20	36
内訳 くれる	0	0	0
内訳 くださる	0	1	1

※内訳の合計が58になるのは、1発話中に複数種の表現がある回答があるためである。

表中の「従属節に授受表現のある回答」の括弧内の数値（パーセント）は、有効データを母数とする比率である。グラフ化して示すと図1のとおりである。

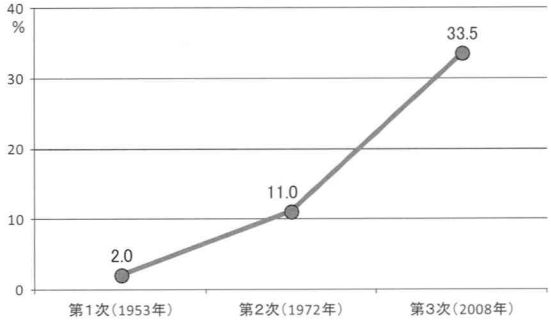

図1　従属節内での授受表現の使用者率の推移（岡崎調査）

第1次調査（1953年）の時点では、従属節内で相手の動作に授受表現を用いる人はほとんどいない。これが第2次調査（1972年）の時点になると数値が増加し、10人のうち1人はこうした表現を使うようになる。さらに第3次調査（2008年）の時点になると数値は一層増加し、3人に1人は使っている。このように、従属節内での授受表現の使用者率は現在に近づくほど増加傾向にあることがわかる。なお、第2次から第3次にかけては増加が加速しているように見えるが、これはその間が36年あるためである。年率にすると、第1次から第2次が0.5%の増加、第2次から第3次が0.6%の増加であり、ほぼ一定である。

授受表現の内訳を見ると、恩恵の授け手である相手の視点から表現する「くれる」「くださる」を用いる人はどの時点の調査でもごくわずかしかおらず、ほとんどの人は恩恵の受け手である話し手の視点から表現する「もらう」「いただく」を用いている。「もらう」と「いただく」の関係については、敬語（謙譲語Ⅰ）を含む「いただく」を用いる人の方が、それを含まない「もらう」を用いる人よりも、どの時点の調査でも多い傾向が見られる。一方、話し手ではなく第三者への恩恵の授け手として相手の視点から表現する「やる」「さしあげる」（「そこを右に曲がってやったら、すぐですよ。」など）を用いる人は全くいない。「曲がってやる」ような人物は想定されえないからであろう。

以上をまとめると、従属節内で授受表現が用いられる場合は、第三者ではなく話し手への恩恵として用いられ、その際相手の視点からではなく話し手の視点からの受恵表現（とりわけ敬語を含み相手を立てる「いただく」）にほぼ限定して用いられていると言える。

視点ということについて言えば、当該の表現が従属節ではなく主節に来る場合は、典型的には「そこを右に曲がってください。そうすればすぐです。」のように授恵表現の方がむしろ普通であろう。また、「そこを右に曲がってもらえますか。そうすればすぐですよ。」のような受恵表現も十分ありうる。これに対し従属節では、「そこを右に曲がってくださったら、すぐですよ。」のような授恵表現はほとんど用いられず、「そこを右に曲がってもらったら、すぐですよ。」のような受恵表現にほぼ限定されることが調査結果から確認される。

「右に曲がってくださったら」という表現を内省すると、たとえば自分に恩

恵をもたらそうとしている人物に対し自宅への来方を電話で教えるような場面での使用が想定され、実質的な恩恵が感じられる。「右に曲がってもらったら」のような受恵表現は、実質的な恩恵の授受関係を離れ、いわば形式的な用法での使用が可能であっても、「右に曲がってくださったら」のような授恵表現は、現在のところ多くの人にとって実質的な意味でしか使いにくく、形式的な用法はほとんどないということであろう。しかしながら今後は、これらにも形式的な用法が加わることも考えられる。わずかではあるがこの調査で観察された「くださる」の回答は、そのさきがけであるのかもしれない。岡崎市のみならず日本各地において今後の動向が注目される。

(2) 年齢層別・男女別傾向

3回の調査について、授受表現の使用者率を年齢層別（3層）に分析したものが図2、男女別に分析したものが図3である。

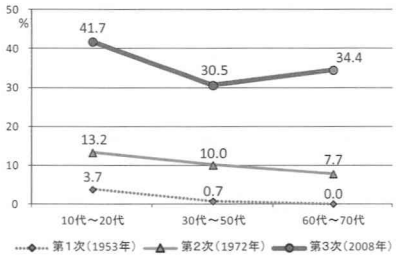

図2　従属節内での授受表現の使用者率の推移［年齢層別］（岡崎調査）

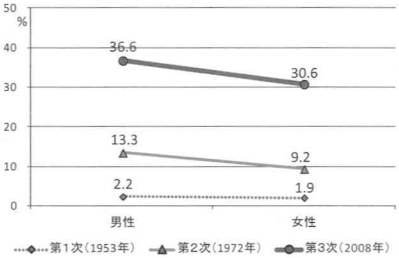

図3　従属節内での授受表現の使用者率の推移［男女別］（岡崎調査）

年齢層別に見ると、一部例外はあるものの、いずれの調査でも数値は若年層ほど高くなる傾向が見られる。おそらくこれは、言語変化（授受表現の使用の増加）が年齢差として現われているものと考えられる。

男女別に見ると、いずれの調査においても、女性よりも男性で数値が高くなる傾向が見られる。こうした授受表現の使用は、女性よりも男性で使われやすいようである。

こうした年齢差・男女差を伴いながら近年使用者率が増加しつつあるのが当該の表現である。

(3) 使用意識

では、従属節内に見られるこうした“道理に合わない”授受表現はどのような意識で用いられているのであろうか。

上に見た岡崎調査では、一つ一つの回答について回答者の意識までは尋ねていないことから、第3次調査が行われた翌年の2009年11月・12月に、問題意識を共有する研究者数名により（筆者もその一人）、任意の岡崎市民14名（若年層・高年層の男女）を対象に、前年の調査で質問した設問のいくつかについて、半構造化インタビューにより使用意識を尋ねた。その質問項目の一つに、この授受表現について問うものがある。それを分析した結果を以下に示す。

調査では、前年と同じ質問をまず行って発話回答を求めた後、発話例のポイントが書かれたカードを回答者に提示しながら、「てもらう」や「ていただく」を含む言い方を自分で言うことがあるかないかおよびその理由、それがない言い方と比べそれがある言い方はどんな感じがするか等について自由に聞かせてもらった。以下の例1）～例3）が、提示したカードに書かれた表現である。

例1）「左に行ったら」
　　→「左に行ってもらったら」「左に行っていただいたら」
例2）「まっすぐ行って」
　　→「まっすぐ行ってもらって」「まっすぐ行っていただいて」
例3）「そこを曲がって」
　　→「そこを曲がってもらって」「そこを曲がっていただいて」

若年層・高年層各3名からの回答を、内容を少し整理する形で示すと次のとおりである。重要だと思われる箇所には下線を引いた。

①言うことがある。「もらって」をつけないとぶっきらぼうな感じがするので、やさしく教えるためにつける。［大学1年生・女性］

②言わない。仕事の口調っぽい。アルバイトなどをしていて場所を聞かれたら、たぶんこういう答え方をすると思う。スーパーで品出しのアルバイトをしているが、スーパーではそのまま自分が案内するので、こういうことは言わない。教えているのはこちらだが、「お手数をかけてすみません」

という感じがする。道を教えるときは自分が上の立場であるので言わない。[大学２年生・男性]

③言うことがある。相手による。見た目で言葉を選ぶ。相手が20代なら「あ、あっち行けば？」だが、年上や老人には「あっち行っていただいて」と自分を下げる感じで説明する。[大学２年生・男性]

④言うことがある。突然会った知らない人や目上の人にタメ語を言ってはいけないという気持ちが多少あるので、そのような言葉が出ると思う。親しい相手なら「～行こうよ」「～行って」のように言う。[60代・女性]

⑤言うことがある。「ていただいたら」の方が丁寧だ。「行ってもらったら」も「行ったら」より丁寧だ。[60代・女性]

⑥言わない。「てもらったら」は使わないが、「ていただいたら」は目上の人に使うときがあるかもしれない。こうした言い方は丁寧な感じがする。[70代・男性]

以上の発言をまとめると、このような場面で使われる従属節内での授受表現は、相手に対する丁寧な言い方という意識で用いられているようである。②の「仕事の口調っぽい」も、スーパーの店員から客に対しては基本的に丁寧な物言いをすることに依拠した感覚であり、言葉遣いの丁寧さということが根本にあるのだろう。本来は恩恵を受けていることを表わす授受表現だが、そのような関係がない場合でも、相手への丁寧さを表わす手段として、従属節内において機能を拡大して用いられているようである。

2.2. 全国多人数調査から

従属節内で授受表現を使用する人の割合が近年増加しつつあるという岡崎市での傾向は、おそらく全国的なものでもあろう。

現在と比較しうる全国を対象とした過去の量的調査はないが、現時点での状況および年齢差から推測される最近の変化傾向について、本書の基盤となった国立国語研究所の研究プロジェクトが最近実施した全国調査から見てみよう。

調査概要は次のとおりである。

(1) 調査対象：全国の16歳以上の男女1,319人（標本数＝4,000人、回収率＝33.0%）

(2) 抽出方法：層化副次（三段）無作為抽出法
(3) 実査：(社) 中央調査社
(4) 調査期間：2011年（平成23年）2月
(5) 調査方法：個別面接聴取法（オムニバス調査）

質問文および回答者にカードの形で提示した選択肢は次のとおりである。下線は原文にもある。作成者は筆者である。

家の近所を歩いていたところ、知らない人から、この辺にコンビニがないかと聞かれたとします。近くの交差点を右に曲がったらすぐの所にあるので、その人に教えるとします。そのときの言い方ですが、いろいろな相手を想定した場合、自分で言うことがあるものを、この中からすべて選んでください。

1．そこを右に曲がったら、すぐ近くにあります。
2．そこを右に曲がってもらったら、すぐ近くにあります。
3．そこを右に曲がっていただいたら、すぐ近くにあります。
4．そこを右に曲がってくれたら、すぐ近くにあります。
5．そこを右に曲がってくださったら、すぐ近くにあります。

1～5は選択肢のように見えるが、回答者には「自分で言うことがあるものをすべて選んでください」と指示することにより、1～5ひとつひとつについて自身の使用／不使用をチェックして回答を求めているので、厳密に言えばこれらは下位質問であり、選択肢は「言う」「言わない」である。

岡崎調査の分析結果によると、「曲がってくれたら」や「曲がってくださったら」の使用者は極めて少ないことが予想されたが、全国調査でもそのことを確認するためにあえてこれらも含めた。なお、従属節の末尾は「たら」の他に「れば」や「と」などもありうるが、今回の調査ではその選択には注目せず、「たら」で統一することとした。この「たら」ができるだけ自然な表現に感じられるよう、質問文の表現も意図的に「曲がったら」とした。

分析結果をまとめると図4のとおりである。図中の「n=」の数字は回答者数を示す。人数の少ない10代（後半）を男女別に集計した場合や、地域別集

計で人口の少ない地域については、該当する回答者数が少なくなり、数値の確からしさが低下するので注意する必要がある。

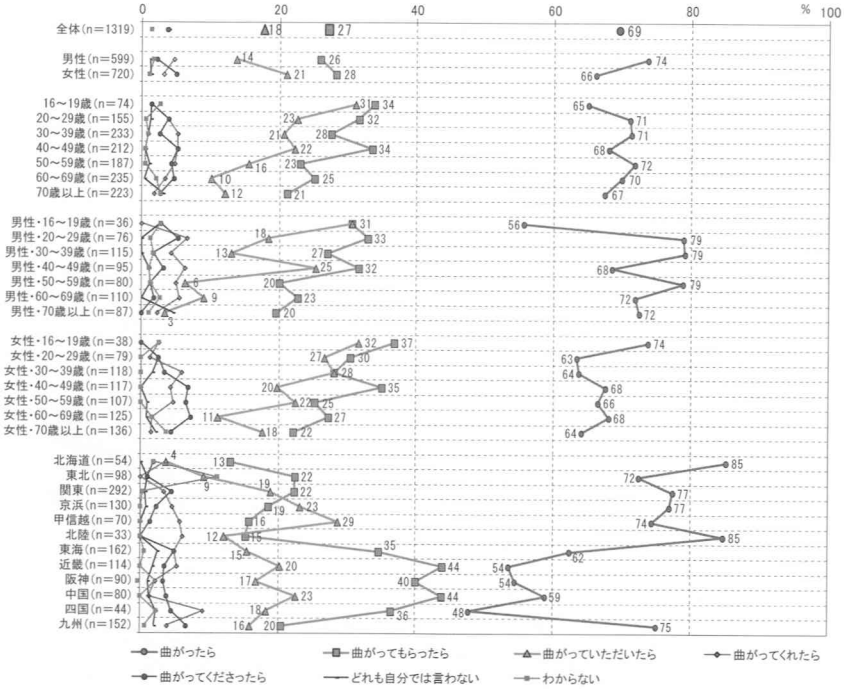

図４　従属節内での授受表現の使用者率の推移（全国調査）

「全体」を見ると、授受表現を用いない表現（「曲がったら」）の数値が最も高いことがわかる（69%）。理屈に合ったこの表現は、現在においても用いる人の割合が最も多く、これが最も一般的な表現となっている。この点は、回答者を性別、年齢層別、性別×年齢層別、地域別に分析した場合にも一貫して見られる特徴である。

しかしその一方で、授受表現を含む表現を使う人も一定の割合いる。その場合、話し手の視点からの表現である「(曲がって) もらう」(27%) や「(曲がって) いただく」(18%) が主流であり、相手の視点からの表現である「(曲がって) くれる」「(曲がって) くださる」を用いる人は非常に少ない。つまり、授受表

現を用いる場合は、話し手の視点からの「もらう」や「いただく」を用いるのが一般的であると言える。この点は、先に見た岡崎調査の結果と一致する。なお、「もらう」と「いただく」の数値的関係については、岡崎調査の結果と異なり、「いただく」よりも「もらう」の方が高い。岡崎市が属する「東海」地方を見てもこの傾向は変わらない。質問方法や回答方法、設定場面が異なることに起因する違いではないかと考えられる。そうした違いがあるにもかかわらず、「もらう」「いただく」と「くれる」「くださる」の間に数値的に大きな開きがある点については両調査で一致していることは重要な意味を持っていると言えよう。

男女差が見られる。授受表現を用いない表現の「曲がったら」は女性よりも男性に多い。逆に、授受表現のうち話し手の視点による「もらう」「いただく」を含む表現は男性よりも女性に多い。これは岡崎調査の結果と逆の傾向である。調査方法等の違いに起因するものであろうか。

年齢差が見られる。授受表現を用いない「曲がったら」については明確な年齢差はないが、「もらう」「いただく」を含む表現はいずれも若年層ほど数値が高くなる傾向が明確に認められる。授受表現の使用者率の増加という言語変化が年齢差に反映している可能性が高いと考えられる。

地域差が見られる。いずれの地域でも授受表現を用いない「曲がったら」が最も優勢だが、近畿およびその周辺（東海・近畿・阪神・中国・四国）は、それ以外の地域と比べ数値が著しく低い。逆に、これらの地域では、「もらう」の数値がそれ以外の地域と比べ著しく高い。「もらう」を付加する表現は、これらの地域から使用が始まり（数値的に見ると特に近畿・阪神・四国か）、近年全国へと普及しつつある可能性が考えられる。一方、「いただく」には明確な地域差は認めにくいが、北海道で数値が著しく低い点は注目される（4%）。この北海道では「もらう」の数値も他の地域より低い（13%）。逆に、授受表現を用いない「曲がったら」の数値は他の地域よりもかなり高い（85%）。北海道では、こうした場面では従属節内に授受表現を用いず、ストレートに表現する傾向が強い。

以上に見た２つの調査の分析結果から考えると、恩恵の与え手であるため道理に合わない従属節内での授受表現は、相手に対する丁寧さを表わす表現として、近畿およびその周辺部を中心に近年一般化しつつあるものと考えられる。

3．授恵場面（援助申し出場面）における主節での「～なさい」「～てください」「～てあげる」等の使用

前節では、話し手が恩恵の与え手であるため本来は道理に合わない従属節内での受恵表現の使用が近年増加傾向にあることを述べた。これとよく似た現象として、やはり話し手は恩恵の与え手という状況であるが、主節において授恵表現「くださる」の命令形「ください」を用いることの定着と、本来は道理に合う「なさる」の命令形「なさい」を用いることの衰退が指摘できる。

たとえば、急に雨が降ってきたため濡れながら道を歩いている知人に自分の傘を提供しようとする場合、相手が親友や家族等の非常に親しい間柄であれば「この傘、持って行け」と言えよう。これに対しもう少し距離を置く相手であれば、「持って行け」とは言いにくいため、敬語（尊敬語）の形にすることが多いだろう。「持って行け」に対応する尊敬語の形は、共通語では、「持って行く」に尊敬語「なさる」の命令形「なさい」を付けた「持って行きなさい」である。

実際、岡田則夫氏により提供・編集・監修された『SP 盤貴重音源岡田コレクション』を聞くと、昭和４年の女児の綴方朗読に、赤ちゃんを抱いて電車に乗り込んできたおじいさんに席を譲ろうとした場面で、次の表現が用いられている。(注3)

> 私は気の毒に思って、ここへお掛けなさいと言おうとしたが、どうしてもことばが出なかった。

現在の感覚からすると、年上に対するこのような場面では「お掛けください」であろう。命令形で尊敬語「なさる」を使ってはいるものの、授受表現を使っていないため、現在の感覚からすると“上から目線”的に感じられる。しかし、かつての日本語では、これで十分敬意が表わされていたのであろう。

同様に、先ほどの傘を貸す場面でも、少し距離を置く相手に対しては、現在では「持って行きなさい」はほとんど使えず、「持って行ってください」が定着している。話し手は恩恵の与え手であるにもかかわらず、道理に合わない「ください」を用いるわけである。

このような場面での「なさい」と授恵表現「ください」の関係について、国

立国語研究所の岡崎調査から、過去から現在への変化（動態）を見てみよう。

本稿では、「傘貸し」場面（にわか雨で濡れながら歩いている少し知っている人に自分の家の傘を貸す場面）と呼ばれる設問への回答を分析することにより、「この傘、持って行きなさい」のような「なさい」の使用状況の変化と、これと対立する「この傘、持って行ってください」のような授恵表現「ください」の使用状況の変化を見ることにする。

「傘貸し」場面の質問文は次のとおりである。３回の調査で文言が若干異なるため、第３次調査の文言で示す。

> にわか雨が降ってきました。家の前を、少し知っているこういう人が濡れて歩いています。気の毒なので、この人にあなたの家の傘を貸すとしたら、あなたは何と言いますか。

回答者には、30～40代の会社員風の男性が濡れながら道を歩いているイラストを提示し、設定された状況の理解を助けるとともにイメージの均一化をはかった。質問文の「こういう人」とは、そのイラストの人物である。なお、社会状況の変化に伴い、イラストには微修正が加えられている。

３.１．授恵場面（援助申し出場面）における「なさい」系の使用

この設問の回答を分析するにあたり、次の回答は分析対象から除外した。

①NR（無回答）

②回答者自身を動作の主体とした表現（「なさい」系や「ください」系の表現がそもそも現われえないため）

「コレヨケレバ オ貸シシマスヨ」

「傘オ 貸シテアゲマショーカ」など

③「傘」を対象にした動詞句がない回答（②と同じ理由による）

「傘 イカガデスカ」

「ヨカッタラ ドーゾ」など

これらに該当する回答数およびそれらを差し引いた分析対象とする回答数を調査ごとに示すと表２のとおりである。

分析対象から除外したデータは、第１次調査から順に51件（11.9%）、77件（19.3%）、57件（18.6%）あった。それらを除いたデータが分析対象となる。

表中の最初の「全体」の数値（パーセント）は、有効データを母数とする比率である。これをグラフ化して示すと図５のとおりである。

表２　岡崎調査「傘貸し」場面の「～なさい」系と「～てください」系の出現状況

「～なさい」系を含む回答		第１次(1953年) 429人	第２次(1972年) 400人	第３次(2008年) 306人
ＮＲ（無回答）		1	3	1
回答者自身を動作の主体とした表現（「貸す」等）		22	48	27
「傘」を対象にした動詞句がない回答		28	26	29
(除外回答の合計)		51（11.9%）	77（19.3%）	57（18.6%）
分析対象となる回答		378	323	249
全　体		20.6% (78/378)	13.0% (42/323)	2.8% (7/249)
性　別	男　性	26.5% (49/185)	18.5% (24/130)	2.3% (3/128)
	女　性	15.0% (29/193)	9.3% (18/193)	3.3% (4/121)
年齢層別	10代～20代	12.8% (21/164)	10.1% (11/109)	0.0% (0/40)
	30代～50代	23.9% (45/188)	11.0% (18/163)	2.3% (3/133)
	60代～70代	46.2% (12/26)	25.5% (13/51)	5.3% (4/76)
「～てください」系を含む回答		第１次(1953年) 429人	第２次(1972年) 400人	第３次(2008年) 306人
分析対象となる回答		378	323	249
全　体		60.3% (228/378)	57.9% (187/323)	70.3% (175/249)
性　別	男　性	52.4% (97/185)	49.2% (64/130)	68.0% (87/128)
	女　性	67.9% (131/193)	63.7% (123/193)	72.7% (88/121)
年齢層別	10代～20代	70.7% (116/164)	65.1% (71/109)	72.5% (29/40)
	30代～50代	54.8% (103/188)	54.0% (88/163)	67.7% (90/133)
	60代～70代	34.6% (9/26)	54.9% (28/51)	73.7% (56/76)

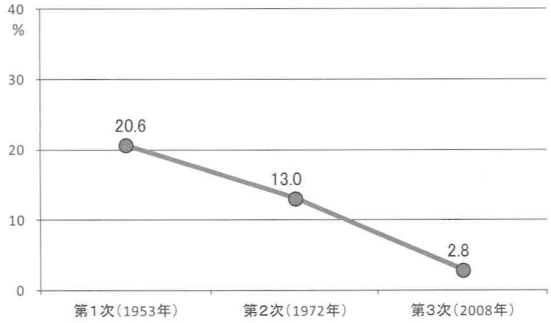

図５「なさい」系の使用者率の推移（岡崎調査）

「この傘、持って行きなさい」のような「なさい」系を含む回答は、第１次調査（1953 年）の時点ですでに約２割と少ない。これが第２次調査（1972 年）の時点になると１割ほどにまで減少する。さらに第３次調査（2008 年）の時点になると数値は一層減少し、「なさい」系を含む表現を使う人はほとんどいなくなる。「なさい」系の使用者率は現在に近づくほど減少傾向にあることが確認される。

３回の調査について、「なさい」系の使用者率を年齢層別に分析したものが図６、男女別に分析したものが図７である。

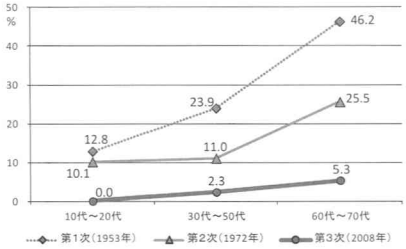

図６「なさい」系の使用者率の推移［年齢層別］（岡崎調査）

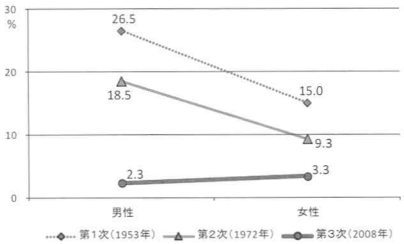

図７「なさい」系の使用者率の推移［男女別］（岡崎調査）

年齢層別に見ると、いずれの調査でも数値は若年層になるほど低下する傾向が見られる。これは言語変化（「なさい」系の使用の減少）が年齢差として現われているものと考えられる。

男女別に見ると、全体としての数値が非常に低い第３次調査を除き、女性よりも男性で数値が高くなる傾向が見られる。「なさい」系は女性よりも男性で使われやすいようである。

こうした年齢差・男女差を伴いながら近年使用者率が減少してきたのが「なさい」系の表現である。

3.2. 授恵場面（援助申し出場面）における「ください」系の使用

その「なさい」系の衰退を補う形で近年増加傾向にあるのが「ください」系の表現である。表２の「ください」系の「全体」の使用者率をグラフ化して示すと図８のとおりである。

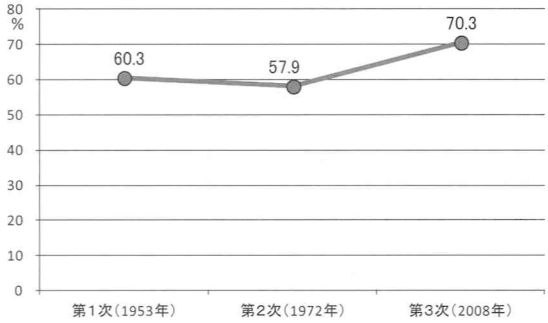

図８ 「ください」系の使用者率の推移（岡崎調査）

「この傘、持って行ってください」「お持ちください」「持って行ってくれ」「さして行ってちょうだい」や、「ください」等の補助動詞が省略されたと考えられる「持って行って」のような「ください」系を含む回答は、第１次調査（1953年）の時点ですでに約６割と多い。この水準は第２次調査（1972年）でも維持され、第３次調査（2008年）になるとさらに約７割にまで上昇する。すでに半世紀以上前から少なからざる人が使っていたが、現在に向けてさらに増加傾向にあることが確認される。

３回の調査について、「ください」系の使用者率を年齢層別に分析したのが図９、男女別に分析したのが図10である。

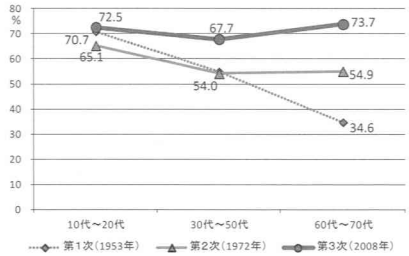

図９　「ください」系の使用者率の推移
［年齢層別］（岡崎調査）

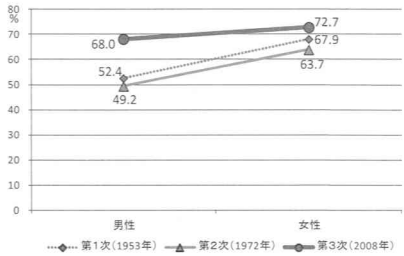

図10　「ください」系の使用者率の推移
［男女別］（岡崎調査）

年齢層別に見ると、第１次調査では若年層ほど数値が高くなる傾向が見られる。これは、言語変化（「ください」系の使用の増加）が年齢差として現われているものと考えられる。ただし第２次調査・第３次調査ではそうした増加が明確には認められない。７割前後で数値が飽和状態に達しているかのように見える。

男女別に見ると、先に見た「なさい」系とは逆に、男性よりも女性で数値が高くなる傾向が見られる。「ください」系は男性よりも女性で使われやすいようである。

こうした年齢差・男女差を伴いながら近年使用者率がさらに増加しつつあるのが当該の表現である。

３.３. 授恵場面（援助申し出場面）における「あげる」系の使用

以上に見た「なさい」系と「ください」系の表現は、「（傘を）持って行く」「（傘を）持つ」のような相手の動作を表わす動詞に接続する表現であるが、同じことを「（傘を）貸す」のような話し手の動作で表現することもできる。その場合、事実関係から考えれば、「貸してあげる」「貸してさしあげる」「貸してやる」のような授恵表現を接続して表現することは問題ないはずだが、恩恵の与え手として自分を上位に位置づけることになり、たとえ「さしあげる」のような敬意の高い謙譲語を使ったとしてもそれは解消されないことから、現在ではこうした表現の使用が回避される傾向にある。(注４)

そこで、さらにこの観点から「傘貸し」場面を分析した。

この設問の回答を分析するにあたり、次の回答は分析対象から除外した。

①NR（無回答）

②相手を動作の主体とした表現（「あげる」系がそもそも現われえないため）

「傘 オ持チナサイ」

「キミ、傘オ持ッテキタマエ」など

③「傘」を対象にした動詞句がない回答（②と同じ理由による）

「傘 イカガデスカ」

「ヨカッタラ ドーゾ」など

これらに該当する回答数およびそれらを差し引いた分析対象とする回答数を調査ごとに示すと表３のとおりである。

表３　岡崎調査「傘貸し」場面の「～てあげる」系の出現状況

「～てあげる」系を含む回答		第１次(1953年) 429人	第２次(1972年) 400人	第３次(2008年) 306人
ＮＲ（無回答）		1	3	1
相手を動作の主体とした表現（「持つ」等）		367	308	242
「傘」を対象にした動詞句がない回答		28	26	29
(除外回答の合計)		396（92.3%）	337（84.3%）	272（88.9%）
分析対象となる回答		33	63	34
全　体		75.8% (25/33)	69.8% (44/63)	29.4% (10/34)
性　別	男　性	83.3% (15/18)	76.7% (23/30)	33.3% (7/21)
	女　性	66.7% (10/15)	63.6% (21/33)	23.1% (3/13)
年齢層別	10代～20代	80.8% (21/26)	63.9% (23/36)	12.5% (1/8)
	30代～50代	66.7% (4/6)	73.9% (17/23)	18.8% (3/16)
	60代～70代	0.0% (0/1)	100.0% (4/4)	60.0% (6/10)

表中の「全体」の数値（パーセント）は、有効データを母数とする比率である。分析対象となる有効データが少なくなるため数値的な信頼性はやや低くなる。グラフ化して示すと図11のとおりである。

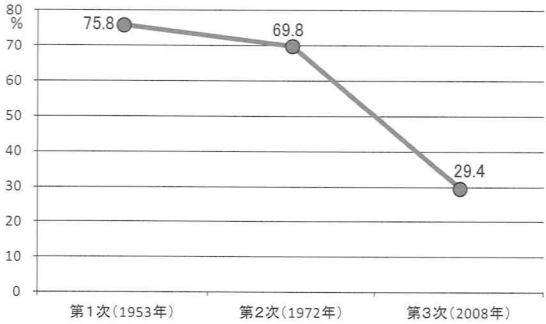

図11　「あげる」系の使用者率の推移（岡崎調査）

「この傘、貸してあげます」のような「あげる」系を含む回答は、第２次調査（1972年）の頃までは約７割と比較的高いが、第３次調査（2008年）になると約３割にまで激減する。「あげる」系を含むこうした表現が回避されるようになったのは比較的最近のことのようである。

これを年齢層別に分析したのが図12、男女別に分析したのが図13である。

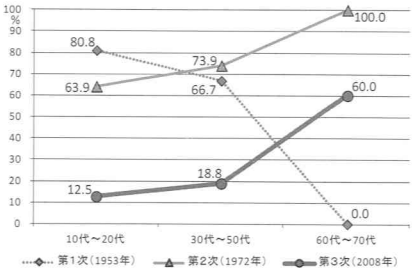

図12　「あげる」系の使用者率の推移
［年齢層別］（岡崎調査）

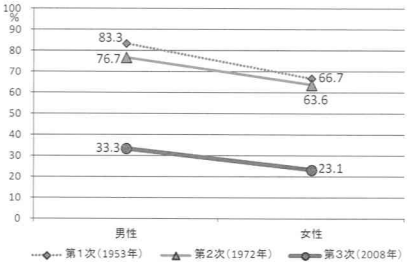

図13　「あげる」系の使用者率の推移
［男女別］（岡崎調査）

該当者が一定数いる第２次調査により年齢層別に見ると、若年層になるほど数値が低下する傾向が見られる。これは、言語変化（「あげる」系の使用の減少）が年齢差として現われているものと考えられる。

男女別に見ると、いずれの調査でも女性よりも男性で数値が高くなる傾向が見られる。「あげる」系は女性よりも男性で使われやすいようである。

4．まとめ

以上、最後の「あげる」系の回避という現象を除けば、授受表現に関する研究においてこれまで注目されることが少なかった“道理に合わない”用法について、現在の使用状況および近過去からの使用状況の変化を見てきた。得られた知見を最後に整理して示すと次のようになる。

(1) 知らない人から道を聞かれて教えるという授恵場面においての「そこを右に曲がっていただいたら」のような従属節内での受恵表現の使用者率は、岡崎市での経年調査のデータを分析したところ、今から60年ほど前は非常に少なかった。しかしその後増加傾向を示し、現在では3人に1人が使うようになっている。市民の意識を調査したところ、相手への丁寧さを示す手段として使われているらしいことがわかった。また、最近実施した関連する全国多人数調査のデータを分析したところ、「～てもらう（～てもらったら）」の使用者率は27%、「～ていただく（～ていただいたら）」の使用者率は18%であり、全国的に見ても受恵表現を使用する人は現在一定の割合いることが確認された。使用者率は若年層に向けて増加傾向にあること、「～てもらう（～てもらったら）」は九州を除く西日本で使用者率が高いこと、逆に北海道では受恵表現の使用者率が低いこと等も確認された。なお、同じ事態を「～てくださる（～てくださったら）」「～てくれる（～てくれたら）」のような授恵表現を用いて表現することも論理的に可能だが、実際に使用する人は両調査とも非常に少ないことも確認された。

(2) 雨に濡れながら道を歩いている知人に傘を貸すという援助申し出場面において、「この傘、持って行きなさい」のような主節での単純尊敬命令形の「なさい」系の使用者率について岡崎調査のデータを分析したところ、今から60年ほど前も約2割と少数派であった。その後使用者率はさらに減少し、現在ではほとんど使う人がいないことが確認された。どの時点の調査でも若年層ほど数値が低くなる傾向が見られた。また、女性よりも男性で数値が高くなる傾向が見られた。

(3) 同じ場面で、「この傘、持って行ってください」のような相手を主体とした授恵表現「ください」系の使用者率について岡崎調査のデータを分析したところ、今から60年ほど前から使用者率はすでに約6割と多く、さ

らに現在では約7割にまで上昇している。60年ほど前には若年層ほど数値が高くなる傾向が見られたが、その後はどの年齢層も7割前後であり、数値的に飽和状態に達しているように見られる。男女別に見ると、「なさい」系とは逆に、「ください」系の数値は男性よりも女性で高くなる傾向が見られた。

(4) やはり同じ場面で、「持って行く」や「持つ」のような相手の動作ではなく、「貸す」のような話し手の動作により主節を表現する場合について、「この傘、貸してあげます」のような「あげる」系を含む回答を分析したところ、今から40年ほど前まではそうした表現の使用者率は約7割と比較的高かったが、現在では約3割にまで激減する。「あげる」系を含む表現が回避されるようになったのは比較的最近のことのようである。該当者数が一定数いる40年前の調査では、若年層ほど数値が低くなる傾向が見られた。また、女性よりも男性で数値が高くなる傾向が見られた。

以上、得られたおもな知見を整理した。

今回分析対象とした“道理に合わない”授受表現の用法は、主節での単純尊敬命令形の「なさい」系のように、設定場面によっては現在ではほとんど使われなくなり、動態をほぼ終えていると思われるものがある一方で、現在動態の真っただ中にあるものも少なくない。また、道教え場面で使用者率が低かった従属節内での「曲がってくださったら」や「曲がってくれたら」は、他の“道理に合わない”授受表現が使用者率を増加させたことを考えると、今後普及する可能性もある。引き続きそれらの動態に注目し、観察と調査を継続してゆくことが望まれる。

注

1）第3次調査は次の科学研究費補助金を受けて実施され、第1次調査・第2次調査のデータの整備(電子化)も研究の一環として行われた。筆者はこの調査の研究分担者(のちに連携研究者）として研究に参画した。

「敬語と敬語意識―愛知県岡崎市における第三次調査―」(文部科学省科学研究費補助金〔基盤研究（A)〕、平成19年度～平成21年度、課題番号＝19202014、研究代表者＝杉戸清樹)

なお、調査の実際については阿部編（2010）で報告されている。

2）3回の岡崎調査について受恵表現「てもらう」「ていただく」の使用の観点から分析した研究に井上・金・松田（2012）がある。また、特に「ていただく」の使用の観点から分析した研究に井上（2012）がある。これらの研究では、設問全体における受恵表現使用の変化傾向について概観を得ることを中心的な目的としたことから、全回答を母数として計算がなされている。また、丁寧さという観点から回答を分析したことから、「てもらう」を含む回答に1点、「ていただく」を含む回答に2点を与えて計算しているため、受恵表現を含む回答をした人の割合が残念ながら示されていない。さらに、注目した表現が受恵表現「てもらう」「ていただく」であったため、授恵表現「てくれる」「てくださる」との関係も明らかではない。これに対し本稿では、受恵表現のみならず授恵表現にも注目し、また全回答を母数とするのではなく、受恵表現ないしは授恵表現を使いうる文型で回答したケースのみを母数として実際の使用者率を計算した。さらに、本稿で注目した設問は、話し手が恩恵を受けようとする状況ではなく、むしろ情報提供者等として恩恵を与える場面、つまり本来授受表現が必要とされない場面に注目し、それにもかかわらず実際には授受表現が使われることがある「道教え」場面等に注目して分析した。すなわち本稿は、これらの先行研究で明らかになったことについてより限定的・詳細に分析しようとするものであり、それらと補完関係にあるものと位置づけられる。

3）『SP盤貴重音源岡田コレクション』は、本書の基盤となった国立国語研究所の研究プロジェクトでの共同研究用に購入し、プロジェクトのメンバーである金澤裕之氏が中心となって録音文字化を行ない、機械分析が可能な状態に整備された。当初はこの資料も用いて、「お掛けなさい」のような「なさい」の使用の変化を分析することを予定したが、「なさい」を検索したところわずか8件検索されるのみであり、このうち他者が益する状況での使用は3件のみであった。また、これと対比される「て下さい」の件数も少なかった。こうした事情から、本稿では岡崎調査のみを分析対象とすることとした。

4）尾崎（2008）は、目上の人が持っている重い荷物を代わりに持つことを申し出る場面での表現について、2007年に実施した全国多人数調査のデータを分析したところ、授恵表現を使用した人は10数%にとどまること、若年層になるほど使用者率が低くなることを報告している。

【参考文献】

阿部貴人編（2010）『敬語と敬語意識―愛知県岡崎市における第三次調査―　研究成果報告書　第2分冊【経年調査 基礎データ編】』（非売品）

井上史雄（2012）「岡崎敬語の現代史」『日本語学』31-11
井上史雄・金順任・松田謙次郎（2012）「岡崎 100 年間の「ていただく」増加傾向―受恵表現にみる敬語の民主化―」『国立国語研究所論集』4
尾崎喜光（2008）「援助申し出場面における授恵表現「～てやる／～てあげる／～てさしあげる」の使用」『待遇コミュニケーション研究』5

〔付記〕

本稿で扱った全国調査は、国立国語研究所基幹型共同研究「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明（プロジェクトリーダー：相澤正夫）」の一環として実施したものである。

第２部　動態研究の基盤
―データと分析手法の側面から―

探索的データ解析による言語変化研究
―蛇行箱型図によるＳ字カーブの発見―

石井　正彦

キーワード：言語変化の進行パターン　代表値の抵抗性　移動中央値法
漢字使用率　存在動詞

１．はじめに

言語変化の進行（普及・伝播）は「Ｓ字カーブ（成長曲線）」を描くことが多い、といわれる[注1]。ただし、現実のデータからＳ字カーブを発見することは、必ずしも容易ではない。本稿では、「探索的データ解析」という統計学の流派で開発された「蛇行箱型図」という手法を用いることによって、従来Ｓ字カーブとは考えられていなかった言語変化の中にＳ字カーブを描くものがあることを示す。その作業を通して、Ｓ字カーブを発見するためにはどのような考え方や方法が必要かという問題を、部分的にではあるが、検討する。注目する言語変化は、安本美典（1963）が指摘し、宮島達夫（1988）が検証した「近現代小説における漢字使用率の減少傾向（仮名使用率の増加傾向）」と、金水敏（2004）が指摘した「近現代小説の有生物主語存在文における動詞『ある』から『いる』への変化」の２つである。

２．探索的データ解析

「探索的データ解析（Exploratory Data Analysis）」とは、J.W. Tukey という統計学者を中心とする人びとによって 1970 年代後半以降に開発された、統計学の歴史の中では比較的新しいデータ解析の手法である。その概要については、渡部洋他（1985）という恰好の入門書があるので、それを参照されたい。本節では、同書によりながら、探索的データ解析の基本的な考え方のうち、本稿の主題にかかわることがらを、私の理解した範囲で、紹介する。

探索的データ解析は、推測統計学に代表されるような、統計的仮説を検証す

るための「確認的データ解析」に対して、研究が探索的な段階にあって前提とする知識が十分に得られていなかったり、様々な事情で無作為標本が用意できなかったりする諸現象について、手元の限られたデータから何らかの仮説的な情報を得るべく、わかりやすい考え方と使いやすい手法とを用意しているというところに特徴がある。十分な数の無作為標本と正規分布する母集団とを前提とせず、どのような種類のデータでも解析の対象とする探索的データ解析は、利用できるデータが限られることの多い言語変化の研究においても有用であると考えられる。

探索的データ解析が確認的データ解析と異なる点はいろいろあるが、最も大きな点は、データの分布の中心的位置を示す「代表値」に、平均値ではなく、抵抗性の高い中央値を採用することである。データ解析では、生のデータを集約して全体の傾向を把握することが重要になるが、限られたデータを扱う探索的な段階では、とりわけ、そうした集約によって得られる統計量が、全体の傾向から逸脱した一部のデータ（外れ値）の影響を受けないように配慮する必要がある。統計量が外れ値の影響を受けにくいことを「抵抗性が高い」というが、探索的データ解析では、順位数である中央値を代表値とすることによって、外れ値の影響を減らそうとする。一方で、平均値は、その計算上すべてのデータを足し合わせるために外れ値の影響を受けやすく、抵抗性が低い。平均値が代表値としてふさわしくない例としては、「勤労者世帯の貯蓄額」が有名である。「ごく少数ながらやたらと収入の高い人に引っぱられて、平均値はうんと高くなってしまう」のである（飽戸 1985）。

探索的データ解析は、データの分布の特徴を、代表値（中央値）のほかに、最大値、最小値、上ヒンジ（最大値と中央値の間の中央値）、下ヒンジ（最小値と中央値の間の中央値）などの「要約値」を使って把握しようとする（これら5つの要約値をとくに「五数要約値」という）。これらは、いずれも、データを大きさの順に並べたときの順位情報を利用した値である。上ヒンジと下ヒンジとの差は「ヒンジ散布度」とよばれ、この間に全データのほぼ半数が入ることになる。探索的データ解析は、平均値のみでデータを代表させるのではなく、抵抗性の高い中央値をはじめとする五数要約値やヒンジ散布度を重視し、データの分布を探っていく。

探索的データ解析は、こうして要約した分布の様子を見やすい形で表現しようとする。「箱型図」とよばれる図はその代表的なもので、上に述べた要約値をはじめとする情報が簡潔に表示され、データが視覚的に要約される（図 1）。

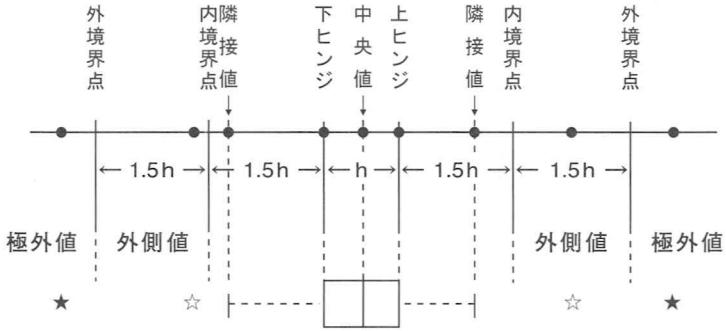

図 1　箱型図の作成法（渡部他（1985）、p.33 と p.35 の図をもとに石井作図）

箱型図において、箱の左右端は、それぞれ下ヒンジ・上ヒンジであり、箱の長さがヒンジ散布度（h）を表す。箱の中の縦線は中央値を表している。箱から出る「ヒゲ」は、「内境界点」に最も近い観測値（「隣接値」）まで伸びている。内境界点とは、下・上ヒンジに、それぞれ、一定の値を加減した値であり、その外側に、さらに一定の値を加減した「外境界点」がある。内境界点より外側のデータが外れ値とされるもので、内境界点から外境界点までの間にあるデータを「外側値」（☆）、外境界点より外側のデータを「極外値」（★）とよぶ。ここで、内境界点・外境界点の設定は、固定的なものではなく、分析の目的・対象などによって、変更し得るものである。図 1 では、下・上ヒンジに、それぞれ、ヒンジ散布度の 1.5 倍（1.5h）を加減したものを内境界点、3 倍（3h）を加減したものを外境界点としている。

探索的データ解析では、この箱型図の考え方を時系列データにも適用し、変動のパターンを探ろうとする。そこでは、「平行箱型図」や「ならし」といった技術に基づいて、「蛇行箱型図」というものが描かれる。これは、たとえば、ならしでも、平均値を用いる「移動平均法」に比べて抵抗性の高い「移動中央値法」を用いるなど、抵抗性重視の手法である。本稿では、この蛇行箱型図によって、従来の方法では見えなかった S 字カーブが発見できるということを指摘す

る（後述）。なお、時系列データの分析には「ならし」のみを適用することも考えられるが、これは、観測時点の間隔が一定、かつ、１時点の観測データが１つという条件を満たす時系列データから、何らかの規則的なパターンを読み取ろうとする場合などに効果的である。時点間隔が必ずしも一定ではなく、また、同じ時点に複数のデータが観測されるような場合、すなわち、観測時点も変数として扱えるようなデータの場合には、２変数間の関係を探る「蛇行箱型図」が有効であり、本稿でも、これを言語変化の進行パターンを探る手法として採用する。

このほか、データの「再表現」、「残差の分析」をはじめ、「幹葉表示」「中央値精練法による二元分類データの分析」「ss 比」「ルートグラム」など、いろいろな解析の手法や考え方が探索的データ解析を特徴づけているが、詳しくは渡部他（1985）を参照されたい。

３．安本（1963）の概要と問題点

安本（1963）は、宮島（1988）が「統計的な方法で言語の将来を予測する、まったくあたらしい試みと、西暦二一九〇年ごろには小説中の漢字はゼロになるだろう、という大胆な推定とが、読者に強烈な印象をあたえた。『言語生活』にのった文章のなかでも、おそらく、いちばん注目されたものの一つだろう」と述べるように、統計を使った言語変化の研究として画期的なものであった。その方法と結論とを、宮島が紹介しているので、引用する。

> 調査資料は、筑摩書房刊『現代日本文学全集』からえらんだ、百人の作家の百篇の小説である。一九〇〇年の泉鏡花「高野聖」から一九五四年の三島由紀夫「潮騒」まで、ぬけている年や重複している年はあるが、ひとりの作家は代表作一つにかぎられている。
>
> これらの作品から一千字ずつを抽出し、そのなかにふくまれた漢字の数をしらべる。抽出のしかたは『言語生活』の論文にはかいてないが、同氏の『文章心理学入門』（一九六五年）によれば、つぎのとおりである。『現代日本文学全集』の一ページは三段からなるが、これを抽出単位とし、一作品につき、二〇段をランダムかつ等間隔にぬく。この各段の最初から

五〇字ずつをとる。

漢字数の平均値を五年ごとにまとめると、その時期時期にふさわしい増減はあるが、大局的には漢字が直線的にへりつづけており、その関係は

$y = -1.244x + 2726.17$　（x は西暦年数、y は千字中の漢字数）

によってあらわせる、という。この傾向がこのままつづけば、右の式から、小説の中の漢字は、二一九一年にはゼロになるはずである。（宮島 1988、p.50）

このように、安本（1963）はその「予測」において注目されたのだが、データ解析でより重要なことは、そうした予測（回帰直線あてはめ）の前提となる「直接的な減少傾向」という言語変化のパターンが、実際のデータからどのようにして導かれたのか、ということである。以下に、安本が、対象とした 100 作品の調査から、その漢字使用率の減少傾向を見出す過程を跡づける。

はじめに、安本のデータを散布図で示す（図 2）。安本は、まず、この 55 年にわたるデータを 5 年ごとの等間隔に 11 の区分に分け、それぞれの漢字数の平均値を求める。そして、その平均値を 5 年ごとの区分の代表値とし、その変動をみる。結果は、図 3（安本 1963 の「第 1 図」）のようになる。

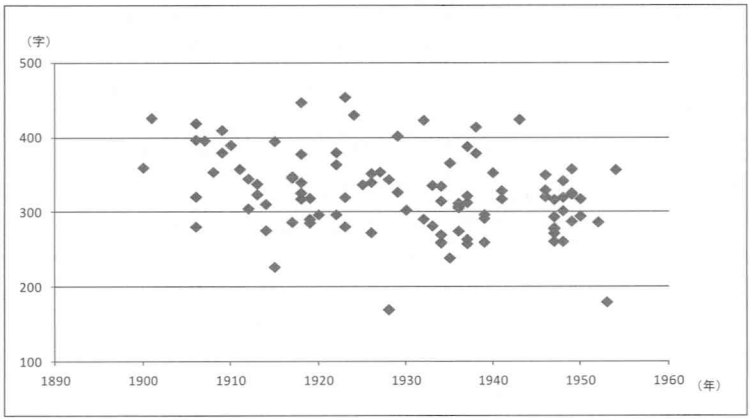

図 2　安本データ（漢字使用率）の散布図

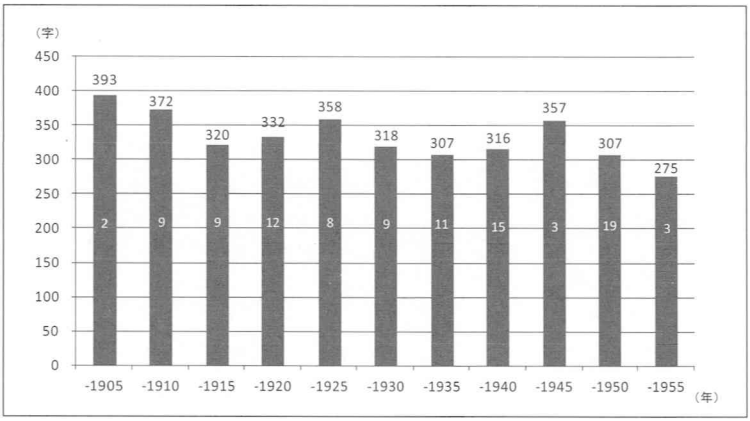

図３　等間隔（５年）に分割された区分の漢字数の平均値（白抜き数字はデータ数）

この図３について、安本は次のように述べる。

このグラフをみるならば、一九五五年までに、漢字の使用率のたかまる三つの山のあることがわかる。すなわち、一九〇〇年から、一九〇五年までが、第一の山であり、一九二〇年から、一九二五年までが、第二の山であり、一九四〇年から、一九四五年までが、第三の山である。ちょうど、二〇年ずつの間隔をおいて、第二の山、第三の山があらわれているのは、興味のあることである。

このうち、第一の山は、時期的には、明治期の、現代小説文の、出発期にあたり、一般に、漢文的文脈の影響が根づよく、それが、漢字の使用率を、大きくさせているものと思われる。

また、第二の山は、横光利一の『日輪』などがあらわれ、その前の時期に、芥川竜之介、菊池寛、久米正雄、などによって、洗練され、再生された漢文的格調美が、一応の頂点に達した時期にあたる。

さらに、第三の山は、大東亜戦争下で、一般的に、漢文的文脈がたっとばれ、中島敦の『李陵』などが、あらわれた時期である。

そして、第一図（上の図３、筆者注）をみるならば、第二の山は、第一の山よりひくく、第三の山は、第二の山よりも、ひくくなっている。また、

その山と山とのあいだの谷も、第二の谷は、第一の谷よりもひくく、第三の谷は、第二の谷よりもひくい。

すなわち、山と谷とをくりかえしながらも、漢字の使用率は、しだいに、減少への道を、たどっている。

(中略)

第一図をみれば、いくたびか増減の山や谷を、形づくりながらも、漢字の使用度は、ほぼ、直線的に減少しているようである。(安本 1963、pp.47-49)

このように、安本は、データを等間隔（5年）の区分に分割して、各区分の平均値をその代表値とし、その変動をデータ全体の変化ととらえるという手順によって、「小説の漢字使用率は、周期的に増減を繰り返しながらも、大局的には直線的に減少する」という言語変化の進行パターンを読み取っている。

しかし、探索的データ解析の考え方からみれば、この手順・解釈には、以下のような問題がある。

第一に、観測時点（発表年代）の間隔が一定でなく、かつ、1時点に複数のデータを観測する場合もあるような今回のデータを、（おそらくは便宜的に）5年という等間隔の区分に分割したことである。このために、各区分のデータ数に偏りが生じ、とくに、データの極端に少ない区分ではその代表値が不安定になっていると考えられる。図3の白抜き数字は各区分のデータ数を示したものだが、安本が「第一・第二・第三の山」とした区分は、いずれもそこに属するデータの数が2個・8個・3個と少なく、とくに第一と第三の山は、データ数があまりにも少ないために、代表値としての資格を持ち得ない可能性がある[注2]。

第二に、各区分の代表値として、抵抗性の低い平均値を採用したことである。このために、代表値が一部の極端な値をとるデータ（外れ値）の影響を受けやすくなり、不安定になっていると考えられる。表1は、安本のデータについて、平均値と中央値との差をみたものであるが、両者の間には少なからぬ差が生じている。差の大きな区分のうち、区分2・6・11のように平均値が中央値より小さい区分では、鈴木三重吉・山本有三・壺井栄という児童文学者の作品が、それぞれ、漢字使用率の最も小さいデータとなっている。逆に、区分4・7・9

のように平均値が中央値より大きい区分では、菊池寛・嘉村礒多・中島敦の作品が、それぞれ、漢字使用率の最も大きいデータとなっている。このうち、菊地・中島については、安本が「漢文的」とする作品である。このように、平均値は、区分の中に漢字使用について特に消極的・積極的なデータがあると、それに影響されやすい。安本は、こうしたデータをまさにその区分の特徴を代表するものと考えるようだが、探索的データ解析では、これらには（全体の傾向から逸脱した）外れ値である可能性があると考える。なお、表１の中央値を結んでも、平均値と同じような山と谷が観察されるが、これは上述の第一の問題点によるもので、区分の設定に問題があれば、中央値であれ、その変動が正しいということにはならない。

表１　安本データの平均値と中央値

区分	年	データ数	平均値（a）	中央値（b）	差（a-b）
1	～1905	2	393	393	0
2	～1910	9	372	390	-18
3	～1915	9	320	324	-4
4	～1920	12	332	322.5	9.5
5	～1925	8	358	350.5	7.5
6	～1930	9	318	340	-22
7	～1935	11	307	291	16
8	～1940	15	316	308	8
9	～1945	3	357	329	28
10	～1950	19	307	317	-10
11	～1955	3	275	287	-12

第三に、各区分の代表値を直接に結び、その変動のみを全体の傾向を代表するものとしたことである。確かに代表値は各区分の分布の中心位置を表すものだが、なお様々なノイズを含むものであり、それを結んだ折れ線がただちに意味のある変動を示すわけではない。代表値の変動からこうしたノイズを除去し、意味のある変動傾向（規則やパターン）を浮き彫りにすること、また、代表値の変動だけでなく、たとえばデータの半数の変動を把握することで、より確実な変動傾向を見出すことが必要になる。

4．金水（2004）の概要と問題点

金水（2004）は、有生物主語をとる存在動詞が「ある」から「いる」へと移行していく過程を、『CD-ROM 版　新潮文庫の一〇〇冊』中の作品を対象とする調査によって、具体的に把握しようとしたものである。調査では、日本人作家による小説・エッセイ・ドキュメント・日記作品など 62 作品（文語体の作品や歴史小説は除く）について、有生物主語をもつ存在文の述語動詞が「ある」（否定形式は「ない」）か「いる」かが調べられた。集計にあたって、地の文と会話文・心内発話とは区別していないが、対象とする存在文は、(b) のような「限量的存在文」と（c）のような「所有文」とに限り、(a) のような「空間的存在文」は、今回の調査ではすべての作品で「いる」しか使われていないため、除いている。さらに、「いる」の用例数には、出来事的な意味において共通し、また、一部の用法で「いる」と相補分布する「おる」も含めている。

(a) 昔々、あるところにおじいさんとおばあさんが {あり／い} ました。
(b) 教科書以外の本をまったく読まない学生も {ある／いる}。
(c) 田中には奥さんもこどもも {あった／いた}。

金水（2004）では、この調査から得た各作品のデータが、作者の生年という観点から整理されている。図 4 は、各作品における「いる」の使用率を、

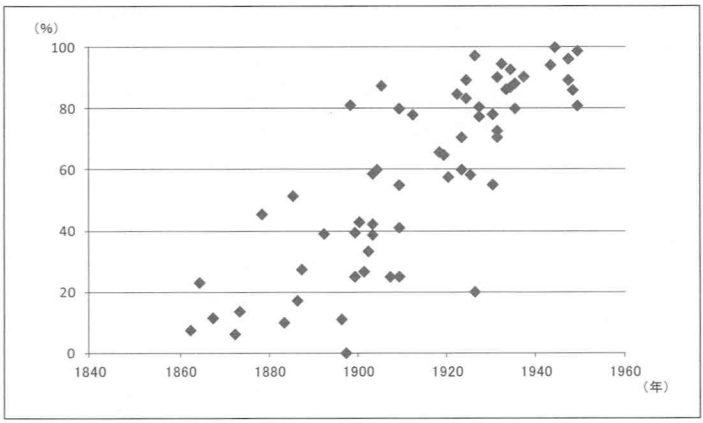

図 4　金水データ（「いる」の使用率）の散布図

作者の生年と関連させて示した散布図である。金水は、このデータを10年ごとの等間隔に9つの区分に分け、それぞれの平均値を求める。そして、その平均値を各区分の代表値とし、その変動をみる。結果は、図5（金水2004の「図1」）のようになる。

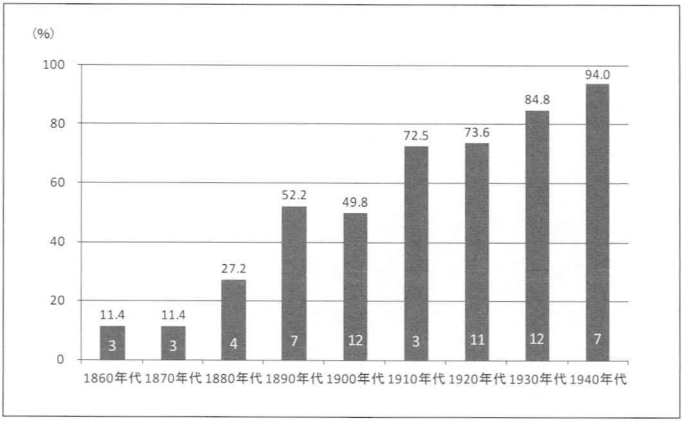

図5　等間隔（10年）に分割された区分の「いる」使用率の平均値（白抜き数字はデータ数）

金水は、この図5を次のように解釈している。

> このグラフを見ると、おおよそ3つの世代に分けられることが分かる。一つ目は、1870年代まで、二つ目は1880年代から1900年代まで、三つ目は1910年代[注3]以降である。第一世代は、「いる」「おる」の使用率は10%程度に止まる。第二世代では「いる」「おる」の使用率が上昇傾向に転じ、50%前後まで増加する。第三世代では、70%に跳ね上がったあと増加し、90%以上にまで至る。1940年代生の作者にあっては、空間的存在文・限量的存在文の区別はすでになく、主語の有生性によってのみ「いる」と「ある」が使い分けられる状態になっていると見てよいであろう。（金水2004、p.11）

金水も、安本と同じように、データを等間隔（10年）の区分に分割して、各区分の平均値をその代表値とし、その変動をデータ全体の変化ととらえると

いう手順によって、「近現代の小説等において、有生物主語存在文（限量的存在文・所有文）での『ある』から『いる』への移行は、3つの段階（世代）を経て進行する」という言語変化のパターンを読み取っている。

しかし、探索的データ解析の考え方からみれば、この手順・解釈にも、安本とほぼ同様の問題がある。

第一・第三の問題点は、安本とまったく同じである。前者については、金水データも、観測時点（作者の生年）の間隔が一定でなく、かつ、一時点に複数のデータが観測されているのだが、それを（おそらくは便宜的に）10年という等間隔の区分に分割したことで、各区分のデータ数に偏りが生じ、データの極端に少ない区分では、その代表値が不安定になり、代表値としての資格を持ち得ない可能性があると考えられる（図5の白抜き数字を参照）(注4)。

第二の、各区分の代表値として平均値を採用したという問題点であるが、これについては、安本とやや事情が異なる。安本は、1つの区分に属するデータの漢字使用率（1000字あたりの漢字数なので千分率に等しい）をそのまま用いて平均値を求めているのだが、金水（2004）の場合は、1区分に所属するデータの「いる」使用率は用いず、そのもとになった各データの「ある」の数と「いる」の数とをそれぞれすべて合算し、改めて「いる」使用率を求めて、その区分の平均値としての比率とする、という方法を採っている。表2は、金水データのうち、作者の生年が1900年以前のものを示したものだが、たとえば、1860年代の「いる」使用率は、3作品の「いる」使用率の平均値（(8+23+12)/3=14.3）ではなく、3作品の「ある」の合計と「いる」の合計との和を分母とし、「いる」の合計を分子とする除算によって求められている（9/(70+9)=11.4）。この方法は、（比率の平均ではなく）平均の比率を求める上で間違ってはいないのだが、数の多いデータの影響を受けやすいという欠点をもっている。1860年代・70年代・80年代の「いる」使用率は、それぞれ、森鴎外・島崎藤村・山本有三のそれに引かれているし、90年代は、極端に大きな井伏鱒二のデータが影響し、他のデータはすべて「ある」の方が多いのに、全体の比率は「いる」の方が多い（52%）という結果になってしまっている。したがって、この方法も、抵抗性は低いと言わざるを得ない。

表２　金水データ（一部）

著者名	生年	「ある」	「いる」	「いる」使用率 (%)
森鷗外	1862	37	3	8
伊藤左千夫	1864	10	3	23
夏目漱石	1867	23	3	12
1860 年代		70	9	11
島崎藤村	1872	76	5	6
泉鏡花	1873	19	3	14
有島武郎	1878	6	5	45
1870 年代		101	13	11
志賀直哉	1883	27	3	10
武者小路実篤	1885	17	18	51
谷崎潤一郎	1886	29	6	17
山本有三	1887	61	23	27
1880 年代		134	50	27
芥川龍之介	1892	25	12	32
宮沢賢治	1896	24	3	11
三木清	1897	3	0	0
井伏鱒二	1898	24	103	81
川端康成	1899	24	8	25
壷井栄	1899	24	18	43
石川淳	1899	20	13	39
1890 年代		144	157	52

５．蛇行箱型図

以上のように、安本（1963）と金水（2004）には、①観測時点（発表年代、作者の生年）を（便宜的に）等間隔に分割してデータ数の極端に少ない区分を生じさせた、②各区分の代表値に抵抗性の低い平均値を採用した（金水の場合は平均の比率）、③代表値の変動のみによってデータ全体の変動を代表させた、という共通の問題点があり、したがって、それぞれが導いた言語変化の進行パターンにも、その妥当性に問題があると言わざるをえない。探索的データ解析は、こうした問題に対処するために、「蛇行箱型図」という手法を用意している。以下、安本のデータを例に、蛇行箱型図の作成方法を説明する[注５]。なお、蛇行箱型図は、２変数間の関係を視覚的に表示する方法だが、より正確には、「変数Ｘ（横軸）の値の変化に従って、変数Ｙ（縦軸）の値がどのように変化して

いくかそのようすを図示したものであり、単に散布図の変形というよりは、むしろ変数間の関係に方向性をもたせた回帰分析に近い図的表現法」である（渡部他 1985、p.81）。したがって、安本データ、金水データのように、観測時点をXとし、それによって、Yである漢字使用率や「いる」使用率がどのように変化していくかをみる場合にもふさわしい方法であるといえる。

蛇行箱型図は、以下のような手順を踏んで作成される（渡部他 1985、pp.81-82）。

(1) Xの値によって境界値を設定し、この境界値にもとづいてデータをいくつかの区分に分割する[注6]。境界値の設定にはいくつかの方法があるが、安本データの場合、各区分のデータ数が同じになるようにする「等データ数による分割」が適当である。
(2) 各区分についてYの五数要約を行い、その要約値にもとづき平行箱型図を作成し、変数間の概要をとらえる。
(3) 各区分のXおよびYについての中央値や上・下ヒンジをならしの技法を用いてならし、中央軌跡やヒンジ軌跡を描く[注7]。

手順（1）は上述の問題①を、手順（2）は問題②を、手順（3）は問題③を、それぞれ、解決する方策である。表3は、安本データを、観測時点（発表年代）をX、1000字あたりの漢字数をYとし、各区分のデータ数が等しく10となるようXを分割して、各区分のXの中央値およびYの五数要約値を求めたものである（境界値の前後に同年のデータが来る場合は、安本が付与した通し番号に従って分割した）。

そして、図6は、このデータにもとづいて作成した、安本データの平行箱型図である。箱が各区分のほぼ半数のデータの位置を示しているが、安本の言うようなはっきりとした山や谷をみとめることは、区分1を除いて、難しいように思われる。なお、区分3の極外値は菊池寛（447字）、区分5・10の外側値は山本有三（170字）、壺井栄（180字）である。これらは、それぞれの区分全体の傾向から逸脱した外れ値である可能性が高い。

表３　安本データの等データ数（10）による分割と五数要約値

区分	発表年代（X）	Xの中央値	五数要約値				
			最小値	下ヒンジ	中央値	上ヒンジ	最大値
1	1900-1909	1906	281	354	388	410	426
2	1910-1915	1913	227	305	331	358	395
3	1917-1919	1918	287	318	333	348	447
4	1919-1925	1922.5	281	297	328.5	380	454
5	1926-1932	1928	170	291	333.5	352	402
6	1932-1935	1934	239	260	298.5	336	423
7	1936-1938	1937	258	275	310	322	388
8	1938-1946	1940.5	260	297	325	353	422
9	1946-1948	1947	261	272	286.5	317	350
10	1948-1954	1949.5	180	288	319	326	358

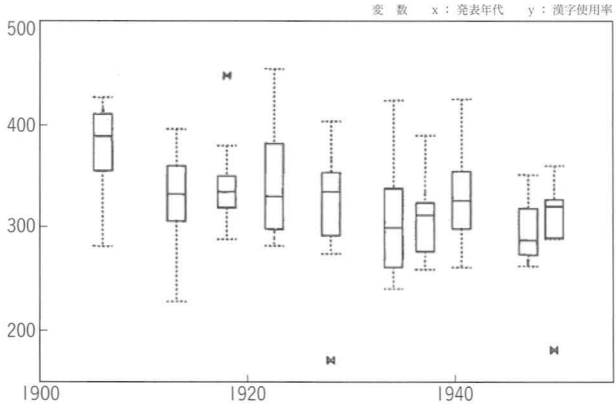

図６　安本データの平行箱型図

ただ、平行箱型図では、発表年代とともに漢字使用率がどのように変化するのか、そこになんらかの傾向（周期性、変動性、方向性）があるのかどうかなどが、いまひとつわかりにくい。そこで、手順（3）で、「ならし」の手法によって、中央値・上ヒンジ・下ヒンジの３つの要約値をならすことになる。ならしの手順は、以下のようなものである。

1）Xの中央値、上下ヒンジを、ハニングによってならす。
2）Yの中央値、上下ヒンジを、3RSSH3によってならす。
3）中央値と上下ヒンジとの間の幅を利用して、上下ヒンジの補正を行う。
4）中央値と上下ヒンジの軌跡を描く。

ここで、ならしの中核となる2）の「3RSSH3」とは、まず「3」のならしの操作をならしの結果が変化しなくなるまで繰り返し（3R)、次いで幅2の峰（谷）の補正を行い（SS)、さらにハニングによってならした後（H)、最後にもう一度「3」のならしを行う方法である。「3」とは、スパン3の移動中央値法、すなわち、ある時点tを中心としてその前後の時点（t－1、t＋1）1つずつ計3つの時点のデータをとり、その中央値を時点tにおけるならしの値とする方法であり、「R」は、これをならしの値が変化しなくなるまで繰り返すことをいう。また、「SS」とは、3Rのならしによって押しつぶされてしまう峰や谷を補正して再び3Rのならしを行うこと(S)を2回繰り返すことであり、「ハニング（H)」とは、一般に、スパンを3、重みを（1/4、2/4、1/4）とする重みつき移動平均法の一種で、移動中央値法によるならしの後に行われ、全体をよりなめらかにする効果がある。このほか、3)、4）にも独自の技法があるが、詳しくは渡部他（1985）を参照されたい。

6．安本データの蛇行箱型図

以上の方法により、安本データについて作成した蛇行箱型図が、図7である。中央軌跡（中央値を結んで得られた軌跡）はX（発表年代）の変化にともなうY（漢字使用率）の主たる変化のようすを表しており、上および下ヒンジの軌跡に囲まれた部分は、分布の中央部およそ50％のデータの動きを表している（渡部他1985、p.93)。いずれの軌跡も、1920年ごろまでの急な減少が、その後、緩やかな減少になり、中央軌跡と下ヒンジ軌跡については、1940年ごろからわずかながらも上昇に転じている。おおよそ、S字カーブの後半、すなわち、「緩→急→急→緩」というパターンの「急→緩」の部分に相当するものとみることができる。

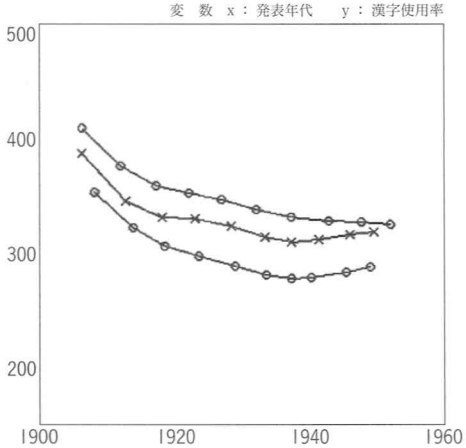

図７　安本データの蛇行箱型図

図８は、宮島（1988）のデータについて蛇行箱型図を描き、図７の安本データの蛇行箱型図と合成したものである。宮島（1988）は、安本（1963）の「小説中の漢字は二一九一年にはゼロになる」という推定について、「発表から二十五年たった現在、そろそろ、この推定がただしかったかどうか、しらべる」必要があるとし、また、安本の調査を延長するためには、有名作家とその代表作を選ばなければならないとして、1935年から1985年までの芥川賞受賞作品94篇を対象として、抽出単位や方法は異なるが、やはり、1000字中の漢字の数を調べたものである。ここでは、この94件のデータを等データ数（9～10件）になるよう９分割して蛇行箱型図を作成した。

宮島データの中央軌跡・ヒンジ軌跡は、きれいなＳ字カーブを描いており、しかも、それは、安本データの軌跡（とくに中央軌跡と下ヒンジ軌跡）とよく重なり、全体として、一連の変動、すなわち、Aitchison（1991）のいう「重複するＳ字カーブ」（overlapping S-curves）を示しているようにみうけられる。重複するＳ字カーブとは、一つの大きなＳ字カーブが多数のより小さなＳ字カーブから構成されることをいい、それぞれの小さなＳ字カーブは、それ独自の言語環境で現れるとされる（邦訳 p.95）。小説における漢字使用率の減少も、全体として一つの大きなＳ字カーブを描き、その内部に、安本データがそ

の後半をとらえたＳ字カーブと、宮島データがとらえたＳ字カーブとが連なっているのかもしれない。２つのＳ字カーブの違いがどのような「独自の言語環境」によるものかは、今のところ不明であるが、有名作家の代表作と若手作家の出世作という違い、あるいは、戦後の漢字制限や新漢字教育に代表される日本語表記の違いなどがかかわっていることが予想される。

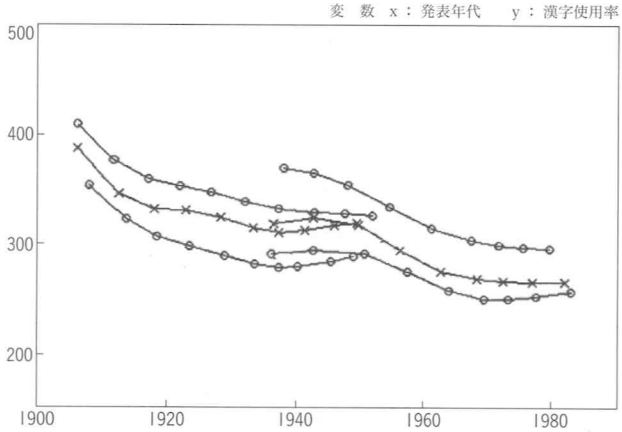

図８　安本データ（左）と宮島データ（右）の蛇行箱型図

７．金水データの蛇行箱型図

表４は、金水データ（62 件）を等データ数（両端の区分のみ７件、他は８件）になるよう８つの区分に分割し、各区分のＸ（作者の生年）の中央値およびＹ（「いる」使用率）の五数要約値を求めたものである（境界値の前後に同年のデータが来る場合は、金水が付与した通し番号に従って分割した）。

図９は、表４にもとづいて作成した平行箱型図である。井伏鱒二（81％）を含む区分２の中央値は 26％で、表２の「1890 年代」の平均値の半分になっている。なお、区分１の（大きい方の）外側値は有島武郎（45％）、区分６の（小さい方の）外側値は星新一（20％）である。

表４　金水データの等データ数（７～８）による分割と五数要約値

			五数要約値（%）				
区分	生年（X）	Xの中央値	最小値	下ヒンジ	中央値	上ヒンジ	最大値
1	1862-1883	1872	6	9	12	18.5	45
2	1885-1899	1894	0	14	26	41.5	81
3	1899-1904	1902.5	27	35.5	40.5	51	60
4	1905-1918	1909	25	33	60.5	79	88
5	1919-1925	1923	58	59	68	84	89
6	1926-1931	1928.5	20	63	75	79.5	97
7	1931-1937	1934	80	86.5	89	91.5	95
8	1943-1949	1947	81	87.5	94	97.5	100

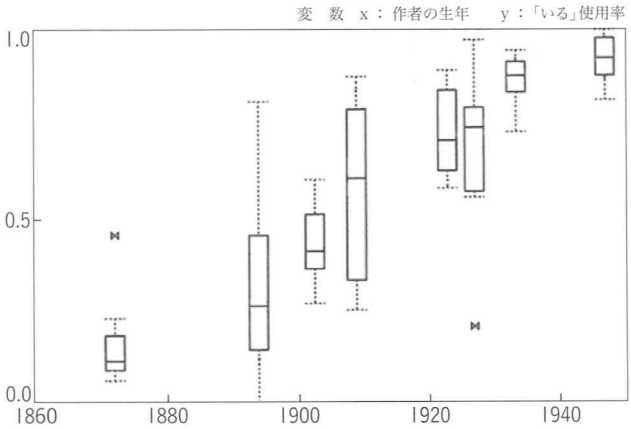

図９　金水データの平行箱型図

図10は、図９の平行箱型図をならして得た蛇行箱型図であるが、きれいなＳ字カーブを描いている。近現代の小説等における有生物主語存在文（限量的存在文・所有文）での「ある」から「いる」への移行は、３つの段階（世代）を経て進行するととらえるよりも、Ｓ字カーブを描く、あるいは、Ｓ字カーブに従うととらえる方が適切であろう。

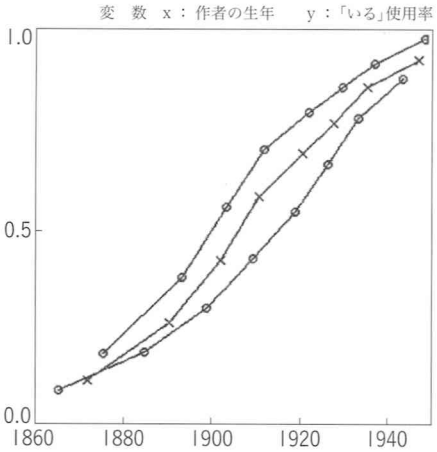

図10　金水データの蛇行箱型図（作者の生年）

なお、金水（2004）では、作者の生年のほかに、作品の発行年による「ごくラフな調査」も行われ、それによると、

> 1900年代、1910年代～1940年代、1950年代以降の三つの時期に分けられることが知られる。『いる』『おる』の使用率は、第一期は10％足らず、第二期では30％前後、第三期では50％程から増加して1980年代には90％を超えている。この結果を見ると、第二次世界大戦以降の伸びが急であることが分かる。（金水2004、pp.11-12）

との解釈が（グラフ抜きで）示されている。

図11は、このデータを蛇行箱型図にしたものだが、これも、中央軌跡はもちろん、ヒンジ軌跡も、きれいなS字カーブを描いている。金水の上の把握はこのS字カーブをとらえている可能性もあるが、とすれば、3つの時期に分けるのではなく、緩→急→急→緩に対応した4区分が妥当であろう。

いずれにせよ、作者の生年・作品の発行年のどちらで見ても、この言語変化の進行がS字カーブに従うことは変わりがないようである。

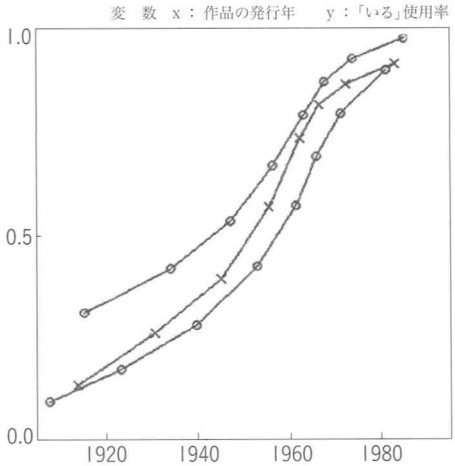

図11　金水データの蛇行箱型図（作品の発行年）

8．おわりに

以上、探索的データ解析の蛇行箱型図という手法を用いることによって、安本（1963）・宮島（1988）による「近現代小説における漢字使用率の減少傾向（仮名使用率の増加傾向）」と、金水（2004）による「近現代小説の有生物主語存在文における動詞『ある』から『いる』への変化」とに、いずれもＳ字カーブの進行パターンを発見し得ることを確認した。そのポイントは、

（ア）データを観測時点によって分割する際に、等間隔ではなく、等データ数とすること
（イ）分割後の各区分の代表値を平均値ではなく中央値とし、また、五数要約すること
（ウ）各区分の変動を、代表値のみを直接結ぶのではなく、中央値と上下ヒンジを移動中央値法を中心とする手法によってならすこと

の３点である。

ただし、（ア）については、データ数の少ない区分が生じないようにするために、等間隔の分割や文字値による分割が推奨される場合もある。また、（ウ）

についても、ならしの際のスパンのとり方やならしの組み合わせ方にいくつかの手法がある。したがって、どのような区分に分割し、どのようなならし方をするかによって、得られる蛇行箱型図は1つに決まらないことが普通である。このため、今回の2つの言語変化の進行がほんとうにS字カーブを描くかどうかは、なお検証される必要がある。

このように、探索的データ解析によって得られるのは、1つの「結論」ではなく、いくつかの「仮説」である。どの仮説が正しいかは、別個のデータを用いた確認的な解析で検証される必要があるとともに、比較的長期の研究の流れの中で、またその領域で積み上げられた知見に照らし合わせて評価・判断されるべきものである（渡部他 1985、p.4）

今回、蛇行箱型図の適用によって、近現代小説の漢字使用率の減少や存在動詞「ある」から「いる」への移行がS字カーブに従って進行するという仮説を得たとしても、それは、確認的データ解析（推測統計学）にもとづく別の調査によって実証されなければならないし、同時に、国語国字問題の歴史的研究や文学史・文体史、また、文法史などの諸研究の知見とも関係づけられるべきものであろう。

注

1）国内外の言語学におけるS字カーブの研究史については、橋本（2010）が詳しく、有益である。

2）図3（安本の第1図）は、平均値を棒グラフで描いているが、これは、いかにも、多くのデータが積み重なって平均値が得られたような印象を与える。一番左の最も高い棒が実はたった二つのデータからなるなどということは想像しにくい。この点、グラフの選択にも問題がある。

3）金水（2004）には「1920年代以降」（p.11）とあるが、金水（2006）では「一九一〇年代以降」（p.105）となっており、後者を採用した。

4）図5（金水の図1）も、平均値を棒グラフで描いており、これにも、安本と同様の問題がある。

5）図表作成には、探索的データ解析専用のパソコンソフト「探索的データ解析システム　枝」（㈱メタテクノ、現在は絶版）を使用した。

6）探索的データ解析では、解析の対象となるデータの集合を「バッチ」、それを何ら

かの観点で下位区分したものを「サブバッチ」と呼ぶが、本稿では、あえてこれらの用語は用いず、前者は単に「データ」、後者は「区分」と呼ぶことにする。

7）渡部他（1985）には、さらに、(4) データのおおよその散布領域を示す「隣接多角形」を書き加える、(5) 必要があれば外側値や極外値も書き加える、という手順が示されているが、Ｓ字カーブの発見に直接かかわらないので、省略する。

【参考文献】

飽戸　弘（1985）『データで人を動かす法』主婦と生活社

石井正彦（2006）「日本語研究における探索的データ解析の有用性」、土岐哲先生還暦記念論文集編集委員会編『日本語の教育から研究へ』くろしお出版

井上史雄・江川清・佐藤亮一・米田正人（2009）「音韻共通語化のＳ字カーブ―鶴岡・山添６回の調査から―」『計量国語学』26-8

金水　敏（2004）「近代日本小説における「(人が) いる／ある」の意味変化」『待兼山論叢』（文学篇）38（金水（2006）所収）

――――（2006）『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房

橋本和佳（2010）『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ書房

宮島達夫（1988）「『漢字の将来』その後」『言語生活』436

安本美典（1963）「漢字の将来―漢字の余命はあと二百三十年か―」『言語生活』137

渡部　洋他（1985）『探索的データ解析入門―データの構造を探る―』朝倉書店

Aitchison, J. (1991) *Language Change: Progress or Decay?* (Second Edition), Cambridge University Press. (若月剛訳『言語変化　進歩か、それとも衰退か？』リーベル出版、1994)

〔付記〕

本稿筆者の求めに応じてデータを快く提供してくださった大阪大学大学院教授・金水敏氏に感謝申し上げます。

現代日本語における外来語表記のゆれ

小椋　秀樹

キーワード：外来語　表記　ゆれ　『外来語の表記』　コーパス

1．はじめに

音節、語など、種々の言語単位において、形式が一つに定まらず、複数の形式が共時的に存在することがある。この現象を「ゆれ」と呼ぶ。

語のレベルにおけるゆれには、語形やアクセントのゆれのほか、日本語においては表記のゆれが多く見られる。例えば、「俺－おれ」「さくら－サクラ」のような異なる文字体系間の対立によるゆれのほか、「付属－附属」のような異なる漢字の対立によるゆれ、「行う－行なう」のような送り仮名の違いによるゆれ等がある。

表記のゆれの中でも、外来語の表記のゆれがしばしば問題となる。外来語の表記がゆれる要因の一つとして、語形選択の基準がなく語形が不安定であることが挙げられる。

国が定めた外来語表記の基準としては、『外来語の表記』（1991 年、内閣告示第 2 号、内閣訓令第 1 号）がある。『外来語の表記』は、「法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など、一般の社会生活において、現代の国語を書き表すための「外来語の表記」のよりどころを示」したものである。

『外来語の表記』の「留意事項その 1（原則的な事項）」を見ると、

3．「ハンカチ」と「ハンケチ」、「グローブ」と「グラブ」のように、語形にゆれのあるものについて、その語形をどちらかに決めようとはしていない。

4．語形やその書き表し方については、慣用が定まっているものはそれによる。分野によって異なる慣用が定まっている場合には、それぞれの慣用によって差し支えない。

とある。また、外来語の表記に用いる片仮名についても、第１表（外来語や外国の地名・人名を書き表すのに一般的に用いる仮名）と第２表（外来語や外国の地名・人名を原音や原つづりになるべく近く書き表そうとする場合に用いる仮名）の２種が掲げられている。

以上のことから、『外来語の表記』が語形の統一を図ったり、語形選択の基準を示そうとしたりするものではないこと、また表記の統一を図ろうとするものではないこと、各分野における慣用を認める立場を取ることが分かる。つまり、『外来語の表記』は、緩やかな性格の基準ということができる。

この『外来語の表記』の性格から、「ロマンティック－ロマンチック」「ジェネレーション－ゼネレーション」「ウエブ－ウェブ」「チューバ－テューバ」のようなゆれに加えて、「メール－メイル」のような長音と二重母音との間のゆれ、「コンピューター－コンピュータ」のような長音と短呼との間のゆれなど、種々の表記のゆれが見られる。

ところで、外来語表記のゆれは、しばしば問題となるものの、現代日本語において、どのくらいの割合で見られるのか、ゆれにはどのような類型があるのかといった、外来語表記のゆれの実態は、十分に明らかにされているとはいえない。そこで本稿では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）のコアデータ(注1)を資料として、主として計量的な観点から、現代日本語における外来語表記のゆれの実態を明らかにする。

２．先行研究

本節では、外来語表記のゆれに関する先行研究を概観する。なお、ここでは外来語表記や外来音の表記全体について扱っている研究を取り上げることとする。したがって、ある特定の外来音を取り上げた研究は、ここでは取り上げない。また通時的な研究も対象外とする(注2)。

外来語表記のゆれに関する大規模な実態調査としては、国立国語研究所（1983）と宮島・高木（1984）とが挙げられる。

国立国語研究所（1983）は、1966年発行の朝日・毎日・読売３紙を対象とした表記のゆれに関する調査報告である。外来語だけではなく、全ての語種を対象としたものである。表記のゆれを、異なる漢字の対立、送り仮名の対立、

外来語表記法の対立等、8類型に分類し、どのような語に、どのようなゆれが見られるのかを示したものである。付録として「新聞における語表記のゆれ一覧」（見出し語数4,878語）を掲げている。

宮島・高木（1984）は、1956年発行の雑誌90種を対象とした外来語表記の調査報告である。「外来語の表記について」（1954年、国語審議会部会報告）に示された外来語表記の原則（19項目）のうち、撥音、長音、イ列・エ列の次の「ア」、外来音「ティ」「ディ」等、7項目について、どのような表記が見られるのかを語ごとに示している。ゆれの要因については、原語の発音やつづりといった観点から考察を行っている。

辞典類の見出しを対象に、外来音の表記のゆれについて調査したものとして、松崎（1992、1993）がある。松崎（1992、1993）は、「シェ」「ジェ」「イェ」等の外来音の表記について調査したもので、松崎（1992）は16種類、松崎（1993）は17種類の辞典類を対象としている。

松崎（1992）は、外来音の表記のゆれを「1拍にあたる外来語音と日本語音2拍がゆれているもの」「母音を共通要素として、外来語音と日本語音がゆれているもの」「子音を共通要素として、外来語音と日本語音がゆれているもの」の3類型に分類している。

松崎（1993）は、ある拍が外来音寄りの表記か日本語音寄りの表記かは、語によってかなり異なることを計量的な方法により示している。また、その結果から、外来音のうち何を日本語の拍を構成するものとして見なすかは、語例により結論が大きく左右されるのであり、少数の語例から結論を出すことは危険であると指摘している。

以上、外来語表記のゆれに関する四つの先行研究を概観した。これらのうち、国立国語研究所（1983）、宮島・高木（1984）からは、外来語表記のゆれに関する研究の問題点として、次の2点を指摘することができる。

（1）いずれも調査対象が単一の媒体である。

（2）国立国語研究所（1983）の調査対象年から既に47年が経過している。

1点目は、調査対象の幅の問題である。国立国語研究所（1983）は新聞のみを、宮島・高木（1984）は雑誌のみを対象とした調査である。新聞、雑誌は、我々がふだんよく目にする媒体であり、国立国語研究所の設置目的や当時の国語施

策を取り巻く状況を考えた場合、これらが調査対象となるのは当然のことと言える。しかし書き言葉は、新聞･雑誌にとどまるものではない。書籍、教科書、公文書、法律など様々な媒体がある。また、1966 年当時には存在しなかった媒体として Web が挙げられる。現代における外来語表記のゆれの実態解明という面からは、複数の多様な媒体を対象に調査を行い、媒体差の有無等を明らかにする必要がある。

２点目は、“今”外来語表記がどの程度ゆれているかを知るための基礎資料がないという問題である。現時点で最も新しい外来語表記のゆれに関する基礎資料は、1966 年発行の朝日・毎日・読売３紙を対象としたものであり（国立国語研究所 1983)、調査対象年から既に 47 年と、ほぼ半世紀が経過している。この間、外来語の使用が増加しているのに加え、社会の変化に伴って語の消長もある。その結果、外来語表記のゆれの実態にも変化が生じていることが予想される。したがって、より現在に近い時期における表記のゆれを調査する必要がある。

ところで、松崎（1992、1993）は、辞典類を資料として調査を行っている。松崎（1992）では、宮島・高木（1984）のように雑誌類を対象とする方が理想的としながらも、辞典類を資料とした理由について、次のように述べる。まず、「表記全般から見た場合、外来語が占める割合は非常に少なく、延べ語数の割合は標本全体の５～ 10%にすぎない」(p.84) と、実際の書き言葉における外来語比率の少なさを指摘する。そして「外来語音の問題に絞り、ゆれの問題を定量的に論じるためには､非常に膨大の資料が容易に得られる点を考慮し」(pp.84-85) て、辞典類を調査対象としたと述べる。また、「辞典が規範的な立場から表記を行っているという危険性には充分注意せねばならない」(p.85) とも述べ、辞典類の資料性についても注意が払われている。

このように、資料性を理解した上で、定量的な調査をするために十分な量のデータを得るのに適した資料として辞典類を選んでいるのであり、その方法は適切だと考えられる。しかし近年、日本語においても大規模コーパスが公開されたことを考えると、研究環境は大きく変化している。コーパスを資料とすれば、従来の大規模言語調査より多くのデータ量を確保することも可能になると考えられる。今後は、大規模コーパスを活用して、実際の書き言葉における外

来語表記のゆれを計量的な面から調査していくことも必要である。

以上の外来語表記のゆれに関する研究の問題点や課題を踏まえ、本稿では、BCCWJ のコアデータを資料として、そこに収録された新聞・雑誌・書籍・白書・Web の五つの媒体（レジスター[注3]）を対象に、より現在に近い時期における外来語表記のゆれの実態を計量的な手法によって明らかにしていく。

具体的には、(1) 外来語の表記がどの程度ゆれているのか媒体ごとに調査し、媒体による差異を明らかにした上で、(2) 各媒体における外来語表記のゆれの類型についても明らかにしていくこととする。

3．調査資料

本稿では、複数のレジスターのテキストを収録した BCCWJ を資料とした。ただし BCCWJ 全体を対象とするのではなく、今回はコアデータのみを対象とした。また、BCCWJ は、言語単位として長単位と短単位の 2 種類を採用している[注4]。今回の調査にはそのうち短単位を用い、固有名詞を除く、いわゆる一般語を対象とした。

コアデータは、以下のレジスターから構成されている。

出版サブコーパス　　：2001 年－ 2005 年発行の新聞、雑誌、書籍

特定目的サブコーパス：2001 年－ 2005 年発行の白書

2004 年 10 月－ 2005 年 10 月投稿の Yahoo! 知恵袋

2008 年 4 月－ 2009 年 4 月投稿の Yahoo! ブログ

各レジスターの延べ語数は、表 1 のとおりである（短単位の語数。記号、補助記号、空白は除く）。本稿では、Yahoo! 知恵袋と Yahoo! ブログとをまとめて Web として扱うため、表 1 でもそのように示している。

表 1　コアデータの語数

	異なり	延べ
新聞	15,822	290,815
雑誌	14,615	193,724
書籍	12,453	198,820
白書	6,548	193,185
Web	12,558	181,868

コアデータは、自動形態素解析を行った後、データ全体に対して人手による確認・修正を行ったデータで、解析精度は長単位・短単位とも約99%以上と高精度である。またコアデータの各レジスターは、元データの正確な縮図となるようにサンプルを決定している。コアデータの新聞を例に、以下説明する。コアデータの新聞のサンプルは、出版サブコーパス（以下SC）・新聞[注5]から取得したものである。サンプルの取得に当たっては、出版SC・新聞と同様の層別を行った上で、各層の文字数比率が出版SC・新聞における各層の文字数比率[注6]と同じになるように、各層から無作為抽出によってサンプルを取得している。

コアデータは、BCCWJ全体の約１%に過ぎないが、形態素解析の精度が高く、元データの正確な縮図となっている。このことから、コアデータを調査することで、外来語表記のゆれの実態について見通しを立てることができると考えられる。

４．外来語表記のゆれの認定

４.１．外来語表記のゆれと認める範囲

表記のゆれとは、一つの語形（発音）に対して２種類以上の表記が共時的に存在する現象を指す。この定義に厳密に従えば、外来語表記のゆれとは、「バイオリン―ヴァイオリン」「ビーナス―ヴィーナス」のようなゆれを指すことになる。

一方、外来語表記のゆれとして取り上げられることの多い「コンピューター―コンピュータ」「マネージャー―マネジャー」「メール―メイル」などは、発音の違いに基づく表記の違いである。例えば、「コンピューター」は、語末を長音化した発音を写したものであり、「コンピュータ」は語末を短呼した発音を写したものである。

それにもかかわらず、これらが外来語表記のゆれとして扱われるのは、外来語は、表記のゆれか発音のゆれかを厳密に判定することが難しいことによる。つまり「コンピューター」と書かれていても「コンピュータ」と、「コンピュータ」と書かれていても「コンピューター」と発音する人がいる可能性は高く、語末の長音符号の有無を発音の違いによるものとは言い切れないのである。「マ

ネージャー―マネジャー」「メール―メイル」も同様である。

外来語表記のゆれの実態を明らかにする場合、表記のゆれを極めて厳密に考えて、「バイオリン―ヴァイオリン」のようなゆれに限定するか、「コンピューター―コンピュータ」のようなゆれも含めて考えるか、立場を明確にしておく必要がある。

先行研究での扱いを見ると、いずれの立場もある。国立国語研究所(1983:18)では、「純粋に表記のゆれとみられる」例として、「アルミニューム―アルミニウム」「スペシャル―スペシァル」「バイオリン―ヴァイオリン」を挙げる。さらに「アイデアーアイディア」「ファンデーション―フアンデーション」等は「純粋な表記のゆれか語形のゆれかの判定がむずかし」いもの、「クロスークロース」「サファイアーサファイヤ」等は「語形のゆれが表記に反映しているとみるほうがあたっているとかんがえられる」ものとしている。その上で、「純粋に表記のゆれとみられる」例のみを表記のゆれとすることとし、それ以外のもので判定の難しいものは、表記のゆれに準ずるものとして扱うとしている。

それに対して、宮島・高木（1984：44）は「「ピアノ～ピヤノ」は、発音がちがうはずだが、その差は微妙である。「ア」または「ヤ」がかいてあるからといって、そのとおり発音しているとみるのは、あぶない。」と述べ、発音のゆれと表記のゆれとの区別の難しさを指摘している。その上で、「ピアノ―ピヤノ」のようなゆれも外来語表記のゆれとして扱っている。国立国語研究所（1983）よりも表記のゆれを広く取る立場といえる。

本稿では、宮島・高木（1984）と同様に、「コンピューター―コンピュータ」等のゆれも外来語表記のゆれとして扱うという立場を取ることとした。このような立場を取った理由は、次の２点である。

１点目は、外来語においては発音のゆれと表記のゆれとの区別が難しいためである。厳密に範囲を区切ろうとしても判断に迷うものが出てくることは容易に想像でき、そのことが調査の進捗を遅らせる要因になると考えられる。また、判断に迷うものを、国立国語研究所（1983）と同様に表記のゆれに準ずるものとして考察の対象に含めるとすると、結局、表記のゆれの認定を厳密に行う意味が曖昧になってしまう。

２点目は、「コンピューター―コンピュータ」のようなゆれが、一般には外

来語表記のゆれと認識され、表記の問題として取り上げられているためである。外来語表記のゆれとして一般に問題にされるものを除外して、外来語表記の実態調査を行っても、その調査から得られたデータは余り意味を持たない。本稿のような実態調査は、表記の在り方、表記の基準を考える際の基礎的な資料になり得るものであり、可能な限り広い範囲の問題をカバーすることが期待される。調査結果の活用ということを視野に入れた場合、一般に外来語表記のゆれと認識されているものをできる限り調査対象に入れる方がよいと考えられる。

4.2. ゆれの認定に関する作業手順

BCCWJの形態論情報は、形態素解析器MeCabと形態素解析用辞書UniDicを用いて付与したものである(注7)。そのため、BCCWJの形態論情報もUniDicと同様の階層的な構造を持っている。具体的には、最上位に語彙素（国語辞典の見出しに相当）があり、その下に語形（語形の違いを区別する層）、更に語形の下に書字形（表記の違いを区別する層）という3階層である（表2）。

表2　BCCWJの形態論情報の構造

語彙素	語　形	書字形
コンピューター	コンピューター（名詞）	コンピューター
	コンピュータ（名詞）	コンピュータ

BCCWJの形態論情報では、表2から分かるように「コンピューター」「コンピュータ」を別語形として扱っている。一方、本稿の立場は、これらを同一語形における表記のゆれとして扱おうというものであるため、「コンピューター」「コンピュータ」を別語形とするデータ構造は、調査に適さないとも言える。そこで、小椋（2013）と同様に、新たに「集計用語形」という層を設けた（表3）。「集計用語形」は、語彙素と同じ語形で、語形と同じ品詞を持つ層である。

表3　集計用語形を加えた形態論情報の構造

語彙素	集計用語形	語　形	書字形
コンピューター	コンピューター（名詞）	コンピューター（名詞）	コンピューター
		コンピュータ（名詞）	コンピュータ

この語彙素、集計用語形、書字形という階層に基づき表記のゆれを認定した。具体的には「任意の異なる二つの書字形が、同じ語彙素・集計用語形・品詞を持つ場合、同じ語の表記のゆれと認める。」とした。

集計用語形レベルで集計を行うため、以下に示す語数は、全て集計用語形の数である。なお本稿では、語の表記を示す際には「コンピューター」「コンピュータ」のように鍵括弧を付け、語を示す際には《コンピューター》のように二重山括弧を付ける。

5．調査結果

5.1．外来語表記のゆれの割合

ここでは、各レジスターにおいてどの程度、外来語表記のゆれが見られるのか見ていくこととする。表4に、表記にゆれの見られる外来語の異なり語数（「ゆれ」の欄）と異なり語数全体（「異なり」の欄）に占めるその割合を示した。

表4　表記にゆれのある語の割合

	異なり	ゆれ	割合
Web	2,054	234	11.4%
雑誌	2,176	276	12.7%
新聞	2,023	92	4.5%
書籍	1,071	28	2.6%
白書	663	16	2.4%

表4を見ると、外来語表記のゆれの割合は、雑誌が12.7%で最も高く、Webが11.4%でそれに次ぐ。この二つのレジスターのゆれの割合が1割を超えている。書籍・新聞・白書のゆれの割合は、5%以下である。この中では、新聞が4.5%で最も高く、書籍が2.6%、白書が2.4%となっている。

本稿冒頭でも述べたように、外来語表記のゆれは、しばしば問題となる。しかし表４に示した結果を見ると、ゆれの割合は必ずしも高いとはいえない。これは、表４に示した外来語表記のゆれの割合が度数１の語を含んで集計していることによる。当然のことながら、表記のゆれは度数１の語では発生しない。そして、外来語は低頻度語が多い。レジスター別に、度数１の外来語の異なり語数と外来語の異なり語数に占める割合とを見ると、Web:930 語（45.3%）、雑誌:892 語（41.0%）、新聞:909 語（44.9%）、書籍:496 語（46.3%）、白書:277 語（41.8%）で、どのレジスターにおいても異なり語数の 40%強を占めている。つまり、４割程度の語にはゆれが生じないのであり、そのような語を含んで集計を行った結果、表４に示したような割合となったと考えられる。

そこで、ゆれが生じる可能性のある度数２以上の語に限って集計し直した。結果は表５のとおりである。これはゆれが生じる可能性のある語が実際にどの程度ゆれているかを示したものである。

表５　表記にゆれのある語の割合

	異なり	ゆれ	割合
Web	1,124	234	20.8%
雑誌	1,284	276	21.5%
新聞	1,114	92	8.3%
書籍	575	28	4.9%
白書	386	16	4.1%

表４と比べてレジスター別順位に変動はない。しかし各レジスターとも、ゆれの割合は高くなっている。雑誌･Web は共に 20%以上となり、新聞は 8%台、書籍・白書は 4%台となっている。

以上のように、表４、表５から外来語表記のゆれの割合に、レジスターによる差のあることが分かる。また表５からは、ゆれの割合が２割台の Web・雑誌と１割以下の新聞・書籍・白書とに大きく二分することができる。なお１割以下の新聞・雑誌・白書については、さらに新聞と書籍・白書とに二分することができる。

5.2. 外来語表記のゆれの類型

本節では、各レジスターにおいて表記がゆれている語を対象に、どのような表記のゆれが、どのくらいあるのか見ていくこととする。国立国語研究所(1983)、宮島・高木（1984）を参考に、表記のゆれを次の３類型に分類する。

(a) 外来語表記法の対立

【例】 コンピューターーコンピュータ、バイオリンーヴァイオリン

(b) 異なる文字体系間の対立

【例】 ページー頁、エコーECO、パンーぱん

(c) 符号等による表記と他の表記との対立

【例】 アットー@、パーセントー%、クリスマスーXマス

これらの３類型に分類した結果を表６に示した。

表６　外来語表記のゆれの類型

	(a) 外来語表記法の対立		(b) 異なる文字体系間の対立		(c) 符号等による表記と他の表記との対立		合計
	異なり	割合	異なり	割合	異なり	割合	
Web	66	26.4%	176	70.4%	8	3.2%	250
雑誌	50	17.4%	227	79.1%	10	3.5%	287
新聞	22	23.2%	65	68.4%	8	8.4%	95
書籍	12	42.9%	15	53.6%	1	3.6%	28
白書	7	43.8%	7	43.8%	2	12.5%	16

ゆれのある外来語の中には、複数の類型に分類されるものがある。例えば、雑誌では、《インターフェース》の表記に「インターフェース」「インターフェイス」「Interface」の３種類が出現する。このうち、「インターフェースーインターフェイス」のゆれは類型（a）に分類され、「インターフェース・インターフェイスーInterface」のゆれは類型（b）に分類される。そのため、《インターフェース》は類型（a）と類型（b）の二つに分類されることになる。表６の異なり語数の合計と表５に示したゆれのある語の異なり語数とが一致しないレジスターがあるのは、このことによる。

表６を見ると、各レジスターに共通の傾向として、類型（b）に属するもの

が最も多く（白書のみ類型（a）と（b）とが同率）、以下、類型（a）、類型（c）の順となっていることが挙げられる。

類型（b）の割合が高いのは雑誌・Webで、共に７割台である。新聞も68.4%でWebに次ぐ。次に類型（a）の割合が高いのは書籍・白書で、共に４割台である。次いで、Web・新聞が２割台となっている。

雑誌・Web・新聞は、他のレジスターに比べて類型（b）の割合が高い点が、書籍・白書は、他のレジスターに比べて類型（a）の割合が高い点が特徴といえる。

5.3. 外来語表記法の対立

外来語表記のゆれの３類型のうち、外来語表記のゆれとして問題となるのは、類型（a）である。本節では、類型（a）に属する表記のゆれには、具体的にどのようなゆれがあるのか見ていく。

類型（a）に属する外来語表記のゆれを、更に分類し、各分類に属する語の異なり語数とその割合を示したのが表７である。

まず、表７の分類について簡単に説明しておく。

（ア）第１表：『外来語の表記』第１表内の仮名による表記法の対立

【例】　アイデアーアイディア

（イ）第１表－第２表：第１表の仮名による表記と第２表の仮名による表記の対立

【例】　バイオリンーヴァイオリン

（ウ）語末長音：語末長音を長音符号で書くか省くかの対立

【例】　コンピューターーコンピュータ

（エ）語中長音：語中長音を長音符号で書くか省くかの対立

【例】　マネージャ・マネージャーーマネジャー

（オ）長音－連母音：長音として長音符号で書くか連母音で書くかの対立

【例】　メールーメイル

（カ）イアーイヤ：イ列音の次のアの音を「ア」と書くか「ヤ」と書くかの対立

【例】　ピアノーピヤノ

表７　外来語表記法の対立の内訳（異なり語数）

	(ア)第１表	(イ)第１表－第２表	(ウ)語末長音	(エ)語中長音	(オ)長音－連母音
Web	7	7	18	3	5
	11%	11%	27%	5%	8%
雑誌	7	10	10	3	14
	14%	20%	20%	6%	28%
新聞	1	1	5	2	5
	5%	5%	23%	9%	23%
書籍	2	4	3	0	0
	17%	33%	25%	0%	0%
白書	1	0	4	1	1
	14%	0%	57%	14%	14%

	(カ)イアーイヤ	(キ)クスーキス	(ク)促音	(ケ)撥音	(コ)清濁	(サ)その他
Web	2	1	4	0	9	11
	3%	2%	6%	0%	14%	17%
雑誌	0	0	0	1	2	6
	0%	0%	0%	2%	4%	12%
新聞	1	0	1	1	1	3
	5%	0%	5%	5%	5%	14%
書籍	1	0	0	0	0	2
	8%	0%	0%	0%	0%	17%
白書	0	0	0	0	1	0
	0%	0%	0%	0%	14%	0%

（キ）クスーキス：英語のつづりのｘに相当するものを「クス」と書くか「キス」と書くかの対立

【例】　テクストーテキスト

（ク）促音：促音の有無の対立

【例】　ルネッサンスールネサンス

（ケ）撥音：撥音の有無の対立

【例】　エンターテインメントーエンタテイメント

（コ）清濁：清音と濁音の対立

【例】　スムースースムーズ

（サ）その他：上記以外の表記のゆれ　（用例省略）

前節における３類型への分類と同様に、複数の種類に分類されるものがあるため、各種類に属する異なり語数をレジスターごとに合計すると、表６に示した類型（a）の異なり語数を超える場合がある。また、表７の割合は、各

種類の異なり語数を表６に示した類型（a）の異なり語数で割って求めたものである。そのため、割合の合計が100%を超える場合がある。

各レジスターにおいて、所属語数の割合が最も高いものを見ると、雑誌は類型（オ）、新聞は類型（ウ）（オ）、Web・白書は類型（ウ）である。なお類型（ウ）は、雑誌・書籍において、割合の高さが共に第２位となっている。語末長音の有無に関するゆれ、長音と二重母音とのゆれは、全てのレジスターで見られる現象ということができる。

類型（ウ）に属する語の例としては、次のようなものが挙げられる。語末がア段長音、イ段長音のものが見られる。

コンピューターに新しいプログラムが入ったばかりで

（書籍、PB53_00055）

一気に経理コンピュータへ流し込みます。（書籍、PB44_00050）

セキュリティーしてれば、心配ないですか？（Web、OC02_00029）

セキュリティを掛けておきましょう（Web、OC02_01062）

類型（オ）に属する語の例としては、次のようなものが挙げられる。

粘り強くつなぐプレースタイルで（新聞、PN2d_00018）

病院のプレイルームで（新聞、PN1e_00003）

インテリアコーディネーターによって（雑誌、PM11_00322）

洞口健児さん（アウトドアコーディネイター）（雑誌、PM45_00132）

書籍は、類型（イ）が33%で最も多い。類型（イ）は、雑誌・Webの両レジスターで割合が第２位となっている。類型（ア）も新聞を除く四つのレジスターで１割台となっている。新聞を除く四つのレジスターにおいては、「チェ」「ティ」「ウィ」等の外来音に関する表記のゆれが、長音に関する表記のゆれに次いで多く見られる。

類型（ア）（イ）の例としては、次のようなものが挙げられる。

プラスチックのたらいの中に（書籍、PB1n_00025）

プラスティック素材で完成したドレッサー（書籍、PB35_00013）

ソフトウエアのダウンロード（雑誌、PM15_00058）

十一種類のソフトウェアもバンドルされ（雑誌、PM45_00056）

6．考察

6.1．表記のゆれの割合

5.1 節で指摘したように、今回調査した五つのレジスターは、外来語表記のゆれの割合によって、2 割台の Web・雑誌と 1 割以下の新聞・書籍・白書と、大きく二つに分けることができる。また表記のゆれが 1 割以下の新聞・書籍・白書も、新聞と書籍・白書とに二分できる（表 5 参照）。

本節では、表記のゆれの割合によって、五つのレジスターが二つ、ないし三つに大きく分けられる要因について考察を行う。なお、考察に当たって注意すべきことがある。それは表 5、表 6 から分かるように、ゆれを持つ語の異なり語数がレジスターによってかなり異なることである。特に書籍は 28 語、白書は 16 語と他と比べて非常に少ない。したがって、今回の調査を基に、表記のゆれの割合によってレジスターが二分、若しくは三分される要因について、明確にすることは難しい。本稿では、一つの見通しを得るための分析手法を提示することとし、今後 BCCWJ 全体を調査すること等によって、要因をより明確にしていくこととする。

レジスター別に表記のゆれの割合を示した表 5 と表記のゆれの類型を示した表 6 とを併せて見ると、表記のゆれの割合が高い Web・雑誌に共通する特徴として、類型（b）の割合が高いことが指摘できる。Web・雑誌共に、表記にゆれのある語の 7 割以上が類型（b）に属している。また、新聞も類型（b）に属する語の割合が雑誌に次いで高く、約 7 割である。

次に、Web・雑誌・新聞を対象に、具体的にどの文字体系と、どの文字体系との対立があるのかを、その異なり語数と共に一覧したのが表 8 である。

表 8 から、どのレジスターとも片仮名と英字との間の対立が最も多いことが分かる。具体的な語例を見ると、Web では、IT 関連用語を中心に英字表記されたものが、新聞・雑誌では欄のタイトルや英字表記された固有名詞で用いられた例が見られる[注8]。

NET で再開する可能性もありますので（Web、OC14_00019）

下北沢 CLUB Que でワンマンを（雑誌、PM11_00166）

Hotel　世界のエクセレントホテル（雑誌、PM13_00008）

ALBUM　私の先生キャスター（新聞、PN1c_00001）

表8　類型（b）の内訳

	Web	雑誌	新聞
片仮名－英字	153	218	44
片仮名－英字－漢字	0	1	1
片仮名－英字－平仮名	4	0	0
片仮名－漢字	4	4	4
片仮名－平仮名	13	3	13
片仮名－平仮名－漢字	1	1	0
平仮名－英字	1	0	2
平仮名－漢字	1	0	2
漢字－英字	1	0	0

ただし英字表記が片仮名表記を上回る例は、非常に少ない。Webでは《カテゴリー》《ナンバー》《フォルダー》《フリー》の4語、雑誌では《アイディア》《ソフトウェア》《ファースト》《カーブ》の4語である。新聞には見られない。

片仮名表記が主体であるところに、部分的ではあるが、英字表記が用いられることによって、表記にゆれが生じることになる。そして、そのような語が多く見られることにより、ゆれの割合の高さにつながっているといえる。

以上のことから、Web・雑誌の表記のゆれの割合を高めている要因として、英字表記される語の存在を指摘してよいであろう。また、新聞も、Web・雑誌よりはゆれの割合が低いものの、書籍・白書よりは割合が高くなっている。これについても英字表記される語の存在が関わっていると考えられる。

一方、書籍・白書で類型（b）の割合が低いのは、書籍については、縦書きの書籍も多数含まれることが関わっていると考えられる。白書は、そもそもゆれを持つ語が16語と少なく、表記がかなりの程度統一されていると予想される。これらの点については、BCCWJ全体を調査することで明らかにする必要がある。

6.2. 外来語表記法の対立について

5.3節で見たように、外来語表記法の対立のうち、長音に関する表記の対立は、全レジスターに共通して多く見られた。また、新聞を除く四つのレジスターについては、類型（ア）（イ）も長音に関する表記の対立に次いで多く見られた。こうした表記のゆれが多く見られる要因としては、本稿冒頭で述べた『外来語

の表記』の性格、つまり語形や表記の統一を図ろうとするものではないという緩やかな基準という性格が挙げられる。以下、『外来語の表記』の規定を参照しながら、このことを確認していきたい。

類型（ア）（イ）は、外来音に関する表記法の対立である。松崎（1992、1993）でも取り上げられている外来音であり、従来の日本語音韻体系にはない、新しい音といえよう。その新しい外来音をどう表記するかというゆれである。

『外来語の表記』では、外来語を表記する際に用いる片仮名として、一般的に用いる仮名（第１表）と原音や原つづりになるべく近く書き表す場合に用いる仮名（第２表）の２種を掲げる。類型（イ）のゆれは、外来語を表記する際の立場（原音等に近く表記するか否か）による仮名の選択に起因するものといえる。

類型（ア）は、第１表の仮名で表記する場合でも、次の例にあるように、慣用を認めるという基準になっていることに起因するものである。

１「シェ」「ジェ」は、外来音シェ、ジェに対応する仮名である。

〔例〕シェーカー　シェード（以下略）

注１「セ」「ゼ」と書く慣用のある場合は、それによる。

〔例〕ミルクセーキ　ゼラチン

『外来語の表記』実施以前に、外来音の表記に複数の仮名が用いられており、それを一つに限定することなく、慣用を尊重するという立場から、『外来語の表記』では引き続き複数の仮名を認めている。そのため、現代においても外来音の表記の仕方においてゆれが継続しており、それが表７に示したような形で現れていると考えられる。

類型（ウ）は、外来語の語末長音は、元々語形が不安定であるのに加え[注9]、次に示すように『外来語の表記』で、長音符号を省く表記を慣用として認めていることに起因するものである。

英語の語末 -er、-or、-ar などに当たるものは、原則としてア列の長音とし長音符号「ー」を用いて書き表す。ただし、慣用に応じて「ー」を省くことができる。

〔例〕エレベーター　ギター　コンピューター　マフラー

エレベータ　コンピュータ　スリッパ

語形の不安定さと慣用を尊重する規定とが相まって、全レジスターでゆれが多く観察されることにつながっていると考えられる。

7．おわりに

本稿では、BCCWJ のコアデータを対象に外来語表記のゆれの実態調査を行った。その結果、次のことが明らかとなった。

(1) 外来語表記のゆれにはレジスターによる差異が見られる。ゆれの割合が２割台の Web・雑誌と１割以下の新聞・書籍・白書とに大きく二分される。

(2) 外来語表記のゆれの類型についてもレジスターによる差異がある。雑誌・Web・新聞の特徴は、類型（b)「異なる文字体系間の対立」の割合が高い点であり、書籍・白書の特徴は、類型（a)「外来語表記法の対立」の割合が高い点である。

(3) 外来語表記法の対立については、長音に関する表記のゆれが全てのレジスターに多く見られる。外来音の表記のゆれ（類型（ア）（イ））がそれに次ぐ。

外来語表記のゆれにレジスターによる差異が見られる要因としては、Web、雑誌及び新聞において英字表記された外来語が用いられることを指摘した。また、外来語表記法の対立のうち、長音に関する表記のゆれ、外来音の表記のゆれが多く見られる要因として、『外来語の表記』が慣用を認めるという立場を取る、緩やかな基準という性格であることを指摘した。

今回の調査の問題点としては、具体的にどういうゆれであるか、細かく分類して見ていく過程で、用例数が少なくなり、十分な分析ができなかったことが挙げられる。本稿の調査結果を一つの見通しとして、今後、BCCWJ 全体を活用した調査を行う必要がある。

注

1）BCCWJ は、Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese の略である。その設計等については、山崎（2007)、前川（2008）を参照。コアデータの設計・構成等については、小椋・小木曽・小磯ほか（2009）を参照。

2）特定の外来音について扱ったものとしては、NHK の放送における用語・用字の基準と関連して、塩田（2006、2012）、山下（2012a、2012b、2012c）がある。
　通時的な研究としては、宮島・高木（1974）、橋本（2010）がある。

3）小椋（2012、2013）では「媒体」と呼んでいた。本稿では、前川（2012）にならい媒体をレジスターの代用とし、以下、レジスターと呼ぶこととする。この場合のレジスターとは、「言語が実際に運用される場の社会的状況―例えば発話の目的、発話者の属性、受容者との関係など―に依存して定まる言語の変種で、発話の全体にわたって分布する言語特徴によって決定されるもの」（前川 2012:216）という意味である。

4）長単位はテキストの言語的特徴の解明を目的とした言語単位で、短単位は用例収集を目的とした言語単位である。長単位、短単位の設計方針、認定規程等については、小椋・小磯・冨士池ほか（2011）を参照。

5）BCCWJ は、出版サブコーパス、図書館サブコーパス、特定目的サブコーパスの三つのサブコーパスで構成される。このうち出版サブコーパスには、2001 年 -2005 年発行の新聞・雑誌・書籍から取得したサンプルが収録されている。延べ語数（短単位）は、新聞：約 137 万語、雑誌：約 444 万語、書籍：約 2855 万語である。

6）BCCWJ の各レジスターにおける文字数比率及びその算出法等については、丸山・秋元（2007、2008）を参照。

7）UniDic の概要については伝・小木曽・小椋ほか（2007）を参照。

8）これらの例については、書き手が外来語としてではなく、外国語として用いている可能性もあるが、外来語と外国語とを区別することは非常に難しい。本稿では、可能な限り広い範囲の問題をカバーすることを考えて、英字表記されたものも外来語として扱うこととした。

9）前川（2002）では、外来語は漢語より短呼率が高いこと、アクセント規則と核の有無の効果との相乗効果で、語末における短呼率が高いことなどが指摘されている。

【参考文献】

小椋秀樹（2012）「コーパスに基づく現代語表記のゆれの調査―BCCWJ コアデータを資料として―」『第 1 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』

――――（2013）「大規模コーパスを活用した外来語表記のゆれの調査」『立命館文学』630

小椋秀樹・小木曽智信・小磯花絵・冨士池優美・宮内佐夜香・渡部涼子・竹内ゆかり・小川志乃・小西光・原裕・中村壮範（2009）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における形態論情報付与作業の進捗状況」『特定領域「日本語コーパス」平成 20 年度公開ワークショップ（研究成果報告会）予稿集』

小椋秀樹・小磯花絵・冨士池優美・宮内佐夜香・小西光・原裕（2011）『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集 第4版（上・下）』（国立国語研究所内部報告書 LR-CCG-10-05-01、LR-CCG-10-05-02）
国立国語研究所（1983）『現代表記のゆれ』（国立国語研究所報告 75）
塩田雄大（2006）「外来語の発音とカタカナ表記 ～［エイ・セイ・ケイ］などを中心に～」『放送研究と調査』56-3
———（2012）「放送の外来語－傾向と対策－」、陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫編『外来語研究の新展開』おうふう
伝康晴・小木曽智信・小椋秀樹・山田篤・峯松信明・内元清貴・小磯花絵（2007）「コーパス日本語学のための言語資源－形態素解析用電子化辞書の開発とその応用－」『日本語科学』22
橋本和佳（2010）『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ書房
前川喜久雄（2002）「話し言葉における長母音の短呼－『日本語話し言葉コーパス』を用いた音声変異の分析－」『国語学会 2002 年度春季大会要旨集』
———（2008）「KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の開発」『日本語の研究』4-1
———（2012）「「形容詞＋です」述語の生起要因についての準備的考察」『第1回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』
松崎寛（1992）「外来語音におけるゆれの類型－辞典類の表記を中心として－」『言語学論叢』10・11
———（1993）「外来語音の表記のゆれに関する定量的研究」『東北大学文学部日本語学科論集』3
丸山岳彦・秋元祐哉（2007）『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』におけるサンプル構成比の算出法－現代日本語書き言葉の文字数調査－』（国立国語研究所内部報告書 LR-CCG-06-02）
———（2008）『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』におけるサンプル構成比の算出法（2）－コーパスの設計とサンプルの無作為抽出法－』（国立国語研究所内部報告書 LR-CCG-07-01）
宮島達夫・高木翠（1974）「外来語の表記の変化とゆれ」『計量国語学』71
———（1984）「雑誌九十種資料の外来語表記」『研究報告集』5（国立国語研究所報告 79）
山崎誠（2007）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の基本設計について」『特定領域「日本語コーパス」平成18年度公開ワークショップ（研究成果報告会）予稿集』
山下洋子（2012a）「外来語の表記・発音について「ウイ・ウエ・ウオ」か「ウィ・ウェ・

ウォ」か」『放送研究と調査』62-4
――― (2012b)「外来語の発音・表記について ～ [wi][we][wo] と二重母音 [ei] ～」『放送研究と調査』62-9
――― (2012c)「外来語の発音・表記について ～ [wei] のカタカナ表記と語末の長音～」『放送研究と調査』62-12

【関連 URL】
外来語の表記：http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/joho/kijun/naikaku/gairai/
UniDic：http://download.unidic.org/
MeCab：http://mecab.googlecode.com

分かりにくい医療用語の類型と語の性質

田中　牧郎

キーワード：専門用語　医療用語　コーパス　認知度・理解度　誤解

１．はじめに

専門家から非専門家に情報を伝える際に障害となることの一つに、分かりにくい専門用語の存在がある。近年、その専門用語を分かりやすく言い換えたり説明したりする工夫の検討が、いくつかの専門分野で行われている。この動向の背景には、自らの問題については、専門家に判断を委ねるのではなく、自らの責任で意思決定をすることに価値を置くようになってきたことや、社会的に重要な問題は、専門性を帯びる内容であっても、専門家だけで議論をしたり決定をしたりするのではなく、非専門家もこれに加わることの必要性が意識されるようになってきたということがある。こうした方向への社会の変化は今後も続いていくことが予想されるから、専門用語を分かりやすくすることに役立つ言語研究の重要性は、今後も高まっていくだろう。

国立国語研究所も、社会における言語問題の改善を主要な任務の一つとしていた独立行政法人であった時代に、上記の問題に取り組み、役所から国民・住民に情報を伝える際に障害になっていた「外来語」と、病院から患者に情報を伝える際に障害になっていた「病院の言葉」（医療用語）について、分かりやすく言い換えたり説明したりする方策について提案を行った。「『外来語』言い換え提案」と「『病院の言葉』を分かりやすくする提案」の二つの提案である(注1)。

これらの提案は、種々の調査と多方面からの検討を踏まえて実施されたものであるが、提案自体は、当事者である専門家（役所職員、医療者など）に使いやすい形に単純化して示し、調査と検討の過程も、比較的単純なデータや、要点をまとめた記録などとして公開したために、提案までの過程で見えてきた研究上の重要な論点について掘り下げた研究を行うことは、あまり十分でなかっ

た[注2]。本稿は、「病院の言葉」に関する提案で示した医療用語の類型に関して、各類型に属する語の性質について詳しく考察しようとするものである。

2．分かりにくい医療用語の分類

2009年に発表した、国立国語研究所「病院の言葉」委員会による「『病院の言葉』を分かりやすくする提案」は、分かりにくい医療用語への対応として、図1のような類型を提示し、「分かりやすく伝える工夫」の枠線内に示す、類型A、B（1）（2）（3）、Cの3種5類型を代表する語を、全部で57語取り上げて、分かりやすくするための具体的な工夫を、事例によって示した。

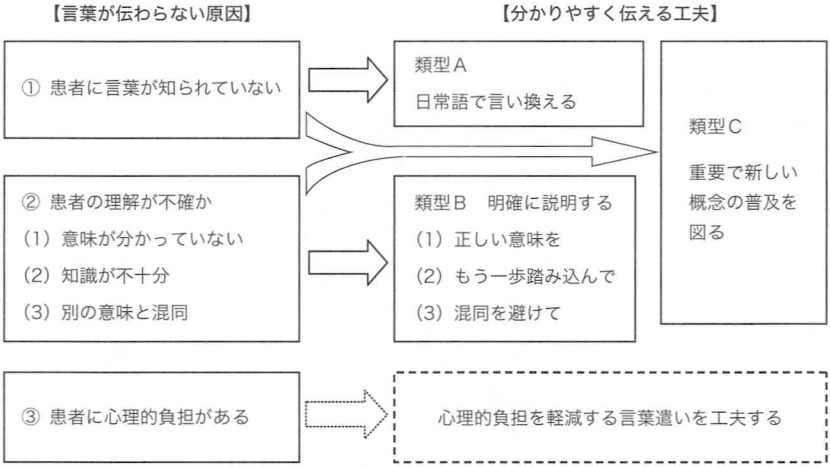

図1　「病院の言葉」を分かりやすくする類型

図1において、「言葉が伝わらない原因」として示した①～③については、「病院の言葉」委員会が、医師に対して行った、患者に言葉が伝わらなくて困った経験についての調査（「医師に対する問題語記述調査」、以下「医師への調査」と呼ぶ）と、医療職に就いていない人に対して行った、医療用語の認知度や理解度の調査（「非医療者に対する理解度等の調査」、以下「認知度・理解度の調査」と呼ぶ）に基づいて、導き出したものである[注3]。

医師への調査は、医師451人に対して次の質問をして、一定期間内にインター

ネット上の指定のサイトに書き込んでもらったもので、364人の医師により約800種類の言葉、約1500件のできごとが書き込まれた。

問1：あなたや同僚が患者やその家族とコミュニケーションする際に、理解してもらうことが難しいと感じたことがある言葉を、一つ挙げてください。

問2：そのときのできごとについて、できるだけ具体的にお書きください。

また、認知度・理解度の調査は、「病院の言葉」委員会で選定した100語について、医療職に就いていない20歳以上の男女10,811人に、インターネットを通して次のように質問し（例は「壊死」のもの）、4,267人が回答した。

問1：あなたは「壊死」という言葉を見たり聞いたりしたことがありますか。

a　ある　　b　ない

問2：(問1でaと回答した人に）あなたは、病院で使われる「壊死」という言葉が、「病気やけがのために、からだの一部の組織や細胞が死ぬこと」という意味であることを知っていましたか。

a　知っていた　　b　知らなかった

問1にaと回答した人の比率を「認知率」、問2にaと回答した人が問1の段階の回答者全員の中で占める比率を「理解率」として集計した。

認知度・理解度の調査の結果をもとに、指標を立てて、表1のような分類を実施した(注4)。

表1　認知度・理解度による用語の分類

類別	性質	基準
a類	言葉が知られていない	認知率が低い（60%未満）
b類	言葉は知られているが、意味が正しく理解されていない	認知率が高く（60%以上）、認知率と理解率の差が大きい(15ポイント以上)
c類	言葉は知られており、意味も正しく理解されている	認知率が高く（60%以上）、認知率と理解率の差が小さい(15ポイント未満)

図1の「言葉が伝わらない原因」の①は表1のa類に相当し、同じく②（1）はb類に相当する。また、②（2）（3）及び③は、認知率・理解率だけの指標では分類できないが、②（2）はc類の一部が、②（3）はb類の一部が該当する(注5)。なお、③は、言語研究の範囲を超えていて、この調査では扱えない。

この調査が対象とした100語の中には、医療に隣接する介護の分野の用語

の問題を探るために、「介護老人保健施設」「グループホーム」「ADL」をあえて含めているが、本稿で各類に属する語彙の性質を詳しく考察していく際に、異分野の語彙が入っていると説明が複雑になる面があるので、以下の考察ではこれらを除外し、医療分野の用語である97語を扱っていくことにする。

3．一般媒体での使用実態の調査

3.1．調査の目的

a類、b類、c類の三つに分類する根拠となっている、各語に対する一般の人々の認知や理解の度合いは、どのようにして決まっていくものだろうか。これらの語やそれが表す意味について、医療機関にかかった際に医療者から詳しく説明を受けることや、学校での授業の中で学ぶこともあるだろうが、それは、一般の人々が医療に関わる言葉に触れる全体から見ればごく一部に過ぎないであろう。多くの語については、むしろ、日常的に接触する媒体でそれらがどのように使われているかということが、人々の語の認知や理解のありようを決めていっている面が強いのではないだろうか。そうであれば、人々の認知のありようは、一般的な媒体での使用頻度、使用場面、意味・用法などを観察することを通して、明らかにしていくことができるのではないだろうか。

3.2．一般媒体での頻度

一般の人々が日常接触する媒体のうち、読むことによって触れる媒体については、現代の書き言葉を代表した設計になっている、国立国語研究所編『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を調べるのがよい(注6)。このコーパスに収められたサブコーパスのうち、「図書館書籍サブコーパス」は、書き言葉の流通実態（つまり、よく読まれているものの代表）を反映するように設計されているので、一般の人々がよく触れる媒体での語の使用実態を調べるのに格好の資料だと見ることができる。具体的には「図書館書籍サブコーパス」は、東京都の公立図書館の蔵書リストをもとに、多くの図書館が共通して所蔵する図書から無作為にサンプルが採られている。

なお、2節で紹介した、認知度・理解度の調査は、より多くの語を対象に調べるにはコストがかかる。そこで、筆者らは、コーパスにおける語の使用頻度

を利用した統計処理によって、専門性の高い語や重要な語を抽出したり、抽出した語を分類したりする研究を行ったことがある[注7]。それらの研究が語の抽出や分類を目的としていたのに対して、本稿で試みるのは、分類に反映している人々の認知や理解のありようを、各種媒体での語の使用実態を分析することを通して考えていくことである。単に頻度だけでなく、コーパス中の各語の意味・用法や使用場面などを分析し、医師への調査や認知度・理解度の調査とも関連付けていくことで、分かりやすさ・分かりにくさに関する語の性質の解明につなげていくことができると予想するからである。

表２は、上記のａ類、ｂ類、ｃ類に分類した97語について、病気や症状などに関する語と、検査や治療（薬剤や医療制度も含む）などに関する語とに分け、「図書館書籍サブコーパス」の「固定長サンプル群」の頻度を括弧内に示したものである。「固定長サンプル群」とは、コーパスのサンプルに採られた書籍について、各サンプル1000字という固定した長さの文章をデータ化したものである。長さが固定されていることから、語の出現頻度を分析するのに好適なサンプル群である。

表２に示した各類の頻度の平均を計算すると、ａ類が2.5、ｂ類が26.9、ｃ類が38.9となり、ａ類が最も低く、ｃ類が最も高く、ｂ類がその中間である。このことは、一般によく読まれている媒体での頻度が高い語ほど、一般の人々によく認知され理解されており、反対にその頻度が低い語ほど、あまり認知されず理解もされていないということを示していると言えるだろう。

一方、表２で、語別の数値を見ればすぐに気づくことだが、上記のような全体的傾向に反して、ａ類の中に頻度が低くない語が混じっていたり、ｃ類の中に頻度が低い語が混じっていたりすることも確かである。このような例外に見える語については、後に取り上げる。

表2　各語の「図書館書籍サブコーパス」での頻度

	病気や症状など	検査や治療など
a類	振戦(0)、ネフローゼ症候群(0)、日和見感染(0)、COPD(0)、DIC(0)、イレウス(1)、間質性肺炎(1)、誤嚥(1)、寛解(2)、せん妄(2)、重篤(5)、統合失調症(5)、虚血性心疾患(6)、予後(6)、塞栓(7)、浸潤(10)	エビデンス(0)、緩和ケア(0)、クオリティーオブライフ(0)、クリニカルパス(0)、集学的治療(0)、プライマリーケア(0)、EBM(0)、HbAlc(0)、生検(1)、MRSA(1)、QOL(3)、レシピエント(4)、ターミナルケア(10)、耐性(10)
b類	慢性腎不全(0)、メタボリックシンドローム(0)、悪性リンパ腫(1)、髄膜炎(1)、敗血症(1)、肉腫(2)、川崎病(3)、肺水腫(5)、狭心症(6)、膠原病(6)、腎不全(6)、インフルエンザ(9)、貧血(17)、心筋梗塞(18)、合併症(19)、腫瘍(36)、潰瘍(47)、炎症(54)、ウイルス(179)、ショック(222)	腫瘍マーカー(0)、頓服(0)、PET(0)、コンプライアンス(7)、対症療法(9)、インスリン(13)、ガイドライン(25)、血糖(31)、ステロイド(36)
c類	悪性腫瘍(3)、うっ血(4)、自律神経失調症(4)、狭窄(5)、黄だん(9)、熱中症(11)、壊死(12)、白血病(16)、ポリープ(19)、血栓(26)、肝硬変(30)、動脈硬化(37)、うつ病(45)、ぜん息(46)、糖尿病(90)、がん(581)	かかりつけ医(0)、術後合併症(0)、ノロウイルス(0)、院内感染(1)、セカンドオピニオン(1)、臨床試験(1)、既往歴(2)、抗生剤(3)、治験(3)、尊厳死(4)、MRI(5)、ホスピス(6)、化学療法(7)、カテーテル(10)、インフォームドコンセント(11)、抗がん剤(16)、CT(18)、脳死(30)、抗体(55)、副作用(62)、免疫(100)、リスク(204)

4．一般に知られていない語（a類）の特徴

4.1．一般媒体でほとんど用いられない語

「『病院の言葉』を分かりやすくする提案」では、言葉そのものが知られていないものは、日常語で言い換えることを提案した。図1の類型Aである。では、その言葉そのものが知られていないa類には、どのような性質の語が属しているのかということを考察する。

まず、一般媒体でほとんど用いられることのない一群がある。表2で頻度が0または1の、次の18語などがその典型的なものである。これらは、一般の人々にとって通常目にすることがほとんどない語であるために、知られていないわけである。

振戦、ネフローゼ症候群、日和見感染、COPD、DIC、イレウス、間質性肺炎、誤嚥、エビデンス、緩和ケア、クオリティーオブライフ、クリニカルパス、集学的治療、プライマリーケア、EBM、HbAlC、生検、MRSA

4.2. 意味の類推が難しい語

ａ類の語には、一般媒体での使用頻度が必ずしも低くないものも多い。例えば、表２の中には、「浸潤」「ターミナルケア」「耐性」のように、頻度が10件に達しているものもある。10件以下の語は、ｂ類やｃ類にも少なくなく、頻度だけから見れば、これらは、一般の人々にもっと認知されていてもよさそうである。比較的よく使われている語であるのに、なぜ知られていないのだろうか。「浸潤」を例に考えてみよう。

「浸潤」とは、がんの場合であれば、「がんがまわりに広がっていくこと」を意味する。表２で、「浸潤」と同じく、身体の中で起きる症状を表す語で、「浸潤」の10件よりも低頻度の５件でありながら、ｃ類（言葉は知られており、意味も正しく理解されている）に属している「狭窄」（「狭くすぼまっている」意味）と比較して考えてみよう。

「図書館書籍サブコーパス」の中の用例を見ると、まず、「浸潤」は、次のように使われている。

・ボルマンⅢ型・Ⅳ型は横に横にと広く発育する浸潤型の胃ガンである。（野原一夫『肺ガン病棟からの生還』）

・顆粒球は組織にびっしりとすき間のない浸潤を引き起こすに至る。（安保徹『免疫からの警鐘』）

一方、「狭窄」は、次のように使われている。

・急性のものに関しては十二指腸潰瘍といわれたからといって、そんなに恐れる必要はありません。ただ、治りやすいといっても繰り返し起こすと狭窄を起こし、今度はそれが原因で吐いたりする場合がありますから、（香坂隆夫『名医の診察』）

・緑内障による視野の狭窄（狭くなること）視野の低下は改善できないからです。（葉山隆一『強度近視、黄斑変性症は治せる』）

「狭窄」の例が、臓器が縮んでその管が狭くなったり、視野が狭くなったり

することを表していて、意味が比較的単純で、医学的な知識がなくても大体のところは理解できるのに対して、「浸潤」の例は、胃がんの型の分類であったり、顆粒球というものが組織に入り込んで広がっていったりすることを表しており、意味は複雑で、医学的な知識がないと、すぐにはその意味が理解できないだろう。

常用漢字表に入っていない漢字「窄」を含む「狭窄」は難解な語にも見えるが、「窄」が「すぼめる」「すぼまる」という訓を持っていることを知っていれば、「狭窄」すなわち「狭くなってすぼまること」という正しい意味を想起することは容易である。これに対して「浸潤」は、「浸」も「潤」も常用漢字表に入っているなじみのある漢字であるが、「浸」に「ひたる」、「潤」に「うるおう」という訓を結びつけて「ひたってうるおうこと」のように考えても、上に記したような医療分野で使われる「浸潤」の意味は連想できない。

このように「狭窄」は、その表記と使用文脈に触れるだけでも大体の意味の理解が可能であるのに対して、「浸潤」は、それだけでは意味を類推することができない。このため、「浸潤」という語に接触する機会があっても、記憶に残ることが難しく、認知度が上がらないのである。

このように考えてくると、a類に属する「耐性」「塞栓」「予後」「重篤」「寛解」なども、表記や文脈などからの類推では、医療用語としての意味がよく理解できないのではないかと思われる。下にこれらの語について、「病院の言葉」委員会が示した意味と、医療に関わる媒体（医療コーパス）に見られる典型的な使用例をあげよう。なお、「医療コーパス」とは、「病院の言葉」委員会が作成した、医療雑誌、新聞の医療面、ネット上の患者向け情報などを集めたもので、委員会での様々な検討に用いた非公開のデータである[注8]。

耐性：薬を繰り返して使ううちに菌が備えてしまった、薬に対する抵抗力
抗がん剤治療を続けても、耐性ができて効果がなくなるケースが多い。（『がんサポート』2007年2月号）

塞栓：血のかたまりや異物などが流れ込んで、血管をふさぐこと
塞栓は全身のどの臓器でも起きる可能性があり、胃梗塞や脾梗塞などがよく見られます。（『暮らしと健康』2007年7月号）

予後：病気のこれからについての見通し

病期は、治療法の選択や予後の推定に重要であり、現在はDurie & Salmonの分類法と呼ばれるものが最も広く用いられています。(『がんサポート』2007年1月号)

重篤：病状が、いちじるしく重いこと

頭痛の原因が脳血管障害などの重篤な病気の場合もあります。(『すこやかファミリー』2007年6月号)

寛解：症状が落ち着いて安定した状態

抗がん剤治療で寛解した後、数か月以内の患者さんがいい状態のときに移植を行うことにしているんです。(『がんサポート』2007年6月号)

「耐性」は、その表記と文脈をもとに「耐える性質」であるという意味の類推を行うところまでは容易だろうが、上にあげた例の「耐性ができて」をがん細胞が薬に対して耐える性質を持つようになったと理解するのは、あらかじめこの語の正しい意味を知っていなければ、難しいのではないだろうか。むしろ、患者に耐える性質ができると解釈してしまって、文意がとれなくなることもあるのではないか。一般媒体でよく使われるのは、「ストレスに対する耐性ができる」のように、人が何かに耐える性質という意味の使われ方である。医療を話題にした例でも、人が何かに耐えると解釈して、菌などと薬の関係を問題にする語であることにすぐには思い至らない場合もあるのではないだろうか。

また、「塞栓」については、「塞」は「ふさがる」「ふさぐ」、「栓」は文字通り栓と考え、そこから、何かをふさぐ栓を連想するのではないだろうか。ところが正しくは、「塞栓」の「栓」とは、「ふさぐ栓」ではなく「ふさぐこと」を言うのであり、上の例で一緒に使われている「梗塞」との違いも分かりにくい。同じ「栓」の字を用いる「血栓」が、文字通り「血の栓」を意味していて分かりやすく、c類に属しているのに対して、「塞栓」は、正しい意味を字面から類推することができないために、a類に属することになったのだろう。

同じように、「予後」を「後のことを予想すること」、「重篤」を「おもくあついこと」、「寛解」を「くつろいでとけること」などのようにして、表記から意味を類推したとしても、それぞれ、上述の医療用語としての意味とはかなり距離があり、正しい意味の類推は容易でないと考えられる。

4.3. 仮名表記、アルファベット表記の語

接触する機会があっても、その語の表記や文脈から、すぐにはその意味が類推しにくいものは、記憶に残りにくいために認知度が低くなると考えたが、そのような類推の困難さは、仮名表記やアルファベット表記の語の場合に、より強くなるだろう。「せん妄」「ターミナルケア」「レシピエント」「QOL」などが、これに該当する。

「せん妄」は「譫妄」と書かれることもあるが、「譫」が「たわごと」「うわごと」の意味を持っていることを知っている人は少ないだろう。「譫」は、常用漢字には入っておらず、医療用語としても通常仮名で書かれる。「さまざまな要因が絡み合ってうつ状態や妄想・徘徊・せん妄などの精神症状が現われます」(「広報きりしま」2008年5号、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』による)というような例を見て、「病気や薬のために話す言葉やふるまいに一時的な混乱が見られる状態」という意味を類推することは難しい。

「ターミナルケア」も、日本語になった「ターミナル」の語からまず思い浮かべるのは終着駅・終点など交通の分野での意味であり、英語terminalが形容詞として持つ「末期の」という意味は日本語として一般化していない。したがって「ターミナルケア」が末期患者のケアを行うことだという意味は、類推しにくい。「レシピエント」については、受け取る人という意味の英語recipientは一般語としては日本語に入ってきておらず、移植手術を受ける人のことに限定した医療専門用語として日本語に入ってきた状況である。「QOL」も、「Quality of Life」の略であることは、そのように説明を受けなければ、知ることができない。「イレウス」「COPD」「DIC」は、病気の名前であるが、その表記に意味を類推する手がかりが全くないことは、「レシピエント」や「QOL」の場合と同じである。

4.4. 語形の長い病名

病名のうち、語形が長い「間質性肺炎」「虚血性心疾患」「統合失調症」「ネフローゼ症候群」の4語が、a類に入っている。病名は、b類やc類に特に多く、一般に他のタイプの語に比べて認知度が高くなる傾向があるが、そのような中で、これらがa類に入っているのは、語形が長いということのほかにも、記憶に残

りにくい何らかの事情があったのではないかと思われる。各語の意味は次の通りである。

間質性肺炎：肺にある、酸素を取り込む働きを持つ肺胞を取り囲む部分に、炎症が起きる病気

虚血性心疾患：心臓の筋肉につながる動脈の、血のめぐりが悪くなるために起こる心臓の病気

統合失調症：感情や行動を一つの目的に合わせてまとめていくような、コントロールができなくなる心の病気

ネフローゼ症候群：大量の蛋白が尿として出てしまい、血液中の蛋白質が減少し、からだがむくむ腎臓の病気

これらの語の語構成は、「間質／性／肺炎」、「虚血／性／心／疾患」、「統合／失調／症」、「ネフローゼ／症候／群」というように分解でき、各構成要素の関係は明確である。ただ、単独では使わない「間質」や「虚血」を、「あいだの質」「うつろな血」などと分解して解釈してみても、その意味は類推しにくく、どのような病気であるか想像しにくい。「統合」は単独でも使うが、何を統合するかが示されていないと、やはりどんな病気かを類推するのは困難である。「ネフローゼ」も専門性の高い外来語であって、意味を類推する手がかりは全くない。

５．言葉は知られているが意味が正しく理解されていない語（b類）の特徴

5.1．一般媒体でよく用いられる語

認知されている語でありながら意味が正しく理解されてない語（ｂ類）を、見聞きした患者は、それらの語を知っていることが多いだろうから、何らかの内容を受け取ることができるだろう。しかし、意味が正しく理解されていないことが多いため、医療者がその語で伝えようとした内容がきちんと伝達されない場合も多くなる。その場合、その語を使う際に、その表す正しい意味の明確な説明を添えることを提案したのが、図１の類型Ｂ（１）である。そして、意味の理解が正しく行われない場合は、自らの理解している範囲で勝手な解釈をしてしまったり、意味の近い語や語形の近い語と混同してしまったりすることも多く、これに対応すべく、誤解や混同を避けた明確な説明を行うことを提

案したのが、同じく類型B（3）である。

表2で見たように、b類の語は全体として、一般的な媒体での使用頻度が、a類に比べて相当に高い。頻度が数十件に及ぶものも多く、中には100件を超えているものもある。しかし、「慢性腎不全」(0件)、「メタボリックシンドローム」(0件)、「頓服」(0件)、「PET」(0件)、「腫瘍マーカー」(0件)、「肉腫」(2件)、「川崎病」(3件）のように、b類の語であっても、一般的な媒体での使用頻度が低いものがあるのはなぜだろうか。これには、二つの理由が考えられる。

第一に、新しい語であるために、一般的媒体と扱っている「図書館書籍サブコーパス」が対象としている下限である2005年以前にはまだ登場していないか一般化しておらず、その後一般にもよく使われるようになって認知度も上がっていった語がある。例えば「メタボリックシンドローム」は、この症状が定義されたのが新しく、「腫瘍マーカー」「PET」は、これらの検査法が導入されたのが新しく、近年になって急速に普及したものである。

5.2. 記憶に残りやすい語

第二に、病気や薬の種類を表す語で、一般的な媒体ではあまり用いられなくとも、見聞きするだけで記憶に残りやすい語というものがあると考えられる。「川崎病」「慢性腎不全」「肉腫」「頓服」などが、これに該当する。

4節で見たように、a類の「間質性肺炎」「統合失調症」あるいは「浸潤」「寛解」などの病気や症状を指す語が、あまり記憶に残らない語であるのに対して、b類のこれら病名や薬の種類を表す語は、記憶に残りやすい面があるのではないか。例えば、病名の「慢性腎不全」は「慢性／腎不全」と区切った「慢性」は分かりやすく、「腎不全」という語自体もb類の語で、a類の「間質／性／肺炎」の「間質」が意味の類推が困難であったのと異なっている。「川崎病」の「川崎」も固有名詞に引き当てることが容易であり、「肉腫」も「肉／腫」と分解するまでもなく意味の類推に困難はないだろう。「頓服」は、語構成や表記から意味を類推することは難しいものの、おそらく、具体的な薬を指し示して使われた例に接触すると考えられるため、指示物と一体化することで、その語が記憶に残りやすいのではないかと思われる(注9)。薬のような具体物を指す語は、a類にはなかったものである。

5.3. 語形の短い病名

「インフルエンザ」「肺水腫」「髄膜炎」「腎不全」「狭心症」「心筋梗塞」「膠原病」「敗血症」といった、病気の名前が、ｂ類には多い。病名はａ類にも少しあったが、それらが長い語形であったり、語構成要素からどのような病気であるかが類推しにくく、認知されにくかった。これに対して、ｂ類の語の場合は、認知率が高く、「心筋梗塞」(99.2%)、「腎不全」(96.7%)、「狭心症」(94.2%)のように、90%台の極めて高い一群と、「膠原病」(82.1%)、「髄膜炎」(80.2%)、「肺水腫」(74.4%)、「敗血症」(70.1%) のように、80%台前半以下のものとに分けられる。

前者の認知率が非常に高いグループでは、病気の名前が極めてよく認知されているわけだが、理解率との差が大きいｂ類に入っているということは、それぞれ「心筋梗塞」＝「心臓の筋肉につながる動脈に血液が流れなくなって、心臓の筋肉がだめになってしまうこと」、「腎不全」＝「腎臓の働きが悪くなり、捨てなければならないものが、血液の中にたまってしまう病気」、「狭心症」＝「心臓の筋肉につながる血管の血のめぐりが悪くなり、胸のあたりにしめつけられるような痛みが起こる病気」といった、病気の詳しい内容までは理解が及んでいないということである。

また、後者の認知率がさほど高くないグループでは、誤解の調査で注意すべきデータが得られている。誤解の調査とは、先に述べた、認知度・理解度の調査と同時に、ありがちな誤解例を示して、その誤解をしていた人の比率を調べたものである。例えば「インフルエンザ」の場合であれば、次のような質問を行い、各選択肢を選んだ人が回答者全員の中で占める比率を、「誤解率」と扱った。

問：次に挙げるのは、「インフルエンザ」についての、ありがちな誤解や偏見、不正確な理解です。これらのうち、あなたがそのように理解していたものすべてを選んでください。(今はそのように理解していなくても、過去にそのように理解していたことがあれば、すべて選んでください)

ａ　普通の風邪が重症になったもののことである

ｂ　インフルエンザ菌によって感染する病気のことである。

c　インフルエンザには解熱剤を使ってはいけない。

d　ワクチンを打っていればかからない

この調査の結果、例えば、「膠原病」の「コウゲン」を「高原」と聞きなして「高原病」と誤解したり（11.6%）、「肺水腫」の「腫」を「腫瘍」のことだと解釈して「肺に腫瘍ができること」と誤解したり（15.1%）する人が一定数いるのである。意味に結び付けられることで記憶され、認知度が高くなっているとは言っても、それが正しい意味でないことも多いということである。

5.4. 誤った理解をしている語

病名以外では、誤った理解がされることが多くなっている。「潰瘍」「腫瘍」「炎症」の3語は、それぞれに97.4%、99.1%、98.4%と極めて高い認知率を示しているが、「潰瘍＝皮膚や粘膜が病気のために深いところまで傷ついた状態」、「腫瘍＝細胞が異常に増えて、かたまりになったもの」、「炎症＝からだを守るために、からだの一部が熱をもち、赤くはれたり痛んだりすること」という意味で調査した理解率は、それぞれ、73.8%、76.0%、77.4%にとどまっており、正しい意味を理解していない人が多い語である。

誤解の調査によれば、「潰瘍」には、「胃や十二指腸などの内臓が痛くなる病気」と誤解している人が46.4%もいる。これは、「胃潰瘍」などの病名で「潰瘍」の語を覚え、何らかの病気と解釈し、それが特定の状態を指し示す語であるということを理解していないということだと思われる。「腫瘍」も、「がんと同じものである」との誤解が22.6%あるなど、どのような状態のことを指すのかまでは理解していない人も少なくない。「潰」「瘍」「腫」はいずれも、2010年に改訂される以前の常用漢字表には入っていなかったため、学校などで教えられる機会が少なかったことも、これらの語の意味が理解されていないことに関係しているだろう。

同じように、「炎症」も、「からだの一部が熱をもち、赤く腫れたり痛んだりすること」というところは理解されていても、それが「からだを守るために」起きているというところが、理解されていないと考えられる。「炎症はすべて、できるだけ早く治した方がよい」（38.2%）という誤解が多かったのも、この症状が起きるしくみに理解が及んでいないからであろう。

「血糖」や「ウイルス」も、やはり、96.3%、99.8%と非常に高い認知率を示すが、「血糖」は「血液に含まれるブドウ糖」という意味、「ウイルス」は、「細菌より小さく、電子顕微鏡でないと見えない病原体」という意味の理解率はそれぞれ、78.3%、64.6%にとどまっているのである。これらは、糖尿病やインフルエンザなど、よくある病気のしくみを正しく理解するのに重要な用語である。しかし、医師への調査では、「(患者は) 血糖と尿糖の区別がつかない。尿糖が陰性だと満足している。」というような記述があり、誤解の調査では、「ウイルスは細菌と同じものである」(22.6%)、「ウイルスには抗生剤がよく効く」(30.9%) のように、類義語「細菌」と区別ができていないことをうかがわせるデータが得られている。これは、身体のなかでの「血糖」や「ウイルス」の役割や働きが理解されていないということであり、表面的な理解に止まり、正しく理解されていない場合が多いと考えられる。

5.5. 偏った理解をしている語

誤解の調査からは、誤った理解の一つのあり方として、その語が指し示す医療内容のある側面を過大にとらえてしまうような、偏った理解がされている語があるというデータも得られており、それも、b類に多い。

例えば「ステロイド」は、認知率は93.8%と非常に高いが、「炎症を抑えたり過剰な免疫の働きを弱めたりする薬で、もとは、人間のからだの中で作られるホルモン」という意味の理解率は44.1%という低率にとどまった。誤解の調査で、「どんな場合でも少量を使用する方がよい」(27.3%)、「麻薬と同じぐらいに作用が強烈だ」(16.2%) というデータが得られていることから、怖い薬であるという理解があるのだと思われる。医師への調査の回答にも、「喘息の患者に、吸入しても発作がおさまらないため、ステロイド入りの点滴をします、と説明したところ、断られた。」などのように、過度の不安から、ステロイドを使った必要な治療を患者から拒否された経験が複数件記されていた。「ステロイド」の怖さを話題にする用例は、「ステロイドを使ったら、永久に薬漬けですよ。効かなくなれば、どんどん強い薬になるだけです。(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』Yahoo!・知恵袋) のように、一般媒体のコーパスにも数多く見つけられる。

「インスリン」についても、医師への調査の回答には、「内服加療が限界となった、重度の糖尿病患者に『インスリンをはじめると、もう止めることが出来ない薬なんですよね。だったら使いたくありません』と頑なにインスリン導入を拒否された。」というものがあって、これに関して、誤解の調査でも、「インスリン注射を始めると一生続けなければならない」（60.5％）という誤解が極めて多かった。

また、「対症療法」も、医学用語としては、英語 symptomatic therapy にあたる語で、「根本原因に対する治療とは別に、疾病の示す症状に対して、これを鎮静除去するために行う療法」（『南山堂医学大辞典』）などという定義を持っている。ところが、一般の人々の間で、この語を使う場合、「風邪薬は、もともと対症療法でしかないので、根治的に治すには、やはり睡眠、栄養、十分な水分補給が一番だと思いますよ。」（『現代日本語書き言葉均衡コーパス』Yahoo!・知恵袋）のように、きちんとした治療でないというような負のニュアンスが加わりやすい。「対症療法」は、医療以外のことについても比喩的に使われることがあり、その場合の大部分の例は、負のニュアンスが強く込められているものである。誤解の調査でも、この語を「『対処療法』だと思った」という誤解が、26.8％もあったのは、症状に対する医学的治療という側面よりも、状況や問題に対する処置という側面に焦点が合わせられやすいからだろう。

5.6. 他の語義と混同されやすい語

誤解の調査で得られた特に注意すべきデータは、その語の別の語義と混同している人が多かった語である。例えば、「貧血」を「急に立ち上がったときに立ちくらみを起こしたり、長時間立っていたときにめまいがすること」とする誤解が67.6％、「ショック」を「急な刺激を受けること」とする誤解が46.5％あることなどである。これらは、医療用語としての、「血液の中の赤血球や、その中の色素が減っている病気」（貧血）、「血圧が下がり、生命の危険がある状態」（ショック）という意味とは大きく異なる日常語の意味であるが、医療の場で使われる語についても、日常語の意味で解釈してしまっているものである。

ほかにも、「合併症」（ある病気が原因となって起こる別の病気）を、「ほかの病気と一緒に必ず起こる病気」と誤解する人が28.8％あるのは、「合併」を、日常語の意味である何かと何かが一緒になるという意味で理解しているからだと考えられる。「コンプライアンス」（処方された薬をきちんと服用するなど、医師の指示を守ること）を、「医師が法令を守って治療をすること」とする誤解が27.4％、「ガイドライン」（病気になった人に対する治療の実績や医学研究に基づいて、国や学会が作った診療の指針）を、「例外なくすべての人にとって最善の治療を示すものである」とする誤解が15.7％あるのも、一般用語の「コンプライアンス」「ガイドライン」の意味がまず想起されることがあるためであろう。

６．言葉は知られており、意味も正しく理解されている語（c類）の特徴

6.1．一般媒体で極めてよく用いられる語

５節で述べたｂ類は、一般媒体での頻度が高く語形が短く、具体物や病気を表す語が多く、これらが語の認知のしやすさをもたらしているものと考えられた。一方で、症状を意味する語や、検査や治療を表す語を中心に、誤解や偏った理解、また他の語義との混同なども起こしやすいものも多く、正しい意味が理解されにくい性質も持っていた。

それでは認知率も理解率も高いｃ類には、どのような語が入っているのだろうか。表２で見たように、一般的な媒体でもよく使われており、ｂ類のものよりも、一段階高い頻度を示す語も多くなっている。このことから、全体として日常の書き言葉で接触する機会が極めて多いことが、その語が正しく理解されることにつながっていっていると言ってよいだろう。

もっとも、表２のｃ類には、頻度が０や１という極めて低頻度の語もいくつか混じっている。そのうち「ノロウイルス」は、「図書館書籍サブコーパス」が対象にしている2005年までには一般化しておらずその後急速に知られるようになった語である。また、「かかりつけ医」「術後合併症」「院内感染」「セカンドオピニオン」「臨床試験」は、語構成は明確で各構成要素の表す意味も明確であるので、ふだん接触する機会が多くなくても、正しい意味と結び付けて認識されるのだと考えられる。

6.2. 意味的に単純な語

c類では、病名がb類よりもぐっと少なくなっているのは、病気の名前だけでなく、その内容までを正しく理解するのは簡単ではないからであろう。それでもc類に属する病名は、「がん」「ぜん息」「糖尿病」「うつ病」などであり、これらは言葉だけでなく、病気の実体もよく知られているということだろう。

症状を表す「うっ血」「壊死」「狭窄」「血栓」「動脈硬化」「ポリープ」などのうち、「狭窄」「血栓」の意味が単純で分かりやすいことは、4節で述べたが、他の語について、その意味と、認知率・理解率をこの順に示すと、次の通りである。認知率の高い順にあげる。

抗がん剤：がんの細胞を減らしたり増えないようにしたりする薬(99.4%、96.3%)

院内感染：病院内で、細菌やウイルスによる病気にかかること（97.8%、97.3%)

ポリープ：胃や腸にできる、キノコのような形をしたできものや、いぼのようなできもの（97.8%、91.9%)

動脈硬化：動脈が硬くなり、狭くなる状態（97.2%、92.8%)

壊死：病気やけがのために、からだの一部の組織や細胞が死ぬこと（92.6%、90.3%)

臨床試験：新しい医薬品や治療法などの有効性や安全性を調べるために、人間を対象として行われる試験研究（92.0%、85.4%)

化学療法：薬を使う、がんなどの治療法（91.5%、77.3%)

うっ血：血液の流れが悪くなり、からだの中で滞ってしまうこと（86.4%、75.1%)

抗生剤：細菌を退治する薬（79.3%、72.8%)

治験：新薬の開発のために、協力してくれる人の同意を得て行う、薬の効果を調べる試験（68.6%、63.0%)

中には「抗生剤」「治験」のように、認知率が80%に満たないものもあるが、その場合も理解率と認知率の差はあまりなく、言葉を知っている人は、たいていその意味までを正しく理解している。

例えば、病気によってできる体内の異物を指す「ポリープ」は、その形状や

できる場所などが明確にイメージできるので、実際にそれを目にしないでも、指示物の輪郭がとらえやすい。病的な症状を意味する「壊死」「動脈硬化」も、身体がどのようにおかしくなるかはイメージしやすい。検査や治療などを表す語も、「院内／感染」「抗／がん／剤」「臨床／試験」などと、語構成要素に分解すれば、正しい意味がほぼそれと分かるものが多い。これらは、意味の分かりにくさが問題になることが少ない語であろう。このような性格から、語が認知されたときにその意味も正しく理解されて、語形と意味とが結び付いて問題なく定着していくのであろう。

「化学療法」「うっ血」「抗生剤」「治験」は、認知率がやや低く、理解率との差もややある。表記や語構成要素にａ類やｂ類の語で分析した性質と通じるものが含まれているもので、分かりにくさのある語である。これらはｃ類の中では、ａ類やｂ類の側に寄ったものと見ることができよう。

6.3. 踏み込んだ理解が必要になる語

しかし、6.2. で取り上げた語のうち、例えば、「血栓」は、血管内にできる血液の固まり、「動脈硬化」は、血管が硬くなって狭くなること、と理解すれば十分なのだろうか。動脈硬化という診断を受けた患者や、動脈硬化の予防の必要性について説明を受けた患者は、単に、この語の意味は動脈が硬くなることを意味するということを理解しているだけでは不十分であろう。動脈が硬くなると血液中に血栓ができやすくなり、そのことで、血栓が血液の流れをふさいで、心筋梗塞や脳梗塞の原因になるということまでを理解しておくのが望ましいだろう。このように、単に語の意味を理解するだけでなく、関連する語の意味が相互に結び付いて、医学的な知識となって理解されていくことが期待される場合もあるのである。

もう一つの事例として、「抗がん剤」と「化学療法」とを取り上げてみよう。「抗がん剤」は文字通りの意味を持っていて分かりやすく、理解率は 96.3％と高率である。「化学療法」は、その抗がん剤を使う、がんの治療法を意味し、理解率は 77.3％とやや下がるものの、認知率と理解率の差は小さい。自分や自分の家族が当事者として、「抗がん剤」や「化学療法」という言葉に触れる場合がどのようなときかと考えると、その治療法がどのような効果や危険性があ

るのかということや、「外科療法」や「放射線療法」などがんの他の治療法と比べてどのような特徴があるのか、それらの治療法を組み合わせるとどうなるのか、など、関連する語と結び付けながら、がん治療についての知識を深めながら理解していくことが求められるところであろう。

このように、よく知られている重要語が多いｃ類は、関連語同士を結び付けた深く確かな理解に達していくことが期待されるだろう。図１において、類型Ｂ(２)として「もう一歩踏み込んで明確に説明する」と提案した所以である。「脳死」「尊厳死」「インフォームドコンセント」「セカンドオピニオン」「ホスピス」のように、ｃ類には新しい医療の概念を表す語も多く、これらの概念を一般の人々が深く理解していくことができれば、医療についての社会的な議論を活発化していくのにも意義のあることになるだろう。

７．おわりに

以上、「『病院の言葉』を分かりやすくする提案」で示した医療用語の類型に即して、語形、表記、語構成、意味、一般媒体での使用頻度などが、一般の人々の認知や理解のありように影響を与えていることを、個別の語の性質を考察することを中心に明らかにしてきた。このようにして個々の専門用語の性質を考察することは、専門用語がなぜ分かりにくいのかの解明に役立つほか、これを分かりやすくするための方策を体系的に構築していくのにも役立っていくだろう。認知度・理解度の調査を行っていない医療用語や、医療用語以外の専門用語にも研究対象を広げていくことも望まれよう。

注

1）「『外来語』言い換え提案」は、2002 年～ 2006 年に、国立国語研究所「外来語」委員会によって行われ、国立国語研究所「外来語」委員会（2006）としてまとめられている。「『病院の言葉』を分かりやすくする提案」は、2007 ～ 2009 年に、国立国語研究所「病院の言葉」委員会によって行われ、国立国語研究所「病院の言葉」委員会（2009）としてまとめられている。提案の全体と主要な調査データなどは、それぞれ、http://www.ninjal.ac.jp/gairaigo/、http://www.ninjal.ac.jp/byoin/ からダウンロードすることができる。二つの活動の要点と関連性については、田中・相澤（2010）にまとめたので参照してほしい。

2）「外来語」に関しては、活動後に、国立国語研究所（2007）という報告書をまとめ、多様な視点から調査データを分析した論考をまとめて公開したが、「病院の言葉」については、このような分析報告書は作成していない。

3）これら二つの調査データは、「『病院の言葉』を分かりやすくする提案」のホームページで（http://www.ninjal.ac.jp/byoin/）公開されている。

4）この分類自体は、「『病院の言葉』を分かりやすくする提案」の検討の中で行われたものであったが、ａ類・ｂ類・ｃ類の語彙リストを明示したのは、田中（2013）においてである。

5）②（３）に該当するｂ類の一部の語は、②（１）と重複して分類される。

6）本稿での『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の利用は、WEB 検索ツール「中納言」（https://chunagon.ninjal.ac.jp/search）によった。

7）田中・近藤（2011）では、一般媒体と医療媒体の頻度比較という方法で、難解で重要な語彙の抽出方法を研究した。また、佐野・田中・丸山（2010）では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』内での媒体間での頻度比較を行うことで、ａ類とｂ・ｃ類との識別を行う方法を研究した。

8）このコーパスは「病院の言葉」委員会で検討する語彙の選定や、その意味・用法の分析などに活用した。これを用いた研究例として、田中・近藤（2011）がある。

9）意味との結びつきが容易であると言っても、それが必ず正しい意味に結び付くとは限らない。「川崎病」は川崎という人が発見した病気であるが、川崎市周辺で発生した公害病と誤解している人が多く（35.0％）、「頓服」は、痛み止め（34.1％）や熱冷まし（38.4％）だと誤解している人も多い。正しく理解している人が少ないｂ類には、このような誤解されやすい語も含まれている。

【参考文献】

国立国語研究所（2007）『公共媒体の外来語―「外来語」言い換え提案を支える調査研究―』（国立国語研究所報告 126）

国立国語研究所「外来語」委員会（2006）『分かりやすく伝える 外来語言い換え手引き』ぎょうせい

国立国語研究所「病院の言葉」委員会（2009）『病院の言葉を分かりやすく―工夫の提案―』勁草書房

佐野大樹・田中牧郎・丸山岳彦（2010）「『病院の言葉』の類型の推測とモデル化―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における語の使用度数を用いた一考察―」『日本言語学会第 140 回大会予稿集』

田中牧郎（2013）「患者への説明に用いられる医療用語の類別と対応」、石崎雅人・野呂

幾久子編『これからの医療コミュニケーションへ向けて』篠原出版社
田中牧郎・相澤正夫（2010）「難解用語の言語問題への具体的対応―『外来語』と『病院の言葉』を分かりやすくする提案―」『社会言語科学』13-1
田中牧郎・近藤明日子（2011）「難解用語の抽出と序列化におけるコーパスの利用―医療用語を例に―」、田中牧郎・相澤正夫・斎藤達哉・棚橋尚子・近藤明日子・河内昭浩・鈴木一史・平山允子『言語政策に役立つ、コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用』（特定領域研究「日本語コーパス」言語政策班報告書、http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/doc/report/JC-P-10-01.pdf）

方言と共通語に対する意識からみた話者の類型
―地域の分類と年代による違い―

田中ゆかり・前田忠彦

キーワード：全国方言意識調査　方言　共通語　潜在クラス分析　類型

1．はじめに

日本語社会における「方言」の社会的位置づけが大きく変化してきたことは、さまざまな先行研究において指摘されている（井上史雄 1993、小林隆 1996、真田信治 2000、陣内正敬 2007）。柴田武（1958）において「方言コンプレックス」と名付けられた「方言」を「恥ずかしい、かっこわるい、隠したい」という意識は地域を問わず薄まり、こんにちでは「方言」は「誇らしい、かっこいい、みせたい」ものにほぼ置き換わったといっていいだろう（田中ゆかり 2011）。

本稿では、2010 年に実施した全国方言意識調査データを用いて、「方言」の受けとめ方の移り変わりをみていく。「方言」と「共通語」にかんする質問項目に対する反応から回答者を多変量解析の手法により、いくつかの類型（クラス）に確率論的に分類し、地域・年齢による平均帰属確率の違いから、「方言」に対する受けとめ方の地域や年齢による違いを検討する。

地域については、主要性と結果の信頼性の観点から、調査において一定以上のサンプル数が確保された近畿・首都圏・九州・東北をとりあげ、その特徴を検討する。

2．全国方言意識調査の概要

分析に用いるデータは、層化三段無作為抽出法[注1]で抽出した 16 歳以上の全国の男女 4,190 人を対象に実施した「方言」と「共通語」についての意識を尋ねた全国方言意識調査に基づくものである。2010 年 12 月に実施したもので、以下ではこの調査のことを「2010 年全国方言意識調査」と呼ぶ。調査

方法は、調査会社の専門調査員による個別面接聴取法で、1,347 人から回答が得られた（回収率 32.1%）。

本稿では、居住地とは別に「出身地」として質問した 15 歳までに一番長く生活した地域を「生育地」とみなし、生育地による差を地域差としてみていく。47 都道府県すべてから回答を得ているが、生育地は、下記に示す 13 の《生育地群》レベルで検討する。なお、生育地を「海外」「わからない」とした 6 人については、「その他・不明」としてまとめた。生育地群別の回答者数を（　）内に示す。

《生育地群》

北海道（66）、東北（128）、北関東（85）、首都圏[注2]（273）、甲信越（72）、北陸（44）、東海（144）、近畿（198）、中国（89）、四国（53）、九州（169）、沖縄（20）、その他・不明（海外 4、わからない 2）

分析に用いる項目は、先に示した《生育地群》を含む回答者属性 6 項目（性、年齢、職業、教育程度、居住地都市規模[注3]）と、「方言」と「共通語」にかんする質問 7 項目である。この言語意識にかんする 7 項目の質問文を以下に示す。提示した選択肢は〔　〕内に示す。

［問 3］あなたは、出身地（＝ 15 歳までに一番長く生活した場所）の「方言」のことが好きですか、嫌いですか〔好き、どちらかというと好き、どちらでもない、どちらかというと嫌い、嫌い、わからない〕

［問 4］ここにあげる（A）～（C）の相手（(A) 家族、(B) 同じ出身地の友人、(C) 異なる出身地の友人）に対して、出身地（＝ 15 歳までに一番長く生活した場所）の「方言」を使うことがありますか。それぞれ当てはまるものを一つずつ選んでください〔よく使う、使うことがある、使わない、わからない〕

［問 7］あなたは、ふだんの生活において「共通語」を使っていると思いますか、思いませんか〔使っていると思う、使っていると思わない、わからない〕

［問 8］あなたは、「方言」と「共通語」を場面によって使い分けていると思い

ますか、思いませんか〔使い分けていると思う、使い分けていないと思う、わからない〕

［問９］あなたは、「共通語」のことが好きですか、嫌いですか〔好き、どちらかというと好き、どちらでもない、どちらかというと嫌い、嫌い、わからない〕

なお、「方言」と「共通語」に対する好悪についての回答は、傾向性をはっきりと捉えるために「好き（好き＋どちらかというと好き）」「どちらでもない」「嫌い（嫌い＋どちらかというと嫌い）」と再カテゴリ化した上で、分析に用いた。

生育地の「方言」使用にかんする質問は、「(A)家族」「(B)同じ出身地の友人（以下、同郷友人）」「(C) 異なる出身地の友人（以下、異郷友人）」といういずれも親密な間柄の相手とやりとりする場面に限定した。このような私的場面においては、「方言」使用に傾くことが先行研究から明らかとなっていることによる。つまり、2010 年全国方言意識調査における「方言」使用にかんする設問は、私的場面における「方言」使用に焦点を絞ったものとなっている。

３．方法

３.１．類型を把握する統計手法の解説

調査データの分析に使用したモデルは「類型」を抽出するために用いられる「潜在クラスモデル」（McCutcheon1987、岡太彬訓・守口剛 2010）と呼ばれる方法である。ここでは、この統計的手法について、直感的な理解しやすさを優先した「たとえ」を用いた説明をする。

人をいくつかの類型でとらえることは我々が日常生活で普通に行っていることである。複雑な現実を、枝葉を切り落とした単純化した図式で捉えることによって、思考の節約につなげているのである。科学的な正当性は心理学者が疑問を投げかけるところであるが、根強く日本人の間で信じられている血液型によるパーソナリティ類型論などが一例である。曰く、「彼はＡ型だからよく～する」、「彼女は典型的なＯ型タイプだね、何しろ…だから」などのように。

ただし、本稿で扱う対象は、類型の元となる指標が、血液型に基づくタイプ

分類のように外在的なものではない。むしろ、職場や身近な友人関係の中における人間観察に基づくタイプ分類に近いといえるだろう。たとえば、次のようなことである。

Aさんはスタープレーヤー、仕事をやらせれば対外的に目立つところで活躍ができる、物怖じしないしプレゼンテーションも抜群にうまい。ただ細かい事務仕事はちょっと苦手な面もある、ふだんも周りの人とのコミュニケーションを欠かさず、忘年会などの内輪のイベントでも常に人の中に入って人を楽しませる華やかさがある。

Bさんは縁の下の力持ちタイプ、対外的に目立つところでの仕事はやりたがらないし、口べたなところもあって押し出しも弱い、ちょっと控えめな感じでパーティーに出席してもあんまり目立たない。一方、冷静な観察眼を持ち細かい仕事も本当に丁寧で信頼できる。

Cさんはあくまでマイペース派。対外的な仕事は気分が乗れば熱心に取り組むので社外の評判は良い。しかし、細かな仕事については、自分に直接関わるような場合は丁寧にこなすが、人のためとなると途端に丁寧さが欠けてくる。内輪のパーティーなどはプライベート優先でさぼってしまいがち。そんなCさんのやる気を引き出すために、周囲は心を砕くことになる。

Dさんは内弁慶な宴会部長タイプ、対外的な仕事は得意とはいえず、のんびり屋さんのところがあり、細かい仕事も進捗をいちいち確認する覚悟でないと安心して任せられない。ふだんの仕事ぶりは凡庸だが、忘年会とか新人歓迎会とか、内輪のパーティーになると俄然張り切るようなタイプ。

以上のようなたとえにおいて重要なことは、「対外的な（社外の人を相手にする）仕事」「細かい事務仕事」「ふだんの人間関係や仕事ぶり」「パーティーなどのソーシャルイベント」のような共通した場面設定の中で、それぞれの人の行動の特徴を捉えて、そこから「スタープレーヤー」「縁の下の力持ちタイプ」「マイペース派」「宴会部長タイプ」のようなニックネームを付け、分類をしているところである。

以下で行うのは、このようにふだん何気なく行っていることへの統計的なアプローチであり、言い換えると、確率的な表現を用いてこうした分類を記述していく、ということになる。すなわち、いくつかの共通した質問項目（共通し

た場面設定）に対する、回答（人の行動の特徴）から、類型を取りだそうという試みである。

3.2. 分析方法

先述の通り、「方言」と「共通語」にかんする意識調査データを用いた回答者の類型化に際しては、潜在クラス分析を用いた。この手法について、もう少し形式的な説明を加える。

潜在クラス分析は、カテゴリカルな変数を用いた個人の「確率的な類型化」を目指す統計的手法で多変量解析の一種である。回答者に複数の類型を想定することによって、変数間の連関を説明しようとするものといえる。この想定される複数の類型を、モデル内では潜在変数である「クラス」として表現する（潜在クラス分析という名称はこのことに由来する）。

この分析においては、さらに説明要因(注4)もモデルに取り組み、その効果をロジット回帰モデルと呼ばれる方法によって評価することが可能である。また各類型が母集団（本研究では日本人成人）の中でどの程度の割合を占めているのかを推定し、地域変数との組み合わせで、地域的な偏りについても検討することができる。

潜在クラス分析という手法を、もう少し一般的に言い換えると、質問項目への回答に基づいて、回答者がどのような類型に分類されるかということを確率的な手段を導入して考察する多変量解析の手法といえる(注5)。確率的な、という意味は、質問に対する応答の選択が類型内で決定論的に（確率１で）なされるというわけではなく、「いつも必ずというわけではないが、～しがちである」という状態を確率というモノサシで表現していることに対応する。たとえば、「スタープレーヤー」タイプでも、対外的な場面で90％くらいは力を発揮するが、残り10％くらいはうまくいかないことも、現実には生ずる。個人の属性要因のような「目に見える（直接測定できる）」項目とは異なって、言語意識のように決定論的ではない「個人の内的世界」を取り扱う際は、たとえ調査票への応答としてたった一つの選択肢を選んだという事実だけであっても、その「選択傾向」を確率で記述するのが自然な発想であるともいえる。

さらに複数の質問項目で特定の選択肢の組を選んだ人が、ある類型に属する

か否かということも確率的に考察する（類型への「帰属確率」を推定する）ことができる。ここでも個人が、決定論的に（確率１で）特定の類型に属すると解釈していない点が、実は統計的な考え方なのである。

個人の類型化に際して確率論的な考えに立つことは、先のたとえ話に即せば「Eさんは基本的にはスタープレーヤー的だけれど、ちょっと宴会部長的なところもあるよね」といった解釈の幅を持たせた日常的な理解に対応しているといえるかもしれない。ある類型に決定論的に押し込めることができなくても、例えば地域変数との組み合わせで地域間での類型の出現率の違いを見ることは可能である。本稿では、こういった利点をもつ潜在クラス分析を用いることで、地域・年齢などの属性ごとの典型と多様性を同時に知ることを目指している。

４．五つの潜在クラスと生育地群別帰属確率

潜在クラス分析の結果、五つの類型すなわち潜在クラスが抽出された。潜在クラスの抽出とその命名（解釈）過程については、田中ゆかり・前田忠彦（2012）に詳しい。要点は、類型としての各クラスに対して、質問で各選択肢の選ぶ確率を推定した結果を「応答プロファイル」と呼び、そのプロファイルを見ながら類型に（前節のたとえ話でスタープレーヤー云々以下のような）「ニックネーム」をつけたということである。

2010年全国方言意識調査データから抽出された五つの潜在クラスは次の通り。（　）内の数値はクラスサイズを示し、各潜在クラスの全サンプルに占める割合を示す。五つの潜在クラスの説明をクラスサイズの大きな順に示す。それぞれの説明文は、クラスの特徴を示す応答プロファイルの数値を言語化したものである。

〈クラス１：積極的方言話者（0.373）〉生育地方言が好きで、共通語があまり好きではない。生育地方言を相手の同郷・異郷を問わずすべての私的場面で用いる傾向が強い。典型的な生育地群は近畿。

〈クラス２：共通語話者（0.286）〉共通語が好きで、ふだんから共通語を使用しているという意識が強い。生育地方言を使用しているという意識が薄く、方言と共通語の使い分け意識も薄い。典型的な生育地群は首都圏。

〈クラス３：消極的使い分け派（0.159)〉クラス１やクラス４に比べると生育地方言への好意度がやや低く、生育地方言使用はある程度高いが消極的。共通語に対する態度もあいまい。典型的な生育地群は、首都圏の周囲に位置する北関東・甲信越。

〈クラス４:積極的使い分け派（0.149)〉生育地方言「好き」が５クラス中最高。しかし、異郷友人には方言を使用しない。共通語使用意識・使い分け意識はともに高い。典型的な生育地群は沖縄。九州・東北もこのクラスへの帰属確率が高い。

〈クラス５：判断逡巡派（0.033)〉どの質問にも「わからない」と回答する傾向が強い。典型的生育地群は「その他・不明」。北海道もこの傾向が認められる。

ここでは、13の生育地群の五つの潜在クラスへの帰属確率(注6)を確認する(表１)。表１を視覚的に確認するために図化したものが図１。

図１から、主要性と結果の信頼性の観点から一定以上のサンプル数(注7)が確保された生育地群である、近畿・首都圏・九州・東北について、その特徴を確認する。

近畿は、〈クラス１：積極的方言話者〉、首都圏は〈クラス２：共通語話者〉への帰属確率が顕著に高い。九州は、〈クラス１：積極的方言話者〉への帰属確率がもっとも高いが、〈クラス４：積極的使い分け派〉への帰属確率も高い。東北は、他の生育地群に比して潜在クラス間の帰属確率の差が相対的に小さい。クラス１、クラス４、クラス２、クラス３の順に帰属確率が下がるものの、互いに近接した帰属確率となっていることが分かる。

５．年齢による潜在クラスへの帰属確率の違い

ロジット回帰モデルによる評価の結果、潜在クラスへの帰属確率に効果のある回答者属性は、効果の大きな順に生育地・職業・教育程度・年代であった(注8)。居住地都市規模・性は有意とはいえなかった。

ここでは、年齢による帰属確率の違いをみていく。まず、サンプル全体、すなわち全国レベルにおける各クラスへの帰属確率の年齢による違いをみる。

表1　生育地群別帰属確率平均

生育地群	クラス1 積極的 方言話者	クラス2 共通語話者	クラス3 消極的 使い分け派	クラス4 積極的 使い分け派	クラス5 判断逡巡派
北海道	0.204	0.528	0.093	0.051	0.123
東北	0.301	0.245	0.152	0.256	0.048
北関東	0.202	0.256	0.359	0.183	0.000
首都圏	0.190	0.665	0.096	0.000	0.049
甲信越	0.214	0.240	0.337	0.196	0.014
北陸	0.345	0.095	0.342	0.218	0.000
東海	0.454	0.162	0.269	0.116	0.000
近畿	0.679	0.118	0.155	0.034	0.015
中国	0.503	0.090	0.103	0.248	0.057
四国	0.491	0.275	0.072	0.161	0.000
九州	0.433	0.111	0.073	0.354	0.029
沖縄	0.173	0.203	0.000	0.625	0.000
その他・不明	0.176	0.477	0.000	0.000	0.347

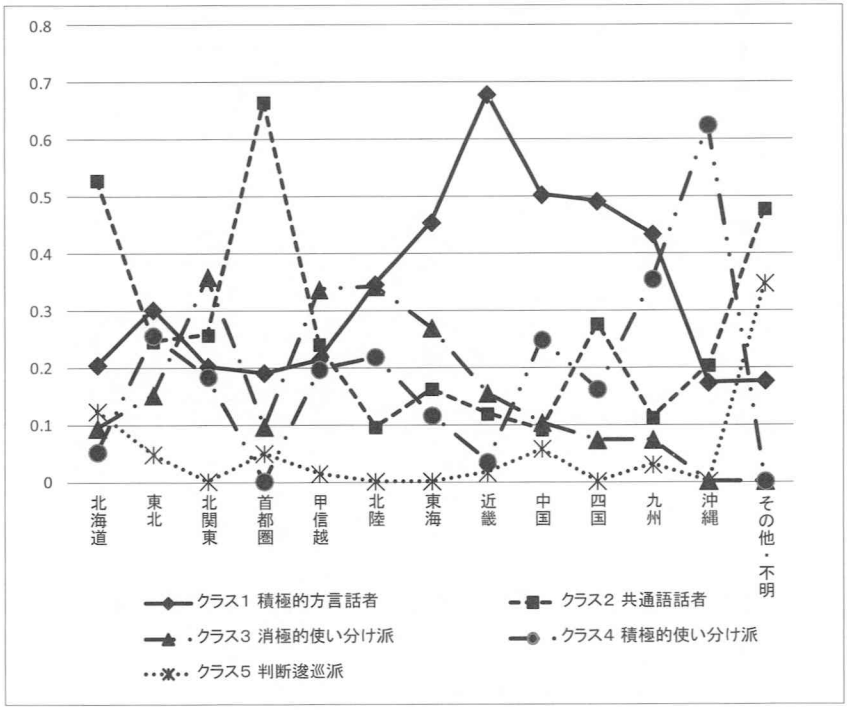

図1　生育地群別帰属確率平均

図２は、年齢ごとの帰属確率を平滑化したもの(注9)。図２からは少なくとも２箇所以上の変化点が認められ、年齢と各クラスへの帰属確率の関係は、非線形であることが分かる。クラス１とクラス２に注目すると、60 歳前後と 40 歳前後が主要な変化点となっていることが確認できる(注10)。60 歳前後から 40 歳前後にかけては、若くなるのに従いクラス１への帰属確率が高まるのと対照的にクラス２の帰属確率が減少している。しかし、40 歳前後より若い世代に向けては、ふたたびクラス１の帰属確率が下がり、クラス２の帰属確率が上昇していることが確認できる。

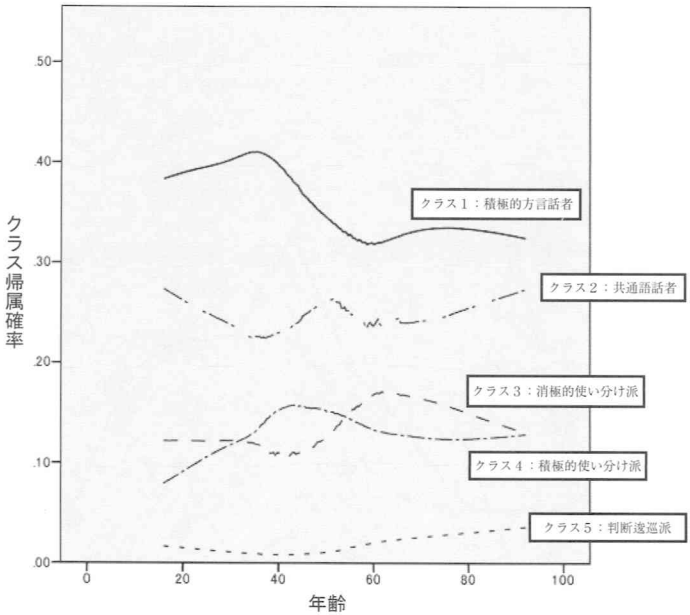

図２　年齢別クラス帰属確率平均値（平滑化後の曲線）

６．主要生育地群ごとの年齢による潜在クラスへの帰属確率の違い

ここでは、主要生育地群別に年齢による潜在クラスへの帰属確率の違いについて検討する。近畿（図 3a)、首都圏（図 3b)、九州（図 3c)、東北（図 3d) の順にみていく。

近畿の各クラスへの帰属確率と年齢との関係も、サンプル全体同様、60 歳前後から 40 歳前後が主要な変化点となる非線形の関係にある。60 歳前後から 40 歳前後にかけてクラス 1 が増加しクラス 2 が減少し、40 歳前後より若い世代にかけてはその関係が逆転することもサンプル全体と同様の傾向を示す。

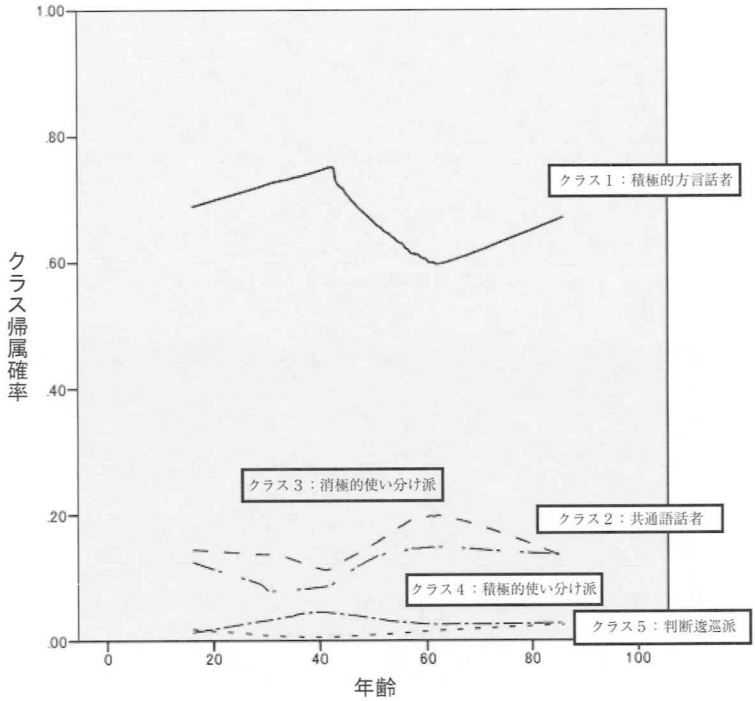

図 3a　近畿圏生育者の年齢別クラス帰属確率平均値（平滑化後の曲線）

首都圏は、サンプル全体・近畿と異なり、帰属確率がもっとも高いクラスは年齢を問わずクラス 2 である。しかし、クラス 1 とクラス 2 の増減傾向に着目すると、サンプル全体・近畿と同様であることが分かる。すなわち、60 歳前後から 40 歳前後が主要な変化点となる非線形の関係にある、60 歳前後から 40 歳前後にかけてクラス 1 が増加しクラス 2 が減少する、40 歳前後より若い世代にかけてはクラス 1 が減少しクラス 2 が増加すること、である。

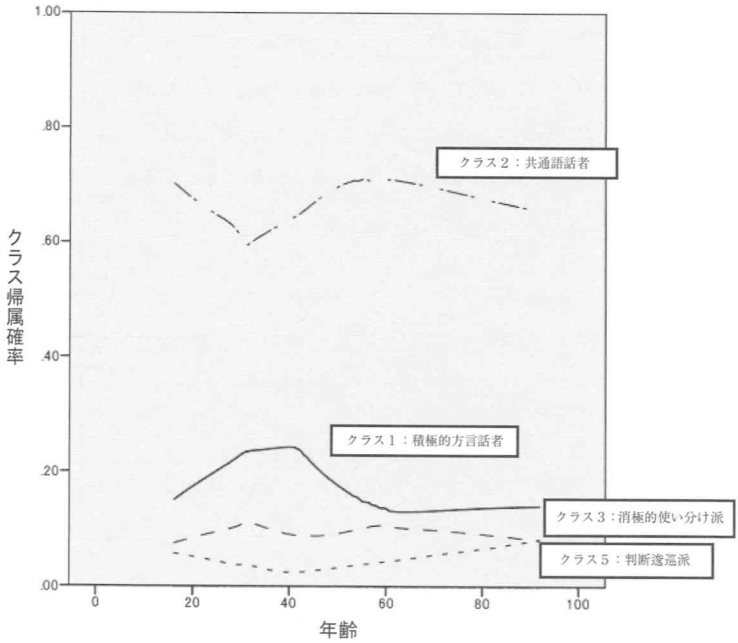

図 3b　首都圏生育者の年齢別クラス帰属確率平均値（平滑化後の曲線）

次に九州をみていく。九州はクラス１とクラス４への帰属確率がともに高いことが特徴である。帰属確率と年齢の関係については、変化点が複数現れる非線形的関係である、主要な変化点が 60 歳前後と 40 歳前後であることは、サンプル全体・近畿・首都圏と同様である。しかし、九州では 60 歳前後から 40 歳前後にかけては、若くなるほどクラス１とクラス４への帰属確率が高まるのに対して、クラス２への帰属確率が減少している。40 歳前後より若い世代にかけては、クラス１への帰属確率は上昇を続けるが、クラス４は減少傾向となり、クラス２が上昇傾向を示す。

さいごに東北について検討する。東北は図１でも確認した通り、各潜在クラスへの帰属確率の差が小さなことが特徴で、とくにクラス１・クラス２・クラス４の帰属確率が近接している。年齢と各クラスへの帰属確率との関係が非線形な関係である、主要な変化点が 60 歳前後と 40 歳前後であることは、これ

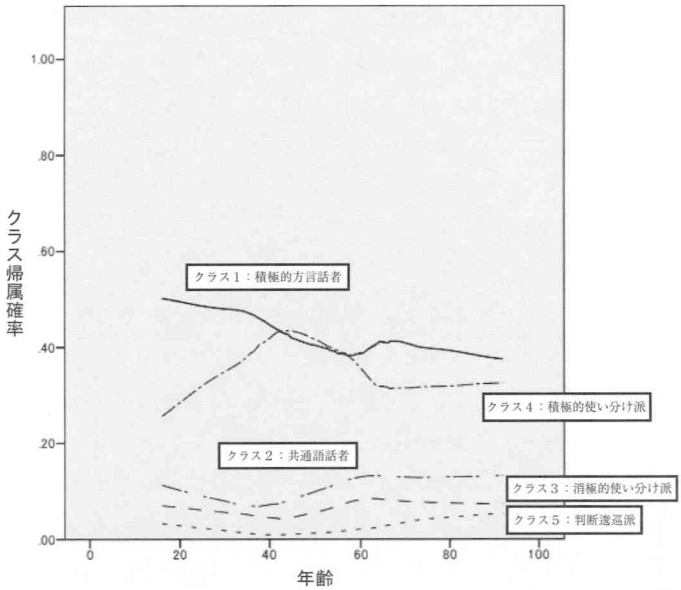

図 3c　九州生育者の年齢別クラス帰属確率平均値（平滑化後の曲線）

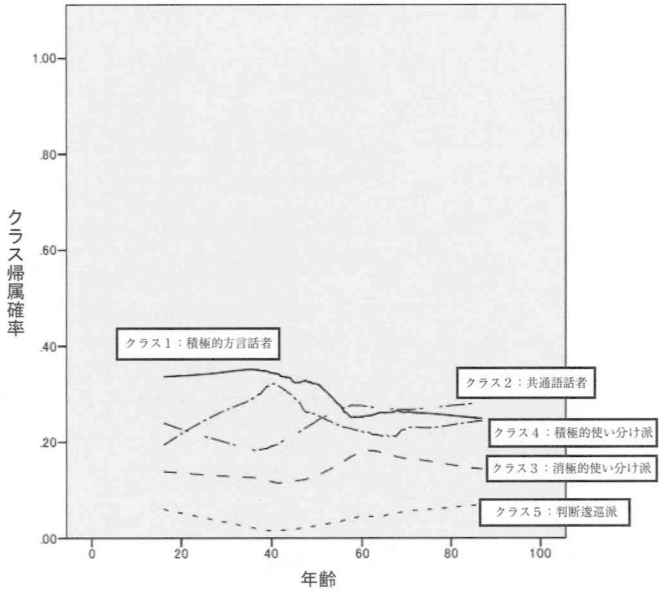

図 3d　東北生育者の年齢別クラス帰属確率平均値（平滑化後の曲線）

まで確認したサンプル全体ならびに近畿・首都圏・九州と同様だが、その内容が異なる。60 歳前後から 40 歳前後にかけては、若いほどクラス１が増加傾向に、クラス２が減少傾向にあることが分かる。クラス４は、クラス１と並行的に増加傾向を示すが、40 歳前後より若い世代では減少に転ずる。一方、クラス２は 40 歳前後で底を打ち、それより若い世代ではやや増加する傾向を示していることが分かる。

７．潜在クラスへの帰属確率と年齢との関係から分かること

サンプル全体と主要生育地群として近畿・首都圏・九州・東北について、それぞれ潜在クラスへの帰属確率と年齢との関係をみてきた。すべてに共通することとして、60 歳前後と 40 歳前後が主要な変化点となっていること、このふたつの変化点の間においてクラス１やクラス４といった積極的な方言使用を志向するクラスへの帰属確率が増加し、共通語話者であるクラス２が減少するという傾向が示された。九州・東北においては、40 歳前後より若い世代でもこの方言使用を志向する傾向は継続的であることが確認された。一方、サンプル全体・近畿・首都圏では、40 歳前後より若い世代では、クラス２（共通語話者）が増加し、クラス１（積極的方言話者）が減少傾向を示している。

以上からは、60 歳前後から 40 歳前後にかけての世代において、こんにちの「方言志向」と呼んでもよさそうな傾向が形成されてきたことがうかがえる。それぞれの言語形成期は、60 歳前後は 1950 年代から 1960 年代、40 歳前後は 1970 年代から 1980 年代であり、高度経済成長期からバブル経済までの安定成長期に言語形成期を過ごしたことになる世代である。40 歳前後は生まれた時からテレビのあるテレビ世代でもあり、テレビを通じて共通語を生まれたときから受容してきた最初の世代ということになる。このようなことを踏まえると、地域を問わず主要な変化点を担っている 60 歳前後から 40 歳前後という世代は、共通語運用能力が若くなるほど高くなっていった世代といっていいだろう[注11]。ここからは、共通語が誰でも使える普通のことばとなるのに従い、方言の価値が相対的に上昇し、それが「方言志向」意識を形成してきた背景となっていることを示すものと解釈できる[注12]。

また、このエポックメーキングな 60 歳前後と 40 歳前後の世代は、人口動

態の観点からも東京への転入者が増えた時期に言語形成期を過ごしていることにもなる（石黒格他 2012）。集団就職が盛んであった 1960 年代、安定成長期の 1980 年代がその時期である。こういった地方から東京への若者の大移動が、全国各地における方言と共通語に対する意識に影響を与えた可能性は否定できないだろう。加えて、これらの世代が言語形成期を過ごした時期において、大学進学率が大きく上昇しており、教育水準が大きく変化したこと[注13]も、この世代が主要な変化点となっている要因のひとつと推測されよう。

一方、サンプル全体・近畿・首都圏においては 40 前後より若い世代では、クラス 1 が減少し、クラス 2 が増加するという逆転が生じている。このことについては、ふたつの解釈の可能性がありそうだ。ひとつは、若年層は他地域との接触を頻繁に行うライフステージに達していないことから、自身の方言と他の地域方言との対比経験が少ない。よって、自身のことばを「方言」と認識しにくく、自身を「共通語話者」と認識しているという解釈。もうひとつは、共通語化が完了したことを受けて、これら大都市圏の若い世代は自身のことばをそもそも「方言」的な色彩をもたない「共通語」として認識している、という解釈である。

「地元でもよそでも関西弁」という地域類型を維持する方言主流社会である近畿[注14]の若年層において、クラス 1 がもっとも帰属確率が高いとはいいながら、首都圏若年層と同様、クラス 2 への帰属確率の増加という傾向を示したことは興味深い。大都市圏生育の若年層における言語意識の首都圏化が進んでいることを推測させる。サンプル全体が示した同様な傾向については、サンプル・サイズの大きな近畿・首都圏といった大都市圏の傾向が全体結果に大きな影響を与えた結果と考えられる。

対して、九州・東北は 40 歳前後より若い世代においても、クラス 1・クラス 4 といった積極的方言話者を志向するクラスへの帰属確率の継続的な増加傾向を示した。このことは、明瞭な方言をもつ生育地群における「方言志向」の定着をうかがわせる結果である。明瞭な方言をもつがゆえに「方言札」に代表されるような方言撲滅運動が顕著であった九州・東北のような地域においても、「方言コンプレックス」（柴田武 1958）が遠いものとなりつつあることを示すと解釈できる。

8．おわりに

2010年全国方言意識調査データを用いて、サンプル全体ならびに主要かつサンプル数が一定以上確保された生育地群における各クラスへの帰属確率を年齢との関係からみてきた。

60歳前後から40歳前後にかけて、「方言」と「共通語」に対するスタンスが大きく変動し、「方言志向」に向かったこと、九州・東北といった地域ではより若い世代に向けてもその傾向性が維持されていることが確認された。

積み残した問題として、次のようなことが考えられる。まず、近畿・首都圏といった大都市圏の若年層の動向の把握や、今回サンプル・サイズの関係で検討対象にすることができなかった「あいまいな態度」をとる地域における年齢からみた動向、すなわち、クラス３（消極的使い分け派）やクラス５（判断逡巡派）の動向の把握には到らなかった。さらに、今回認められた年齢による違いが、コーホート効果なのか、ライフステージの問題であるのか、時代による社会動向を反映したものなのか、あるいはそれらが相互に影響しあったものなのか、などについても今回のデータでは十分に検討ができなかった。

このような問題については、より大規模な調査や、同一項目を用いた繰り返し調査などを行うことによって解決することが可能と考える。これらについては、今後の課題としたい。

注

1）全国規模の社会調査を行う際の標準的な手法である層化多段無作為抽出のひとつ。通常、２段か３段の抽出が用いられる。今回用いられた３段抽出の場合、次のような過程を経る。まず市区町村内の丁字（第１段）を無作為に選び、これを調査地点と呼ぶ。その地点の中から、さらに世帯（第２段）、個人（第３段）を無作為に選ぶ。

2）東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県。

3）20大都市（政令指定都市）、市部、町村部。

4）2010年全国方言意識調査では、《生育地群》を含む回答者属性６項目（性、年齢、職業、教育程度、居住地都市規模）。

5）詳細は田中ゆかり・前田忠彦（2012）参照。

6）帰属確率は０から１の間の値をとる。１が100%。表１では、生育地群ごとに横列の数字を合計すると１（100%）になる。小数点第四位で四捨五入をしているため、横

列の合計が1とならないこともある。

7）サンプル数100以上を目安とした。

8）職業の観点から把握できた各潜在クラスの典型を示す。クラス1は農林漁業、クラス2は学生・主婦、クラス4は自由業・管理職。

9）詳細は、田中ゆかり・前田忠彦（2012）参照。

10）クラス3・クラス4も主要な変化点については連動している。以下ほぼ同様。

11）Yoneda（1997）では、山形県鶴岡市における共通語化調査の結果として、1991年調査における1966年から1975年生まれの世代の音声項目が満点となったことが示されている。1960年代生まれの世代においては、全国的に共通語運用能力が身に付いたものとなっていることがここからも推測される。

12）60歳前後から40歳前後という世代が、社会的活躍世代というライフステージと重なることが要因である可能性も高い。たとえば、Yoneda（1997）に再掲された共通語化モデル（Nomoto-Egawa Model）の共通語化のⅠ期において社会的活躍層が他世代より早く共通語化している形状は、本分析の結果と似ていることが指摘できる（江川清1973、同1977、野元菊雄1975）。また、Ⅰ期においては、回答者の教育程度と職業による属性差が認められるという点でも本分析結果と共通する。

13）文部科学省サイトの「大学・短期大学等の入学者数及び進学率の推移」によれば、1965年から1975年にかけての大学進学率の伸び率は非常に大きい。全体では、12.8%から27.2%に上昇している。男性の進学率の伸び率はとくに大きく、20.7%から41.0%。女性も4.7%から12.7%に増加している。

14）田中ゆかり（2011）pp.111-114、田中ゆかり・前田忠彦（2012）。

【参考文献】

石黒格・李永俊・杉浦裕昭・山口恵子（2012）『東京に出る若者たち－仕事・社会関係・地域間格差－』ミネルヴァ書房

井上史雄（1993）「価値の高い方言／低い方言」『月刊言語』22-9、大修館書店

江川清（1973）「最近二十年間の言語生活の変容」『言語生活』257、筑摩書房

――――（1977）「第一章 地域社会の言語生活の変化・変遷」、野元菊雄・野林正路監修『日本語と文化・社会2　ことばと社会』三省堂

岡太彬訓・守口剛（2010）『マーケティングのデータ分析―分析手法と適用事例―』朝倉書店

小林隆（1996）「現代方言の特質」、小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎編『方言の現在』明治書院

真田信治（2000）『脱・標準語の時代』小学館

柴田武（1958）『日本の方言』岩波書店
陣内正敬（2007）「若者世代の方言使用」、小林隆編『シリーズ方言学３　方言の機能』岩波書店
田中ゆかり（2011）『「方言コスプレ」の時代―ニセ関西弁から龍馬語まで―』岩波書店
田中ゆかり・前田忠彦（2012）「話者分類に基づく地域類型化の試み―全国方言意識調査を用いた潜在クラス分析による検討―」『国立国語研究所論集』3　国立国語研究所
野元菊雄（1975）「第六章 年齢層と言語」、波多野完治・野林正路編『新・日本語講座 10 ことばと文化・社会』汐文社
McCutcheon, Allan L. (1987) *Latent class analysis*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
Yoneda, Masato (1997) Survey of standardisation in Tsuruoka, Japan: Comparison of results from three surveys conducted at 20-year intervals. *Japanese Linguistics*（『日本語科学』）2 Tokyo: Kokusho Kankokai.

【参考サイト】
文部科学省「大学・短期大学等の入学者数及び進学率の推移」（出所）文部（科学）省「学校基本調査」（昭和 25 年以前については「文部省年報」）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/03090201/003/002.pdf（2013 年 5 月 5 日 最終閲覧）

〔付記〕

本稿で扱った「2010 年全国方言意識調査」は、国立国語研究所基幹型共同研究「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明（プロジェクトリーダー：相澤正夫）」の一環として実施したものである。また、本稿は、田中ゆかり「「方言」の受けとめかたの移り変わり―全国方言意識調査からみる年齢差・地域差―」『日本語学』31-11（2012 年 9 月、明治書院）に大幅な加筆・修正を加えたものである。

「とびはね音調」はどのように受けとめられているか
—2012年全国聞き取りアンケート調査から—

田中ゆかり

キーワード：とびはね音調　全国聞き取りアンケート調査　地域差　年齢差　性差

1．はじめに

本稿では、2012年10月に実施した「音声聴取による“とびはね音調”の全国アンケート調査(以下、「2012年全国聞き取りアンケート調査」)」に基づき、「とびはね音調」が全国規模でどのように受けとめられているのかをみていく。

この調査の主たる目的は、1990年代以降に首都圏において勢力を拡張してきた「～ナイ？」形式を伴う問いかけ音調の一種である「とびはね音調」(田中ゆかり1993、2009)が、全国各地でどのように受けとめられているのかについて概略を把握することである。

「とびはね音調」は、2．で述べる通り、近年の首都圏において勢力を拡張してきた新しい音調である。しかし、この音調は、単に首都圏における新しい形式としてのみ位置づけられるばかりではなく、全国で受容されつつある東京発の新しい言語形式という側面ももつと推測される。

また、この音調は、首都圏における拡張過程や、音調から想起される「都会・若者・女性」といったイメージ語(田中ゆかり1993、2006、2009、2010)から推測すると、生育地や居住地、年層・性といった回答者属性によって受けとめ方が相当異なることが予測される。さらに、地元の方言や共通語、新しいことばをどのように評価するかによっても、受けとめ方は大きく異なりそうだ。

加えて、「とびはね音調」をどの程度・どのように受けとめるかについては、どの地域(のことば)に関心があるか、端的に言えば「東京(のことば)」に対してどのような意識をもつのか、ということとの関連も強いように思える。これについては、同時に実施した言語意識や地域にかんする意識についての項

目と併せ検討することを通じてみていくことにしたい。

２．「とびはね音調」とは？

「とびはね音調」について、田中ゆかり（2011b）に基づいて簡単に説明する。「とびはね音調」とは、田中ゆかり（1993）で報告をした1990年代以降、首都圏で拡張しつつある新しい音調である。この音調は、以下のような特徴をもつもので、主として聞き手に対する「同意求め」の機能を有する。以下では、アクセントの下がり目の位置を］で、文末の上昇を↑で示す。

(1)「～ナイ？」形式をとる問いかけ音調で昇調の一種である。
(2)「～ナイ？」部分だけに焦点を絞れば、「浮き上がり調（川上蓁1963）」の一種に聞こえる。「～ナ］イ」の下がり目が無効化される。
(3)「～ナイ？」の前接形式に起伏型アクセントの単語が入る場合、その単語のアクセントの下がり目が無効化される。前接形式には、形容詞（ク形）、動詞（＋タク）、形容動詞（＋ジャ）、名詞（＋ジャ）などが入る。
(4)「～ナイ？」の前接形式に平板型アクセントの単語が入った場合、その単語のアクセント型は保持される。
(5)（1）～(3) を踏まえると、「カワイク＋ナイ？」の場合、「カワイ］ク」の下がり目ならびに「ナ］イ？」の下がり目が無効化され、「カワイクナイ↑」とカからワへの上昇以降文末まで上昇し続ける音調として実現される。田中ゆかり（1993）では、「最後の拍の上昇に備えるように語アクセントを破壊してまで、早い段階からピッチが上がったままになる」と表現している。

首都圏における「～ナイ？」形式をとる問いかけにかんする音調は、前接形式が起伏型の場合、前接のアクセントの下がり目が保持されるか無効化されるかに加え、文末音調が昇調と「浮き上がり調」（川上蓁1963）の２パターンあることから、少なくとも４種類が共存する。前接形式が起伏型アクセントの形容詞「カワイクナイ？」を例として、「～ナイ？」形式にあらわれる４種の音調を、以下に示す。

(a) 前接形式アクセント下がり目保持型＋昇調：カワイ］クナ］イ↑
(b) 前接形式アクセント下がり目保持型＋浮き上がり調：カワイ］クナイ↑
(c) とびはね音調（前接形式アクセント下がり目無効化型＋浮き上がり調）：カワイクナイ↑
(d) 前接形式アクセント下がり目無効化型＋昇調：カワイクナ］イ↑

「とびはね音調」の成立については、首都圏における「浮き上がり調」の拡張と、前接部分のアクセント変化の協同的変化により成立したという解釈（田中ゆかり 2007、2010）の他、「栃木か茨城の「尻上がりイントネーション」が首都圏に入り込んだと受け取れる」（井上史雄 2008）という解釈もある。早野慎吾（1992）では成立過程にかんする解釈は示されていないものの、北関東の無アクセント方言域における「尻上がりイントネーション」に「近い現象」(p51) と捉えている。

一方、高丸圭一（2010）では、無アクセント方言域の栃木県における調査結果から、少なくともある程度共通語アクセントを獲得した若年層においては、「とびはね音調」は無アクセント方言における「尻上がりイントネーション」をそのまま適用したものとはいいがたいことを指摘している[注1]。

なお、首都圏若年層においては、浮き上がり調を伴わない (d) についても「同意求め」という解釈が主流化していることから、前接部分のアクセント下がり目の無効化が「同意求め」の合図となりつつあることもうかがえる（田中ゆかり 2011b)。

疑問の文末上昇イントネーションに連動するアクセントの下がり目の無効化にかんする現象としては、「浮き上がり調」（川上蓁 1963）[注2]、「とびはね音調」に加え、地域は異なるものの、福岡市方言における疑問詞疑問文におけるアクセントの下がり目が無効化される現象の報告もある（早田輝洋 1985、久保智之 1989)。しかし、これらが相互に関連する現象であるのかについては不明な点が多い。

３．2012 年全国聞き取りアンケート調査

3.1．調査概要

本調査は、調査票を用いた面接調査の形式で、調査会社（社団法人新情報センター）に委託の上、2012 年 10 月に実施した。47 都道府県に 10 年以上の居住経験をもつ生え抜き・準生え抜きレベルの 20-30 代（以下若年層）・40-50 代（以下、中年層）・60 代以上（以下高年層）の３つの年層ごと(注3)に男女２人ずつ計 564 人から回答を得た。各年層・男女はそれぞれ 94 人ずつである。

以下の分析では、回答者の居住地（以下、調査地）とは別に、「出身地」として質問した 15 歳までに一番長く生活した地域を「生育地」とみなす。47 都道府県すべての居住者から回答を得ているが、都道府県レベルの地域差をみていくにはそれぞれのサンプル数が少ないため、以下に示す 13 のブロックレベルに統合し、地域差を検討していくことにする。関東は、首都圏（東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県）と北関東（茨城県・栃木県・群馬県）に分けた(注4)。北海道と沖縄県は、方言・言語意識(注5)などの面において東北や九州とブロック化して検討することは重要な差異を見落とすと考え、道県単位のままとした。調査地ならびに生育地による回答者数内訳は次の通り。調査地・生育地市区町村の都市規模別回答者数も併せて示す。

〔調査地 13 ブロック内訳〕
北海道（12）、東北（72）、北関東（36）、首都圏（48）、甲信越（36）、北陸（36）、東海（48）、近畿（72）、中国（60）、四国（48）、九州（84）、沖縄（12）
〔調査地都市規模内訳〕
20 大都市(注6)（73）、市部（465）、町村部（26）

〔生育地 13 ブロック内訳〕
北海道（16）、東北（76）、北関東（34）、首都圏（35）、甲信越（33）、北陸（39）、東海（52）、近畿（70）、中国（60）、四国（50）、九州（88）、沖縄（11）
〔生育地都市規模内訳〕
23 区（7）、20 大都市（65）、市部（442）、町村部（50）

調査地を基準にした生育地との一致率は、首都圏（72.9%[注7]）以外は90%以上一致した[注8]。首都圏以外は、調査地と生育地がほぼ重なる回答者が得られたとみてよさそうだ。

3.2. 調査項目

調査項目は、「とびはね音調」に関連した6種類の刺激音声に対する反応（使用程度・聞く程度・意味）を尋ねる項目と、言語意識ならびに地域に対する意識項目、「打ちことば」メディアの利用状況、回答者属性項目によって構成されている。以下では、聞き取りアンケート調査で用いた刺激音声とそれにかんする項目と選択肢、言語意識等の項目を示す。

3.2.1. 聞き取りアンケート項目

6つの刺激音声[注9]の内訳は、2. で示した3拍形容詞II類[注10]「高い」を前接部分とするナイ形式4音調と、3拍形容詞I類[注11]「赤い」を前接部分とするナイ形式2音調。刺激音声には30代女性アナウンサーの発話を用いた[注12]。

2回ずつ刺激音声を聞かせたのち、各刺激音声に対して①回答者自身の使用程度（よくする、たまにする、しない、わからない）、②調査地における聞く程度（よく聞く、たまに聞く、聞かない、わからない）、③どのような意味として解釈するか（質問[注13]、同意求め[注14]、その他、わからない）について選択肢を示した上でひとつずつ回答を求めた。「とびはね音調」については、さらにその刺激音声を聞いて思い浮かぶイメージを、提示したイメージ語（東京、若者、女性、男性、都会、田舎、かわいい、かっこ悪い、好き、嫌い、その他、わからない[注15]）のうち、あてはまるものすべてについて回答を求めた。

調査で使用した6つの刺激音声は以下の通り。（　）内は、前接形式のアクセント型－ナイのアクセント型＋文末の上昇を示す。刺激音声のF0曲線を図1として示す。

(1) タカクナイ↑(0-0↑)：とびはね音調
(2) タカクナ］イ↑(0-1↑)
(3) タ］カクナイ↑(1-0↑)
(4) タ］カクナ］イ↑(1-1↑)
(5) アカクナイ↑(0-0↑)
(6) アカクナ］イ↑(0-1↑)

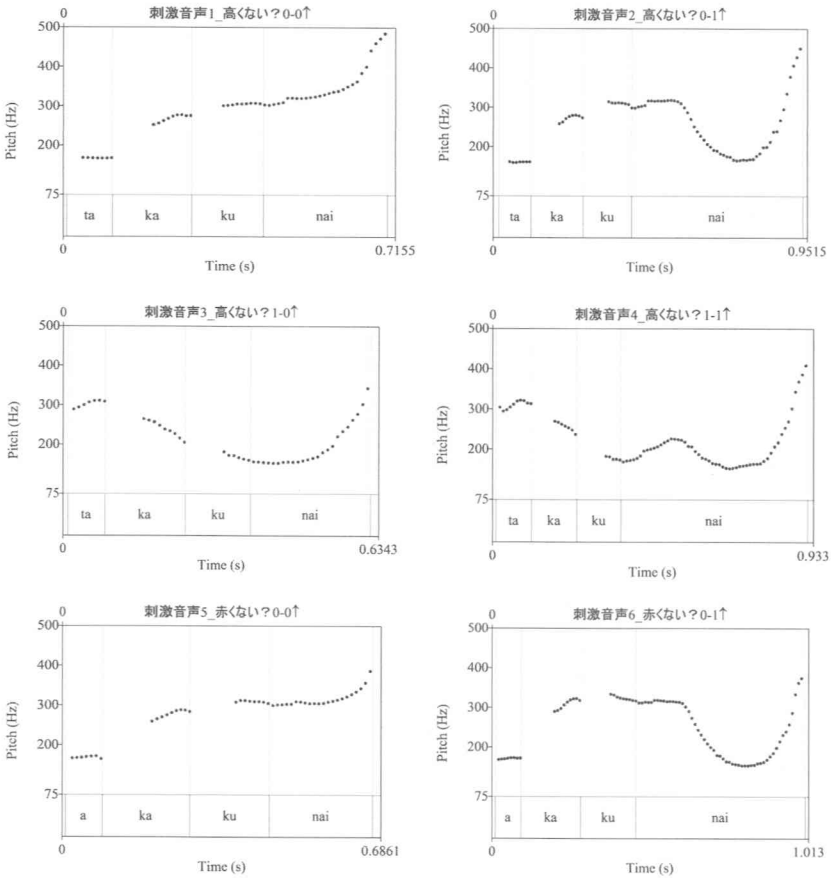

図１　2012年全国聞き取りアンケート刺激音声１～６のＦ０曲線

3.2.2. 言語意識項目など

「とびはね音調」の受容程度とパターンとの関わりをみるために、以下の言語意識などにかんする項目にも多肢選択式による回答を求めた(注16)。

(1) 出身地方言好悪

(2) 出身地方言使用程度

(3) 共通語使用程度

(4) 出身地方言と共通語の割合

(5) 方言と共通語の使い分け意識
(6) 共通語好悪
(7) 東京のことば好悪
(8) 東京のことばへの関心
(9) 周囲のことばづかいへの関心
(10) 新しいことばへの関心(注17)
(11) 新しいことばの採用
(12) 注目都市圏
(13) 各種メディアの利用状況〔a. HP、b. PC メール、c. 携帯メール、d. SNS、e. ブログ、f. ツイッター〕

4. 報告

以下では、聞き取りアンケート調査結果全体を概観した上で、「とびはね音調」関連項目について詳しく報告する。

4.1. 聞き取りアンケート結果の概観

まず、6つの刺激音声に対する、①使用程度、②聞く程度、③意味についての回答を概観する。

以下、質的な2変数の関係については、クロス集計の上、カイ二乗検定を行なった。2*3 以上のクロス集計表については、カイ二乗検定において 5%水準で有意な連関の認められたものについては、さらに残差分析を行ない、調整済み残差が +2 以上のセルを他よりも大きな値が得られたセルとして言及していく。有意な連関が認められないケースについても調整済み残差が +3 以上のセルがある場合、適宜、特徴的なセルとして言及する。

4.1.1. 6つの刺激音声の使用程度

6つの刺激音声について「よくする」の降順で示したものが図2。いずれの刺激音声も「しない」が 55.3%～ 64.5%ともっとも多い。

「よくする」の降順にみると、「赤くない 0-0 ↑」、「高くない↑ 1-0 ↑」、「とびはね音調」の「高くない 0-0 ↑」、「高くない↑ 1-1 ↑」、「高くない↑ 1-

１↑」という順に並ぶ。

起伏型か平板型かを問わず、「前接形式が共通語アクセント型＋浮き上がり調」の使用程度が相対的に高く、前接形式のアクセント型がどうであれ従来型昇調が関わるものについては相対的に使用程度が低いことがわかる。「とびはね音調」を「する（よく＋たまに）」は35.8%となっており、両タイプの中間に位置づけられている。全国平均で約４割から「する」という回答が得られたことは、この音調がある程度は全国においても受容されていることを示す。

一方、「とびはね音調」の使用率が100%であった2010年首都圏大学生聞き取りアンケート結果（田中ゆかり2011b）や、65.5%であった1992年首都圏高校生聞き取りアンケート調査の結果（田中ゆかり1993、2010[注18]）と比べると、2012年全国聞き取りアンケート調査の35.8%という結果は、かなり低い。

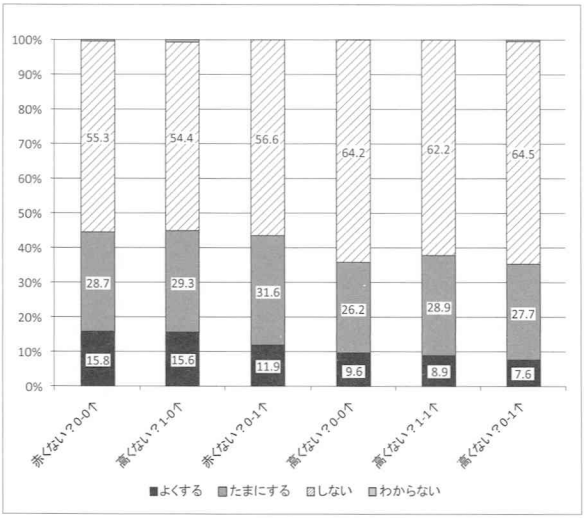

図２　６つの刺激音声使用程度（よくする％降順n＝564）

4.1.2. ６つの刺激音声の調査地で聞く程度

６つの刺激音声の調査地において聞く程度を「よく聞く」の降順で示したものが図３。いずれも、「聞く（よく＋たまに）」が50%以上となっており、すべての刺激音声が半数以上に聞き覚えのある音調として回答されたことになる。

「よく聞く」の降順にみると、図２で確認した使用程度の「よくする」の降順と多少の入れ替わりはあるものの、大きな傾向は一致している。すなわち、前接形式が起伏型か平板型かには関わらず、「前接形式共通語アクセント型＋浮き上がり調」が相対的に聞く程度が高く、前接形式を問わず従来型昇調をとるものが相対的に聞く程度が低く、「とびはね音調」がその中間に位置するという傾向である。

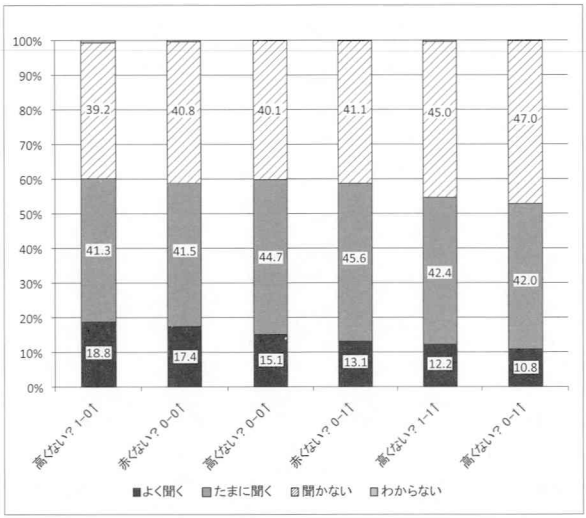

図３　６つの刺激音声聞く程度（よく聞く％降順n＝564）

4.1.3. ６つの刺激音声の意味

首都圏における新しい言語形式としての「とびはね音調」の中心的な機能は、「同意求め」であることが確認されている（田中ゆかり 2011b）。よってここでは、6つの刺激音声についての意味を「同意求め」の降順で示したもの（図4）を用いて全体を概観する。使用程度が30-40%台・聞く程度が50-60%台であっても、意味を問われれば「わからない」という回答は、非常に少ない。

「同意求め」の選択率降順に刺激音声をみる。「同意求め」は、「とびはね音調」の「高くない↑ 0-0 ↑」が61.7%ともっとも高い。ついで、「前接形式平板型（共通語アクセント型）＋浮き上がり調」の「赤くない↑ 0-0 ↑」が52.0%と続く。「赤くない↑ 0-0 ↑」と「とびはね音調」は、「前接形式アクセント下がり目

なし＋浮き上がり調」という点が共通しており、音調としての聞こえにはほとんど差はない。「同意求め」が 50%を超えて選択されたものは、「とびはね音調」または「とびはね音調」と同様の音調ということになる。

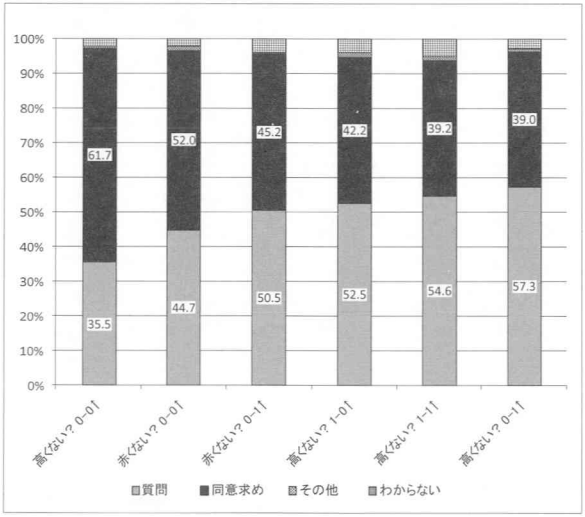

図4　6つの刺激音声の意味（「同意求め」降順％ n＝564）

一方、「質問」が優勢なものは、「とびはね音調」との対比形式となる「前接形式起伏型アクセント（共通語アクセント型）＋浮き上がり調」の「高くない↑ 1-0 ↑」以外は、文末音調が従来型昇調をとる刺激音声である。

以上を踏まえると、「とびはね音調」は、全国調査においても「同意求め」として優勢に受容されていることがわかる。

また、「共通語アクセント型＋浮き上がり調」の「赤くない↑ 0-0 ↑」も「同意求め」が優勢である。これは、「とびはね音調」と同様な聞こえ、すなわち「前接形式アクセント下がり目なし＋浮き上がり調」で実現される音調が、「同意求め」として優勢に受容されているということになる。一方、前接形式を問わず、従来型昇調をとる刺激音声は「質問」が優勢という結果を示している。このような結果は、2011 年に実施した首都圏若年層を対象とした聞き取りアンケート調査の結果と一致している（田中ゆかり 2011b）。

4.2.「とびはね音調」の使用・聞く程度、意味とイメージ

以下では、「とびはね音調」である「高くない↑0-0↑」の刺激音声に対する聞き取りアンケート調査の結果に焦点を絞った報告を行なう。

4.2.1.「とびはね音調」使用程度と回答者属性などとの関連

「とびはね音調」の「高くない↑0-0↑」の使用程度と回答者属性等との連関を検討した結果、5%水準で統計的に有意であったものを表1として示す。

まず、性差・年層との連関が認められる。女性に「よくする」、若年層に「よくする」「たまにする」が多い。

地域については、調査地・生育地ほぼ同様の傾向を示す。以下では調査地についての結果について言及する(注19)。九州に「よくする」、北海道・北関東・首都圏に「たまにする」、近畿・中国に「しない」が多い。

都市規模については20大都市に「よくする」が多い。メディア利用程度でなんらかの関連が認められたものはHP・携帯メール・SNSで、利用傾向にある人は使う、利用しない人は使わない傾向を示す。これは、年層差が反映されたものと思われる。

使用程度と統計的に有意な連関の認められた言語意識項目は、次の通り。「方言を使用していると思わない」には「わからない」が多く、「東京のことば」が「嫌い」には「しない」が多い。「新しいことば」が「気になるタイプ」は「よくする」、「どちらでもないタイプ」は「たまにする」、「気にならないタイプ」は「しない」。「新しいことば」を「使うタイプ」は「よくする」、「どちらかというと使わないタイプ」は「たまにする」、「使わないタイプ」は「しない」。

以上を踏まえると、「東京のことば」が嫌いだと「とびはね音調」は使用せず、「新しいことば」に対して関心があり、使うというタイプは「とびはね音調」も使う程度が高いということになる。

4.2.2.「とびはね音調」聞く程度と回答者属性などとの関連

「とびはね音調」の「高くない↑0-0↑」の調査地における聞く程度と回答者属性等との連関を検討したところ、5%水準で統計的に有意であったものを表2として示す。

表１　「高くない 0-0↑」：あなたは、この発音をどの程度しますか。

	総数	よくする %	たまにする %	しない %	わからない %	する(計) %
＊＊【　総　　数　】＊＊	564	9.6	26.2	64.2	-	35.8
〔Ｆ１　性〕						
男性	282	6.0	24.5	69.5	-	30.5
女性	282	13.1	28.0	58.9	-	41.1
〔Ｆ２　年齢（20 歳刻み）〕						
20 ～ 39 歳	188	14.4	35.6	50.0	-	50.0
40 ～ 59 歳	188	8.0	25.0	67.0	-	33.0
60 歳以上	188	6.4	18.1	75.5	-	24.5
〔Ｆ１×Ｆ２　性・年齢別〕						
男性　20 ～ 39 歳	94	11.7	34.0	54.3	-	45.7
40 ～ 59 歳	94	3.2	19.1	77.7	-	22.3
60 歳以上	94	3.2	20.2	76.6	-	23.4
女性　20 ～ 39 歳	94	17.0	37.2	45.7	-	54.3
40 ～ 59 歳	94	12.8	30.9	56.4	-	43.6
60 歳以上	94	9.6	16.0	74.5	-	25.5
〔調査地都道府県 13 ブロック別〕						
北海道	12	16.7	58.3	25.0	-	75.0
東北	72	6.9	44.4	48.6	-	51.4
北関東	36	11.1	41.7	47.2	-	52.8
首都圏	48	14.6	18.8	66.7	-	33.3
甲信越	36	8.3	25.0	66.7	-	33.3
北陸	36	8.3	33.3	58.3	-	41.7
東海	48	10.4	27.1	62.5	-	37.5
近畿	72	4.2	9.7	86.1	-	13.9
中国	60	5.0	23.3	71.7	-	28.3
四国	48	2.1	14.6	83.3	-	16.7
九州	84	21.4	22.6	56.0	-	44.0
沖縄	12	-	33.3	66.7	-	33.3
〔調査地都市規模市区町村４ブロック別〕						
23 区	-	-	-	-	-	-
20 大都市（政令指定都市）	73	19.2	26.0	54.8	-	45.2
市部	465	8.2	26.2	65.6	-	34.4
町村部	26	7.7	26.9	65.4	-	34.6
〔生育地都道府県 13 ブロック〕						
北海道	16	12.5	43.8	43.8	-	56.3
東北	76	6.6	42.1	51.3	-	48.7
北関東	34	8.8	44.1	47.1	-	52.9
首都圏	35	17.1	17.1	65.7	-	34.3
甲信越	33	9.1	24.2	66.7	-	33.3
北陸	39	7.7	33.3	59.0	-	41.0
東海	52	9.6	26.9	63.5	-	36.5
近畿	70	4.3	10.0	85.7	-	14.3
中国	60	5.0	28.3	66.7	-	33.3
四国	50	4.0	14.0	82.0	-	18.0
九州	88	21.6	21.6	56.8	-	43.2
沖縄	11	-	27.3	72.7	-	27.3
海外	-	-	-	-	-	-
わからない	-	-	-	-	-	-
〔生育地市区町村都市規模４ブロック〕						
23 区	7	14.3	-	85.7	-	14.3
20 大都市（政令指定都市）	65	20.0	26.2	53.8	-	46.2
市部	442	8.4	26.0	65.6	-	34.4
町村部	50	6.0	32.0	62.0	-	38.0
〔Ｆ５ａ　HP の利用状況〕						
毎日	185	11.9	30.3	57.8	-	42.2
週に数回程度	93	7.5	30.1	62.4	-	37.6
週に１回以下	53	7.5	41.5	50.9	-	49.1
利用しない	229	8.3	18.3	73.4	-	26.6
わからない	4	50.0	-	50.0	-	50.0
利用する（計）	331	10.0	32.0	58.0	-	42.0
〔Ｆ５ｃ　携帯メールの利用状況〕						
毎日	293	12.3	28.7	59.0	-	41.0
週に数回程度	113	5.3	31.9	62.8	-	37.2
週に１回以下	46	6.5	23.9	69.6	-	30.4
利用しない	108	6.5	15.7	77.8	-	22.2
わからない	4	50.0	-	50.0	-	50.0
利用する（計）	452	10.0	29.0	61.1	-	38.9
〔Ｆ５ｄ　SNS の利用状況〕						
毎日	71	21.1	25.4	53.5	-	46.5
週に数回程度	17	11.8	52.9	35.3	-	64.7
週に１回以下	27	22.2	18.5	59.3	-	40.7
利用しない	430	6.5	26.3	67.2	-	32.8
わからない	19	15.8	15.8	68.4	-	31.6
利用する（計）	115	20.0	27.8	52.2	-	47.8

【凡例】白黒反転セル：5% 水準で有意な連関有 & 特徴的に回答率の高いセル
網かけのセル：特徴的に回答率の高いセル（調整済み残差 +3 以上）

表2　「高くない 0-0↑」：あなたは、この発音をどの程度聞きますか。

	総数	よく聞く %	たまに聞く %	聞かない %	わからない %	聞く（計） %
＊＊【　総　　数　】＊＊	564	15.1	44.7	40.1	0.2	59.8
〔F 1　性〕						
男性	282	12.8	44.0	43.3	-	56.7
女性	282	17.4	45.4	36.9	0.4	62.8
〔F 2　年齢（20 歳刻み）〕						
20 ～ 39 歳	188	21.3	47.3	31.4	-	68.6
40 ～ 59 歳	188	16.0	51.6	31.9	0.5	67.6
60 歳以上	188	8.0	35.1	56.9	-	43.1
〔F 1 × F 2　性・年齢別〕						
男性　20 ～ 39 歳	94	21.3	45.7	33.0	-	67.0
40 ～ 59 歳	94	12.8	51.1	36.2	-	63.8
60 歳以上	94	4.3	35.1	60.6	-	39.4
女性　20 ～ 39 歳	94	21.3	48.9	29.8	-	70.2
40 ～ 59 歳	94	19.1	52.1	27.7	1.1	71.3
60 歳以上	94	11.7	35.1	53.2	-	46.8
〔調査地都道府県 13 ブロック別〕						
北海道	12	41.7	50.0	8.3	-	91.7
東北	72	8.3	51.4	40.3	-	59.7
北関東	36	25.0	55.6	19.4	-	80.6
首都圏	48	25.0	52.1	22.9	-	77.1
甲信越	36	22.2	52.8	25.0	-	75.0
北陸	36	11.1	50.0	38.9	-	61.1
東海	48	14.6	45.8	39.6	-	60.4
近畿	72	5.6	30.6	63.9	-	36.1
中国	60	15.0	40.0	45.0	-	55.0
四国	48	2.1	43.8	54.2	-	45.8
九州	84	23.8	39.3	35.7	1.2	63.1
沖縄	12	-	41.7	58.3	-	41.7
〔調査地市区町村 4 ブロック別〕						
23 区	-	-	-	-	-	-
20 大都市（政令指定都市）	73	26.0	52.1	21.9	-	78.1
市部	465	13.8	44.5	41.5	0.2	58.3
町村部	26	7.7	26.9	65.4	-	34.6
〔生育地都道府県 13 ブロック〕						
北海道	16	31.3	62.5	6.3	-	93.8
東北	76	7.9	48.7	43.4	-	56.6
北関東	34	23.5	58.8	17.6	-	82.4
首都圏	35	31.4	51.4	17.1	-	82.9
甲信越	33	24.2	51.5	24.2	-	75.8
北陸	39	10.3	51.3	38.5	-	61.5
東海	52	13.5	46.2	40.4	-	59.6
近畿	70	7.1	27.1	65.7	-	34.3
中国	60	15.0	43.3	41.7	-	58.3
四国	50	2.0	42.0	56.0	-	44.0
九州	88	23.9	39.8	35.2	1.1	63.6
沖縄	11	-	45.5	54.5	-	45.5
海外	-	-	-	-	-	-
わからない	-	-	-	-	-	-
〔生育地市区町村 4 ブロック〕						
23 区	7	42.9	42.9	14.3	-	85.7
20 大都市（政令指定都市）	65	20.0	56.9	23.1	-	76.9
市部	442	14.3	43.7	41.9	0.2	57.9
町村部	50	12.0	38.0	50.0	-	50.0
〔F 5　メディアの利用状況 a HP〕						
毎日	185	19.5	47.6	32.4	0.5	67.0
週に数回程度	93	14.0	52.7	33.3	-	66.7
週に 1 回以下	53	18.9	52.8	28.3	-	71.7
利用しない	229	10.5	38.0	51.5	-	48.5
わからない	4	50.0	-	50.0	-	50.0
利用する（計）	331	17.8	49.8	32.0	0.3	67.7
〔F 5　メディアの利用状況 c 携帯メイル〕						
毎日	293	18.1	45.4	36.2	0.3	63.5
週に数回程度	113	11.5	55.8	32.7	-	67.3
週に 1 回以下	46	15.2	34.8	50.0	-	50.0
利用しない	108	9.3	36.1	54.6	-	45.4
わからない	4	50.0	25.0	25.0	-	75.0
利用する（計）	452	16.2	46.9	36.7	0.2	63.1

【凡例】白黒反転セル：5% 水準で有意な連関有 & 特徴的に回答率の高いセル

使用程度においては性差・年層との連関が認められたが（表1）、聞く程度では性との連関は認められず、年層との間にのみ連関が認められた。若年層に「よく聞く」、中年層に「たまに聞く」、高年層に「聞かない」が多い。

ただし、男女別に年層との連関をみていくと、女性では高年層に「聞かない」が多いものの、「よく聞く」「たまに聞く」においては年層との連関が認められない。一方、男性は若年層に「よく聞く」・高年層に「聞かない」が多くなっており、男性は若いほど「聞く」が多い。女性は、すでに中年層以下において「聞く」が主流化しているのに対して、男性は、中年層はまだその段階に達していないことの反映と考えられる。

次に地域との連関を検討する。ここでも調査地と生育地の結果はほぼ重なるため、調査地の結果について述べる。北海道・首都圏・九州に「よく聞く」、近畿・四国に「聞かない」が多い。使用程度と聞く程度の結果を併せみると、九州・北海道では「使う」「聞く」傾向、近畿・四国では「しない」「聞かない」傾向が重なる。東北・北関東・首都圏においては、使用と聞く程度の結果はそれほど重なりをみせない。

都市規模については、20大都市に「よく聞く」、町村部に「聞かない」が多い。使用程度と聞く程度の結果において傾向性が重なるのは、20大都市が「する」「聞く」ということである。

メディア利用程度において、有意な連関が認められた項目は、HPと携帯メールである。いずれも、利用程度が高いほど「とびはね音調」を「聞く」という結果を示した。どちらも若い程、利用程度の高いメディアであることから、年層差の反映と思われる。

聞く程度と統計的に有意な連関の認められた言語意識項目は、「新しいことば」への態度にかんするものである。「新しいことば」を「使うタイプ」は「よく聞く」、「どちらでもない」は「たまに聞く」、「使わないタイプ」は「聞かない」という結果となった。「新しいことば」への態度次第で「聞く」という認識にも差が出てくることを示している。

4.2.3.「とびはね音調」意味と回答者属性などとの関連

「とびはね音調」の「高くない↑0-0↑」の意味と回答者属性項目等との関係

表3　「高くない0-0↑」：あなたは、この発音を聞いたら、どのような意味として受けとめますか。

	総数	質問 %	同意求め %	その他 %	わからない %
＊＊【総　数】＊＊	564	35.5	61.7	0.5	2.3
〔F1　性〕					
男性	282	39.7	57.4	1.1	1.8
女性	282	31.2	66.0	－	2.8

【凡例】白黒反転セル：5%水準で有意な連関＆特徴的に回答率の高いセル

を検討し、5%水準で統計的に有意な連関の認められたものを表3として示す。

4.1.3.の図4で示した通り、「とびはね音調」の意味として「同意求め」は全体で61.7%、「質問」が35.5%となっている。これについては、表3で示したように、女性に「同意求め」、男性に「質問」が多いという性差が確認されるが、これを除くと年齢・地域・都市規模などとの連関は認められず、「とびはね音調」はこれらとは関わりなく「同意求め」として受容されていることになる。

「とびはね音調」の意味と言語意識項目等との関係を検討したところ、統計的に有意な連関の認められたものは、次の通り。「方言と共通語を使い分けている」には「同意求め」、「使い分けていない」には「質問」、「わからない」にはこの音調の意味も「わからない」とする回答が多い。また、「共通語」が「嫌い」「わからない」とする回答者には意味も「わからない」が多く、「新しいことば」を「使わないタイプ」「わからない」とする回答者には意味を「わからない」とする回答が多い。

以上を踏まえると、「方言と共通語を使い分けている」と意識する回答者は、音調による意味の使い分けも意識している程度が高いことになる。

4.2.4.「とびはね音調」とイメージ語との関連

「とびはね音調」から想起されるイメージ語として10%以上選択されたものを選択率降順に示すと、「女性」69.1%、「若者」67.7%、「都会」40.1%、「東京」29.8%、「嫌い」15.4%となる。「若者」「都会」イメージ選択率の高さは、1992年に実施した首都圏高校生聞き取りアンケート調査の結果と重なる(注20)。

「とびはね音調」から想起されるイメージ語と回答者属性等との関係を検討した結果、5%水準で統計的に有意な連関の認められたものを表4として示す。

表４　「高くない 0-0 ↑」：この発音から思い浮かぶイメージとしてあてはまるものがあれば、この中からいくつでもあげてください。〈M.A.〉％

	総数	東京	若者	女性	男性	都会	田舎	かわいい	かっこ悪い	好き	嫌い	その他	わからない	回答計
＊＊【　総　　数　】＊＊	564	29.8	67.7	69.1	2.7	40.1	5.3	6.0	3.0	3.4	15.4	1.2	2.0	245.7
〔Ｆ１　性〕														
男性	282	31.9	64.5	66.0	3.5	39.0	4.6	6.4	3.2	3.9	16.0	1.4	3.2	243.6
女性	282	27.7	70.9	72.3	1.8	41.1	6.0	5.7	2.8	2.8	14.9	1.1	0.7	247.9
〔Ｆ２　年齢（20 歳刻み）〕														
20 ～ 39 歳	188	31.9	82.4	69.1	2.1	38.8	4.8	2.7	2.1	1.1	12.8	0.5	2.1	250.5
40 ～ 59 歳	188	34.0	71.3	71.3	2.7	37.2	6.4	5.3	2.1	3.2	14.4	1.1	1.1	250.0
60 歳以上	188	23.4	49.5	67.0	3.2	44.1	4.8	10.1	4.8	5.9	19.1	2.1	2.7	236.7
〔Ｆ１×Ｆ２　性・年齢別〕														
男性　20 ～ 39 歳	94	31.9	76.6	63.8	3.2	38.3	5.3	3.2	2.1	1.1	13.8	1.1	3.2	243.6
40 ～ 59 歳	94	38.3	71.3	68.1	4.3	36.2	3.2	6.4	2.1	3.2	11.7	-	2.1	246.8
60 歳以上	94	25.5	45.7	66.0	3.2	42.6	5.3	9.6	5.3	7.4	22.3	3.2	4.3	240.4
女性　20 ～ 39 歳	94	31.9	88.3	74.5	1.1	39.4	4.3	2.1	2.1	1.1	11.7	-	1.1	257.4
40 ～ 59 歳	94	29.8	71.3	74.5	1.1	38.3	9.6	4.3	2.1	3.2	17.0	2.1	-	253.2
60 歳以上	94	21.3	53.2	68.1	3.2	45.7	4.3	10.6	4.3	4.3	16.0	1.1	1.1	233.0
〔調査地都道府県13ブロック別〕														
北海道	12	41.7	66.7	75.0	-	41.7	-	-	16.7	-	25.0	8.3	-	275.0
東北	72	19.4	66.7	76.4	2.8	51.4	6.9	8.3	-	8.3	9.7	1.4	1.4	252.8
北関東	36	8.3	55.6	83.3	2.8	16.7	16.7	2.8	8.3	-	11.1	-	2.8	208.3
首都圏	48	20.8	68.8	64.6	6.3	25.0	12.5	6.3	8.3	8.3	12.5	2.1	4.2	239.6
甲信越	36	11.1	86.1	66.7	-	27.8	-	-	2.8	-	8.3	-	-	202.8
北陸	36	25.0	63.9	80.6	-	44.4	-	2.8	5.6	5.6	8.3	-	-	236.1
東海	48	12.5	79.2	66.7	2.1	22.9	4.2	2.1	4.2	2.1	20.8	2.1	6.3	225.0
近畿	72	77.8	55.6	70.8	1.4	45.8	1.4	6.9	1.4	1.4	29.2	1.4	2.8	295.8
中国	60	21.7	71.7	55.0	3.3	43.3	1.7	11.7	1.7	-	16.7	-	1.7	228.3
四国	48	47.9	66.7	70.8	2.1	66.7	4.2	10.4	-	6.3	20.8	-	-	295.8
九州	84	22.6	65.5	64.3	4.8	34.5	8.3	3.6	1.2	-	10.7	2.4	1.2	219.0
沖縄	12	50.0	91.7	66.7	-	75.0	-	16.7	-	16.7	8.3	-	-	325.0
〔調査地市区町村４ブロック別〕														
23 区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
20 大都市（政令指定都市）	73	35.6	71.2	65.8	2.7	28.8	4.1	4.1	5.5	1.4	20.5	1.4	-	241.1
市部	465	28.2	68.0	69.7	2.8	40.0	5.6	6.0	2.8	3.4	14.8	1.3	2.2	244.7
町村部	26	42.3	53.8	69.2	-	73.1	3.8	11.5	-	7.7	11.5	-	3.8	276.9
〔生育地都道府県 13 ブロック〕														
北海道	16	37.5	62.5	75.0	6.3	37.5	6.3	-	18.8	-	18.8	6.3	-	268.8
東北	76	19.7	65.8	75.0	1.3	48.7	7.9	7.9	-	7.9	10.5	1.3	2.6	248.7
北関東	34	8.8	58.8	85.3	2.9	17.6	17.6	2.9	8.8	-	11.8	-	2.9	217.6
首都圏	35	22.9	74.3	65.7	8.6	25.7	11.4	5.7	8.6	5.7	14.3	-	2.9	245.7
甲信越	33	12.1	84.8	66.7	-	27.3	-	-	3.0	-	9.1	-	-	203.0
北陸	39	30.8	61.5	76.9	-	46.2	-	2.6	5.1	5.1	7.7	-	-	235.9
東海	52	11.5	78.8	67.3	1.9	25.0	3.8	1.9	3.8	3.8	19.2	1.9	5.8	225.0
近畿	70	75.7	55.7	70.0	1.4	44.3	1.4	8.6	1.4	2.9	28.6	1.4	2.9	294.3
中国	60	21.7	71.7	55.0	3.3	41.7	1.7	10.0	1.7	-	16.7	1.7	1.7	226.7
四国	50	46.0	66.0	70.0	2.0	64.0	4.0	12.0	-	6.0	20.0	-	-	290.0
九州	88	21.6	65.9	64.8	4.5	35.2	8.0	3.4	1.1	-	11.4	2.3	1.1	219.3
沖縄	11	54.5	90.9	72.7	-	81.8	-	18.2	-	18.2	9.1	-	-	345.5
海外	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
わからない	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
〔生育地市区町村４ブロック〕														
23 区	7	28.6	71.4	28.6	14.3	14.3	28.6	-	28.6	-	14.3	-	-	228.6
20 大都市（政令指定都市）	65	33.8	69.2	63.1	4.6	27.7	6.2	6.2	6.2	3.1	20.0	1.5	-	241.5
市部	442	29.4	69.2	70.1	2.5	41.0	5.0	5.9	2.5	2.9	15.6	1.4	2.0	247.5
町村部	50	28.0	52.0	74.0	-	52.0	4.0	8.0	-	8.0	8.0	-	4.0	238.0

【凡例】白黒反転セル：5%水準で有意な連関有 & 特徴的に回答率の高いセル
網かけのセル：特徴的に回答率の高いセル（調整済み残差 +3 以上）

年層・地域・都市規模とイメージ語との連関が認められた。年層では、若年層に「若者」、高年層に「かわいい」「好き」が多く、調査地都市規模では、町村部に「都会」が多い。生育地都市規模では23区に「田舎」「かっこ悪い」、20大都市に「都会」が多い。

表4からは、地域によってこの音調から受けるイメージは、かなり異なることも確認される。大きく、(ⅰ) 東北・甲信越、(ⅱ) 北海道・北関東・首都圏、(ⅲ) 近畿、(ⅳ) 九州、(ⅴ) 沖縄の5つに分類できそうだ。調査地を主とした分類を以下に示す。生育地のみにおいて連関の認められたものは波線で、調査地・生育地ともに連関の認められたものについては□で囲んだ。

(ⅰ) 東北・甲信越：「若者」(甲信越)、「都会」(東北)、「好き」(東北)
(ⅱ) 北海道・北関東・首都圏：「田舎」(北関東・首都圏)、「かっこ悪い」(北海道・首都圏・北関東)、「好き」(首都圏)
(ⅲ) 近畿：「東京」「嫌い」
(ⅲ') 四国：「東京」「都会」
(ⅳ) 九州：「都会」
(ⅴ) 沖縄：「都会」、「好き」

「とびはね音調」の発信源である首都圏を含む (ⅱ) の地域を除くと、この音調から想起される主たるイメージ語は、「都会」「東京」であることがわかる。(ⅰ) 東北、(ⅳ) 沖縄において、「都会」「好き」が重なり、(ⅳ) 九州、(ⅲ') 四国においても「都会」が多くあらわれる。(ⅲ) 近畿、(ⅲ') 四国では「東京」が多い。このことから、この音調が首都圏 (東京) 由来のものであるという感覚は広く共有されていることがうかがえる。また、(ⅰ) 東北、(ⅳ) 九州、(ⅴ) 沖縄は「好き」の選択率も高い。とりわけ九州は、「とびはね音調」の使用程度も聞く程度も高い。

1992年首都圏高校生聞き取りアンケート調査の結果 (田中ゆかり 1993、2010) においては、この音調から「都会」「好き」というイメージ語を想起した回答者は、使用程度が高かった。これらのイメージ語を「とびはね音調」の採用意欲と連動したものと捉えることができるならば、(ⅰ) 東北、(ⅳ) 九州、

（ｖ）沖縄といった地域は、「とびはね音調」に対する採用意欲の高い地域とみることができる。

しかし、言語意識項目と回答者調査地・生育地との連関（表５・表６）をみると、（ⅲ）九州は、「東京のことば」は「嫌い」で、「東京のことばへの関心」も「ない」、「新しいことばの採用」も「使わない」、「注目都市圏」は「九州」という回答が多く、（ｉ）東北・（ｖ）沖縄と同列に扱うことは困難かも知れない。

九州にかんしては、２．でも述べたように疑問詞疑問文アクセントの下がり目を無効化し、文末まで上昇を続ける音調の報告がある（早田輝洋 1985、久保智之 1989）。九州の中核都市である福岡方言における類似音調の存在が「とびはね音調」に対する使用程度・聞く程度の高さと関連する可能性は否定できないが、確定的な証拠はない。

一方、「東京」の選択率が高いという点においては、上述の地域と同様だが、（ⅲ）近畿においては「嫌い」の選択率も高い。4.2.2. と 4.2.3. でみてきた使用・聞く程度における傾向性と重ね合わせると、（ⅲ）近畿・（ⅲ'）四国は、「とびはね音調」に対して「使用しない」「聞かない」傾向を示している。言語意識項目等からみても（表５・表６）、（ⅲ）近畿は「東京のことば」は「嫌い」、「東京のことばへの関心」は「ない」、「注目地域」は「近畿圏」である[注21]。

さいごに、「とびはね音調」の発信源である首都圏を含む（ⅱ）においては、「田舎」（北関東）、「かっこ悪い」（北海道・首都圏）があらわれることが特徴的である。これは、「とびはね音調」のアクセント下降を無効化し、文末まで上昇し続ける聴覚印象が首都圏に隣接する北関東・無アクセント方言における「尻上がりイントネーション」を想起させるためと考えられる。

首都圏に居住あるいは生育した者が、北関東方言を身近な「方言」として捉らえていることは、2007 年に首都圏大学生を対象に実施したイメージ語から想起する方言として北関東方言が特徴的にあらわれたことからもわかる[注22]。23 区生育者に「田舎」「かっこ悪い」の選択率が高いことも、このことに関連すると思われる。これらより、「とびはね音調」の「する」程度が北関東に高くあらわれるのは、「とびはね音調」としての回答に加え、当該地方言の「尻上がりイントネーション」と聞きなした回答が含まれていることが強く推測される。このことは、首都圏における「とびはね音調」の「する」「聞く」の出

表5　言語意識項目と調査地ブロック

言語意識項目	p 値	特徴のある属性（カイ二乗検定 5%水準有意な連関有り＋調整済み残差 +2 以上のセル）
方言使用程度	0.000	近畿：使っていると思う、北関東・首都圏・甲信越・沖縄：使っていると思わない、甲信越：わからない
共通語使用程度	0.000	首都圏・甲信越：使っていると思う、近畿：使っていると思わない、九州：わからない
方言と共通語の割合	0.000	近畿：方言のみ、中国・四国・九州：どちらかというと方言、東北：半々、北海道・北関東・甲信越・沖縄：どちらかというと共通語、首都圏・沖縄：共通語のみ
方言と共通語の使い分け意識	0.000	北海道・首都圏：使い分けていないと思う、東海：わからない、中国：使い分けていると思う
共通語好悪	0.000	甲信越：好き、北関東：どちらかというと好き、四国・九州：どちらでもない、近畿：どちらかというと嫌い、首都圏：わからない
東京のことば好悪	0.000	首都圏：好き・どちらかというと好き、近畿・九州：嫌い
東京のことばへの関心	0.000	北関東・北陸：ある、北関東・四国：どちらでもない、東北：どちらかというとない、近畿・九州：ない
周囲のことばづかいへの関心	0.117	－
新しいことばへの関心	0.516	－
新しいことばの採用	0.010	北海道・東海：使う、東北：どちらかというと使わない、九州：使わない
注目都市圏	0.000	東北・首都圏：東京圏、近畿：関西圏、東海：名古屋圏・その他、九州：福岡圏、甲信越：札幌圏、東北：仙台圏、中国：広島圏・わからない

表6　言語意識項目と生育地ブロック

言語意識項目	p 値	特徴のある属性（カイ二乗検定 5%水準有意差有り＋調整済み残差 +2 以上のセル）
方言使用程度	0.000	近畿：使っていると思う、北関東・首都圏・甲信越・沖縄：使っていると思わない、甲信越：わからない
共通語使用程度	0.000	首都圏・甲信越・沖縄：使っていると思う、近畿：使っていると思わない、九州：わからない
方言と共通語の割合	0.000	近畿：方言のみ、中国・四国・九州：どちらかというと方言、東北：半々、北海道・北関東・甲信越・沖縄：どちらかというと共通語、首都圏：共通語のみ
方言と共通語の使い分け意識	0.000	北陸：使い分けている、北海道・首都圏：使い分けていない、東海：わからない
共通語好悪	0.000	甲信越：好き、北関東：どちらかというと好き、四国・九州：どちらでもない、近畿：どちらかというと嫌い、首都圏：わからない
東京のことば好悪	0.000	首都圏・中国：好き、首都圏：どちらかというと好き、近畿・九州：嫌い
東京のことばへの関心	0.001	北関東・北陸：ある、首都圏・四国：どちらでもない、九州：ない
周囲のことばづかいへの関心	0.076	－
新しいことばへの関心	0.537	－
新しいことばの採用	0.007	東海：使う、東北：どちらかというと使わない・わからない、九州：使わない
注目都市圏	0.000	東北・首都圏：東京圏、近畿：関西圏、東海：名古屋圏、九州：福岡圏・その他、甲信越：札幌圏、東北：仙台圏

現率が、2011 年首都圏大学生調査などと比べ、いずれも低いこととも関連してくると思われる。

北海道が首都圏と同じグループに入っていることについては、田中ゆかり・前田忠彦（2012）でみたように方言・共通語に対する言語意識の観点から、北海道が首都圏と似たふるまいをしていることとが関連していると推測される。

4.2.5.「とびはね音調」に対するイメージの地域差から考えられること

以上を踏まえると、「とびはね音調」に対する態度によって、4.2.4. でみたような地域グループが形成されるように思われる。これは、2010 年全国方言意識調査の方言・共通語意識項目に基づく地域類型（田中ゆかり・前田忠彦 2012[注23]）と重なる部分もあるが、齟齬もみられる。

この齟齬の背景には、先に確認したように、当該の言語形式が「どの地域発のもの」として意識されるか、ということが強く関連しているように思われる。

新しい言語形式を採用する際、当該地域がどのような方言体系であるのかということや、発信地との地理的・時間的距離とは別に、当該言語形式をどの地域と結びつけて認識しているかということが重視されることを示していると考える[注24]。

「とびはね音調」がどのような経緯によって、東京発の新しい言語形式として受容されるようになったのかについて、データに基づきつつたどることは難しいと思うが、1990 年代に首都圏で拡張すると同時に、マス・メディア経由で東京発の新しい言語形式として全国に広まっていったものと推測される[注25]。その際、「若い女性」というステレオタイプも付与されていただろうことも掲示板の記述（田中ゆかり 2010[注26]）などから推測される。

5．まとめと今後の課題

2012 年 10 月に実施した全国聞き取りアンケート調査の結果について、「とびはね音調」関連項目を中心に報告してきた。その結果、「とびはね音調」は、全国平均では 4 割弱が「する」、6 割弱が「聞く」と回答し、意味については 6 割強が「同意求め」として受容しているという結果となった。また、この音調から想起されるイメージ語として、「東京」「都会」が広く共有されているこ

ともわかった。

この結果は、「とびはね音調」がすでに東京発の「同意求め」の音調として、かなりの程度全国的に受容されていることを示しているとみていいだろう。ただし、提示した「とびはね音調」の刺激音声を、当該地方言由来の別の音調と聞きなした回答も含まれた結果であることは否定できない。このあたりは、聞き取りアンケート調査という手法に基づくデータの限界といえる。

「とびはね音調」の受けとめ方については、使用・聞く程度、想起されるイメージ語いずれの側面においても、地域・年層による大きな差があることが確認できた。「とびはね音調」において認められた地域差については、「東京発の新しい言語形式」をそれぞれの地域ではどのように評価・受容するのか、ということの一端を示すものとも考えられる。

こういった「東京発の新しい言語形式」の全国各地における受容については、従来、若者ことばを中心とした語彙の拡散にかんする研究は数多くなされてきたが、音調形式については、まだあまり例がないように思える。

本調査データのさらなる吟味と併せて、このような新しい研究課題にどのように取り組んでいくのか、ということも今後の課題としたい。「とびはね音調」と当該地方言由来の音調との関係については、別途臨地調査などを実施し、本調査によって得られたデータの意味を検証していきたいと考えている。

注

1）高丸圭一（2010）は、ジャネ形式を扱っており、ナイ形式とは前接形式のアクセントの下がり目無効化の程度の違いがあることを根拠に、両者を別物として取り扱っている。しかし、本稿では、ジャネ形式は、ジャナイ形式の音訛形由来と解釈する（ナイ＞ネー＞ネ）。ジャネ形式により前接形式アクセントの下がり目無効化型が多くあらわれるのは、ジャネ形式の方が短い、すなわち前接形式の下がり目までの距離が短く、下がり目を無効化する力が強いため、あるいは、その結果、音調込みの定型表現化している可能性があるため、などが考えられる。助詞ダケのような前接形式の下がり目を無効化する「牽引型（郡史郎 2010）」と同様の働きをナイ部分の上昇が担っているという考え方に近い。

2）川上蓁（1971）では、長音・二重母音・撥音などの弱拍を含む最終音節のアクセントの下がり目が無効化される現象は、「上昇型文末イントネーションに打ち負かされ

てアクセント核が消された」結果という解釈を示している。

3）もっとも若い回答者は20歳、もっとも高齢な回答者は86歳。平均年齢は49.6歳(SD=16.0)。

4）アクセントにかんしては、群馬県方言は有形アクセント方言であるため、栃木・茨城県とは別カテゴリという考え方もあるが、ここでは、「東京」に対する意識との関わりから、首都圏方言とその他という区別を重視した。

5）方言と共通語にかんする言語意識項目を用いた地域のタイプ分類において、北海道と東北、九州と沖縄は異なるタイプに分類されている（田中ゆかり・前田忠彦2012)。

6）政令指定都市のこと。

7）調査地が首都圏の回答者の首都圏外生育地の%は次の通り。東北10.4%、北海道6.3%、中国4.2%、北関東・東海・四国各2.1%。

8）首都圏以外の調査地と生育地の一致率は次の通り。北海道（100%)、東北（95.8%)、北関東（91.7%)、甲信越（91.7%)、北陸（97.2%)、東海（97.2%)、近畿（93.1%)、中国（95.0%)、四国（100%)、九州（100%)、沖縄（91.7%)。

9）田中ゆかり（2011b）で用いたものと同じ刺激音声を用いた。

10）Ⅱ類形容詞終止形は、原則起伏型（-2型）をとる。「ナイ形式」においても起伏型をとる。「ない」は1型が共通語アクセント型。調査語とした「高くない」は1型が共通語アクセント型(1-1型)。首都圏における新しい型として2型(2-1型)と4型(アクセント下がり目無効化型）があらわれる。本調査では、1型と4型に絞って検討をした。調査語に関連した首都圏で共存する型のバリエーションについては、田中ゆかり（2003）参照。

11）Ⅰ類形容詞終止形は、原則平板型（0型）をとる。「ナイ形式」においても形容詞部分にアクセントの下がり目はあらわない。「赤くない」の共通語アクセント型は4型。Ⅰ類形容詞「ナイ形式」については、Ⅱ類のように勢力の拮抗するバリエーションはないといってよい。田中ゆかり（2003）参照。

12）刺激音声がイメージ語の選択に影響を与えた可能性は否定できない。

13）「相手から「高くないかどうか」について判断を求められている」とした。

14）「相手から「高いよね」と同意を求められている」とした。

15）1992年首都圏高校生聞き取りアンケート調査に用いたイメージ語に含まれていないものは「東京」「女性」「男性」「好き」「嫌い」。1992年首都圏高校生聞き取りアンケート調査では用いているが今回の調査で用いていないイメージ語は「新しい」「古い」「正しい」「誤り」「年寄り」「子供」「方言」「くだけた」「丁寧」「憎らしい」「軽薄」「重厚」。

16）この他、出身地方言の「a. 家族」「b. 同じ出身地の友人」「c. 異なる出身地の友人」

に対する使用程度についても質問している。選択肢は「よく使う、使うことがある、使わない、わからない」。

17）枝問として「気になる（気になる＋どちらかというと気になる）」という回答をした人には、「場面」と「部分」を選択肢として提示の上、あてはまるものすべてを選んでもらった。その上で具体例については、自由回答を求めた。

18）1992年に実施した首都圏高校生リスト読み上げ式調査（n=216）では、「とびはね音調」35.2%、「とびはね音調」と思われるものを加えると59.7%。聞き取りアンケート調査（n=220）では「使う」65.5%。調査語は「カワイクナイ？」。

19）3.1.で示したように調査地と生育地は、首都圏を除くとほぼ重なっている。また、全体生育地よりも現在の居住地である調査地による集計結果の方が、現在拡張中であるこの現象についてみていくには適当と思えたためである。

20）2012年全国聞き取りアンケート調査で用いたイメージ語と重なる1992年首都圏高校生聞き取りアアンケート調査（n=220）のイメージ語選択率は、「若者」39.5%、「くだけた」23.6%、「都会」14.5%、「かわいい」14.5%、「軽薄」10.9%、「田舎」5.5%、「かっこ悪い」4.1%、「かっこいい」1.4%。

21）「東京のことば」が「嫌い」に「とびはね音調」を「しない」が多い（4.2.1.）。

22）イメージ語と結びつく「方言」については、この他に2010年全国方言意識調査、2010年山形県三川町調査においても調査をした。2007年首都圏大学生調査の結果では、他の調査ではあらわれてこない茨城方言が「素朴」「かわいくない」というイメージ語と結びついていることが確認された（田中ゆかり2011a、2012）。

23）積極的方言話者（近畿・中国・四国）、共通語話者（首都圏・北海道）、消極的使い分け派（北関東・甲信越・北陸・東海）、積極的使い分け派（沖縄・九州・東北・中国）、判断逡巡派（その他・不明・北海道）の5群。

24）注目都市圏と関連しそうだ。基本的に調査ブロックの中核都市への注目度が高いが、その他の都市圏に注目する地域（東北の東京圏、甲信越の札幌圏など）、注目しない都市がある地域（関西・九州の東京圏、東北・首都圏・甲信越の関西圏）、注目都市圏のない地域（北海道・北関東・北陸・四国・沖縄）など。生育地でもほぼ同様な結果が得られた。

25）テレビCMや番組などを通じての伝播。最近の例としては、2012年冬に放送されたハウス食品「ウコンの力」で1979年香川県生まれの女性アナウンサーが「ズルクナイ0-0↑」、2013年1月9日「おはよう日本（NHK第1）」における1983年愛知県岡崎市生まれの女性アナウンサーが「カワイクナ］イデスカ↑」など。

26）2ちゃんねるの「「ギャル語」を見聞きすると腹が立つ奴」スレッドの投稿（2004年2月29日）として「形容詞のアクセントを無視したとびはねイントネーション大

嫌い、虫酸が走る。」という「ギャル語」としての把握などが典型的（最終閲覧 2008 年７月 22 日）。

【参考文献】

井上史雄（2008）「ことばの散歩道 123 新方言じゃね」『日本語学』27-9　明治書院

川上蓁（1963）「文末などの上昇調について」『国語研究』16 國學院大學国語研究会（川上蓁 1995『日本語アクセント論集』「第 26 文末などの上昇調について」汲古書院による）

———（1971）「国語アクセントの将来」金田一博士米寿記念論文集編集委員会（編）『金田一博士米寿記念論集』三省堂（川上蓁 1995『日本語アクセント論集』「第 22 国語アクセントの将来」汲古書院による）

久保智之（1989）「福岡市方言の、ダレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン」『国語学』156 国語学会

郡史郎（2010）「アクセントの実現度および「じゃない」の音調についてのいくつかの聴取実験」近畿音声言語研究会発表資料（2010/07/04 小修正版 ver.3）

高丸圭一（2010）「無アクセント地域の若年層における「じゃね？」先行語のアクセント―収録による調査と音声を提示したアンケート調査―」『明海日本語』15　明海大学

田中ゆかり（1993）「「とびはねインネーション」の使用とイメージ」『日本方言研究会第 56 回研究発表会発表原稿集』日本方言研究会

———（2003）「首都圏方言における形容詞活用形アクセントの複雑さが意味するもの―「気づき」「変わりやすさ」の観点から―」『語文』116　日本大学国文学会

———（2006）「「とびはね音調」の採否とイメージ―東京首都圏西部域高校生調査から―」『語文』126　日本大学国文学会

———（2007）「「とびはね音調」の成立と拡張―アクセントとイントネーションの協同的（collaborative）関係―」今石元久（編）『音声言語研究のパラダイム』和泉書院

———（2009）「「とびはね音調」とは何か」『論集』Ⅴ　アクセント史資料研究会

———（2010）「第２部「とびはね音調」の成立とその背景」『首都圏における言語動態の研究』笠間書院

———（2011a）「「とびはね音調」は同意要求表現か？」『論集』Ⅶ アクセント史資料研究会

———（2011b）『「方言コスプレの時代」―ニセ関西弁から龍馬語まで―』岩波書店

———（2012）「イメージ語からみた方言ステレオタイプ―山形県三川町調査・首都圏大学生調査・全国方言意識調査から―」『語文』142 日本大学国文学会

田中ゆかり・前田忠彦（2012）「話者分類に基づく地域類型化の試み―全国方言意識調査データを用いた潜在クラス分析による検討―」『国立国語研究所論集』3、国立国語研究所、pp.117-142 ※ online 版 URL　http://www.ninjal.ac.jp/publication/papers/03/

早田輝洋（1985）「4. 音韻句とアクセント」『博多方言のアクセント・形態論』九州大学出版会

早野慎吾（1992）「第３章 アクセント」玉造方言研究グループ『地域言語と文化―玉造のことば―』

〔付記〕

本研究は、以下の共同研究ならびに研究助成によるものである。

・国立国語研究所基幹型共同研究「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明（プロジェクトリーダー：相澤正夫）」

・科学研究費基盤研究（C）（課題番号 24520509 代表者：田中ゆかり）2012 ～ 2014 年度 「「とびはね音調」の実態とその機能の解明」

なお、「2012 年全国聞き取りアンケート調査」の設問作成にあたり、相澤正夫（国立国語研究所）・高木千恵（大阪大学）・林直樹（日本大学文理学部助手）の各氏から助言を受けた。

NHK アナウンサーのアクセントの現在
―複合動詞を中心に―

塩田　雄大

キーワード：アナウンサー　アクセント　複合動詞　中高化　山田の法則

１．はじめに

NHK では、アナウンサーが用いるためのアクセント辞典を編集している。1943（昭和 18）年に最初の版を出してから、1951（昭和 26）年、1966（昭和 41）年、1985（昭和 60）年、1998（平成 10 年）と、改訂を重ねてきた。各回の改訂にあたっては、記載するアクセントの変更・修正の根拠とするために「アナウンサーを対象としたアクセント調査」をおこなっている（塩田雄大 2011）。

本稿では、現代日本語アクセントの動態の一端を見るために、次回のアクセント辞典改訂に向けて実施したアクセント調査（NHK アナウンサー約 500 人対象）の結果について、特に複合動詞のアクセントを中心に報告する。アクセントの「中高化」がさらに進みつつあることを指摘し、また複合動詞のアクセントを決定する要因として、これまで重視されてきた「前部動詞」の式についてだけでなく「後部動詞」の式についても視野に入れるべきであることを、新たに提案する。

２．今回のアクセント調査

2.1．概要

現在出版されている NHK のアクセント辞典（NHK 放送文化研究所編（1998）『NHK 日本語発音アクセント辞典　新版』、以降「現行版」とする）を改訂して新しい版を準備するのにあたり、すでに２回の調査がおこなわれている（3 回目の調査が現在進行中である）。

第１回調査（2008 年、指摘式）は、NHK のアナウンサーに対して、「現行版」

の記述の中で改訂を要すると思われるものを、手書き（「現行版」のコピーに赤字を書き入れる形式）で指摘するように求めたものである（表1）。

表1　第1回アナウンサーアクセント調査（2008年・指摘式）の概要

調査期間	2008年10月～11月
調査対象	NHKアナウンサー　519人 　回答者　498人 　回答率　96%
調査項目	本文（約69000項目）および付録部分（約7000項目）
調査方法	現行の『NHK発音アクセント辞典』をコピーしたものに、改訂（アクセント型の変更・追加・削除など）が必要だと思われる箇所について手書きで書きこむ。
人数配分	全アナウンサーを、53のグループに分けた。各グループの内部構成は、若年層（23～34歳、約200人）／中堅層（35～44歳、約180人）／ベテラン層（45歳以上、約120人）の3年層ができるだけ均等になるよう配慮した。 【内訳】 「現行版」を53分割 回答グループ（1～53）：それぞれ約10人から構成 1人の回答者が閲読を担当する数：約1500項目（「現行版」で各20ページ程度）
指摘項目数	約12000項目（1件でも指摘のあった「異なり語数」）

（坂本充（2009.2）（2009.5））

第2回の調査（2009年、音声聴取式）は、上記の第1回調査で何らかの指摘があった約12000項目のうち、指摘件数の多かったものを中心として3021項目を選定し、音声を聴かせる形で回答を求めたものである（表2）。

設問群および回答グループを20に分割したのは、調査対象語数が3021項目（6500アクセント型）とたいへん多く、現役のアナウンサーがすべての設問に回答するような形式では負担が大きすぎると判断されたためである。

各アナウンサーは、イントラネットの画面上で示される文字表記（アクセント記号は付されていない）を見ながら、それにあわせて再生される読み上げ音声を聴いて、そのアクセント型が放送で使うのにふさわしいかどうかを回答する形になっている。

表2　第2回アナウンサーアクセント調査（2009年・音声聴取式）の概要

調査期間	2009年10月5日～11月13日
調査対象	NHKアナウンサー493人 回答者　471人 有効回答率　95%
調査項目	3021項目（うち複合動詞199）〔6500アクセント型〕
調査方法	NHK局内イントラネットを使って、読みあげ音声（事前に収録したもの）がランダムに再生される。回答者は、再生された音声を聴いて、○（放送で使うのに望ましい）、×（放送で使うのに望ましくない）、☆（このことばを口に出して言ったことがない）の判定（いずれか一つ）をする。
人数配分	全アナウンサーを、20のグループに分けた。各グループの内部構成は、若年層（23～34歳、約200人）／中堅層（35～44歳、約180人）／ベテラン層（45歳以上、約120人）の3年層ができるだけ均等になるよう配慮した。 【内訳】 設問群(1～20)　：それぞれ約325アクセント型(約151語)から構成 回答グループ(1～20)：それぞれ約25人から構成 （1人の回答者が聴取して回答する数も約325アクセント型(約151語)）

（塩田雄大（2010）（2011））

回答選択肢として設定したのは、以下の3つである。いずれかを回答しないと、次の設問に進めないようになっている。

○	：	放送で使うのに望ましい
×	：	放送で使うのに望ましくない
☆	：	このことばを口に出して言ったことがない

1つの語に関して複数のアクセント型を音声として提示するのであるが、その複数のアクセント音声は、すべて1つのグループ内で聴かせるようにした。たとえば「熊は」について尋ねる場合、音声〔ク／マ＼ワ〕（／で上がり目を、＼で下がり目を示す；以下同）と〔/ク＼マワ〕は、必ず同一のグループ内で出題するようにした（グループ1には〔ク／マ＼ワ〕を聴かせてグループ2には〔/ク＼マワ〕を聴かせる、というようにはしなかった）。また、その複数の音声は提示順としてなるべく連続しないように配列した。

調査項目の音声収録は、元アナウンサー（1人）が担当した。名詞には助詞「は」を付けて読み上げることを原則としたが、「は」以外の助詞のほうがふさ

わしいと思われる項目については、適宜調整した。

2.2. 結果の概観

第2回アクセント調査の結果（以降「調査結果」とする）の傾向を考察するための方法として、秋永一枝編（2001）『新明解日本語アクセント辞典』（三省堂）に掲載されている「アクセント習得法則」の分類（アクセントの傾向の違いを類型別に整理したもの）を活用することにした。今回の調査対象語である3021項目のうち、『新明解日本語アクセント辞典』に掲載されていて「アクセント習得法則」番号の付されているものは、2347項目確認できた。

この2347項目の中から、「現行版」の示すアクセントと「調査結果」との乖離がはなはだしい項目を抽出した。下記のA・Bいずれかに該当するものを、「乖離がはなはだしい項目」とした。

A.「現行版」の示す複数のアクセント型の順位と、「調査結果」での支持率の順位が、食い違っている項目

たとえば「沸点」は、「現行版」では〔平板〕〔頭高〕という提示順であるが、「調査結果」では〔平板〕の支持率〔＝「『○　放送で使うのに望ましい』の回答率」〕が13%、「頭高」の支持率が96%であった。順位が逆転していることから、「沸点」の主流のアクセントは、アクセント辞典が第1アクセント〔＝最も推奨するアクセント型として冒頭に掲げられている型〕として掲げている伝統的な〔平板〕から、調査結果で支持率の高かった〔頭高〕へと移ったものとして解釈することができる。

このように、それぞれの順位が食い違っているものを、ここに含めた。

B.「現行版」の示すアクセント型の中で、支持率が極端に低いもの

たとえば「居心地」は、「現行版」で〔平板〕〔尾高〕という提示順であるが、「調査結果」では〔平板〕の支持率が100%、〔尾高〕の支持率が5%であった。〔尾高〕の支持率は極端に低いことから、アクセント辞典が第2アクセントとして示す「居心地」の〔尾高〕は、衰退しているととらえることができる。

このように、あるアクセントの支持率が、主流のアクセントの支持率に比べ

て10分の1以下であるものを、ここに含めた。

上記のAまたはBに当てはまるもの〔＝「乖離がはなはだしい項目〕は、2347項目のうちの1463項目であった。この1463項目を先述の「アクセント習得法則」の番号ごとにまとめて、「乖離がはなはだしい項目」の多い順に10位までを示すと、表3のようになる。

「【調査項目数】」は、調査を実施した項目の数を示す。「乖離がはなはだしい項目」は、先述したとおり上記のAまたはBに該当する項目の数である。今回の調査は、先述の「第1回調査（2008年、指摘式）」において指摘数の多かった項目（つまり「現行版」のアクセント記述に関して問題のあるもの）を中心に出題したので、それぞれの類型において「【調査項目数】」と「乖離がはなはだしい項目」がある程度比例関係にあるのは、自然なことである。

ここで、「複合語」の扱いについて述べる。『新明解日本語アクセント辞典』(巻末pp.(2)-(3)）では、複合語が下記の3つに分類されている。

癒合語：複合の度合がもっとも強く、もとの語のアクセントの影響があまりみられないようなもの。
〔例〕青葉、七くさ、秋物、秋晴れ

結合語：複合の度合が中間で、もとの語のアクセントによって定まるもの。
〔例〕葉桜、七草がゆ、雨上がり、七五調、アイスクリーム、晴れ上がる、青白い、物すごい

接合語：複合の度合がもっとも弱く、前部の語のアクセントを生かす傾向があるもの。
〔例〕木の葉、青い鳥、我が子、雨風（あめかぜ）、七つ八つ、物言う、見て取る

表3において、1位から4位にある類型は、いずれも4拍以下の「癒合語」である。今回の集計基準によって見ると、アナウンサーのアクセントが大きく変化したグループの一つとして、「癒合語」を挙げることができる。

「癒合語」のアクセント変化全般については、別稿で論じることとしたい。ここからは、「乖離がはなはだしい項目」がその次に多い「複合動詞〔＝『新

表３　「現行版」と「調査結果」との乖離がはなはだしかった類型

順位	番号	類　　型	乖離がはなはだしい項目【調査項目数】	乖離がはなはだしい項目の例
1位	8	後部が漢字一字二拍（漢字音）の癒合名詞（前部が漢字一字または二拍以下のもの）	208【363】	乾麺⓪①、嗅覚⓪①、渦中⓪①、代金⓪①、沸点⓪①、人道①⓪、精霊（しょうりょう）①⓪、非道①⓪、遺恨①⓪、…
2位	4	名詞＋和語名詞の癒合名詞（前・後部とも二拍以下の語）	131【177】	しばえび⓪②、底値⓪②、いがぐり⓪②、手槍（てやり）①⓪、小づめ①⓪、手縄①⓪、福耳②⓪、山かご②⓪、炭火②⓪、…
3位	5	動詞・形容詞などとの和語の癒合名詞（前・後部とも二拍以下の語）	126【179】	あまだい⓪②、負け星⓪②、舞姫⓪②、肝吸い⓪②、深爪②⓪、下げ緒②⓪、板付き②⓪、打ち綿②⓪、冷や麦③②、…
4位	7	後部が漢字一字一拍（漢字音）の癒合名詞（前部が漢字一字または二拍以下のもの）	111【185】	待機⓪①、評議⓪①、喫茶⓪①、認可⓪①、合意①⓪、代謝①⓪、応募①⓪、職種①⓪、明示①⓪、内科⓪①、作家⓪①、…
5位	45	動詞＋動詞の結合動詞	106【166】	見やる⓪②、見舞う⓪②、成り行く⓪③、彫り込む⓪③、射殺す⓪③、出し抜く⓪③、植え替える④③、…
6位	14	後部が漢字一字の結合名詞（原則として、前部が漢字二字以上、または三拍以下のもの）	103【178】	無頼漢⓪②、自画像⓪②、紀行文⓪②、時間外⓪②、如意棒②⓪、予備金②⓪、二次会②⓪、日本史②⓪、機関砲②⓪、…
7位	12	後部が和語名詞でできた結合名詞（原則として前・後部とも二拍以下のものを除く）	90【140】	うなぎめし⓪③、ひのえうま⓪③、五目飯⓪③、回り道⓪③、万葉がな⓪③、小田巻き②⓪、獅子舞②⓪、…
8位	9	外来語の単純名詞（転成名詞及び外国語的造語を含む）	82【147】	アーメン⓪①、ペーパー⓪①、メタル⓪、オーボエ①⓪、キルティング①⓪、モップ①⓪、シールド①⓪、…
9位	13	後部が動詞・形容詞などでできた結合名詞（前・後部とも二拍以下のものを除く）	51【83】	頭痛持ち⓪②、布団蒸し⓪②、気変わり⓪②、首くくり⓪③、お召し替え②⓪、日めくり②⓪、二枚落ち②、…
10位	2	転成名詞－動詞からのもの	31【43】	支え③⓪、出しゃばり⓪③(④)、瞬（またた）き③④⓪、賄い③⓪、偽り④⓪(③)、ほころび④⓪③、驚き④⓪③、強がり④③(⓪)、…
10位	19	接合名詞	31【46】	かのと②⓪、このわた②⓪、麻の葉③⓪、目の下②①、湯の花②①、がまの油④⓪、とりの市④③、のみの市④③、…

（丸数字は「現行版」掲載アクセント、詳細は塩田雄大（2010）参照(注1)）

明解日本語アクセント辞典』での「結合動詞」」について、考察を進める。

３．複合動詞のアクセントをめぐる先行研究

これまでに、伝統的な東京方言における複合動詞のアクセントは、その複合動詞を形成する前部動詞の反対の式を取ることが指摘されている（「式保存の逆転現象」(注2)）。ただしこれは（少なくとも現代では）あくまで「傾向」にすぎず、時代の経過につれて、全体としておおむね「起伏式（中高型）」に統一されるような方向に変化しつつある。このことは、川上蓁（1959）で早くに指摘され、菅野謙・臼田弘・最上勝也・宗像朋子（1982）、菅野謙（1989）、相澤正夫（1992）、塩田雄大（1998a、1998b）などで計量的に確認・実証されている。

伝統	腫れる〔平板式〕	＋上がる〔平板式〕	⇒	腫れ上がる〔起伏式（中高型）〕
	晴れる〔起伏式〕	＋上がる〔平板式〕	⇒	晴れ上がる〔平板式（平板型）〕
新興	腫れる〔平板式〕	＋上がる〔平板式〕	⇒	腫れ上がる〔起伏式（中高型）〕
	晴れる〔起伏式〕	＋上がる〔平板式〕	⇒	晴れ上がる〔起伏式（中高型）〕

また川上蓁（2006）では、複合動詞のアクセントに関して、前部動詞の反対の式を取るのが「古則」、全般的に起伏式（有核式）になるのが「新則」であるとする一方、前部動詞と同じ式を取るのが「最新則」、全般的に平板式（無核式）になるのが「未来則」であると推定している(注3)。

４．前回のアクセント調査（1996、1997年）での複合動詞の傾向

前回のアクセント辞典改訂時には、２回のアナウンサー調査をおこなった。第１回（録音式）は、文字で示された調査文を各アナウンサーが読み上げてテープに吹き込むもので、その録音テープを放送文化研究所の研究員が聴き取って集計をおこなった。第２回（記述式）は、各アナウンサーに問題用紙を配布して記述させるもので、１つの語に対して複数のアクセント型を選択肢として提示し、もっともよく使うものを１つ選ぶような形式で実施した（加治木美奈子 1998、表４）。

表4　前回のアナウンサーアクセント調査（1996、1997 年）概要

	第１回〔録音式〕	第２回〔記述式〕	
調査期間	1996年7月1日～15日	1997年5月12日～26日	
調査対象	NHKアナウンサー 523人 回答者　439人 （男 395人、女 44人） 有効回答率 83.9％	NHKアナウンサー 506人 回答者　426人 （男 387人、女 39人） 有効回答率 84.1％	東京・関西民放11局 アナウンサー 110人 回答者 99人 （男 68人、女 31人） 有効回答率　90％
調査項目	460項目(うち複合動詞45)	451項目(うち複合動詞112)	
調査方法	調査項目を織り込んだ短文を、各アナウンサーが、日ごろ放送で使っているアクセントで、カセットテープに音声収録。	各アナウンサーが、日ごろ放送で使っているアクセントに合致する型を、提示された複数の選択肢から1つだけ選ぶ形式。	
年代別	20代：123人 30代：89人 40代：127人 50歳以上：100人	20代：108人 30代：96人 40代：125人 50歳以上：97人	20代：22人 30代：39人 40代：19人 50歳以上：19人

ここで、複合動詞に関して、前回の調査（1996、1997 年）から得られた傾向を列挙する。

【傾向①】：
　伝統的には平板型である複合動詞のなかに、中高型に移行しているものが多くみられる。
【傾向②】：
　複合動詞の中高化は、若年層ほど進んでいる。
【傾向③】：
　連体形では終止形にくらべて中高化の度合いが低い。
【傾向④】：
　全体の拍数が長くなるほど、中高化の度合いが高い。
　　中高化：【○○○○○○○○】＞【○○○○○○○】＞【○○○○○○】
　　＞【○○○○○】＞…
【傾向⑤】：
　全体の拍数が同じ場合、前部動詞の拍数が長くなるほど、中高化の度合いが高い。
　　中高化：【○○○＋○○】＞【○○＋○○○】＞【○＋○○○○】
【傾向⑥】：
　前部動詞にアクセントをおく形のもの（前部型）は、あまり多くない。
【傾向⑦】：
　複合動詞の中高化に関しては、民放とＮＨＫとの差はほとんど見られない。
（塩田雄大 1998a、1998b）

5．今回のアクセント調査（2009年・音声聴取式）での複合動詞の傾向

ここで、複合動詞に関する前回の調査（1996、1997年）での傾向が、今回の音声聴取式調査（2009年）でも同様にみられるかどうか、検証してみる。今回調査した複合動詞（199項目）は、以下のとおりである。

【第２回アナウンサーアクセント調査（2009年、音声聴取式）で取り上げた複合動詞（199項目）】

【ア行】仰ぎ見る、歩み合う、歩み寄る、ありふれる、荒れ回る、言い伝える、生き長らえる、射殺す、痛めつける、植え替える、受け継ぐ、受け止める、打ち明ける、打ち上げる、打ち合わせる、打ち解ける、打ち割る、移り変わる、奪い合う、奪い返す、老いぼれる、押し頂く、落ち延びる、陥れる、おびき出す、おぼしめす、思い上がる、思い当たる、思い余る、思い合わせる、思い描く、思い起こす、思い返す、思い切る、思い込む、思い知る、思い過ごす、思い出す、思い立つ、思いつく、思い続ける、思い詰める、思い直す、折り畳む　【カ行】帰りかける、書き換える、書き下す、かき暮れる、書き加える、掻き壊す、書き記す、書き足す、書き違える、かぎ取る、かき寄せる、駆け下りる、掛け替える、駆け込む、掛け違う、駆けつける、稼ぎ出す、勝ち上がる、勝ち越す、勝ち取る、勝ち抜く、勝ち誇る、かっ込む、かなぐり捨てる、かみつく、かみ割る、考え出す、鍛え上げる、切れ上がる、切れ込む、悔い改める、食いちぎる、食い残す、崩れ落ちる、崩れかかる、繰り越す、繰り広げる、け上げる、けとばす、恋い焦がれる、恋い慕う、漕ぎ返る、こき使う　【サ行】さえかえる、差し押さえる、差し替える、差し込む、差し回す、差し向かう、さび付く、締め込む、調べ直す、すがりつく、住み替える、すり替える、ずれ込む、せっつく、競り勝つ、そそり立つ、備え付ける、染め替える　【タ行】出し抜く、たたきのめす、立ち上がる、立ちすくむ、立ち止まる、立ち直る、立ち並ぶ、立ち昇る、立ち回る、垂れこめる、たれ流す、散り敷く、付け加える、付けねらう、詰め込む、出くわす、出尽くす、出っ張る、出直す、出回る、出迎える、説きつける、解き分ける、とじ込む、取り上げる、取り押さえる、取り囲む、取り消す、取り下げる、取りすがる、取りつく、取り除く、取り運ぶ、取り結ぶ　【ナ行】殴り飛ばす、投げ込む、成り行く、煮返す、縫い上げる、塗り替える、寝違える、飲み歩く　【ハ行】はいずり回る、はげ上がる、走り去る、走り出る、走り回る、はせ参じる、話しかける、冷え込む、ひねくり回す、ひねり出す、ひねり回す、ぶち上げる、ぶち込む、ぶち抜く、ぶちまける、踏みこたえる、へばりつく、ほえつく、彫り込む、彫りつける　【マ行】まかり越す、待ち暮らす、待ち望む、待ちわびる、見飽きる、見失う、みくだす（見下す）、見比べる、見据える、見過ごす、見立てる、乱れ飛ぶ、見とがめる、見計らう、見開く、見舞う、見やる、見分ける、見忘れる、見渡す、群れ飛ぶ、召し上がる、申し伝える、持ち上がる、持ち上げる、持ち帰る、持ち替える、持ち越す、持ち込む、持ち運ぶ、持ち回る　【ヤ行】酔っぱらう

調査では、「中高型」はすべての複合動詞について聴取させて回答を求めたが、「平板型」については質問音声を作成していないものもある。これは、今回の調査がアクセント辞典改訂を目的としたものであり、もはや平板型の使われる可能性がほとんどない複合動詞（たとえば前部動詞が起伏式であるにもかかわらず「現行版」で平板型が掲載されていないものなど）については、平板型についての質問を調査対象から省いたためである。

またこれ以降、「中高型」を集計する際には、以下のような基準を採った。

1）中高型 [-2] と中高型 [-3] の両方を調査した場合

ex.「出迎える」：中高型 [4]、中高型 [3]、平板型 [0] の 3 つを調査

⇒中高型 [-2]（＝中高型 [4]）のみを「中高型」の集計対象とした

2）中高型 [-3] のみを調査した場合

ex.「漕ぎ返る」：中高型 [3]、平板型 [0] の 2 つのみを調査

⇒中高型 [3] を「中高型」の集計対象とした

5.1. 検証 【傾向①】：

「伝統的には平板型である複合動詞のなかに、中高型に移行しているものが多くみられる。」

表 5　中高型への移行に関して（1）

今回調査した複合動詞：199 項目	
伝統的には平板型であると規定されるもの （前部動詞が起伏式） 188 項目	伝統的には中高型であると規定されるもの （前部動詞が平板式） 11 項目

表 6　中高型への移行に関して（2）

伝統的には平板型であると規定されるもの（188 項目）		
「現行版」での第 1 アクセントが		
a）平板型であるもの 103項目	b）中高型であるもの 83 項目 （うち平板型も調査したのは73項目）	c）前部型であるもの 2 項目 （うち平板型も調査したのは 1 項目）
平板型支持率（平均） ：57%〔母数は103項目〕 中高型支持率（平均） ：90%〔　　〃　　〕	：29%〔母数は 73 項目〕 ：94%〔母数は 83 項目〕	：14%〔母数は 1 項目〕 ：54%〔母数は 2 項目〕
全体（188 項目） 平板型支持率（平均）　：　45%〔母数は 177 項目〕 中高型支持率（平均）　：　92%〔母数は 188 項目〕		

今回調査した複合動詞（199 項目）のうち、伝統的には平板型であるとされるもの〔＝前部動詞が起伏式のもの〕は、188 項目である（表５）。これらを、「現行版」に掲載されている第１アクセントが、ａ）平板型であるもの、ｂ）中高型であるもの、ｃ）前部型〔＝前部動詞の部分にアクセント核があるもの〕に分け、それぞれについて、今回調査での「平板型支持率〔＝平板型で提示した音声に対して「放送で使うのに望ましい」と回答した人の割合〕」と「中高型支持率」を集計して平均を算出した（表６）。

表６から、下記のように言うことができる。

伝統的には平板型であると規定されるもの（＝前部動詞が起伏式）に関して、
　　a）現行 NHK アクセント辞典での第１アクセントが平板型であるもの
　　b）現行 NHK アクセント辞典での第１アクセントが中高型であるもの
のいずれにおいても、新興のアクセント型である「中高型」に対する支持率が、伝統的なアクセント型である「平板型」に対する支持率を、上回っている
　　⇒**【傾向①】は合致している**

5.2. 検証　【傾向②】：
「複合動詞の中高化は、若年層ほど進んでいる。」（合致していない）

表７　中高型への移行に関して（年層差）

伝統的には平板型であると規定されるもの（188 項目）		
若年層〔23～34歳〕	中堅層〔35～44歳〕	ベテラン層〔45歳以上〕
平板型支持率(平均)〔母数は177項目〕：45%	：44%	：48%
中高型支持率(平均)〔母数は188項目〕：91%	：93%	：90%
全体（188 項目）		
平板型支持率（平均）：45%〔母数は 177 項目〕		
中高型支持率（平均）：92%〔母数は 188 項目〕		

複合動詞の中高化には「若年層ほど進行している」という特徴がこれまでに確認されているが、この傾向が今回の調査でもみられるかどうかを検討してみた。手順として、伝統的には平板型であるとされる〔＝前部動詞が起伏式〕188 項目について、平板型支持率・中高型支持率を、年層（若年層・中堅層・ベテラン層）別に算出した。

すると表７で見るとおり、平板型支持率については 40％台、中高型支持率

については90％台という状況が、いずれの年層においても共通していた。つまり、年層差は表れていないことになる。

調査項目の中には個別の例としては年層差が観察されるものもあるが、全体としては年齢面での差は見られず、【傾向②】は合致していない。このようになった理由として、以下のようなものが想定できる。

a．「複合動詞の中高化」という動きは、もはや収束段階なのか？

言語変化において、年齢差というものは変化の途中段階で顕著に見られるものであり、その変化が収束段階に至ると年齢差はあまり表れなくなってくる。今回の調査結果も、この一般傾向に沿ったものなのかもしれない。特に今回の調査語には、それぞれの複合動詞に関して伝統的なアクセントである平板型の衰退が著しいものが数多く含まれている（そもそも第2回調査の対象語となった理由として、「現行版」に掲載されているそれぞれの複合動詞の平板型アクセントに対して、第1回調査（指摘式、2008年）において少なからぬアナウンサーが違和感を指摘していたことが挙げられる）。これらは、すでに変化の最終局面を迎えて収束段階にあるものとして位置づけることができるかもしれない。そのために年層差が表れていないのではないか、と推定することができる。

b．「みかけ上の年代差が表れない形の言語変化〔＝全年代が一斉に変化〕」なのか？

言語変化は若い層から始まるのが典型的であるが、気付かれにくい変化の場合、すべての年層がほぼ同時・同程度に変化をしてゆくことがある。複合動詞のアクセント変化も、この例に当てはまるのかもしれない。

この場合、ではなぜ前回のアクセント調査（1996、1997年）では年層差が現れたのかということについて、同じ複合動詞であっても変化のしかたが両者〔＝前回調査の調査対象語と今回調査の調査対象語〕で異なるものだったのではないかなどの別の理由を考える必要があるのだが、背景推定の可能性の一つとして指摘しておきたい。

c．調査方式の違いによるものなのか？

調査方式の違いが結果に影響を及ぼすことは、一般論として言えることである。前回の調査では、アナウンサー自身が話す音声を録音する（1996

年)、またアナウンサー自身が使うと判断するアクセント型を一つだけ選択する（1997年）という方法だったのに対して、今回の調査では、アナウンサーが複数のアクセント型を聴取しそれぞれについて適否を答える（2009年）という方法上の違いがある。前回の両調査のように「唯一回答方式〔＝もっともふさわしいものを一つだけ答える〕」の場合には年齢的な差が表れるが、それぞれのアクセント型について別個に尋ねた場合には、相対的には変化の先端に位置する若年層であっても伝統的なアクセント型（ここでは複合動詞の平板型アクセント）に対する許容性が残っていたため（たとえば、自分はそのようには発音しないが、先輩アナウンサーは口にしていた、という意識など)、年代差が表れないという結果につながったのかもしれない。

5.3. 検証　【傾向③】：
「連体形では終止形にくらべて中高化の度合いが低い。」

これについては、今回対象とした複合動詞はすべて終止形で調査をしており、連体形では尋ねていないので、残念ながら検証できない。

5.4. 検証　【傾向④】：
「全体の拍数が長くなるほど、中高化の度合いが高い。」

中高化：【○○○○○○○】＞【○○○○○○】＞【○○○○○】
＞【○○○○】＞…

伝統的には平板型であるとされる〔＝前部動詞が起伏式〕188項目を終止形での拍数別に分け、平板型支持率・中高型支持率をそれぞれ算出した（図1)。

まず、調査対象語数の少ない3拍語と7拍語を考察の対象から外しておくと、平板型支持率に関して、「全体の拍数が長くなるほど、平板型の支持率が低くなる」という傾向が見て取れる。一方、中高型の支持率に関しては、どの拍数の語においても、もはや「ぎりぎりいっぱいまで」の高支持率となっており、拍数別の支持率差は観察されない。

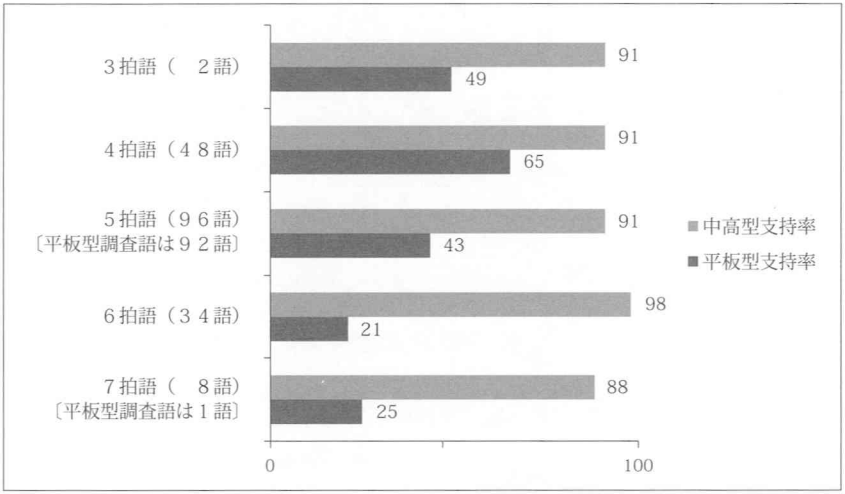

図1　中高型への移行に関して（全体拍数別）

つまり、【傾向④】を「全体の拍数が長くなるほど、平板型の支持率が低くなる」と読みかえることによって、前回調査と今回調査の傾向は、合致していることになる。

5.5. 検証　【傾向⑤】：

「全体の拍数が同じ場合、前部動詞の拍数が長くなるほど、中高化の度合いが高い。」

中高化：【○○○＋○○】＞【○○＋○○○】＞【○＋○○○○】

伝統的には平板型であるとされる〔＝前部動詞が起伏式〕188 項目を前部（連用形）・後部（終止形）拍数別に分け(注4)、平板型支持率・中高型支持率をそれぞれ算出した（図2）。前項と同じく、調査対象語数の少ない 3 拍語と 7 拍語を考察の対象から外しておく。ここで、4･5･6 拍語の平板型支持率に関して、「全体の拍数が同じ場合、前部動詞の拍数が長くなるほど、平板型の支持率が低くなる」という傾向が、おおむね見て取れる（ただし 4 ＋ 2 は対象語数が 1 語しかないので例外的）。一方、中高型の支持率に関しては、前項と同じようにどの拍数の語においてももはや「ぎりぎりいっぱいまで」の高支持率となっ

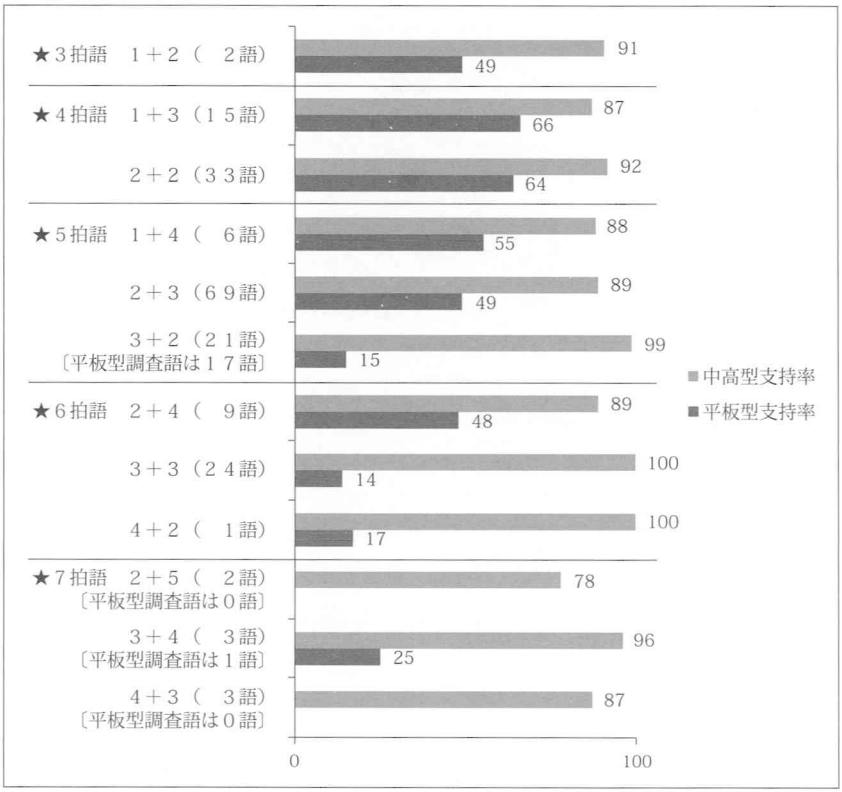

図２　中高型への移行に関して（前部後部拍数別）

ているため、拍数別の支持率差は観察されない。

つまり、【傾向⑤ 】を「全体の拍数が同じ場合、前部動詞の拍数が長くなるほど、平板型の支持率が低くなる」と読みかえることによって、前回調査と今回調査の傾向は、合致していることになる。

5.6. 検証　【傾向⑥】：
「前部動詞にアクセントをおく形のもの（前部型）は、あまり多くない。」

表８は、前部型アクセントをあわせて調査した項目の一覧である。「前部型支持率」の欄を見ると、一部の例外（悔い改める、恋焦がれる、恋い慕う、こ

表8　前部型アクセントに関して

	前部型支持率	平板型支持率	中高型支持率		前部型支持率	平板型支持率	中高型支持率
痛めつける	0	8	100	思い直す	4	29	100
おびき出す	0	26	100	かなぐり捨てる	0		82
思い上がる	0	13	100	悔い改める	72		72
思い当たる	0	38	100	恋い焦がれる	78	44	91
思い余る	9	18	96	恋い慕う	71	42	88
思い合わせる	13		100	こき使う	86	14	24
思い起こす	0	4	100	すがりつく	13		100
思い返す	0	5	100	そそり立つ	9		100
思い切る	4	4	100	たたきのめす	0	13	100
思い込む	4	8	100	殴り飛ばす	14	14	100
思い知る	13	17	100	はいずり回る	4		92
思い過ごす	0	17	100	走り回る	0	14	100
思い出す	0	9	100	ひねくり回す	4		88
思い立つ	0	17	100	ひねり出す	17	17	100
思いつく	4	12	100	ひねり回す	8	25	96
思い続ける	13		96	へばりつく	24		100
思い詰める	0	17	100	まかり越す	13		83

(注　「悔い改める」前部型は[1]・[6]、「恋焦がれる」前部型は[1]・[5]と意識して読み上げたものを音声収録してある)

き使う)を除いて、前部型アクセントの支持率はきわめて低いことがわかる(注5)。なお「こき使う」については、複合動詞全般に広くあらわれる中高型の支持率が24%とかなり低く、例外的に前部型アクセントが優勢な複合動詞だと言える。

全体的に見ると、【傾向⑥】については、前回調査と今回調査で合致していると言える。

5.7. 検証　【傾向⑦】:
「複合動詞の中高化に関しては、民放とNHKとの差はほとんど見られない。」

これについては、今回は民放アナウンサーを対象にした調査をしていないので、残念ながら検証できない。

5.8. 「後部動詞」の式は関係ないか？

共通語の複合動詞のアクセントに関するこれまでの調査・研究では、「前部

動詞」の式・拍数の違いに着目することが主であった。一方「後部動詞」については、「後部動詞の拍数が小さいものほど〔＝前部要素の拍数が大きいものほど〕、中高型があらわれやすい」という形で「拍数」については考慮されてきたものの、「式」についてはあまり検討されてきていない。

菅野謙・臼田弘・最上勝也・宗像朋子（1982）では、「前部の動詞のアクセント以外に、次のような要因が複合動詞のアクセントに影響を及ぼすことはないであろうか」として、「後部動詞のアクセント」などが提起されている。ただし「今回の調査結果のみでは調査語があまりに少なく、どのような結論を導くにも不十分である」と記し（調査語のうち前部動詞が起伏式の複合動詞は17語）、断定はなされていない。また、相澤正夫（1992）には888語の複合動詞（前部動詞が起伏式）のリストが載せられており、それぞれの複合動詞について後部動詞の式もすべてデータとして付与されているが、それを用いた分析は示されていないようである。

ここでは今回調査の結果に関して、「後部動詞」の式の違いをもとに分類して集計したのが、図3である。

集計の対象としたのは、伝統的には平板型であるとされる〔＝前部動詞が起伏式〕188項目のうち、平板型アクセントを調査語として提示しなかった11項目を除いた177項目である。

ここでも、調査対象語数の少ない3拍語と7拍語を考察の対象から外しておく。またこれまで見てきたとおり、中高型支持率はどの拍数の語においても「ぎりぎりいっぱいまで」の高支持率となっているため、平板型支持率にのみ着目する。

まず4拍語について見てみると、【後部起伏】の平板型支持率は68％であるのに対して、【後部平板】では61％である。両者はほぼ同程度であると言える。

次に5拍語については、【後部起伏】の平板型支持率（30％）は、【後部平板】の平板型支持率（54％）よりも、低くなっている。

同様に6拍語についても、【後部起伏】の平板型支持率（17％）が、【後部平板】の平板型支持率（32％）よりも、低い。

つまり、4拍語をいったんおいておくと、5拍語・6拍語については、

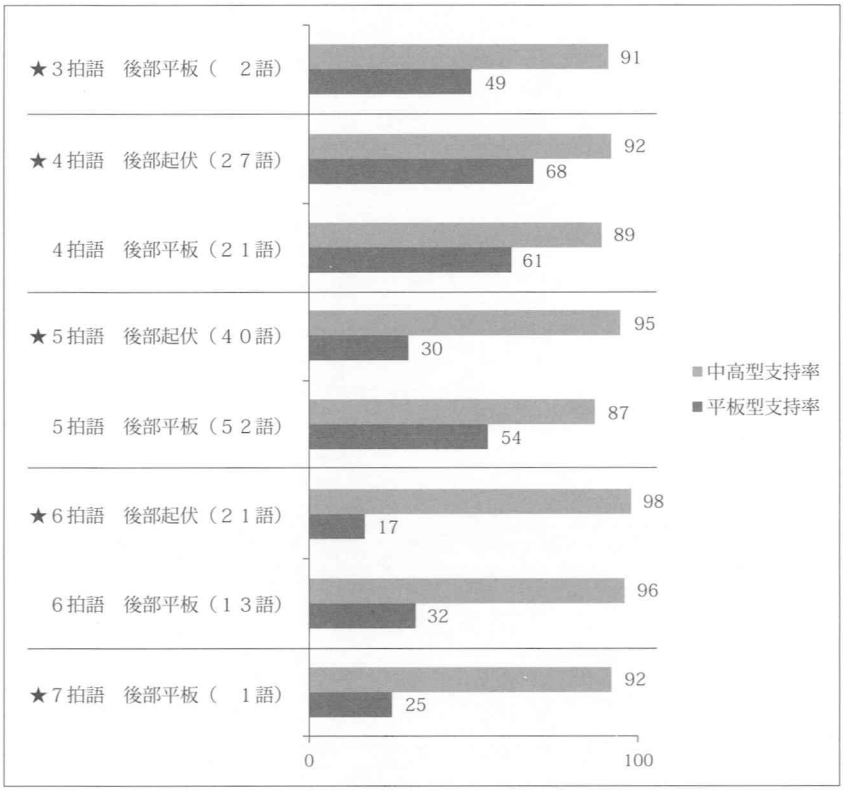

図３　中高型への移行に関して（全体拍数別・後部動詞式別）

平板型支持率　：　【起伏＋平板】＞【起伏＋起伏】

という関係になっていることがわかる。【起伏＋起伏】のほうが、【起伏＋平板】よりも、伝統的である平板型を「捨て去る」傾向〔＝「平板型衰退率」〕が、さらに強いのである。言い方を変えると、後部動詞が起伏式の場合、「後部動詞の式が生きてくる」余地が大きくなる、とも見ることができる。

ここから、以下のような傾向を指摘することができるだろう。

複合動詞（前部動詞＋後部動詞）全体のアクセントは、かつては、前部動詞と反対の式をとる形になっていた。前部動詞が起伏式である場合には、複合動詞全体のアクセントは平板型になるのが伝統的であった。

しかし近年では、前部動詞の式とは関係なく、複合動詞全体のアクセントが中高型［－２］を指向するようなアクセント変化が、全体として進行している。

ただしこのアクセント変化の進み具合は語によって遅速があり、後部動詞の式の違いに着目すると、５拍語・６拍語の場合には、「後部動詞が平板式」のもののほうが、「後部動詞が起伏式」のものよりも、伝統的な型である平板型を保存する傾向が、やや強い。

つまり、複合動詞のアクセント変化は、語による「進行度合いの違い」をかかえつつ、後部動詞が起伏式であるものは「より早く」、平板式であるものは「相対的に遅く」進んでいるものと思われる。

６．考察

今回の調査結果からも、これまでの先行研究で示されてきているとおり、

複合動詞は、前部動詞とは反対のアクセント式をとる。　（＝伝統的な法則）

から

複合動詞のアクセントは、中高型［－２］である。　（＝新しい中高化の傾向）

という変化が、確実に進行しつつあることがわかる（ただし、語による遅速の違いはある）。ここでの「新しい～」というのはもはや相対的な意味しか持っておらず、「現代の～」と言い換えるのがむしろ妥当である。

ここで、アナウンサーのアクセントを調査するとはそもそもどういうことなのかについて、考えてみたい。

日本では、アナウンサーのことばを「標準語」であるととらえる傾向が強い（塩田雄大（2013））。アナウンサー集団はもともといろいろな地域の出身者から構成されているが（たとえば東京都生育者は523人中126人にすぎない（1996年時点、塩田雄大1998a））、自身のふだんのことばづかいを矯正し職業として「規範的」な日本語を使いこなすことが求められている。そこで形成されるアクセント体系は、不規則性を多くはらんだ「特定の地域アクセント＝東京語」と完全に同一のものではなく、それを土台としつつも統一的・単純な方向に凝

集した「放送標準語」のものであると考えることができる。

この「放送標準語」は、日本人・日本語母語話者が考える「標準語」の一形態である。今回のアナウンサーアクセント調査は、この「放送標準語」の一部〔＝「標準語」の一形態の一部〕を調べたものである。

東京方言においては、以前から「複合動詞アクセントの中高化」が進んでいる。また「放送標準語」においても、一般のことばに比べて保守的ではあるものの、半歩遅れるような形で、同様の現象が進行している。さまざまな母方言を背景とするアナウンサーたちの話す放送標準語が、不規則性を解消する形で「複合動詞アクセントの中高化」のような変化を遂げてゆくのは、自然なことだと言える。

「複合動詞アクセントの中高化」の扱い方に関して、日本語教育では「複合動詞のアクセントは中高型［－２］である」ということが、事実上の標準となっている。

「現在の複合動詞のアクセントは前部・後部要素がどのようなアクセント型であっても、全体として《中略》一つの型に集中する傾向があります。具体的には、前部・後部の核の有無に関わらず、複合動詞全体で語末から２拍目に核が置かれます。」(p.83)（田中真一・窪薗晴夫（1999)『日本語の発音教室　理論と練習』くろしお出版）

「ふたつの動詞がいっしょに使われる複合動詞のアクセント核は、後ろからふたつ目にあります。」(p.58)（戸田貴子（2004)『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク）

「複合動詞のアクセントは「－２型」(本研究では類型１～４）と「－３型」(本研究では類型５、６）の２種類であることを規則として導入しても差し支えないと言える。それにより複合動詞のアクセント規則は四種類から二種類に簡素化され、学習者にとっても覚えやすいはずである。」(劉佳琦(2010)「中国語母語話者(北京・上海出身者)による複合動詞の東京語アクセントの習得」『早稲田日本語教育学』)

一方でアナウンサーの使うことばには、わずかではあるが、いまでも伝統的な法則に合致したアクセント型（＝平板型）が優勢な複合動詞もある。

受け取る	[0]68%	[3]32	
見回る	[0]64	[3]36	
見返す	[0]52	[3]41	[2]6
見比べる	[0]53	[4]47	
立ちのぼる	[0]50	[4]50	

（1997 年アナウンサーアクセント調査〔記述式、単一選択回答〕、塩田雄大（1998b））

こうした複合動詞が、今後ほかの複合動詞と同様に中高化してゆくのか、あるいは化石的な平板型複合動詞として残存してゆくのか、今後とも見極めてゆく必要があるだろう。

注

1）塩田雄大（2010）では、「後部が漢字一字一拍（漢字音）の癒合名詞（前部が漢字一字または二拍以下のもの）」が表から抜け落ちていた。ここに掲げたのはそれを訂正したものである。

2）複合動詞のアクセントが前部動詞の反対の式を取るという一般化が最初に示されたのは三宅武郎（1934）においてであり、同書ではその原案が 1929（昭和 4）年 4 月の音声学協会研究会において発表されたものであると示されている。三宅は吉沢義則編（1938）『アクセント表示　新辞海』のアクセント記述担当者であり、日本放送協会編（1943）『日本語アクセント辞典』の編纂主任である（塩田雄大（2008））。

この現象は「山田（美妙）の法則」と呼ばれることがある。しかし山田美妙（1892）を見る限り、山田が記述したのは、（現代の音声学・音韻論の術語で言うならば）たとえば前部が 2 拍平板式・後部が 2 拍平板式の場合には全体として起伏式となり、2 拍起伏式と 2 拍平板式の場合には全体として平板式になる、といったそれぞれの現象を列挙したものである（前部動詞の「逆」の式が複合動詞のアクセントになるという一般化にまで踏み込んだ明記は見られない）。加えて山田の記述では、前部動詞（終止形）が 2 拍の場合には式保存の逆転現象が成立しているものの、前部 1 拍および 3 拍では成り立っていない。前部動詞が「ゐ」など 1 拍のときは、前部・後部動詞のアクセントがそのまま残るとされている。また前部 3 拍の場合は、その前部が平板式の

場合には全体が起伏式になるが、起伏式の場合には前部のアクセント（「式」ではない）がそのまま生きる形の記述になっている。以上のことを勘案すると、山田の個別的記述を重要な出発点として、三宅武郎（1934）において帰納的な一般化が成されたと解釈するのが妥当である（この点で、一般化を発見したのが自分であるという三宅の主張は三宅本人の思い込みによるものであるとした塩田雄大（2009）の記述は、不適切であった）。なお、山田が提起した諸問題（複合名詞・複合動詞のアクセントの法則など）に関してその後に三宅をはじめとする研究者たちが解明していったことについては、平山輝男（1940）p.63にも言及がある。

3）川上蓁（2006）では、たとえば「盛り（平板式）＋込む（起伏式）」を例にとると、

古則　：「盛り」が平板式（無核）であり、複合動詞は前部動詞の反対の式になるので、「盛り込む」は起伏式（有核）

新則　：複合動詞はすべて起伏式（有核）となるから、「盛り込む」は起伏式（有核）

最新則：「盛り」が平板式（無核）であり、複合動詞は前部動詞と同じ式になるので、「盛り込む」は平板式（無核）

未来則：複合動詞はすべて平板式（無核）となるから、「盛り込む」は平板式（無核）

といった趣旨の説明がなされている。なお、こうした変化が生じる（と思われる）理由については、特に示されていない。現段階では、この「古則」から「新則」への推移は確実に認定されているが、「最新則」「未来則」については、このような変化が複合動詞全体のアクセントとして生じている実態があるかどうかについても未確認である。

4）なお相澤正夫（1992）では、拍数別の集計に当たって、前部・後部ともに連用形を基準としている。

5）かつての東京方言の複合動詞では、本稿で言う「前部型アクセント」が一般的であったと推定されている（高山林太郎2012）。

【参考文献】

相澤正夫（1992）「進行中のアクセント変化―東京語の複合動詞の場合―」『研究報告集』13、pp.195-265、国立国語研究所

加治木美奈子（1998）「伝統を受け継ぎ、新しい変化にも対応～『NHKアクセント辞典』13年ぶりに大改訂～」『放送研究と調査』48-6、pp.34-39

川上蓁（1959）「標準アクセント習得の急所」『音声学会会報』100

――――（2006）「最近の首都圏語のアクセント変化」『音声研究』10-2、pp.72-76

菅野謙（1989）「山田美妙のアクセントと現代共通語のアクセント」『大正大学大学院研究論集』13、pp.71-94

菅野謙・臼田弘・最上勝也・宗像朋子（1982）「NHK アナウンサーのアクセント 19 年の変化」『NHK 放送文化研究年報』27、pp.271-334

坂本充（2009a）「『アクセント辞典』改訂への要望～現行アクセント辞典・アナウンサー全項目調査から～」『放送研究と調査』59-2

――――（2009b）「『アクセント辞典』改訂第２回調査に向けて～第３回『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂専門委員会～」『放送研究と調査』59-5

塩田雄大（1998a）「アナウンサーのアクセントはここ 15 年でどう変化したか―現役アナウンサー 500 人調査から（用言の分析）―」『国語学会平成 10 年度春季大会要旨集』pp.98-105

――――（1998b）「アクセントは［ウツリカワル］～アナウンサーアクセント調査報告②「複合動詞」～」『放送研究と調査』48-8、pp.48-57

――――（1998c）「アクセントは［ムズカシイ］～アナウンサーアクセント調査報告⑤「動詞・形容詞」～」『放送研究と調査』48-12、pp.54-67

――――（2008）「アクセント辞典の誕生 放送用語のアクセントはどのように決められてきたのか」『NHK 放送文化研究所年報』52、pp.173-200

――――（2009）「戦前・戦中期におけるアクセントの規範と放送―複合動詞にみる―」『第 267 回近代語研究会秋季発表大会（松江）』発表予稿

――――（2010）「全国アナウンサー音声調査の結果報告～アクセント辞典改訂専門委員会（第４回）から～」『放送研究と調査』60-5

――――（2011）「『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂調査結果にもとづく作業方針の検討～アクセント辞典改訂専門委員会（第５回）から～」『放送研究と調査』61-3

――――（2013）「「標準語」は規定されているのか」『日本語学』32-6、pp.4-24

高山林太郎（2012）「岡山市方言の複合動詞のアクセント」『東京大学言語学論集』32、pp. 305-332

平山輝男（1940）『全日本アクセントの諸相』東京：育英書院

三宅武郎（1934）『音声口語法』 東京：明治書院

山田美妙（1892）「日本音調論」『日本大辞書　附録』、pp.43-57、日本大辞書発行

あとがき

プロジェクト発足時からの約束の一つが、成果として論文集を公刊することであった。メンバーとなった方々には、まずそのことをお伝えし、順番に公開研究発表会での発表をお願いした。そして、当初のフルネームでの名称が“現代日本語の動態”となり、さらに“動態”と略称しても違和感なくメンバー間で通じるようになったころ、「動態論集」の編集に取りかかることを宣言した。2012年10月のことである。

スタートからほぼ3年が経過し、メンバーは各自の関心領域に即したテーマで、既に2回程度の研究発表を行っていた（個々の発表内容は、国立国語研究所ホームページの「共同研究プロジェクト」欄でご覧いただくことができる）。「動態論集」の原稿は、発表をもとに取りまとめることを原則としたが、それで強く縛ることは考えていなかった。試行的、探索的であることを尊重し、執筆の自由度を高めることを優先したからである。

とはいえ、「多角的アプローチ」を標榜する以上、編者としては各自の執筆プランを事前にある程度は把握しておきたい。「執筆確認票」と称して、論文のタイトルと概要に加え、「研究対象」と「研究目的」に関する小アンケートを実施したのである（次に示すのは、相澤論文の場合の記入例である）。

●研究対象（該当すると思われるものを、いくつでも選んでください。）

□ 音声・音韻・アクセント・イントネーション
■ 語彙・語句
□ 文法・文法形式
■ 文字・表記
■ 文章・談話
■ 言語意識・言語使用意識
□ その他（具体的に　　）

●研究目的（該当すると思われるものを、いくつでも選んでください。）

■ 言語変化の先端現象の把握・分析
■ 戦後60年余の通時的変化の把握・分析

□ 多元的分析手法の開発
□ 新規資料の発掘・分析
□ 言語問題の解決に資する応用研究
□ その他（具体的に　　）

完成した本書をご覧いただきたい。全体の構成と論文の配置は、集まってきた12編の論文を、編者なりにくまなく読んで得た感触の反映であり、一つの提示法に過ぎない。個々の論文が実際に多様な側面をもつことは、アンケート結果から十分に予想されたことであり、プロジェクトの趣旨からして歓迎すべきことであった。論文を読んで、その都度アンケートの回答項目をチェックリストとして確認すれば、そのことが実感されるはずである。

以上、編集の舞台裏ばかり語ってきたが、主人公は個々の論文と執筆者である。執筆者の皆様には、実質的に半年ほどの窮屈な日程のなか、持ち味を存分に発揮した論考を寄稿していただいたばかりでなく、編者のコメントにも丁寧にお応えいただいた。この場を借りて、心より感謝申し上げる。昨年秋の原稿依頼は「寝耳に水」ではなかったと思う。しかし、昨今の大学における研究教育職員の多忙な現状を考えると、第一優先でご執筆いただけたことが何よりも嬉しいことであった。

実は、本書のどの論文にも「見えない謝辞」が付いている。公開研究発表会における参加者の活発な議論やコメントが有益であったことは言うまでもないが、個々の論文で謝辞を述べることはしなかった。末尾ながら、いわば共通因数を括りだすかたちで、ここにまとめて謝辞を述べることとしたい。

最後に、厳しい出版事情のなか、本書の編集・出版を引き受けてくださった㈱おうふうの坂倉良一さんにも、改めてお礼を申し上げたい。昨秋刊行の前編著『外来語研究の新展開』の勢いをそのままに、初動の早さ、メールと電話を駆使した巧みな編集術で、気が付けば今回も予定どおり刊行の秋がそこに来ている。

2013年8月　記録的な炎暑の夏に

相澤　正夫

●編者紹介

相澤正夫（あいざわ・まさお）国立国語研究所教授

『分かりやすく伝える　外来語言い換え手引き』（共著、ぎょうせい、2006年）、「『「外来語」言い換え提案』とは何であったか」（陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫編『外来語研究の新展開』、おうふう、2012年）

●執筆者紹介（掲載順）

金愛蘭（きむ・えらん）東京外国語大学講師

「外来語『トラブル』の基本語化―20世紀後半の新聞記事における―」（『日本語の研究』2-2、2006年）、『20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化』（大阪大学、2011年）

新野直哉（にいの・なおや）国立国語研究所准教授

『現代日本語における進行中の変化の研究』（ひつじ書房、2011年）、「“全然”に関する国語学者浅野信の言語規範意識―昭和10年代を中心に―」（『表現研究』97、2013年）

松田謙次郎（まつだ・けんじろう）神戸松蔭女子学院大学教授

『国会会議録を使った日本語研究』（編著、ひつじ書房、2008年）、「東京方言格助詞「を」の使用に関わる言語的諸要因の数量的検証」（『国語学』201、2000年）

金澤裕之（かなざわ・ひろゆき）横浜国立大学教授

『留学生の日本語は、未来の日本語―日本語の変化のダイナミズム―』（ひつじ書房、2008年）、「時代を超えた言語変化の特性」（金澤裕之・矢島正浩編『近世語研究のパースペクティブ』、笠間書院、2011年）

尾崎喜光（おざき・よしみつ）ノートルダム清心女子大学教授

『しくみで学ぶ！ 正しい敬語』（ぎょうせい、2009年）、「援助申し出場面における授恵表現『～てやる／～てあげる／～てさしあげる』の使用」（『待遇コミュニケーション研究』5、2008年）

石井正彦（いしい・まさひこ）大阪大学大学院教授

『現代日本語の複合語形成論』（ひつじ書房、2007年）、『マルチメディア・コーパス言語学―テレビ放送の計量的表現行動研究―』（共著、大阪大学出版会、2013年）

小椋秀樹（おぐら・ひでき）立命館大学准教授
『日本語話し言葉コーパスの構築法』（国立国語研究所報告 124）（共著、2006 年）、「現代雑誌 70 誌における漢字の使用実態と常用漢字表―国語施策へのコーパス活用に向けた基礎調査―」（共著、『日本語科学』22、2007 年）

田中牧郎（たなか・まきろう）国立国語研究所准教授
『病院の言葉を分かりやすく―工夫の提案―』（共著、勁草書房、2009 年）、『近代書き言葉はこうしてできた』（岩波書店、2013 年）

田中ゆかり（たなか・ゆかり）日本大学教授
『首都圏における言語動態の研究』（笠間書院、2010 年）、『「方言コスプレ」の時代―ニセ関西弁から龍馬語まで―』（岩波書店、2011 年）

前田忠彦（まえだ・ただひこ）統計数理研究所准教授
『言語研究のための統計入門』（共編著、くろしお出版、2010 年）、『心理統計法への招待―統計をやさしく学び身近にするために―』（共著、サイエンス社、2006 年）

塩田雄大（しおだ・たけひろ）NHK 放送文化研究所専任研究員
「現代人の言語行動における“配慮表現”～「言語行動に関する調査」から～」（『放送研究と調査』62-7、2012 年）、「放送の外来語―傾向と対策―」（陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫編『外来語研究の新展開』、おうふう、2012 年）

現代日本語の動態研究

2013年10月 5 日　初版一刷印刷
2013年10月10日　初版一刷発行　定価は、カバーに表示してあります。

編　者　©相　澤　正　夫
発行者　坂　倉　良　一
印刷所　電　算　印　刷　㈱

発行所　㈱おうふう
〒101-0064　東京都千代田区猿楽町1-4-5
Tel.　03-3295-8771(営業)
03-3295-8774(編集)
(振替)00140-2-665242

造本には充分注意しておりますが、落丁・乱丁などございましたら、小社かお買い上げ書店にておとりかえいたします。
ご意見、ご感想がございましたら、小社編集部までお寄せ下さい。

ISBN978-4-273-03737-6 C1081

ISBN978-4-273-03737-6
C1081 ¥2500E

おうふう

定価 本体2500円 ＋税

9784273037376

1921081025005

現代日本語の動態研究

第1部　動態研究の実際―分析対象の側面から―

〈語・慣用句〉

動詞ヒモトクにおける伝統用法と新用法の共存 …… 相澤　正夫

外来語動名詞「チェック」の基本語化
―通時的新聞コーパス調査と意識調査の結果から― …… 金　愛蘭

慣用句“気がおけない”の「誤用」について …… 新野　直哉

〈文法・表現〉

サ変動詞の五段活用化・上一段活用化の現状 …… 松田謙次郎

新聞データ（朝日『聞蔵』）に見る「なく中止形」の動向 …… 金澤　裕之

“道理に合わない”授受表現の使用と動態
―愛知県岡崎市での経年調査および最近の全国調査から― …… 尾崎　喜光

第2部　動態研究の基盤―データと分析手法の側面から―

〈コーパス調査〉

探索的データ解析による言語変化研究―蛇行箱型図によるS字カーブの発見― …… 石井　正彦

現代日本語における外来語表記のゆれ …… 小椋　秀樹

分かりにくい医療用語の類型と語の性質 …… 田中　牧郎

〈対人調査〉

方言と共通語に対する意識からみた話者の類型
―地域の分類と年代による違い― …… 田中ゆかり・前田　忠彦

「とびはね音調」はどのように受けとめられているか
―2012年全国聞き取りアンケート調査から― …… 田中ゆかり

NHKアナウンサーのアクセントの現在―複合動詞を中心に― …… 塩田　雄大